梅花女子大学大学院　博士学位論文
主査　野口芳子教授

日本における「ヘンゼルとグレーテル」の受容

－明治期から昭和期まで－

2021 年 11 月

小泉 直美

論文要旨

日本における「ヘンゼルとグレーテル」の受容
ー明治期から昭和期までー

小泉直美

グリム童話 KHM 15「ヘンゼルとグレーテル」は、1901(明治 34)年に日本で初めて邦訳され紹介されている。先行研究においても最初の邦訳が 1901 年であることは述べられている。しかし、それが誰によって訳されたものなのかについては、筆名から実名を割り出すための調査が行われてこなかったため、長年明らかにされてこなかった。本論ではまず、さまざまな資料に当たりながら、最初の邦訳者である東海生の実名が上田敏であろうという結論に達した。

明治期、大正期、昭和期における邦訳をすべて調べて、それぞれの時期に訳された「ヘンゼルとグレーテル」を詳細に検討し、改変の有無および改変理由などについて、時代背景を視野に入れながら受容の実態を明らかにするよう努めた。日本における「ヘンゼルとグレーテル」の邦訳について、このような包括的な研究は本論が嚆矢であろう。

収集した邦訳は 168 話で、明治期 10 話、大正期 20 話、昭和期 138 話である。時代ごとに「ヘンゼルとグレーテル」の邦訳の変遷を見ていくと、そこには訳者(作者)の意向や社会的影響が見て取れる。訳者について詳しく調査すると、邦訳における改変の理由などについて推測することができる。

その手法を駆使して、最初の邦訳者の筆名「東海生」が上田敏のものであることを突き止めた。上田敏を調査すると、明治期の文豪である森鷗外と親交が深かったことが判明した。鷗外の長男である山君(森於菟)は、「ヘンゼルとグレーテル」の 2 番目の訳者である。彼は当時、獨逸学協会学校の生徒であった。獨逸学協会学校では独逸語教科書として『エンゲリン讀本』が使用され、多くのグリム童話やドイツ伝説が教授されていた。獨逸学協会学校の初代校長は西周であり、鷗外とは親戚関係にあった。西周は外山正一と上田敏の伯父である乙骨太郎乙の上司である。外山と乙骨は友人関係にあり、乙骨の弟子の田口卯吉は、上田敏を 10 年間寄寓させていた。このように上田敏を調査すると、グリム童話との密接な関係が見えてくる。

明治期は殖産興業、富国強兵が叫ばれ、近代化を推し進めようとした時代である。文学から外国の近代化を取り入れようと翻訳文学が隆盛を極める。明治期の「ヘンゼルとグレーテル」の邦訳者には、文学者だけでなく、ジャーナリストも存在している。ひろく文筆活動をしている人びとが、普及に貢献したといっても過言ではない。「パンの家」を「餅の家」に、「パン屑」を「飯粒」に変えて読者が理解しやすいようにしながら、同時に、当時流行りの「あんぱん」や「金米糖」も出現させている。西洋の昔話を日本風に変えながら、

西洋の香りを盛り込むことも忘れず、読者が興味を持つよう工夫しているのである。

大正期になるとドイツ語対訳の本が相次いで出版される。これはドイツ語の需要が増えて、学ぶ人が増えたことを示しているといえる。また、大正期は明治期からの近代化が発展し、子どもという存在が認識された時代でもある。数多くの児童雑誌が創刊され、その表紙には流行りの服を着た華やかな子どもが描かれるようになる。西洋菓子産業が発達し、「ビスケット」や「チョコレート」が広く一般に普及するのもこの時代である。それに呼応するかのように、改変された邦訳には都市部で流行りの西洋菓子が出現するようになる。「お菓子の家」という題名や色鮮やかな絵本が初めて出現するのも大正期である。「ヘンゼルとグレーテル」では、鴨(家鴨)が子どもたちを向こう岸に渡してくれる場面がある。そこでは鳥が擬人化され、2 人と会話をするのである。子捨てという残酷な行為から目を背け、ファンタジーの世界へと読者を誘導する表現が増える。ここに大正期の童心主義が読み取れる。しかし、その一方で、貧困のために子どもを手放す親も増え、「ヘンゼルとグレーテル」に似た境遇の子どもたちが数多く存在していた。そのことを裏付けるかのように、邦訳文には「木の皮を食べさせられない」という表現が出現する。飢饉のときには樹皮を食べていたという事実を思い起こさせる表現である。大正期の訳者は、子どもの人権を認めて理想化し、夢を与えようとした。その一方で西洋昔話に描かれた貧しい庶民の現実を伝えようとした訳者も存在した。15 年間しかない大正期に 20 話も出現するのは、「ヘンゼルとグレーテル」がこの時代の要求に合致した存在だったからではないだろうか。

昭和期は長く続いた激動の時代であるため、3 区分に分けて論述している。昭和初期の日本は金融恐慌や世界大恐慌の様相を帯びて、経済界は大混乱に陥る。安価な「円本」と呼ばれる全集が一般に普及されるのがこの頃である。一方、大正期のような華やかさは失われるが、鴨(家鴨)が会話をしたり、チョコレートが出現したり、童心主義を残しているものも出版されている。1938（昭和 13）年に国家総動員法や「児童読物改善ニ関スル指示要綱」が発令され、出版物が統制されるようになると、邦訳数は減少する。しかし、その状況下でも次世代の子どもたちにグリム童話を伝えようと努力をした人物が存在する。1927(昭和 2)年にグリム童話集の全訳本を出版した金田鬼一である。彼は「ヘンゼルとグレーテル」の話を改変して、食糧難を克服するため、農作業をして自ら食糧を調達することの大切さを国民に説いている。おそらくそのおかげで、この本は検閲網を潜り抜けて出版できたのであろう。

戦後になると状況は一変し、外国文学作品が数多く出版されるようになる。そのなかでは子捨てが削除され、子どもたちが自ら道に迷う話に改変されるものが頻出する。親子間の愛情や子どもを大切にすることを強調するため、子捨てはなかったことにしているのである。これらの本は理想的な家族像を伝えており、「近代家族」の姿をプロデュースしているのである。また「お菓子の家」という題名の本が頻出するのもこの時期である。「ヘンゼルとグレーテル」ではなく、「お菓子の家」という名前でこの話を認識している人が多いの

は、この時代の本の影響かもしれない。

『グリム童話集』邦訳史上、特筆すべきことは、戦後すぐに『グリム童話集』の初稿の全訳本が出現したことである。訳者はドイツ文学者の田中梅吉である。レフツ版からの翻訳であるが、こんな早期に初稿グリム童話全集が出版されたことから、日本はグリム童話の受容に関して、先端をいく国と言っても過言ではないだろう。

昭和後期には新著作権法(1971)の施行を境に、題名も「ヘンゼルとグレーテル」に統一され、原典に忠実な訳が主流を占めるようになる。近代家族像が揺らぎ始め、家庭環境が変化し、児童文学でもそれまで扱われなかったテーマが目立つようになる。1970 年代は絵本の黄金期とよばれ、外国の絵本がそのまま訳されて紹介されるようになり、子どもたちは外国文化を容易に取り入れることが可能となる。しかし、メディアの発達に伴い、外国の昔話がテレビで放映されるようになると、子どもの読書離れが懸念されるようになる。

その対策として、1974(昭和 49)年に東京子ども図書館が設立される。1979(昭和 54)年の国際児童年開幕を機に、全国各地で「児童図書まつり」や「世界児童図書展」などの催しが開催されるようになる。図書館や出版社、書店が共同して、子どもと本をつなぐために働きかけたのである。

本論では「ヘンゼルとグレーテル」が、日本でどのように受け入れられたのかをさまざまな視点から考察している。その結果、邦訳文に社会の変容が取り込まれていることがわかった。明治期の近代化、大正期の童心主義、昭和初期の軍国主義、戦後の近代家族主義などが「ヘンゼルとグレーテル」の受容に反映しているのである。

目　次

序論 …… 1
第 1 章　先行研究について
1. 概要 …… 3
2. 金城ハウプトマン朱美の論文 …… 4

第 2 章　グリム兄弟の改版による変化
1. 概要
1）改版について …… 6
2）あらすじ(第 7 版) …… 6
2. 改版による変更箇所
1）改版による変更箇所の一覧表 …… 7
2）変更箇所の項目について …… 7
3）アウグスト・シュテーバー(August Stöber)の影響 …… 9
3. 人物描写の変遷
1）父親の描写 …… 10
2）母親の描写 …… 10
3）ヘンゼルの描写 …… 11
4）グレーテルの描写 …… 12
5）魔女の描写 …… 13
4. 考察 …… 14

第 3 章　日本で邦訳されている類話
1. 概要 …… 16
2. ペローの「親指小僧」
1）あらすじ …… 16
2）シャルル・ペロー(Charles Perrault)について …… 17
3. ベヒシュタインの「ヘンゼルとグレーテル」
1）あらすじ …… 17
2）ルードヴィヒ・ベヒシュタイン(Ludwig Bechstein)について …… 17

第 4 章　最初の邦訳「一太郎とおすみ」
1. 「一太郎とおすみ」について
1）概観 …… 18
2）掲載誌について …… 18
3）「一太郎とおすみ」のあらすじ …… 18
2. 「一太郎とおすみ」の邦訳文について 1
1）原典と異なる表現 …… 19
2）原典と一致する表現－結末句－ …… 23
3）白い鳥が出現する場面について …… 23
3. 邦訳者東海生について
1）東海生が訳した童話 …… 25
2）東海生と上田敏との接点 …… 26
3）上田敏の生い立ち …… 26

4）上田敏の経歴 …… 28
4. 東海生の実名について
1）上田敏と音楽 …… 28
2）上田敏と「あなた」という表現 …… 29
3）上田敏と外国文学 …… 31
4）上田敏の筆名および号 …… 31
5. 上田敏と交友関係がある人物について
1）森鴎外 …… 32
2）西周 …… 33
3）乙骨太郎乙 …… 34
4）外山正一 …… 35
5）田口卯吉 …… 35
6. 上田敏と関係のある人物とグリム童話との関係について …… 37
7. まとめ …… 38

第 5 章　明治期における「ヘンゼルとグレーテル」
1. 邦訳の概観
1）邦訳一覧表 …… 39
2）先行研究について …… 39
2. 明治期に邦訳された他の 9 話の訳文と邦訳者について
1）山君訳「ヘンゼルとグレエテルと」 2 …… 40
2）佐藤天風訳「深い深い森の中」 3 …… 42
3）ばんすゐ訳『寶の箱』 4 …… 44
4）橋本青雨訳「太郎と皐月」 5 …… 47
5）巌谷小波翻案「鬼の宿」 6 …… 49
6）曉影生訳「鬼婆退治」 7 …… 51
7）水野繁太郎/權田保之助訳「兄と妹」 8 …… 52
8）柴田流星訳「兄と妹」 9 …… 53
9）日野蕨村訳「グレーテルとヘンゼル」 10 …… 54
3. 明治期 9 話の概要 …… 56
4. 独逸語教科書による受容
1）『エンゲリン讀本』の概観 …… 57
2）『エンゲリン讀本』に収録されている「ヘンゼルとグレーテル」 …… 57
3）『エンゲリン讀本』以外の独逸語教科書 …… 58
5. 英語教科書による受容
1）明治期の英語教科書 …… 59
6. 明治期のまとめ …… 60

第 6 章　大正期における「ヘンゼルとグレーテル」
1. 邦訳の概観
1）邦訳一覧表 …… 62
2）大正期の邦訳について …… 62
2. 大正期 20 話の邦訳内容と邦訳者(編者)について
1）田中楳吉訳「ヘンゼルとグレーテル」 11 …… 63
2）小笠原昌齋訳「ヘンゼルとグレーテル」 12 …… 64

3）年岡長汀訳「ヘンゼルとグレーテル」 13 …… 64
4）藤沢衛彦訳「ヘンゼルとグレーテル」 14 …… 65
5）中島孤島訳「ヘンゼルとグレテル」 15 …… 66
6）少年通俗教育會編「魔法婆」 16 …… 66
7）少年通俗教育會編「林の中へ捨てられた兄妹」 17 …… 67
8）内藤豊一訳「Hans to Grete」 18 …… 68
9）巌谷小波編「キコリノコドモ」 19 …… 69
10）三宅房子訳「林へ子を捨てに」 20 …… 69
11）葉多黙太郎訳「お菓子の家」 21 …… 70
12）今井ただし訳「ヘンセルとグレーテル」 22 …… 71
13）金田鬼一訳「ヘンゼルとグレーテル」 23 …… 72
14）あしや・ろそん「お菓子の家」 24 …… 72
15）橋本玉造「ヘンゼルとグレーテル」 25 …… 73
16）金の星社編輯部「ヘンゼルとグレテル」 26 …… 73
17）馬場直美訳「森の家」 27 …… 74
18）童話研究會編「林の棄兒」 28 …… 75
19）蘆谷蘆村著「お菓子の家」 29 …… 75
20）畑小鳥著「オクワシノイヘ」 30 …… 76
3. ベヒシュタイン童話の邦訳について
1）今井ただし訳「ヘンセルとグレーテル」 …… 76
2）魔女の詳細な容貌 …… 76
3）魔女の宝物を子どもたちが持ち帰る場面 …… 77
4）子どもたちが帰宅したときの在宅者 …… 78
5）比較の結果 …… 79
4. 大正期 20 話の概要 …… 79
5. 「菓子」の出現と西洋菓子産業
1）改変された菓子について …… 80
2）チョコレートについて …… 80
3）ビスケットとカステラについて …… 81
4）西洋菓子産業と子ども向け読み物との関わり …… 81
6. 『赤い鳥』における西條八十の「お菓子の家」について
1）西條八十について …… 82
2）童謡「お菓子の家」について …… 82
7. 大正期のまとめ …… 84

第 7 章　昭和期における「ヘンゼルとグレーテル」
1. 邦訳の概観 …… 85
2. Ⅰ期 A(1926-1938)の邦訳 31 ～ 37
1）邦訳一覧表 …… 85
2）Ⅰ期 A(1926-1938)の邦訳について …… 85
3）Ⅰ期 A(1926-1938)の時代背景 …… 89
3. Ⅰ期 B(1938-1945)の邦訳 38 ～ 39
1）邦訳一覧表 …… 89
2）Ⅰ期 B(1938-1945)の邦訳について …… 89
3）Ⅰ期 B(1938-1945)の時代背景 …… 90

3. Ⅱ期(1946-1970)の邦訳　40 ～ 130
1) 邦訳一覧表 …… 91
2) Ⅱ期(1946-1970)の邦訳について …… 95
3) Ⅱ期(1946-1970)に出版された初稿訳について …… 96
4) Ⅱ期(1946-1970)に改変、改作されている話 …… 97
5) 家族の在り方 …… 107
6) Ⅱ期(1946-1970)の時代背景 …… 108
4. Ⅲ期(1971-1988)の邦訳　131 ～ 168
1) 邦訳一覧表 …… 110
2) Ⅲ期(1971-1988)の邦訳について …… 112
3) Ⅲ期(1971-1988)に出版された第2版訳について …… 112
4) Ⅲ期(1971-1988)に改変されている話 …… 112
5) テレビアニメとの関連 …… 115
6)「お菓子の家」という表現について …… 115
7) 宝物略奪について …… 116
8) Ⅲ期(1971-1988)の時代背景 …… 116
5. フンパーディンクのオペラ「ヘンゼルとグレーテル」
1) フンパーディンクのオペラについて …… 117
2) オペラ「ヘンゼルとグレーテル」のあらすじ …… 117
3) 日本での上演 …… 118
4) 日本での受容 …… 118
5) フンパーディンクのオペラが混成された邦訳 …… 118
6. 西洋と日本における子どもの遺棄について
1) 西洋の子どもの遺棄 …… 122
2) 日本の子どもの遺棄 …… 123
3) ジェンダーの視点から見た改変について …… 124
7. 昭和期のまとめ …… 125

結論 …… 130

謝辞 …… 135

参考文献 …… 136
図版出典一覧 …… 145

資料

序 論

グリム童話は、グリム兄弟(Jacob Grimm 1785-1863, Wilhelm Grimm 1786-1859)により収集された西洋の昔話である。通常、本のタイトルは『グリム童話集』と訳されているが、正式名称は、『子どもと家庭のためのメルヒェン集』(*Kinder- und Hausmärchen*)である。グリム兄弟が最初に書き留めたのは初稿(1810)で、その後初版(1812,1815)から第7版(決定版)(1857)まで8種類のテキストが存在する。つまり彼らは7回も改変しているのである。KHM 15「ヘンゼルとグレーテル」(Hänsel und Gretel)は初稿(1810)から存在する。初稿では 11 番に置かれ、題名も「兄と妹」(Das Brüderchen und das Schwesterchen)になっている。ヴィルヘルム・グリムがカッセルに住むヴィルト家(Familie Wild)で、口承により収集したものである[1]。初版(1812)から15番に置かれ、題名も「ヘンゼルとグレーテル」に改変され、決定版(1857)まで維持される。初版から決定版までこの話はヴィルヘルムによって、さまざまな話が混成されて改変されていく。第 2 版(1819)は、1813年1月15日にドロテーア・ヴィルト(Dorothea Wild 1793-1867)が語った類話の影響を受けて改変され[2]、第 5 版(1843)はアウグスト・シュテーバー(August Stöber 1808-1884)のエルザス地方のメルヒェン「パンケーキの家」(Eierkuchenhäuschen)を混成させて改変される[3]。

日本における受容について考察する前に、まず、この話が編者であるグリム兄弟によって、版を重ねるごとにどのように改変されたのかについて知っておく必要がある。そこで本論では、「グリム兄弟の改版による変化」の章を設けて、そこで詳述することにする。

「ヘンゼルとグレーテル」の日本における最初の邦訳は、1901(明治34)年の東海生訳「一太郎とおすみ」(『日本之小學教師』所収)である。このことは府川源一郎の先行研究により明らかにされているが[4]、邦訳内容についての詳細な分析や考察が行われておらず、訳者東海生の実名についても解明されていない。本論ではそれらのことについて明らかにしていきたい。

明治期の邦訳は 10 話存在する。このことはすでに金城ハウプトマン朱美により明らかにされている。大正期の邦訳は先行研究では 13 話とされていたものが、20 話存在することが判明した。昭和期の邦訳についての先行研究は存在しない。調査の結果、昭和期の邦

---

[1] Brüder Grimm: *Kinder- und Hausmärchen*. Hrsg. v. Heinz Rölleke. Stuttgart: Reclam 2019, Bd.3, S. 464.

[2] Rölleke, Heinz: August Stöbers Einfluß auf die *Kinder- und Hausmärchen* der Brüder Grimm. In: *Wo das Wünsch noch geholfen hat*. Bonn: Bouvier 1985, S. 75-87,hier 82.

[3] Ebd. S. 80.

[4] 府川源一郎「樋口勘次郎とグリム童話」『横浜国大国語教育研究』横浜国立大学国語教育研究会 2004年 6月 25頁。

訳は 138 話存在することが判明した。日本での受容に焦点をあてた明治期から昭和期までの「ヘンゼルとグレーテル」の包括的な先行研究は存在しない。邦訳者や邦訳の内容を分析し考察したものとしては 2 つの拙論のみである[5]。本論では、これら 2 つの研究を包括し、大正期の邦訳と新たに発見した資料を加え、明治期から昭和期において「ヘンゼルとグレーテル」の邦訳が、時代の変遷によりどのように改変され受容されているのかに焦点をあてて考察していく。

研究方法としては明治期から昭和期までに出版(非売品含む)された 168 話の「ヘンゼルとグレーテル」の邦訳文について分析し、考察していく。それらの資料を明治期、大正期、昭和期に分けて、社会や文化の変容に伴ってこの話がどのように受容されているのかを探っていく。昭和期についてはⅠ期、Ⅱ期、Ⅲ期の 3 つの時代に分けて考察する。また明治期、大正期、昭和Ⅰ期の邦訳については数が少ないため、すべての邦訳文について分析し、訳者(編者)についても詳細に述べる。明治期はまず、最初の邦訳文と邦訳者について詳細に述べる。大正期は訳文中に西洋菓子が取り込まれているため、菓子産業との関連に触れながら論述する。昭和期の邦訳については主として改変されているものに焦点を当てて、時代背景に照らし合わせながら分析し考察する。

研究資料の対象は、単行書、絵本、雑誌、紙芝居などの紙媒体とする。主として、国立国会図書館、大阪府立中央図書館国際児童文学館、三康図書館、茨木市立図書館、京都府立図書館、梅花女子大学附属図書館で複写したものと、インターネットサイトや書店などで購入したものである。

---

[5] 拙論「明治期におけるグリム童話 KHM15『ヘンゼルとグレーテル』の受容について－『一太郎とおすみ』の訳者東海生に焦点をあてて－」『梅花児童文学』(27) 梅花女子大学大学院児童文学会 2019 年 6 月 51-67 頁。「昭和期における『ヘンゼルとグレーテル』の受容について－ジェンダーの視点から－」『日本ジェンダー研究』(24) 日本ジェンダー学会 2021 年 10 月 87-100 頁。

第１章　先行研究について

1. 概要

「ヘンゼルとグレーテル」の受容についての先行研究としては、金城ハウプトマン朱美、須田康之、細谷瑞枝、大島浩英のものが挙げられる。金城ハウプトマン朱美の論文はドイツでの受容であるが、日本での受容に関わりがあるため述べることにする。また書誌情報としては野口芳子、川戸道昭、榊原貴教が編集した『日本におけるグリム童話翻訳書誌目録』(2000)、川戸道昭、榊原貴教が編集した『児童文学翻訳作品総覧』(2005)が存在する。

須田康之は、「日本におけるグリム童話の受容と変容」(1991)[6]において、明治期から昭和期にかけて邦訳数の多い 5 話を取り上げて、訳文の変化を検討し改変の実態を明らかにしている。須田は時代区分を明治期、大正期、昭和 1 期(S1～S20)、昭和 2 期(S21～S40)、昭和 3 期(S41～S63)としている。5 話のなかには「ヘンゼルとグレーテル」が含まれているが、単行本のみの調査であり詳細な書誌事項はない。調査は冒頭と結末部分に焦点をあてて、子捨てについての改変のみを述べているにすぎない。改変は明治期、昭和 2 期、昭和 3 期に表れていると述べている。しかし、この調査は特定箇所のみの比較であり、対象とする資料は単行本のみで雑誌や教科書が含まれておらず、数が少ないうえにすべての資料名が明確に示されていないものである。

細谷瑞枝は「『ヘンゼルとグレーテル』その後」(2003)[7]において、第 7 版のモティーフのうち存続しているもの、削除されているものを調査している。調査対象は、国立国会図書館国際子ども図書館所蔵の 1945 年から 2005 年までに日本で出版された 67 話である。モティーフは「母親」、「猫と鳩」、「雪のように白い小鳥」、「川と鴨」を取り上げて、時代を 10 年ごとに区切り比較している。しかし、時代背景及び訳者に対する考察がないため、本来の意味での受容論とは認めがたい。

大島浩英は「『グリム童話集』初稿、初版、第 7 版における『ヘンゼルとグレーテル』の変化について」(2009)[8]において、論文の題名どおりテキストを比較し、その相違点を考察している。大島は「ヘンゼルとグレーテル」の初稿は、話の展開が簡潔な平叙文で表現されているが、初版から第 7 版になると、登場人物の動きや場面の描写が詳しくなり、具体的な表現に変化していることをドイツ語と日本語を併記して詳細に述べている。しかし、第 2 版から第 7 版に至るまでの各版(第 2 版、第 3 版、第 4 版、第 5 版、第 6 版)における改変点についての調査は行われていない。各版における改変にはそれぞれ理由があり、そ

---

[6] 須田康之「日本におけるグリム童話の受容と変容」『教育社会学研究』49 集 日本教育社会学会 1991 年 10 月 117-134 頁。

[7] 細谷瑞枝「『ヘンゼルとグレーテル』その後」『茨城キリスト教大学紀要』(37) 茨木キリスト教大学 2003 年 19-31 頁。

[8] 大島浩英「『グリム童話集』初稿、初版、第 7 版における『ヘンゼルとグレーテル』の変化について』『大手前大学論集』(10) 大手前大学 2009 年 53-67 頁。

れについての考察がないため、第 7 版で変化するかのような印象を与えてしまう。

2. 金城ハウプトマン朱美の論文

金城ハウプトマン朱美は「グリム兄弟のメルヒェン『ヘンゼルとグレーテル』について－その成立と現代ドイツにおける受容」(2013)[9]において、テキストの改版の比較や類話、現在のドイツでの受容について報告している。とくに改版の比較や類話については詳細に述べている。以下にその内容を記す。

テキストの改版の比較では文法的な変化を指摘しており、正書法が確立されていなかった時代において、ヴィルヘルムが試行錯誤していたことを明らかにしている。また『小さな版』にも言及し、第 6 版から加筆される魔女の詳細な容貌は『小さな版』8 版(1850)と 10 版(1858)にはないことから、金城は『大きな版』と『小さな版』は別々に編集が行われたと推測している。また改版により母親、父親、ヘンゼル、グレーテル、魔女の 5 人の登場人物の描写がどのように変化しているのかを明らかにしている。

次にグリム兄弟が影響を受けた主な類話を 3 つ紹介している。1 つ目は、シャルル・ペロー(Charles Perrault 1628-1703)の「親指小僧」である。これは父親が子捨てを提案し、7 人兄弟は捨てられ、人喰い鬼の家に行く。末っ子の親指小僧の機転により、人喰い鬼の娘たちを死亡させ、鬼の七里靴を盗み、さらに世話になった鬼の妻を騙して宝物を奪うというものである。金城は「グリム兄弟は、命の恩人を騙すことは教育上問題があると考えたのであろう」と述べており、そして「私的制裁(selbstjustiz)が、中世には多くおこなわれていたことがこのモチーフから想起される」と述べている。2 つ目はアウグスト・シュテーバー(August Stöber 1808-1884)の「パンケーキの家」(Das Eierkuchen häuslein)である。これは『アルザスの小さな民話本』(*Elsässiches Volksbüchlein*)(1842)に収録されているものである。

金城は、グリム兄弟がもっとも影響を受けた本であると述べている。実際、グリム版の第 5 版(1843)から加筆されている事柄がかなり多くなっている。そこには「雪のように白い鳥」(schneeweißes Vöglein)の出現や結末句「私の話はおしまい。そこに鼠が走っている。その鼠をつかまえた人は大きな大きな毛皮の帽子が作れる」(Jetzt isch's uß, dort lauft e Muuß, wer sie fangt derf sich e großi großi Pelzkabb druß mache)が存在する。金城は「シュテーバーの話は、グリム兄弟が目指した民衆の語りに近いものであった」と述べている。3 つ目は、ルートヴィヒ・ベヒシュタイン(Ludwig Bechstein 1801-1860)の「ヘンゼルとグレーテル」である。ベヒシュタイン版はグリム版よりも「神様」が多く出現することを取り上げている。金城は、ベヒシュタインはカトリック教徒で、そのためメルヒェ

[9] 金城ハウプトマン朱美「グリム兄弟のメルヒェン『ヘンゼルとグレーテル』について－その成立と現代ドイツにおける受容－」溝井裕一編『グリムと民間伝承』麻生出版 2013 年 7 月 227-265 頁。

ンにもキリスト教的要素を加えていると指摘している。

ゲッティンゲンのメルヒェン百科事典編纂所に「ヘンゼルとグレーテル」(話型 ATU374A)の類話は 200 以上蒐集保管されている。金城は 1 部のモティーフが類似している「四つ目の雌犬」と「人喰い男」を取り上げて類話として紹介している。「四つ目の雌犬」は、主人公の娘が人喰いに食べられそうになるが、逆に人喰いを釜に閉じ込めて無事帰宅するというものである。この場面はグレーテルが魔女を焼死させることと似ている。「人喰い男」は、道に迷った男の子が 1 軒の家を見つけて、出てきた老婆に一晩泊めてもらうことを懇願する。そこは人喰い鬼の住む家で、老婆は男の子を樽に入れるが、鬼は男の子の匂いを嗅ぎつける。男の子は指の代わりに細い枝を差し出し、鬼は男の子が痩せていると思い込むというものである。この場面は、ヘンゼルが魔女に捕らえられ指の代わりに骨を差し出していることと似ている。「人喰い男」はドイツ文学教授のイグナツ・ヴィンツェンツ・ツィンゲルレ(Ignaz Vinzenz Zingerle 1825-1892)により採取されたものである。彼はグリム兄弟と親交があり、「ヘンゼルとグレーテル」の魔女に非人間的な描写が加筆されるのは、ツィンゲルレの影響によるものではないかと金城は推測している。

さらに金城は、現代のドイツにおける受容として、「お菓子の家」の挿絵について触れている。19 世紀のフランツ・フォン・ポッチ(Franz Graf von Pocci 1807-1876)の挿絵には普通の家が描かれているだけで、オットー・ウッベローデ(Otto Ubbelohde 1867-1922)の挿絵でもお菓子の家は入口に大きなレープクーヘンが立てかけられているだけであるが、20 世紀から出現するカラーの挿絵は画家による独自の創意工夫が凝らされたものが多いと指摘している。

最後に金城は「ヘンゼルとグレーテル」が人々に受け入れられる要因として 3 つ挙げている。1 つ目は、父親、母親、子ども 2 人という現代の典型的な家族構成を示していることである。2 つ目は、グレーテルの勇敢な活躍に憧れを抱くというものである。3 つ目はお菓子の家が登場することである。

このように金城による先行研究は、日本における受容について述べたものではなく、主として、ドイツでグリム兄弟がどのような類話の影響を受けて 7 回も改版したのか、その出典に焦点を当てて考察したものである。

第 2 章　グリム兄弟の改版による変化

1. 概要

1) 改版について

グリム童話の最初のテキストは初稿(1810)で、その後初版(1812, 1815)、第 2 版(1819)、第 3 版(1837)、第 4 版(1840)、第 5 版(1843)、第 6 版(1850)、第 7 版(決定版)(1857)まで存在する。「ヘンゼルとグレーテル」については、主として弟のヴィルヘルム・グリムが加筆、修正したとされている[10]。先行研究で明らかにされているように、話の内容は第 5 版(1843)で大きく改変される。本論では新たに発見した事柄を含めて 2 項と 3 項で詳述する。

この章では初稿から第 7 版までの改版によって、話がどのように改変されているのかについて述べていく。テキストは下記のものを使用する。文中の括弧内にはテキスト番号⓪から⑦と頁数を明記する。なお、本論で使用する原典は⑦第 7 版(決定版)とする。

⓪初稿　Rölleke, Heinz: *Die älteste Märchensammlung der Brüder Grimm*. Cologny-Geneve: Bodmer 1975.

①初版(第 1 巻) Rölleke, Heinz: *Die älteste Märchensammlung der Brüder Grimm*. Cologny-Geneve: Bodmer 1975.

②第 2 版 Brüder Grimm: *Kinder- und Hausmärchen*. Hrsg. v. Heinz Rölleke. Bd. 1. Köln: Diederichs 1982.

③第 3 版 *Kinder- und Hausmärchen gesammelt durch die Brüder Grimm*. Hrsg. v. Heinz Rölleke. Frankfult a. M. : Deutscher Klassiker 1983.

④第 4 版 *Kinder- und Hausmärchen gesammelt durch die Brüder Grimm*. Bd.1. Göttingen: Dieterich 1840.

⑤第 5 版 *Kinder- und Hausmärchen gesammelt durch die Brüder Grimm*. Bd.1. Göttingen: Dieterich 1843.

⑥第 6 版 *Kinder- und Hausmärchen gesammelt durch die Brüder Grimm*. Bd.1. Göttingen: Dieterich 1850.

⑦第 7 版(決定版) Brüder Grimm: *Kinder- und Hausmärchen*. Bd.1. Hrsg. v. Heinz Rölleke. Stuttgart: Reclam 1980.

2) あらすじ（第 7 版）

貧しい樵の父親、継母、ヘンゼル、グレーテルの 4 人が森のはずれに住んでいる。父親

[10] Rölleke, Heinz: *Die Märchen der Brüder Grimm-Quellen und Studien. Trier*: WVT. 2000, S. 177-180.

は物価高のために子どもたちを養うことができない。そこで後妻である妻に相談する。継母は子どもたちを森に捨てることを提案する。父親は気が進まないが、仕方なく継母の提案に従う。1 回目の子捨てでは道しるべの白い小石により子どもたちは無事帰宅するが、2 回目の子捨てでは道しるべのパンくずは森の小鳥たちに食べられてしまい、2 人は森で迷子になる。そして雪のように白いきれいな小鳥に導かれてパンの家を見つける。そこには魔女がいて牛乳、砂糖をまぶしたパンケーキ、りんご、くるみを子どもたちに与える。しかし翌日になると、ヘンゼルは檻に入れられ、グレーテルは働かされる。魔女は子どもたちを食べようとするが、グレーテルの機転によりパン焼き竈に入れられて逆に焼き殺される。2 人は魔女の家にあった宝物を奪って逃げる。途中に大きな川があり白い鴨が泳いでいる。ヘンゼルはすぐに白い鴨に乗り、グレーテルにも乗るように言うが、グレーテルは、それでは鴨にとって重すぎるのでひとりずつ渡してもらうことを提案する。帰宅すると継母は死亡しており、父親だけになっている。3 人は奪った宝物で幸せに暮らす。

2. 改版による変更箇所

1) 改版による変更箇所の一覧表

初稿から第 7 版までの改版で物語の状況描写が変化している。ここでは改版に伴い、どのように加筆されているのか、いくつかの改変事項を【表 1】に示す。

【表 1】

改変事項	初稿	初版	第 2 版	第 3 版	第 4 版	第 5 版	第 6 版	第 7 版
(1) 物価高(インフレ)						○	○	○
(2) 大人たちが寝てしまった後						○	○	○
(3) 斧の音			○	○	○	○	○	○
(4) 森の奥深くに連れていく (2 回目)		○	○	○	○	○	○	○
(5) 木の下で眠りこむ						○	○	○
(6) 白い小鳥の出現						○	○	○
(7) 白い鴨の出現			○	○	○	○	○	○
(8) 心配がなくなり楽しく暮らす						○	○	○
(9) 結末句						○	○	○

○は改版により出現する事項

2) 変更箇所の項目について

(1) 物価高(インフレ)

最初に「物価高(インフレ)」(große Teuerung) という表現が出現するのは、第 5 版からであり、それ以前の版では出現していない。第 4 版までは「ついにそれ(パン) さえも手に

入れることができないときがきた。そしてこの窮地(Not)にどう対応していいかわからなかった」(Endlich kam die Zeit, da konnte er auch das nicht schaffen, und wußte keine Hülfe mehr für seine Noth)[11]と表現されており、具体的な社会的状況を示していない。

(2) 大人たちが寝てしまった後

子どもたちは両親が子捨ての相談をしているのを聞き、ヘンゼルは外へ小石を集めに行く。「大人たちが寝てしまった後」(als die Alten eingeschlafen waren)という表現が第5版から挿入される。時間描写がされ、遅い時間であることが読み取れる。

(3) 斧の音(Axt hörten)

1 回目の子捨てで、子どもたちは森に置き去りにされると父親が斧で木を伐っているかのような音が聞こえてくる。この表現は第2版から挿入されている。父親が枝を木にくくりつけていて、それが風になびいているのである。両親が近くにいると子どもたちに思い込ませるために意図的にした行為であるとはテキストには書かれていない。

(4) 森の奥深くに連れて行く(wir wollen sie tiefer in den Wald hineinführen)

2 回目の子捨てでは、子どもたちは今まで来たことのない森の奥深くまで連れて行かれる。2 人の帰宅を阻もうとする母親の策略であり、それによって母親の悪の度合いが強調されている。

(5) 木の下で眠りこむ

2 回目の子捨てで子どもたちが森の中で迷子になり、疲れて眠る場面では、「木の下で疲れて眠り込んだ」(legten sie sich unter einen Baum und schliefen ein)[12]という表現が第5版から加筆され文章が終わる。初版から第4版までは森で迷った2人は「疲れて眠り込んだ」(schliefen endlich vor Müdigkeit ein)のであるが、お腹が空き、食べ物は木の実しかないという表現で終わる。つまり第4版までは2人は食べ物のことを心配する場面で終わるのであるが、第5版からは2人が眠ることで一旦話の終わりを告げ、次章に向けての新しい展開を示そうとしていると読める。

(6) 白い小鳥の出現

「雪のように白いきれいな小鳥」(schönes schneeweißes Vöglein)が現れて、迷子にな

---

[11] *Kinder- und Hausmärchen gesammelt durch die Brüder Grimm*. Bd.1 Göttingen: Dieterich 1840, S. 93.

[12] *Kinder- und Hausmärchen gesammelt durch die Brüder Grimm*. Bd.1. Göttingen: Dieterich 1843, S. 96.

った 2 人をパンの家へと導く。この鳥も第 5 版から出現する。暗い森の中で白い小鳥の出現は、まるで「神の使い」であるかのようだといえる。

(7) 白い鴨の出現

魔女の家から逃げ出すときは、初版では走って帰宅するのみであったが、第 2 版から川にいる白い鴨(weiße Ente)の出現により、家との距離があり 2 人は遠くまで行ってしまったことがわかる。グレーテルは川を渡るため、白い鴨を呼んで背中に乗り渡してもらう。次にヘンゼルも渡してもらう。しかし、第 5 版からグレーテルが呼んだ鴨にヘンゼルが真っ先に乗り、グレーテルも一緒に乗るように言う。するとグレーテルは鴨のことを考えて「重いから 1 人ずつ」と言い、ヘンゼルを渡してもらってから、その後で渡してもらう。おそらくシュテーバーの類話の影響を受けたものであろう。

(8) 「心配がなくなり楽しく暮らす」(帰宅後の状況)

魔女の家から子どもたちが帰宅したとき、初稿では父親は「金持ちになった」(der ward ein reicher Mann)、初版では(ward nun ein reicher Mann)であるが、第 2 版から第 4 版までは「子どもたちが充分な宝物を持ち帰ったので、彼らは一生食べ物や飲み物のことを心配する必要がなくなった」(Nun brachten die Kinder Reichthümer genug mit und sie brauchten für Essen und Trinken nicht mehr zu sorgen)と改変され、飲み食いに困らないことが幸せであると表現されている。第 5 版からは「心配がなくなり彼らは楽しく暮らす」(Da hatten alle Sorgen ein Ende, und sie lebten in lauter Freude zusammen)となる。つまり幸せの解釈が「食べ物に困らないこと」だけでなく、他の要素もあることを暗示した表現に変えられたのである。

(9) 結末句

初稿から第 4 版までは存在しなかった結末句が第 5 版から挿入される。それは「これで私の話はおしまい。あそこに鼠が走っているよ。捕まえたらそれで大きな大きな毛皮の帽子が作れるよ」(Mein Märchen ist aus, dort läuft eine Maus, wer sie fängt, darf sich eine große, große Pelzkappe daraus machen)という表現である。昔話の特質を表しているといえる。

3) アウグスト・シュテーバー(August Stöber)の影響

金城の先行研究にあるように「ヘンゼルとグレーテル」は、第 5 版からシュテーバーの影響を大きく受けている。ハインツ・レレケ(Heinz Rölleke)の「アウグスト・シュテーバーがグリム童話集に与えた影響」(August Stöbers Einflüß auf die Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm)には、グリム童話の第 5 版とシュテーバーとの比較が

記載されている。上記に挙げた「白い小鳥」(schneewyß Vejele)の出現やヘンゼルが先に乗り込んでグレーテルにも一緒に乗るように言うが、それでは鴨にとって重すぎるとたしなめるのもシュテーバーの影響である。ヘンゼルが幼稚化し、グレーテルが賢く大人になったことが強調されている表現になっている。さらに結末句(Jetzt isch' s uß, dort lauft e Muuß, wer sie fangt derf sich e großi großi Belzkapp druß mache!)も挿入されているのもシュテーバーの類話から取り込んだからである[13]。

3. 人物描写の変遷

1) 父親の描写

父親は、初稿から第 4 版までは妻からいきなり子捨てを提案されるが、第 5 版からは妻の提案の前に「俺たちはどうなるのだろう」(Was soll aus uns werden?)と将来を悲観して嘆いている。さらに第 5 版から、2 回目の子捨てを妻が提案したとき、すぐに同意しなかった夫に対して妻は夫の言葉を聞かず、しかりつけて非難する。それに対して夫は「やりかけた以上最後までやり通さなければならない」(Wer A sagt, muß auch B sagen)という諺を使って自らを説得し、不本意ながらも妻に同意する。つまり善良ではあるが、妻に逆らえない弱い夫として描かれているのである。

2 回目の子捨てでは、初版から第 7 版まで父親は「子どもたちと最後の一口まで分け合う方がよい」(es wäre besser, daß du den letzten Bissen mit deinen Kindern theiltest)と発言し、困難な状況にあっても家族全員で生き抜こうとする姿勢を貫こうとしている。

2) 母親の描写

母親(Mutter)は、初稿から第 3 版までは実母であったが、第 4 版から継母(Stiefmutter)に変えられる。しかし、継母に変わると同時に母親の悪の度合いが強められたわけではなく、版を重ねるにしたがって、冷酷で非情な人物として描かれていく。1 回目の子捨ての提案をするときの理由は「もはや子どもたちを養うことができない」(Wir können sie nicht länger ernähren)とされており、第 5 版からはじめて「子どもたちは帰り道がわからないので、厄介払いができる」(Sie finden den Weg nicht wieder nach Haus, und wir sind sie los)という表現に変わる。また父親に子捨てを迫るとき、初版から第 4 版までは「全員飢え死にすることになる」(So müssen wir alle miteinander Hungers sterben.)だけであったが、第 5 版から夫を侮辱する言葉「ばか者」(narr)とともに、「棺桶を作るための板にかんなをかけておきな」(Du kannst nur die Bretter für die Särge hobelen)という表現が加わる。2 回目の子捨ての提案をするときも、初版から第 4 版までは「1 回目では子どもは帰り道がわかったから、戻ってきたのは仕方がない」(Einmal haben die Kinder den Weg

[13] Rölleke, Heinz: *Wo das Wünschen noch geholfen hat*. a. a. O., S. 84-86.

zurückgefunden, und da habe ichs gut seyn lassen）と言い、前回の失敗した理由に触れてから再度提案するのだが、第 5 版からはこの言葉が削除され、自分と夫のことだけを考えている表現に変わり、「これで一巻の終わりだ。子どもたちを捨てなければならない」（Hernach hat das Lied ein Ende. Die Kinder müssen fort）と言うのである。さらに、第 5 版から妻は子捨てに同意しない夫に対して罵る場面が「妻は夫の言うことに耳を傾けず、彼を叱りつけて非難した」（die Frau hörte auf nichts, was er sagte, schalt ihn und machte ihm Vorwürfe）挿入される。このように第 5 版から継母は子どもたちに対して非情で、身勝手な母親として悪の度合いが強調されていく。

次に母親が子どもたちに対してどのように対応しているのかを見ていく。第 1 回目の子捨てで、朝子どもたちを起こすとき、第 5 版から「怠け者」（Faulenzer）という言葉が加わる。初稿では朝子どもたちを起こすのは、母親だけでなく両親である。しかし、初版から母親のみとなり、それが第 7 版まで維持される。また森へ行く途中にヘンゼルが猫（2 回目は鳩）を見ていると言ったとき、初版から第 7 版まで「ばかだね」（narr）と侮辱している。1 回目の子捨てで子どもたちが森から帰宅したとき母親は、初稿ではただ「怒っていた」（Mutter war bös）だけであるが、初版から第 4 版までは「嬉しそうなふりをしていたが、心のなかでは怒っていた」（als wenn sie sich freute, heimlich aber war sie bös）と改変される。それがさらに第 5 版からは「おまえたちは、もう帰る気がないと私たちは思った」（Wir haben geglaubt, ihr wolltet gar nicht wiederkommen）と言って、子捨てをした自分が悪いのではなく、暗くなるまで帰ろうとしなかった子どもたち自身が悪いと言い放つのである。つまり自分が犯した罪を子どもたちに責任転嫁したのである。このように子どもたちを邪険に扱う継母像が、第 5 版でより鮮明に打ち出されているのである。

3) ヘンゼルの描写

ヘンゼルは改版により、魔女の家に到着するまでは頼りがいのある男の子になっていくが、魔女に囚われてからは退化していく。両親が子捨ての相談をしているのを聞いて、グレーテルに対して、初稿では「静かにするように」（Es soll still seyn）と言うだけであるが、初版から「なんとかする」（Ich will uns helfen）という言葉が加わる。道しるべに投げたパン屑が鳥に食べられ、森で迷子になってから、グレーテルに言う言葉は、第 5 版から「道はきっとみつかる」（Wir werden den Weg schon finden）である。つまり前向きな逞しい男の子として描かれているのである。グレーテルに対して、初版から「安心してお休み」（schlaf nur ruhig）と言うが、第 5 版からは「神様は見捨てないだろう」（Gott wird uns nicht verlassen）という言葉が加わる。2 回目の子捨ての相談を聞き、外へ小石を集めに出ようとしたとき戸に鍵がかかっているのだが、初稿ではヘンゼルは「悲しくなって妹を慰めることができなかった」（Da fing das Brüderchen an traurig zu werden, und konnte das Schwesterchen nicht trösten）のに、初版から第 7 版まで一貫して上記の表現

は削除され、「神様がきっと助けてくれる」（Der liebe Gott wird uns schon helfen）という表現に変えられる。つまり気の弱い男の子だったのが、神を信じ、希望を捨てない男の子に改変されたのである。

ヘンゼルは、魔女のパンの家を食べるとき、グレーテルに屋根ではなく下にある甘い氷砂糖でできた窓を食べるよう促している。おそらくグレーテルはヘンゼルよりも背が低いということなのであろう。妹に対する兄の優しい気遣いがみてとれる。しかし魔女に囚われてからは、ヘンゼルは言葉をなくしてしまう。その時点からグレーテルが主役になる。魔女の家から宝物を持ち帰るときも、ヘンゼルは無言であるが、第 5 版から宝物を見てはじめて「小石よりいい」（Die sind noch besser als Kieselsteine）という言葉を発する。その後大きな川を前にしたとき、第 5 版から「渡れない。橋もなければ丸太もない」（„Wir können nicht hinüber“,sprach Hänsel, „ich sehe keinen Steg und keine Brüke“）と弱気な言葉を発する。グレーテルが呼んだ白い鴨がこちらに来たとき、第 2 版から第 4 版まではヘンゼルはグレーテルが乗ってから、2 回目の使いで渡るが、第 5 版からはグレーテルが呼んだのに「ヘンゼルが先に乗り、妹にも乗るように促す」（Hänsel setzte sich auf und bat sein Schwesterchen, sich zu ihm zu setzen）のである。つまり彼は妹よりも自分の安全を優先し、鴨の負担についても考える力がないのである。このように魔女の家で捕われてから、ヘンゼルはとりわけ第 5 版から退化現象が進み、グレーテルとは立場が逆転してしまうのである。

4）グレーテルの描写

グレーテルは、両親の子捨ての話を聞いたとき、しくしく泣き出し、ヘンゼルに慰められるか弱い女の子であったが、魔女の家に入ってからは勇気ある女の子として描かれている。「泣く」ことに焦点を当ててこの話を見ていくことにする。森に置き去りにされて泣く場面では、第 4 版までは「夜になるまで待っても父と母は戻ってこない。誰も迎えに来てくれない」（Nun warteten sie bis zum Abend, aber Vater und Mutter blieben aus, und niemand wollte kommen und sie abholen）ので、そのうち暗闇を感じて泣くのだが、第 5 版からは「眠ってようやく目を覚ますと、もう真っ暗な夜になっていた」（Als sie endlich erwachten, war es schon finstere Nacht）ので泣くのである。この違いは何であろう。第 4 版までは幼いグレーテルは両親を信じていたが、迎えに来てくれなかったので泣いたのである。第 5 版からは気が付くと夜になっていたから泣いたのである。「泣く」理由が変わっているのである。また初稿から第 4 版まで言葉はないが、第 5 版から「私たちはどうやって森から出たらいいの」（Wie sollen wir nun aus dem Wald kommen）と嘆き悲しむ言葉が出現し、ただ泣くだけでなく、対策を考えるグレーテルの姿が描き出されている。魔女の家に行ってからは、家事を言いつけられると、初版から第 4 版までは「グレーテルは驚いて泣き、魔女の言うとおりにしなければならなかった」（Grethel erschrak und weinte,

mußte aber thun, was die Hexe verlangte）のであるが、第 5 版からは「グレーテルは激しく泣いたが、すべて無駄であった」（Grethel fing an bitterlich zu weinen, aber es war alles vergeblich）という言葉が加わり、つらい現状を直視して諦めて受け入れていることがわかる。

次に魔女との対決の場面である。魔女を竈の中に押し込むとき、初稿ではグレーテル自身が魔女の企みに気付くのだが、初版から第 3 版までは神が導いたように描かれている。しかし第 4 版からは再びグレーテル自身が魔女の企みに気付き、それが第 7 版まで維持される。川を渡るときも第 2 版から第 4 版まではグレーテルが先に渡るのであるが、第 5 版からはグレーテルが鴨を呼んだにもかかわらず、ヘンゼルが先に乗り、グレーテルにも一緒に乗るように言う。そこでグレーテルは「それでは鴨が重いから順番に渡してもらおう」（Es wird dem Entchen zu schwer, es soll uns nacheinander hinüberbringen）と言うのである。ヘンゼルとは異なり、グレーテルは思いやりがあり、状況を判断する力が備わっていることがわかる。グレーテルは身の上に起こるさまざまな災いに対して泣くだけの弱い女の子であったが、魔女の家で仕事をすることによって、判断力も勇気も備わった大人の女性に成長したのである。森から帰宅して父親に宝物を出す場面が第 5 版から加わるが、グレーテルはエプロンから宝物を出すとき「真珠や宝石が部屋中に散らばった」（daß die Perlen und Edelsteine in der Stube herumsprangen）とある。グレーテルは一気に宝物を出したのだ。第 4 版まではこの場面の記述はない。悪い魔女を倒した自信と父親に会うことができた喜びを一気に放出したような表現である。おそらくグレーテルは労働をして森のなかで試練に打ち勝つことができた。つまりイニシエーションに合格して大人になったのである。そのことをヴィルヘルム・グリムは改筆により、明確に描き出したといえる。

5）魔女の描写

魔女は森に住んでいて子どもを食べようとする悪人として描かれており、改版によりその容貌が変化していく。魔女の外見について、初稿では「小さな年とった女」（eine kleine alte Frau）であるが、初版では「石のように年とった小さな女」（eine kleine steinalte Frau）に変わる。「石のように」（steinalte）という形容詞は「片足をすでに墓石に突っ込んでいる」という意味で非情に侮辱的な表現である[14]。この表現はその後第 2 版から第 7 版まで維持される。さらに第 5 版からは「杖をついている」（eine Krücke stützte）ことが加わる。魔女の特徴として第 6 版から「目が赤く、遠目が利かず、獣のように嗅覚が発達していて人間が近付くと嗅ぎ分けることができる」（Die Hexen haben rote Augen und können nicht weit sehen, aber sie haben eine feine Witterung, wie die Tiere, und merken´s, wenn

[14] Grimm, Jacob u. Grimm, Wilhelm: *Deutsches Wörterbuch*. München: DTV 1984, Bd.18. (1.Aufl. 1941 Leipzig), S. 2040. 野口芳子『グリム童話と魔女』勁草書房 2002 年 2 月 10 頁。

Menschen herankommen）という人間離れした表現が加筆される。ヘンゼルが檻に入れられて指の代わりに鳥の骨を差し出す場面があるが、そこでは魔女は「濁った目をしていて見えない」（die trübe Augen hatte, konnte es nicht sehen）ために骨を出されてもわからないのである。この表現は第 5 版から挿入される。またヘンゼルとグレーテルへの執着心を示す言葉として「逃がすものか」（die sollen mir nicht entwischen）という言葉が第 5 版から加わり、「人食い」としての魔女の本性が描かれている。さらに魔女には「悪い」という形容詞が版を追うごとに加筆されていく[15]。非人間的で悪い魔女像が改版により強調されているのである。

子どもたちとの会話において、魔女の言葉に大きな改変が行われている。2 人を家に招き入れるとき、魔女は初版から第 5 版まで「いいものをあげよう」（Ihr sollts gut haben）と誘うが、第 6 版からは「つらい思いはさせない」（Es geschieht euch kein Leid）と言う。子どもたちの災難を察知しているかのような言葉であり、子どもたちの警戒心を解き安心させようとする心遣いが感じられる。

グレーテルに竈に入るように促す場面では、初稿から第 4 版までは魔女は「板の上に乗る」（setz dich auf das Brett）のであるが、第 5 版からは自ら「竈に頭を突っ込む」（steckte den Kopf in den Backofen）のである。その後グレーテルに竈に押し込まれて焼き殺されてしまうが、小さくても大人の魔女を板の上に載せて押し込むより、竈の中に突き飛ばす第 5 版の表現の方が、より簡単で少女にでもできる現実的な行為といえよう。

4. 考察

改版による変更箇所を見ていくと、話の内容に深みが増してくるのがわかる。第 5 版からは、インフレまたは物価高（große Teuerung）のために子捨てが行われ、2 回目の子捨てでは森で迷った 2 人が木の下で眠り込む。物語はここで幕が閉じることを意味している。そして朝 2 人が目覚めると雪のように白いきれいな小鳥が出現し、新たな幕開けとなるのである。これにより読者は過酷な状況から束の間の休息を得る。そして結末句を挿入することにより、現実の話ではなく、昔話であることを表明しているのである。金城が先行研究で述べているように、第 5 版の改版による変化は、シュテーバーの「パンケーキの家」の影響を強く受けているのである。

父親は子捨てに同意しながら、子どもたちに対して常に優しい存在として描かれている。母親は初稿から子捨ての提案をする悪人として描かれている。子捨てについては母親が提案するが、父親の同意を求めるのは、父親の親権を意識しているからであろう。母親は 1 回目の子捨てで2人が帰宅すると、第4版までは不機嫌さの態度のみで表現されているが、

[15] 初稿 0 回、初版 1 回、第 2 版 1 回、第 3 版 4 回、第 4 版 5 回、第 5 版と第 6 版 8 回、第 7 版 9 回出現する。野口芳子「『グリム童話』のなかの悪人像－継母と魔女の抽出を中心に－」『武庫川女性学研究』（2） 武庫川女子大学女性学研究会 1997 年 11 月 26 頁。

第5版からは子どもを罵る言葉が出現する。幼い子どもだけで帰宅したにもかかわらず、暴言を吐き、悪の度合いが強調されるようになる。ヘンゼルは、話の前半部分では妹を保護しようとしているが、後半部分では逆に妹から保護される存在となる。一方、グレーテルは泣いているだけであったが、ヘンゼルが囚われの身となり魔女の下で労働をすることにより、第5版からは賢く逞しい存在となる。魔女は容貌が変化していく。小さな年取った女から、第6版からは詳細な容貌描写が加筆され、人間離れした存在にされてしまう。

一方、父親は改版に関係なく常に優しい存在である。ようするに、改版により母親と魔女は悪人に、ヘンゼルは退化し、グレーテルは成長していくのである。換言すれば、悪事を謀る者は排除され、労働しない者は退化し、労働をする者は賢く強くなることを示唆しているといえる。

第 3 章　日本で邦訳されている類話

1. 概要

「ヘンゼルとグレーテル」には多くの類話が存在し、『国際昔話話型カタログ』では 327A に分類される。そのうち邦訳されているのは、シャルル・ペロー(Charles Perrault 1628-1703)の「親指小僧」『昔ばなし』(*Histoires ou Contes du temps passè* 1697)、ルートヴィヒ・ベヒシュタイン(Ludwig Bechstein 1801-1860)の「ヘンゼルとグレーテル」『ドイツ昔話の本』(*Deutsches Märchenbuch* 1845)、マルティン・モンターヌス(Martin Montanus 1537 頃-1566 頃)の「ふたりの子を持つ女の美しい話」(「地の雌牛」ともいう)『庭の集い第二部』(*Das Ander theyl der Gartengesellschafft* 1560 頃)[16]、ジャンバッティスタ・バジーレ(Giambattista Basile 1575 頃-1632)の「ニッニッロとネッネッラ」『ペンタメローネ』(*Pentamerone* 1634-1636)[17]、オーノワ夫人(Marie Catherine Aulnoy 1650-1705)の「フィネット・サンドロン」(『ロゼット姫』所収)[18]である。

明治期から昭和期までの邦訳の内容を精査した結果、上記のうち主として 2 種類の類話が底本として使用されていることが判明した。それはペローの「親指小僧」とベヒシュタインの「ヘンゼルとグレーテル」である。ここではペローとベヒシュタインについて見ていくことにする。

2. ペローの「親指小僧」

1) あらすじ

貧しい樵と妻、7 人の息子が住んでいる。7 番目の息子はとても小さくて親指小僧と呼ばれている。ある年、大飢饉になり、樵は子どもたちを養っていけないという理由で子捨てを提案する。妻はしぶしぶ同意する。親指小僧はその話を聞き、白い小石を集める。両親は子捨てを実行するが、道しるべの白い小石で 7 人の子どもたちは帰宅し、ご馳走を食べる。ほどなくして一家の経済状態が悪くなり、両親は再び子捨てを実行する。親指小僧は道しるべにパン屑を撒くが、小鳥たちに食べられてしまう。道に迷った 7 人は人食い鬼の家にたどり着く。人食い鬼の妻は 7 人をかくまう。人食い鬼の家には 7 人の娘がいるが、親指小僧の機転で鬼は自分の娘たちを殺してしまう。鬼は怒り、逃げた 7 人を 7 里靴で追いかけるが、途中でひと休みする。その隙に親指小僧は鬼の 7 里靴をはき、鬼の家に行って全財産を奪い、帰宅すると父親に歓迎される[19]。

---

[16] 板倉敏之他編『もうひとりのグリムーグリム兄弟以前のドイツ・メルヘンー』北星堂書店 1998 年 7 月 13-19 頁。
[17] 杉山洋子他訳『ペンタメローネ』大修館書店 1995 年 10 月 438-443 頁。
[18] 上村くにこ訳『ロゼット姫』東洋文化社 1981 年 6 月 103-144 頁。
[19] 今野一雄訳『ペローの昔ばなし』白水社 2007 年 7 月 166-206 頁。

2) シャルル・ペロー(Charles Perrault 1628-1703)について

フランスの作家で、弁護士として活躍した後、1663 年にルイ 14 世の財務総監コルベールの下で王立建築物監督として勤める。著作に『古代人と現代人の比較』があり、これは古代の権威を否定し、学問や芸術の分野にも進歩があるという考えを示したものである[20]。

3. ベヒシュタインの「ヘンゼルとグレーテル」

1) あらすじ

森の中の小屋に、貧しい樵が妻と 2 人の子どもと一緒に住んでいる。子どもの名前はヘンゼルとグレーテルである。あるとき、食べ物の価格が高騰し、両親は不安になる。そこで母親は子捨てを提案する。苔のベッドの中で眠れずにいた子どもたちは、両親の話を聞く。1 回目の子捨てでは、ヘンゼルはグレーテルの手を取り、目印にした白い石で無事帰宅する。2 回目の子捨てでは、ヘンゼルはパン屑をまくが、森の小鳥に食べられてしまう。2 人は道に迷い森の中で眠る。朝、空腹で目が覚めた 2 人が野苺を食べ、森の中をさまよっていると、雪のように白い小鳥が現れ、2 人を案内する。小鳥について行くと、壁がパンで、屋根がパンケーキ、窓が透明な飴でできた小さな家に辿り着く。そこには高齢で、腰が曲がり、ただれ目をした小さな老婆がいた。彼女は 2 人をビスケット、マジパン、砂糖入りのミルク、リンゴ、胡桃、ケーキで歓待する。しかしその老婆は邪悪な魔女であり、ヘンゼルをガチョウ小屋に閉じ込め、グレーテルを女中として働かせる。魔女はヘンゼルが太ったかどうか確かめるため、ヘンゼルに指を出させる。ヘンゼルは指の代わりに骨を出し魔女をだます。しびれをきらした魔女はヘンゼルを焼くことにする。グレーテルは機転を利かせて、魔女をオーブンに閉じ込め焼き殺す。グレーテルはヘンゼルを助けると、キスをして、神に感謝する。そこへ白い小鳥が来て、パンのお礼に小さな石や真珠を 2 人に与える。小鳥に案内され森を抜け、大きな川に出る。白鳥がひとりずつ渡してくれ、無事帰宅する。年老いた樵と妻は、子捨てをしたことを後悔していた。ヘンゼルとグレーテルが宝石と真珠を持参して帰宅すると、食べ物の心配がなくなり、幸せに暮らす[21]。(拙訳)

2) ルードヴィヒ・ベヒシュタイン(Ludwig Bechstein 1801-1860)について

ベヒシュタインはドイツの作家である。彼はグリム兄弟と同時代に昔話や伝説を発表していて、1845 年に『ドイツ昔話の本』(*Deutsches Märchenbuch*)を出版しており、それはグリム童話集を上回る読者数を獲得したといわれている[22]。

---

[20] 今野一雄訳 前掲書 2007 年 208 頁。

[21] Bechstein, Ludwig: *Deutsches Märchenbuch*. California: Createspace 2013, S. 42-47.

[22] 高木昌史編著『決定版グリム童話事典』三弥井書店 2017 年 4 月 303 頁。

第 4 章　最初の邦訳「一太郎とおすみ」

1. 「一太郎とおすみ」について

1) 概観

グリム童話「ヘンゼルとグレーテル」の最初の邦訳は、1901(明治 34)年 8 月の東海生訳「一太郎とおすみ」である。この邦訳についての先行研究は拙論のみである[23]。子どもたちの名前は和名で紹介されているが、原典[24]に忠実で結末句まで訳されている。明治期の邦訳において結末句が訳されているのは「一太郎とおすみ」のみである。このことから伝承文学について造詣が深い人物の邦訳であると推測される。訳者の東海生は筆名であり、本論ではその実名についても探っていきたい。

2) 掲載誌について

「一太郎とおすみ」は、1901(明治 34)年の 8 月と 9 月に発行された雑誌『日本之小學教師』に収録されているものである。『日本之小學教師』は、國民教育學会(後の大日本小學教師協会)により、「小学教育法の研究・改善、小学教師の知識増進、小学教師社会の幸福および小学教師の優秀者、功績者の表彰を推進することを目的」[25]として創刊された雑誌である。

3) 「一太郎とおすみ」のあらすじ

樵の父、継母、兄の一太郎、妹のおすみの 4 人は、大きな森の近くに住んでいる。あるとき飢饉がおこり、継母は子捨てを提案する。親子 4 人で森に行き、2 人の子どもに握り飯を与え、置き去りにする。しかし一太郎が道に撒いていた白い石を頼りに、子どもたちは無事帰宅する。しばらくして再び飢饉になる。継母は 2 回目の子捨てを提案する。一太郎は飯粒を撒くが、鳥に食べられてしまい、2 人は森で迷子になる。そこへ雪のように白いきれいな小鳥が現れ、2 人を餅の家に導く。その家には鬼婆がいて、彼女は牛乳、金平糖、まんじゆ、むしがし、かき、くるみ、りんごで 2 人を歓待する。翌日、一太郎は小屋に入れられ、おすみは水汲みや料理をさせられる。4 週間経過後、鬼婆は一太郎を食べることにする。鬼婆は焙肉とテンプラを作ると言う。おすみは料理を手伝う。鬼婆に火加減を見るように言われると、おすみは機転を利かして、逆に鬼婆を竈に押し込み焼き殺す。おすみは一太郎を救出し、鬼婆の家にあった真珠や宝石を奪いとる。途中に大きな池があ

---

[23] 拙論「明治期におけるグリム童話 KHM15『ヘンゼルとグレーテル』の受容について－『一太郎とおすみ』の訳者東海生に焦点をあてて－」『梅花児童文学』(27) 梅花女子大学大学院児童文学会 2019 年 6 月 51-67 頁。

[24] テキストの第 7 版(決定版)(1857)を原典として使用する。

[25] 教育ジャーナリズム史研究会編『教育関係雑誌目次集成』第Ⅱ期学校教育編 20 巻 日本図書センター 1989 年 9 月 85 頁。

り白いかもめが泳いでいる。一太郎はおすみに一緒に乗るように言うが、おすみはひとりずつ渡してもらうことを提案する。2 人が帰宅すると継母は病気で死亡しており、父親だけになっている。2 人が持ち帰った宝物で心配事がなくなり、親子 3 人仲睦まじく暮らす。

2. 「一太郎とおすみ」の邦訳文について 1

1) 原典と異なる表現

(1) 登場する人物と動物

登場人物の名前は、兄が一太郎、妹がおすみで和名である。魔女(Hexe)は鬼婆である。この当時„Hexe“は「鬼婆」と訳されていたのである。子どもたちが鬼婆を焼死させ、その帰宅途中の池には白い鴨ではなく、白いかもめが出現する。継母は病気で死亡している。

(2) 食べ物

「一太郎とおすみ」ではさまざまな食べ物が出現し、原典とは異なる表現が数多く存在する。1 回目の子捨てでは一太郎は原典どおり「白い石」を撒くが、2 回目の子捨てでは「パン屑」ではなく「飯粒」を撒く。子どもたちが森で見つける「パンの家」は「餅の家」に改変されている。魔女が 2 人を歓待する料理は「牛乳、砂糖をまぶしたパンケーキ、りんご、くるみ」ではなく、「牛乳、金米糖、まんじゅ、むしがし、かき、くるみ、りんご」である。原典では魔女は兄を食べようとする前に「まずパンを焼く」と言うのであるが、「焙肉とテンプラを作る」と言う。とくに魔女の家で提供される食べ物に焦点を当てると、日本古来の食べ物と外国から伝来した食べ物が混在していることがわかる。邦訳者は博識な人物であるといえる。以下それぞれの食べ物について考察する。

牛乳は古墳時代に伝来した説と奈良時代に朝鮮半島を経て伝えられた説とがある[26]。しかし日本では長い間、殺生禁止、肉食禁止が続いたために牛乳は飲用されなかった。江戸中期の享保年間(1716-1736)に 8 代将軍徳川吉宗が、調馬師として来日していたオランダ人の勧めで白牛を輸入し、安房国(現千葉県)の牧場で飼育させたという[27]。1869(明治 2)年には北海道開拓使により乳牛飼育が本格化した。1870(明治 3)年に福沢諭吉は「肉食之説」において牛乳の効能を説いており、牛乳を用いた「乾酪（洋名チーズ）乳油（洋名バタ）懐中乳の粉（洋名ミルクパヲダル）懐中白薄乳の粉（洋名コンデンスド・ミルク）」などを紹介している[28]。1872(明治 5)年に国学者である近藤芳樹(1801-1880)は『牛乳考屠畜考』において牛乳を「美留久」と称して飲用を勧めている[29]。1881(明治 14)年には、東京で一

[26] 岡田哲『たべもの起源事典 日本編』筑摩書房 2013 年 5 月 184 頁。
[27] 同上 185 頁。
[28] 福沢諭吉「肉食之説」『福沢諭吉全集』20 巻 岩波書店 1963 年 6 月 39 頁。
[29] 近藤芳樹『牛乳考屠畜考』日新堂 1872 年 9 月 3-4 頁。

般家庭の牛乳配達が始まるのである[30]。

金米糖(金平糖)はポルトガル語（confeito）が語源であり[31]、16 世紀にポルトガル人が持ち込んだ南蛮菓子である。

まんじゆは饅頭のことであろう。饅頭は中国から伝来した菓子であり、2 つの系統がある[32]。1 つは、鎌倉時代中期の 1241(仁治 2)年に、宋から帰朝した聖一国師(円爾1202-1280)が「酒素まんじゅう」を伝えた。もう 1 つは、南北朝時代の 1349(貞和 5)年に、元の林浄因が帰化して奈良に住み、塩味の「菜まんじゅう」を創作した[33]。1214(建保 2)年に林浄因は、塩瀬と改姓して奈良に饅頭店を開業した。これが塩瀬饅頭の元祖であり[34]、現在の塩瀬総本家の始まりである。

むしがしは、「蒸してつくった菓子であり、饅頭や外郎などの類である」[35]。饅頭については前述しているので、ここでは外郎について記す。外郎は、室町時代に元から伝わった薬である。それは万能薬の「陳外郎」と呼ばれていた。1718(享保 3)年に、2 代目市川團十郎は、啖と咳に悩まされ台詞が出なくなったが、外郎薬で全快し、その返礼として演じたのが歌舞伎の「外郎売り」である。菓子の外郎は黒砂糖の色と形が外郎薬に似ているが、その起源は不明である[36]。

かきは柿であろう。柿の栽培の歴史的な経緯は定かではない。日本の自生種が原産であるとする説と、奈良時代に中国から伝来した説がある[37]。平安中期の『本草和名』に、果樹としての「加岐」があり、干し柿は 758 年の『大日本古文書』に、「干柿十貫」とあるのが初出とされている[38]。1775(安永 4)年に、日本を訪れたスウェーデン人の植物学者、博物学者、医学者であるカール・ツンベルク(Carl Peter Thunberg 1743-1828)が「ディオスピロス・カキ」(Diospyros Kaki)という学名を付けた[39]。「ディオスピロス」は、神々の食べる果物という意味である[40]。

くるみは、呉国から渡来したものであり、クレミ(呉実)が転じたものであるという[41]。また太古から食用にされ、種類が多く、土呂や藤原宮址など多くの遺跡から出土していると

---

[30] 岡田哲 前掲書 2013 年 186 頁。
[31] 小林祥次郎『くいもの 食の語源と博物誌』勉誠出版 2011 年 7 月 210 頁。
[32] 岡田哲 前掲書 2013 年 685 頁。
[33] 同上 686 頁。
[34] 藤沢衛彦『図説日本民俗学全集』3 巻 高橋書店 1977 年 3 月 607 頁。
[35] 小学館編『日本国語大辞典』小学館 第 2 版 2001 年 12 月 951 頁。
[36] 岡田哲 前掲書 2013 年 61-62 頁。
[37] 同上 121 頁。
[38] 同上 122 頁。
[39] 同上 123 頁。
[40] 同上。
[41] 前田富祺編『日本語源大辞典』小学館 2005 年 4 月 443-444 頁。

いう[42]。信濃国(長野県)のヒメグルミは平安初期から知られ、平安中期の『延喜式』に記載されているという[43]。くるみは古くから日本人が食した木の実なのである。

りんごは、奈良時代に中国より「和リンゴ」が伝えられる。安土桃山時代の 1637(寛永14)年の『本草綱目』には「この菓味甘く衆禽を林に来たすより林檎の名あり」とある[44]。現在普及している西洋リンゴは、1872(明治 5)年に北海道開拓使がアメリカから苗木を持ち帰ったものである。1875(明治 8)年には、内務省に勧業寮が設置される。勧業寮は殖産興業を担う部署である。その勧業寮により、北海道、岩手県、秋田県、長野県に苗木が配布され、本格的なリンゴの栽培が始まったという[45]。

焙肉については辞典で調べたが、言葉自体を調査することができなかった。焼肉のことであろうか。肉食は 675 年に天武天皇が最初の肉食禁止令を発布し、その後もたびたび禁令が出され、肉食禁止は長い間引き継がれた。1872(明治 5)年に明治天皇が肉を食したことから、肉食は解禁となる[46]。

テンプラに関しては、その語源は諸説ある。スペイン語のテンポラ(tempora 四季の斎日)、ポルトガル語のテンポラ(temporras 金曜日の祭りの呼称)、同じくポルトガル語のテンペロ(tempero 調理)である[47]。てんぷらは室町時代に日本に入ってきたポルトガル料理である。ポルトガル語(tempero)は調理するという意味があるので、料理の名称としてはこれがもっとも近いといえる。

東海生訳で出現する食べ物はさまざまである。鬼婆が子どもたちに提供する牛乳やりんご、提供しようとうする肉は、明治期から一般に普及したものである。明治政府が近代化を推し進めようとする文明開化の一端がみてとれる。また東海生は、パンの家を餅の家に、パン屑を飯粒にし、日本古来の食べ物に変更している。餅や飯は日本人の常食である。饅頭も古くから日本人に親しまれてきた食べ物である。一方、金平糖やテンプラは西洋から伝わってきた食べ物である。「一太郎とおすみ」のなかに、原典にはない日本古来の食べ物と外国伝来の食べ物を取り入れたのは、訳者が「江戸趣味と異国趣味」を持っていたからだと推測する。

(3) 「あなた」という表現

「一太郎とおすみ」の文章には「あなた」という言葉が頻出する。樵の妻が夫に対して使う二人称の「あなた」以外に、「森のあなた」「あなたの森」「あなたを眺めていました」などの表現がみられる。これは「向こうの」を意味する遠称の「あなた」であり、それが

---

[42] 岡田哲 前掲書 2013 年 210 頁。
[43] 同上。
[44] 同上 762 頁。
[45] 同上 763 頁。
[46] 岡田哲『明治洋食事始め』講談社 2012 年 9 月 32-33 頁。
[47] 岡田哲編『たべもの起源事典』東京堂出版 2003 年 1 月 308 頁。

頻出しているのである。また「一太郎とおすみ」だけでなく、『日本之小學教師』第 3 巻に収録されている東海生の他の邦訳文にも遠称としての「あなた」が使われている。それを表したものが【表 2】である。訳者の東海生は「あなた」を好んで使用した人物であることがわかる。なお、明治期の「ヘンゼルとグレーテル」の邦訳文において「向こうの」を意味する言葉として「あなた」が使われているのは、「一太郎とおすみ」のみである。

【表 2】『日本之小學教師』第 3 巻における遠称としての「あなた」

号	32 号、33 号	35 号	36 号
題名	**「一太郎とおすみ」** （ヘンゼルとグレーテル）	**「狼と七疋の若き山羊」** （狼と七匹の子山羊）	**「敬神なる子供」** （星の銀貨）
回数	森の**あなた**（2 回） **あなた**の森（1 回） **あなた**を眺めていました（1 回）	**あなた**の森　（2 回） 原野の**あなた**（1 回）	**あなた**、 こなたの山（1 回）

(4) 鳥の鳴き声と楽器

ヘンゼルとグレーテルが森の中で迷い、2 人を老婆の家に導く「雪のように白いきれいな小鳥」(schönes schneeweißes Vöglein)が現れる場面がある。「一太郎とおすみ」にはその鳥の様子が詳細に描かれている。下線は筆者による。

> 丁度晝頃とも思ぼしき頃、二人は立ち留まりて、ふと空に聳（そびえ）ゆる緑の木をながめていましたが、何時の間にやら、眞白の美しい小鳥が飛び來りて、二人の立ちとまりたる上の木枝にとまりまして歌ひ始めました、其の鳥のすがたの、やさしき事は例えむものもなく、<u>其の歌の面白き事は、うぐいす、と、ほとゝぎすを一所になかせたる如く、其のこわねのよさは、風琴とヴァイオリンとの合奏の如く</u>、二人此の鳥の歌に、氣も心もうばわれ、腹のすいたる事も、足の勞かれも打ちわすれて、またゝきもせずに、あなたを眺めていました[48]

文語調でリズミカルな文章であり、風琴やヴァイオリンが出現するのが特徴である。この風琴というのはオルガンのことであり、当時の『日本之小學教師』に掲載されている広告においても風琴が宣伝されている。またこの表現は原典にはなく、非常に独創的であると思われる。そのことを証明するには、他の邦訳者の文と比較する必要がある。比較については 2.3)で後述する。

[48] 東海生訳「一太郎とおすみ」國民教育學會編『日本之小學教師』3(33) 國民教育社 1901 年 9 月 27 頁。

2) 原典と一致する表現－結末句－

「一太郎とおすみ」の邦訳文には結末句が存在する。原典に忠実であることを明らかにするために原典の結末句を引用し、東海生訳の結末句を記す。

> Mein Märchen ist aus, dort läuft eine Maus, wer sie fängt, darf sich eine große, große Pelzkappe daraus machen.(S.108)

> 私の話は終わりました。そこで鼠が走っています。それを捕まえる人は誰でも大きな大きな毛皮の帽子をそれで作ることができます。(拙訳)

> 之れで私の噺は終りました。今そこらを廿日鼠が走つてゐます、誰でも此の鼠を捕えたれは其の毛皮で大きな美しい帽子がこしらへられますよ[49] (東海生訳)

明治期の「ヘンゼルとグレーテル」の邦訳文において結末句があるのは、「一太郎とおすみ」のみである。しかもこの結末句は原典に忠実な訳である。おそらく訳者は伝承文学に造詣が深い人物であろう。

3) 白い鳥が出現する場面について

(1) 「一太郎とおすみ」と他の明治期の邦訳との相違点

相違点が明らかな 2.1)(4)で挙げた白い鳥が鳴く場面についての訳文を比較する。「一太郎とおすみ」以外の明治期の邦訳文との違いを明らかにする。ただし白い鳥が出現する場面は橋本青雨訳「太郎と皐月」と巌谷小波訳「鬼の宿」には存在しないため、ここで比較する訳文は下記の 7 話となる。下線は筆者による。

① 山君訳「ヘンゼルとグレエテルと」1902(明治 35)年 10 月

> それから其日一日と其夜とは迷ひあるいて、木の根に眠つてしまつて、家を出てから三日目の眞晝頃二人が首を擧げて、ふと向うを見ると、ゆくての木の枝に、一羽の白い、雪のやうな鳥が居て、<u>面白く囀つて居た</u>。二人はその聲があまり好いので、暫く立ち留まつて聞いて居ると、鳥はやがて歌をやめて飛び出した[50]

---

[49] 東海生訳 前掲書 1901 年 30 頁。

[50] 本論 39 頁【表 3】の資料番号 2 21 頁。

② 佐藤天風訳「深い深い森の中」1902(明治 35)年 12 月

やがて晝頃になりましたが、二人は食べる物もなく、寂しげに進んで行きますと、丁度目の前の木の枝に、得も云はれない綺麗な鳥が止まつて居て、其鳴く聲は、殆んど極楽の音樂の様に聞へます。二人はつひに其に氣を取られて見て居たが、鳥は忽ちづいと飛んで、二人の前にうろついて居ます[51]

③ ばんすゐ訳『寶の箱』 出版年月不明 1905(明治 38)年 3 月以前

すると何處からとなく、面白い鳥の鳴聲が聞えますので、思はず立止まって、あたりを見回しますと、自分達の直傍の大きな枝に、一羽の美しい鳥が居ました。二人が見ると、急に鳴くのをやめて、隣の枝に飛び移って鳴き出し、又二人が見ると、鳴くのをやめて、又隣の枝に飛び移りました[52]

④ 曉影生訳「鬼婆退治」1908(明治 41)年 8 月

途方にくれて、とある大きな木の下に、立つて居りましたら、其木の枝に雪の様に白い小鳩は、面白くさへづッて居ました。あまり面白い鳴聲だから、二人は聞とれておりますと、小鳩は翼を振て、さもこちへお出でと言はぬばかりに、あちらへ飛ました[53]

⑤ 水野繁太郎/權田保之助訳「兄と妹」1909(明治 42)年 3 月

午頃に、一羽の綺麗な雪白の小鳥が枝に止まつて居るのを見ました、その小鳥はいゝ聲で鳴いて居りましたので、二人は立ち止まつて耳を傾けました。その鳥が鳴き終るや、翼を動かして二人の先に立つて飛んでいきました[54]

⑥ 柴田流星「兄と妹」1910(明治 43)年 12 月

吾れ知らず嘆息して天を仰ぎますと、ツイ上の梢に一羽の白い〳〵雪のやうな鳥がとまつてをりました。兄妹は凝乎とそれを見入つてをりますと、妹は其氣でもなかつ

---

[51] 【表 3】資料番号 3 67 頁。
[52] 【表 3】資料番号 4 15 頁。
[53] 【表 3】資料番号 7 70 頁。
[54] 【表 3】資料番号 8 89-90 頁。

たのに、急に其鳥に訊いて見たくなりまして、いつもの朗らかな聲で歌を唄ひ出しました。『鳥や〳〵、白い鳥や。私たちのいく處をしへておくれ。』すると、鳥はさも〳〵それに答へるやうに、チヽチヽと二三度囀りまして、軈て其梢を飛びさります[55]

⑦ 日野蕨村「グレーテルとヘンゼル」1911(明治 44)年 2 月

けれどもお午時分の事。二人は、雪のやうに白い、美くしい鳥が、とある木の枝で、美い聲をして余り美い聲をして囀つて居るものだから、つひ立ち止つて、それを聞きました。すると小鳥は、嘴で羽を揃へて、奇麗にして、そして二人の前へ翱び降りて來て、二人に、さも私の行く方へ尾ひてお出でなさい、と言はぬ許りの風をするのでした[56]

(2) 比較考察

これらの 7 つの訳文と東海生の訳文を比較すると、東海生の文はいかに文語調でリズミカルであるか、また音楽に精通した者の文であるかということがわかる。東海生は鳥がさえずる音を、オルガンやヴァイオリンの音色に例え、「合奏」という言葉で表現している。佐藤天風は「音楽の様に」と表現しているだけで、東海生ほど具体的な描写はしていない。鳥の鳴き声に焦点を当てると、東海生の文章は音楽に対する美意識を反映したものであるといえる。

3. 邦訳者東海生について

1) 東海生が訳した童話

東海生は、雑誌『日本之小學教師』において「教材としての童話」として 5 つの話を邦訳して紹介している。それらはすべて 1901(明治 34)年に出版された第 3 巻に収録されている。それらを順に記すと、「富人と貧人」(KHM 87「貧乏人と金持ち」)(3 巻 30 号)、「一太郎とおすみ」(KHM 15「ヘンゼルとグレーテル」)(3 巻 32 号、33 号)、「七人の裁判官」(3 巻 34 号)、「狼と七疋の若き山羊」(KHM 5「狼と 7 匹の子山羊」)(3 巻 35 号)、「敬神なる子供」(KHM 153「星の銀貨」)(3 巻 36 号)である。東海生は前書きに「此の童話は獨逸の文豪グリム氏の蒐集にかゝる Kinder und Hausmachen と稱する童話集中の最も興味多くして且つ幼年教育殊に家庭教育に神益する處多きものをや譯出したるものなり」[57]とある。訳者本人がグリム童話から訳出していると明記しているが、グリム童話と確認できるものは 5 話のうち 4 話である。「七人の裁判官」はグリム童話ではない。調査

[55] 【表 3】資料番号 9 13-14 頁。
[56] 【表 3】資料番号 10 237 頁。
[57] 國民教育學會編『日本之小學教師』3(30) 國民教育社 1901 年 6 月 24 頁。

した結果、出典はルードヴィッヒ・アウアーバッハー(Ludwig Aurbacher 1784-1847)の『小さな民話本』(*Ein Volksbüchlein*)であることが判明した。このことについては後述する。

2) 東海生と上田敏との接点

東海生とはどのような人物であるのかについて探っていくことにする。「一太郎とおすみ」が掲載されている雑誌『日本之小學教師』の目次には、東海生の所属が「在高等師範学校」とある[58]。しかしこの人物が職員であるのか、学生であるのかは不明である。そこで『日本之小學教師』の目次をすべて調査すると、その内容から学生が執筆できるようなものではなく、教育者である教師のみが執筆できるものであるということが判明する。したがって、東海生は教職員であり、それも6回にわたって執筆しているので、教員としては一目置かれる人物であると思われる。

1901(明治 34)年当時の高等師範学校は現在の筑波大学の前身であり、文部省の管轄である。明治34年の文部省職員録を見ると、高等師範学校の教授として上田敏の名前が掲載されている[59]。他にグリム童話を邦訳している樋口勘治郎や登張信一郎の名前も見られる。樋口は外国留学中と記載されている。登張は登張竹風という筆名で「狼と子羊」(KHM 5「狼と七匹の子山羊」)と「貧乏人と金持ち」(KHM 87「貧乏人と金持ち」)を邦訳している[60]。いずれも『金港堂お伽噺』(1902年6月)に収録されている。この2つの邦訳題名は、東海生訳の「狼と七疋の若き山羊」、「富人と貧人」とは異なる。したがって消去法で東海生は上田敏である可能性が高いということになる。

3) 上田敏の生い立ち

上田敏の生い立ちを詳しく調査すると、興味深い事実が浮かびあがる。彼の父親は乙骨亘(おっこつわたる)で、池田長発(ながおき)が正使を務めた1863(文久3)年の第2回遣欧使節団(横浜鎖港談判使節団)に、17歳で理髪師として渡航している人物である[61]。そのときのことを示すものとして、侍姿の使節団がスフィンクスの前で撮った写真やフランスでルイ・ルソーにより撮影された個人写真が残っている[62]。乙骨亘は、帰国後に上田友輔(東作)の娘孝子(こうこ)と結婚し、上田絅二(けいじ)と改名する。そこで誕生したのが上田敏である。母方の祖父である上田友輔は、

---

[58] 教育ジャーナリズム史研究会編『日本之小學教師;教育研究』日本図書センター 1989年3月 38-40頁。

[59] 『職員録 明治34年4月1日現在調査』578頁。

[60] 野口芳子『グリムのメルヒェン その夢と現実』勁草書房 1994年8月 後記付属資料③ 9頁。

[61] 永井菊枝『小伝乙骨家の歴史 江戸から明治へ』フィリア 2006年6月 200-201頁。

[62] 同上 202頁。岩下哲典他『レンズが撮らえた幕末の日本』山川出版社 2011年4月 149頁。

1862(文久 2)年の第 1 回遣欧使節団で渡航している人物である。このときの同行者には、福沢諭吉、箕作秋坪、松木弘安、福地源一郎がいる。福沢、箕作、松木については、この渡航においてグリム兄弟を訪問していることが報告されている[63]。そして敏の母孝子の妹である上田悌子は、岩倉具視が正使を務めた 1871(明治 4)年の岩倉使節団で津田梅子と共に日本人初の女子留学生として渡航している[64]。このとき彼女は 16 歳であった。さらに敏の伯父である乙骨太郎乙も注目すべき人物である。祖父や父が存命であったにもかかわらず、上田敏の名前を命名しているのである[65]。太郎乙は英学者(英文学者)であり翻訳者であった[66]。このような家庭環境にあった上田敏は早くから西洋文化に親しんでいた。半自伝的小説「うづまき」[67]からそのことが読み取れる。この「うづまき」に登場する牧春雄は、上田敏であるとされている。幼少期の牧春雄が西洋文化に触れている文章があるので引用する。

> 祖父は維新前、西人の所謂大君使節の一員として鷗州に派遣され、第二帝政の榮華に接し、獨逸を過ぎて、露國冬宮の豪奢をも歡て來た人であるから、宮廷の賜物を土産に持つて歸つた當時には珍しかつた物品が、春雄の生れる頃迄も幾分か殘つてゐた。いろは歌留多を弄ると同時に、羅馬字の書いてある板を積んで遊んだり、藤間の扇を玩弄にして、若い叔母に叱られると、今度は自鳴琴の機關を覗いて見たがるといふやうな經驗は、舊日本の趣味を懐しがる執著心と共に、新文明に對する愛慕の念を小兒心に起した。學問智識文明開化等の語が常に家庭で繰返され、遊戯の時の口吟にも「波のあなたの亞米利加洲」を歌つて、「吾に自由を與えよ、然らずむば死を與へよ」と、何心無く叫んでゐたのは、一面に世界一家の思想を抱かしめる素因となった[68]

上記の祖父とは上田友輔のことであり、若い叔母は上田悌子のことであろう。幼少期の上田敏の生活を描いていると思われる。安田保雄は「彼の一生を通じて見られる江戸趣味と異國趣味との萌芽は、すでに、この幼年時代にあらはれてゐたのである」[69]と記している。

---

[63] 野口芳子「幕末にヤーコプ・グリムを訪問した日本人について」大野寿子編『グリム童話と表象文化　モティーフ・ジェンダー・ステレオタイプ』勉誠出版 2017 年 7 月 110 頁。
[64] 寺沢龍『明治の女子留学生』平凡社 2009 年 1 月 18 頁。
[65] 永井菊枝 前掲書 2006 年 183 頁。
[66] 上田正昭他編『日本人名大辞典』講談社 2001 年 12 月 446 頁。
[67] 上田敏「うづまき」上田敏全集刊行会編『定本上田敏全集』2 巻 教育出版センター 1985 年 3 月 499-598 頁。「うづまき」の初出は 1910(明治 43)年 1 月で、46 回にわたり『国民新聞』に掲載された。
[68] 同上 504-505 頁。
[69] 安田保雄『上田敏研究　その生涯と業績』有精堂出版 増補新版 1977 年 12 月 5 頁。

4) 上田敏の経歴

上田敏は 1889(明治 22)年に第一高等中学校(後の第一高等学校)に入学する。1894(明治 27)年に東京帝國大学文科大学英吉利文学科に入学し、1897(明治 30)年に卒業し、大学院に入学する。大学院での彼について安田保雄は、上田敏は優等生で、「特に小泉八雲からは英學生として『萬人中の一人』(You are the one Japanese student in ten thousand)とまで激賞された」[70]と記している。大学を卒業した 1897(明治 30)年の 9 月に、上田敏は高等師範学校英語科講師嘱託となる。そして 2 年後の 1899(明治 32)年 9 月に高等師範学校教授に任命される。その後 1903(明治 36)年 4 月には東京帝國大学文科大学講師となる。同期には夏目漱石が存在する。そして 1909(明治 42)年には、京都帝國大学教授に任命され[71]、1916(大正 5)年 7 月に逝去するまで同大学に奉職する。

4. 東海生の実名について

1) 上田敏と音楽

上田敏の生い立ちを調べると、彼の周りには学識者が多くいることがわかる。祖父の上田友輔、父の上田絅二、叔母の上田悌子は渡航経験者である。伯父の乙骨太郎乙は、渡航経験はないが、英学者(英文学者)であった。上田敏は東京生まれだが、本籍は静岡県であり静岡で暮らしたことがある。静岡県に住んでいた伯父の乙骨太郎乙は、英文科卒業の敏にとって頼りになる存在であった。さらに太郎乙の親友に外山正一がいる。東京帝國大学で教鞭を執っていた外山は、英語テキストの刊行を手掛けている[72]。外山が東京帝國大学文科大学長であったとき、上田敏は同大学の学生であった。英文科の上田敏が伯父と親交のある外山を知らないはずはない。太郎乙の弟子である田口卯吉は、東京帝國大学を卒業して独立するまで上田敏の面倒を見ていた[73]。ともに田口邸に寄寓していた乙骨三郎は上田敏とともに、東京音楽学校(現東京芸術大学)の学生と親交を深め、後には東京芸術大学の教授になった人物である。安田保雄は「上田敏は明治二十五年頃から既に音樂に興味をもち、上野の音樂堂や鹿鳴館の演奏會を聞きに行き、また美術に對しても關心を寄せてゐたのである」[74]と述べている。上田敏もまた音楽に親しみを持つ人物であったのである。

「一太郎とおすみ」には風琴(オルガン)とヴァイオリンという 2 種類の楽器が出現する。原典には出現しないものである。これは上田敏がこの楽器に特別な想いを抱いていたからであろう。彼は 1907(明治 40)年に「わが愛づる音樂」という論文に次のように書いている。

---

[70] 安田保雄 前掲書 1977 年 17 頁。
[71] 同上 254-256 頁。
[72] 川戸道昭/榊原貴教編『図説翻訳文学総合事典』1 巻 大空社 2009 年 11 月 68 頁。
[73] 安田保雄 前掲書 1977 年 248 頁。
[74] 同上 12 頁。

樂器の中ではバイオリンが深く刺戟する爲めか、一番好きであります。併し耳が鋭くないのか高音は嫌ひです。ピヤノは面白く感じはしますが、バイオリン程にはよいと思ひません。オルガンは曲よりも個々の音が長く味ふことの出來る爲めに愉快に感じます。管絃樂の方では、大概獨奏を面白く感じます[75]

上田敏は田口邸に寄寓していた 15 歳から 25 歳の間に、演奏会評論や西洋の作曲家や作品について解説した西洋音楽論を著している[76]。彼の西洋音楽に対する造詣の深さが如実に表れているといえる。なお、彼はバイオリンの表記について、ヴァイオリン、ヴイオリン、ウヰオリン、ヴヰオリン、ヴヰオロン、ヰオロン、ギオロンなどを混用している[77]。

2) 上田敏と「あなた」という表現

彼の訳文に出現する「向こうに」という意味での「あなた」という言葉は、上田敏の翻訳で有名になったカール・ブッセ(Carl Hermann Busse 1872-1918)の詩「山のあなた」(Über den Bergen)を連想させる。この当時方向を示す「あなた」を使う文学者は上田敏だけではない。たとえば徳富蘆花(1868-1927)がいる。彼は『不如帰』のなかでも遠称としての「あなた」を使用しているが、「彼方」を「あなた」と読ませている。『不如帰』の文章中にある遠称としての「あなた」の部分を記すと「やをら彼方(あなた)に轉臥(ねがへり)して」[78]、「山本はぢろりと彼方(あなた)の顔を見つゝ」[79]、「浪子は徐ろに移り行く彼方(あなた)の列車を眺めつ」[80]とある。ここでは「あなた」は平仮名ではなく、漢字で「彼方」と表記されている。1900(明治 30)年に徳富蘆花が使用した「彼方(あなた)」は漢字であるが、上田敏と東海生が使用した「あなた」は平仮名である。そのうえ、徳富蘆花は高等師範学校とは関連がない人物である。したがって雑誌「日本之小學教師」に掲載された「一太郎とおすみ」の訳者とは考えられない。

「あなた」という言葉を古語辞典で調べると、遠称としての「あなた」は『古今集』から使われている古くからある言葉である。『古今集』には「冬ながらそらより花のちりくるは雲のあなたは春にやあるらむ　清原深養父」があり、『伊勢物語』には「山崎のあなたに、水無瀬といふ所に宮ありけり」があり、謡曲の卒塔婆小町には「あなたの玉章こなたの父」

---

[75] 上田敏「わが愛づる音樂」上田敏全集刊行会編『定本上田敏全集』6 巻 教育出版センター 1985 年 3 月 152-153 頁。「わが愛づる音樂」の初出は『音樂新報』4(1) 1907 年 1 月である。

[76] 中村洪介『西洋の音、日本の耳　近代日本文学と西洋音楽』春秋社 新装版 2002 年 7 月 235-236 頁。

[77] 同上 248 頁。

[78] 蘆花生『不如帰』民友社 1900 年 1 月 130-131 頁。

[79] 同上 271 頁。

[80] 同上 358 頁。

とある[81]。清原深養父は生没年が不明だが、主として 901 年から 922 年に活躍した人物であるとされている[82]。『伊勢物語』は平安初期に成立したものである。「卒塔婆小町」は 1465 年の観世演能でこの曲名が見られる[83]。これらのことから「あなた」は古語表現であることがわかる。

「あなた」の語源は、『語源海』によると「あなた(貴方・貴女)」は「アナタが二人称代名詞として用いられるのは江戸後期、18 世紀後半。〈山のあなた〉(狭衣)など方向をさす語から、第三人称、他称として用い、さらに第二人称に転用された」[84]とある。「あなた」はもともと方向を示す言葉であり、それが転じて人称として使用されるようになったのである。

上田敏は英文学者であり、西洋文学を熟知する学者であるが、同時にまた国文学にも造詣が深かったようである。笹渕友一は「一高時代の敏の文章には古事記、日本書紀、祝詞を始め、万葉、古今、新古今、敏行朝臣歌集、桂園一枝等の歌集、伊勢、源氏、狭衣、栄華、大鏡、宇治拾遺、今昔等の物語、枕草子、徒然草、琴後集等の随筆、謡曲卒塔婆小町等の作品や本文が引用されている」[85]とある。上田敏が第一高等中学校に入学した同じ年に、落合直文が第一高等中学校に赴任している。上田敏は落合直文から国文学の指導を受けたようだ[86]。落合直文の「孝女白菊の歌」にも遠称としての「あなた」が使われていて、七五調である。「孝女白菊の歌」は 1888(明治 21)年 2 月と 7 月、1889(明治 22)年 2 月と 5 月に『東洋學會雑誌』に掲載されたものである[87]。恩師の詩を上田敏が知らないはずはない。上田敏の日本古来の美しい言葉を使ったリズム感のある文章は、落合直文の影響が大きいのではないだろうか。

安田保雄は上田敏の幼年期について「彼は『波のあなたの亞米利加洲』を歌ひ」[88]と記している。1905(明治 38)年に出版された『海潮音』には遠称としての「あなた」が 57 編中 4 編使われている。それらは「山のあなた」「燕の歌」「時鐘」「海のあなたの」である。また 1900(明治 33)年 8 月の『帝国文學』に掲載されたロティの「まぼろし」の中でも、遠称としての「あなた」が下記のように使われている。

心覺えの、とある隅をおほふ、闇の、とばりのこなたに、もがきつゝ、それをこえ

---

[81] 日本大辞典編集刊行会編『日本国語大辞典』1 巻 小学館 1972 年 12 月 358 頁。
[82] 片桐洋一『古今和歌集全評釈』上巻 講談社 1998 年 2 月 660 頁。
[83] 伊藤正義編『新潮日本古典集成 謡曲集』中巻 新潮社 1986 年 3 月 470 頁。
[84] 杉本つとむ『語源海』東京書籍 2005 年 3 月 50 頁。
[85] 笹渕友一『「文學界」とその時代「文學界」を焦点とする浪漫主義文學の研究』上巻 明治書院 1959 年 1 月 628 頁。
[86] 安田保雄 前掲書 1977 年 8 頁。
[87] 落合直文他『明治文學全集』44 巻 筑摩書房 1968 年 12 月 78 頁。
[88] 安田保雄 前掲書 1977 年 5 頁。

て、底しらぬ深みのあなたに沈まむとすれどかひなし[89]

「あなた」を「向こうの」という意味で使用するのは、古典作品にみられる傾向である。その使用法を西洋昔話の邦訳に取り入れたのは、その話に古いものであるというニュアンスを植え付けようとしたかったのではないだろうか。

3) 上田敏と外国文学

上田敏は語源についても深い知識があった。彼は「金平糖」がポルトガル語の語源であることを知っていた。彼は 1903(明治 36)年 10 月に樗牛會の講演会で「外国文學の研究」と題して、日本語の名詞にはポルトガル語の影響があり、そこで「金平糖」がポルトガル語の語源であると述べている[90]。南蛮学にも精通している上田敏であればこそ「一太郎とおすみ」で提供される料理に金平糖を出現させたのであろう。

上田敏はその講演会で次のように述べている。

> 「フォオク、ロア」Folklore 即ち俗説の知識が必要です。まづ有名なグリム Grimm のお伽噺集を始めとし、ストラパロオラ Straparola　バンデルロ Bandello 又はペロオ Perrault などの短篇は一通り心得て居ると便利と思ふ。俗説或いはお伽噺に意を留めて、本當に外國人の感情になつて文學を味はふのです[91]

彼は俗説の必要性を説き、その例としてグリム童話を挙げている。明治期には外国文学の翻訳が盛んに行われた。それらは外国文化を取り入れ、近代社会を構築するためでもあったが、上田敏は伝承文学から一般の人びとの考え方を知ることの重要性を察知していたと思われる。彼は“folklore”という言葉を日本に紹介した人物であり、それは「俗説学」と訳されている[92]。上田敏という実名でグリム童話を邦訳したものは見あたらないが、少なくとも彼はグリム童話が伝承文学であるということを認識していたのである。

4) 上田敏の筆名および号

上田敏にはいくつも筆名があり、一般には「柳村」という号を使用していた。他にも現在わかっているものは、「文學士なにがし」「逸名氏」「藝苑子」「微笑」「微笑子」「紫法師」「紫冠者」「紫野々守」「拈華庵主人」「無絃堂」「無絃堂主人」「妙幢子」「柳條牽根性」「さ

---

[89] 上田敏「まぼろし」上田敏全集刊行会編『定本上田敏全集』2 巻 教育出版センター 1985 年 3 月 37 頁。初出は、みをつくし「まぼろし」『帝国文學』6(8) 1900 年 8 月。
[90] 上田敏「外國文學の研究」上田敏全集刊行会編『定本上田敏全集』同上 289 頁。
[91] 同上 297 頁。
[92] 福田アジオ「上田敏の俗説学」『日本の民俗学「野」の学問の二〇〇年』吉川弘文館 2009 年 10 月 56 頁。

くらあさ」「鏡彰子」「微幽子」「月すきのわらべ」「瀬川田縁之丞」「あやめ」「みをつくし」「P・A」などが挙げられる[93]。「山のあなた」を『萬年艸』で発表したときの名前は、上田敏ではなく「逸名氏」である。東海生という筆名では、『婦人と子ども』の第 1 巻(1901)と第 2 巻(1902)の学術欄に 6 回執筆している。『婦人と子ども』の発行母体は、東京女子高等師範学校附属幼稚園内に発足したフレーベル会である。発行当初は、東京高等師範学校の教授も執筆している。東海生が『日本之小學教師』に「一太郎とおすみ」を掲載した年が 1901 年であるので、『婦人と子ども』に掲載した年と重なる。おそらくこの頃彼は東海生という筆名を使用していたのであろう。上田敏は多くの筆名や号をもち、それらを使い分けていたと思われる。

5. 上田敏と交友関係がある人物について

1) 森鷗外(1862-1922)

森鷗外の長男である森於菟が『父親としての森鷗外』で鷗外と上田敏の私的な関係を記している。お互いの娘どうしは親交があり、鷗外の実母も上田邸を訪れていて、家族ぐるみの付き合いをしていたようである[94]。また鷗外が軍医として戦地に赴くときに遺書を残しているが、その証人に上田敏の名前が挙げられている[95]。於菟によると「証人の一人は京大教授文学博士上田敏、親友の一人で文学上の盟友、家族の誰からも信頼されている人という所から父が頼んだので、留守中は実印をもこの人に委託していた」[96]とある。しかし上田敏は鷗外よりも早く逝去するため、鷗外はその死を悼み上田敏の戒名を命名している[97]。

文学活動においては、上田敏と森鷗外は雑誌『萬年艸』を共同で創刊している。1902(明治 35)年 10 月のことである。その創刊号に森於菟が山君という筆名で、「ヘンゼルとグレエテルと」(KHM 15「ヘンゼルとグレーテル」)の邦訳を発表している。山君はそれよりも前の 8 月に雑誌『藝文』で、「顎曲りの王」(KHM 52「つぐみひげの王」)を発表している。『藝文』は上田敏が主宰して創刊した雑誌である。『藝文』は諸事情により、2 号で終刊する。その後身となる雑誌が『萬年艸』である[98]。於菟は『藝文』と『萬年艸』にグリム童話の邦訳を発表したときのことを次のように記している。

> この両方には私にグリムのお伽噺を数篇訳させそれと直して出してくれた。父のつけてくれた私の号が山君である。お伽噺についても父は見識があり、小波等の文に慊(あきた)

[93] 安田保雄 前掲書 1977 年 7,23,27,31 頁。村上濱吉編『明治文学書目』村上文庫 1937 年 4 月 263 頁。近代人物研究会編『近代人物号筆名辞典』柏書房 1979 年 10 月 26 頁。
[94] 森於菟『父親としての森鷗外』(ちくま文庫)筑摩書房 1993 年 9 月 174、184-185 頁。
[95] 同上 414 頁。
[96] 同上 419 頁。
[97] 安田保雄 前掲書 1977 年 47 頁。
[98] 杉本邦子『明治の文芸雑誌－その軌跡を辿る－』明治書院 1999 年 7 月 126 頁。

らなかったのを私を通じて実現しようとしたのだ。私のたどたどしい訳が父の筆で立派に化けた[99]

またグリム童話についても記している。

私の父はこの時代の少年たちにひろくよまれていた巌谷小波さんのお伽噺に満足しないで、文法やかなづかいの正しい子供のよみ物を求めており、その考から私にもグリムを譯すことをすすめたのであつた[100]

これらのことから鷗外は於菟の翻訳の添削をし、グリム童話を訳すことを勧めていたことがわかる。このように上田敏と森鷗外は雑誌の創刊と共にグリム童話に関わっていて、仕事と私生活の両方で深い親交があったのである。

2) 西周(1829-1897)

西周は啓蒙思想家で教育者である。石見国津和野藩(現島根県津和野町)の出身で、森鷗外と同郷であり、系譜上では親族でもある[101]。西周は鷗外の曾祖父の次男である森覚馬が西家を継いで生まれた子どもである[102]。

1872(明治 5)年に鷗外は父親の静男とともに東京に上京し、ドイツ語を学ぶために私塾の進文學社に入り、西周邸に寄寓していたという[103]。また西周は鷗外の最初の結婚(森於菟の生母である赤松登志子)の媒酌をした人物である。しかしこの結婚は於菟の誕生後、1890(明治 23)年に破綻したことから、西周と鷗外との間で交流は途絶えるが[104]、西が逝去した翌年に鷗外は『西周伝』を残すのである。

西周は、1868(明治元)年に開校された沼津兵学校の頭取となる。開校当時の教授陣には、上田敏の伯父である乙骨太郎乙や赤松則良がいる[105]。赤松則良と西周は、1862(文久 2)年にともにオランダに留学していて親交があった。森鷗外の最初の結婚相手である赤松登志子は赤松則良の娘である。また西周は 1881(明治 14)年に東京高等師範学校長、1883(明治 16)年には獨逸学協会学校(現獨協中学校・高等学校)の初代校長となる。獨逸学協会学校の

---

99 森於菟 前掲書 1993 年 286-287 頁。
100 森鷗外/森於菟共譯『グリム童話しあはせなハンス』文藝春秋社 1948 年 12 月 「あとがき」1-2 頁。
101 清水多吉『西周 兵馬の権はいずこにありや』ミネルヴァ書房 2010 年 5 月 79 頁。
102 吉田精一『森鷗外全集』別巻 筑摩書房 1971 年 11 月 307 頁。
103 小堀桂一郎『森鷗外 日本はまだ普請中だ』ミネルヴァ書房 2013 年 1 月 25 頁。
104 清水多吉 前掲書 2010 年 2 頁。
105 樋口雄彦『旧幕臣の明治維新 沼津兵学校とその群像』吉川弘文館 2005 年 11 月 48 頁。

主眼は「ドイツ学をベースとし、日本の近代化に必要な法曹官吏や医学者を養成することに置かれていた」[106]とある。その獨逸学協会学校ではルドルフ・レーマン(Rudolf Lehmann 1842-1914)が 1884(明治 17)年 2 月に雇用され、同年 10 月から 1887(明治 20)年まで教鞭を執っている[107]。レーマンは御雇外国人で、1869(明治 2)年に来日し、1870(明治 3)年 11 月に京都の欧学舎の教師として招かれたドイツ人である。レーマンは東京第一高等学校に 1882(明治 15)年 2 月に雇用されドイツ学を教えている[108]。彼は 1886(明治 19)年に『RŌMAJI ZASSI』で「HITSUJIKAI NO WARABE」(KHM152「牧童」)を邦訳した片山謹一郎を指導した可能性が高い[109]。

なお獨逸学協会学校には 1883(明治 16)年に中等部の第 1 期生としてグリム童話を邦訳した巌谷小波が入学している。その後彼は 1889(明治 22)年に専修科を退学している[110]。森於菟は 1901(明治 34)年に入学し、1905(明治 38)年に獨逸学協会学校中等部を卒業している[111]。

3) 乙骨太郎乙(1842-1922)

上田敏の伯父で英学者(英文学者)であり、翻訳者である。祖父や父が存命であるにもかかわらず、敏の名前を命名している。彼は箕作麟祥より英語を学んでいる[112]。箕作麟祥は箕作秋坪を伯父にもつ人物である。箕作秋坪は 1862(文久 2)年の遣欧使節団で、福沢諭吉とともに渡航した人物である。前述しているように、この渡航でヤーコプ・グリムを訪れた日本人であるといわれている[113]。

太郎乙は 1868(明治元)年開校の沼津兵学校で英語の 2 等教授として勤務していた。兵学校の教授陣は優秀な人材が選出されていたといわれている[114]。そうした所で教えていた

---

[106] 獨協学園史調査研究資料センター編『獨協学園資料センター研究年報』(4) 獨協学園史調査研究資料センター 2012 年 3 月 109 頁。

[107] „OAG Notizen September 2006“には、ルドルフ・レーマンについての記述がある。「OAG において長期間在任した会長および名誉会員」(Langjähriger Vorsitzender und Ehrenmitglied der OAG)の項目で、レーマンは東京予備門の専任教員として教えていたと書かれている。「さらに彼は 1884 年から 1887 年まで獨逸学協会学校で非常勤講師としてドイツ学を教えていた」(Ferner unterrichtete er nebenamtlich an der Schule des Vereins für Deutsche Wissenschaft [Doitsugaku Kyokai Gakko, DKG] von 1884 bis 1887)と明記されている。

[108] 野中正孝編『東京外国語学校史 外国語を学んだ人たち』不二出版 2008 年 11 月 61 頁。

[109] 野口芳子『グリム童話のメタファー』勁草書房 2016 年 8 月 173 頁。

[110] 巌谷大四『波の跫音－巌谷小波伝－』新潮社 1974 年 12 月 260 頁。

[111] 森於菟 前掲書 1993 年 171-172 頁。

[112] 永井菊枝 前掲書 2006 年 110 頁。

[113] 野口芳子「幕末にヤーコプ・グリムを訪問した日本人について」前掲書 2017 年 110 頁。

[114] 樋口雄彦 前掲書 2005 年 51 頁。

太郎乙は英語に精通していた人物であったのであろう。彼は 1870(明治 3)年に渡米した外山正一の後任として静岡学問所に赴任する。その後 1873(明治 5)年に大蔵省翻訳局教頭に任じられ、静岡から東京へ引っ越すことになる[115]。

4) 外山正一(1848-1900)

外山正一は静岡県の出身で、蕃書調所と箕作麟祥の塾で英語を学んでいる[116]。外山は 1868(明治元)年に沼津兵学校と姉妹校である静岡学問所で教授となる。静岡学問所では 1870(明治 3)年の春頃に西周が顧問として任じられている[117]。同年の 12 月に、外山は森有礼の部下として随行し渡米する[118]。その後 1886(明治 19)年には帝國大学文科大学長、1897(明治 30)年に東京帝國大学総長、1898(明治 31)年に文部大臣を歴任するのである[119]。

1890(明治 23)年には、外山は英語学者の神田乃武、心理学者の元良勇次郎、教育学者の高島平三郎らと「日本教育研究会」を創設する。1898(明治 31)年の 11 月には『児童研究』が創刊される。1902 (明治 35) 年には学会名を「日本児童研究会」と改名する。その後心理学、教育学、医学の 3 つの分野から総合的に児童の研究を行う児童学を掲げる学会となる[120]。外山は児童研究においても先駆的役割を担っていたのである。

外山は太郎乙と親交が深く、長男が誕生したときには太郎乙が命名している[121]。また外山は「羅馬字会」を設立している。この「羅馬字会」には、グリム童話を邦訳した上田萬年や樋口勘次郎が会員として名を連ねている[122]。

5) 田口卯吉(1855-1905)

田口卯吉は法学者であり経済学者である。江戸で生まれ、父親を早くに亡くしている。卯吉は 1869(明治 2)年に沼津兵学校に勤務していた乙骨太郎乙の家に寄寓し、沼津兵学校に入学する。1872(明治 5)年には、太郎乙が教頭として勤務する大蔵省翻訳局の生徒となり、そこで経済学に興味を持つ。卯吉は太郎乙を師としており、太郎乙も公私にわたり面倒をみていた。また田口家の近くに外山正一の家があり、外山の父親と田口の家族は親しく付き合っていたという[123]。外山は東京と静岡を往復する際には、沼津にいる親友の太郎乙の家に泊まっていたという[124]。その当時太郎乙の家に同居していた田口は、当然外山と

---

115 永井菊枝 前掲書 2006 年 180-181 頁。
116 三上参次『外山正一先生小伝』大空社 1987 年 9 月 9 頁。
117 樋口雄彦『静岡学問所』静岡新聞社 2010 年 8 月 106-107 頁。
118 同上 84-85 頁。
119 静岡新聞社出版局編『静岡県歴史人物事典』静岡新聞社 1991 年 12 月 324 頁。
120 松村康平他編『児童学事典』光生館 3 版 1970 年 6 月 352 頁。
121 永井菊枝 前掲書 2006 年 183 頁。
122 野口芳子『グリム童話のメタファー』前掲書 2016 年 178 頁。
123 田口親『田口卯吉』吉川弘文館 2000 年 11 月 38 頁。
124 同上。

会う機会があり、親交を深めていたと思われる。田口と外山の親交の深さを知る手がかりが残されている。それは田口と外山が歌のやり取りをしていたということだ。田口卯吉の孫である田口親によるとその数は数千通にのぼるという[125]。後に卯吉は経済学に造詣が深く『東京経済雑誌』を創刊する。彼は 1899(明治 32)年に博士会の推薦により法学博士の学位を授与される[126]。

田口卯吉は太郎乙から受けた恩義を終生忘れることはなかった。それゆえ田口と同じように父親を早く亡くした太郎乙の甥である上田敏を書生として預かるのである[127]。上田敏は 1889(明治 22)年に第一高等中学校に入学し、その後帝國大学を卒業して独立するまで田口邸に寄寓していた[128]。また太郎乙の三男である乙骨三郎(1881-1934)も上田敏とともに田口邸に寄寓していた[129]。三郎は 1901(明治 34)年に東京帝國大學文化大学哲学科に入学する。後に彼は東京音楽学校(現東京芸術大学)ドイツ語教師嘱託を経て、教授となる[130]。彼は「小学唱歌」に携わっており「日の丸の旗」「鳩」「兎」「浦島太郎」「汽車」などの歌詞を作詞している[131]。2 人が寄寓していた当時のことを「当時本郷西片町の田口家書生部屋は帝大生、東京音楽学校(現東京芸術大学音楽部)の生徒が集まり、文学、美術、音楽等の談論風発したところだった」[132]とある。さらに三郎について「田口邸に寄寓していた従兄の上田敏の感化もあって早くから西欧の詩文に親しみ、また西洋音楽にも深い興味と関心を」[133]示していたと述べている。三郎は帝國大学在学中から友人や東京音楽学校の生徒らと協力してグルックの「オルフォイス」を上演し、日本で最初のオペラ公演を行っている[134]。名ソプラノ三浦環も音楽学校の生徒時代に田口邸に出入りしていたという[135]。中村洪介は「十年間の田口卯吉方での生活が、漸く少年期から青年期に達した敏の音楽趣味を、一層助け育てたであろう」と記している[136]。

上田敏と乙骨三郎が過ごした田口邸は、2 人にとって西洋音楽への関心を深める貴重な場所であったといえる。

---

125 田口親「外山正一博士」日本歴史學會編『日本歴史』(74) 實教出版 1954 年 7 月 56 頁。
126 田口親『田口卯吉』前掲書 2000 年 249 頁。
127 永井菊枝 前掲書 2006 年 182 頁。
128 安田保雄 前掲書 1977 年 249 頁。
129 永井菊枝 前掲書 2006 年 237 頁。
130 岸辺成雄他編『音楽大辞典』1 巻 平凡社 1981 年 10 月 303 頁。
131 永井菊枝 前掲書 2006 年 238 頁。
132 同上 182 頁。
133 同上 237 頁。
134 同上 237 頁。
135 磯崎嘉治「東京人・上田柳村の一性格」上田敏全集刊行会編『定本上田敏全集』月報・総目次巻 教育出版センター 1985 年 3 月 45 頁。
136 中村洪介 前掲書 2002 年 235 頁。

6. 上田敏と関係のある人物とグリム童話との関係について

森鷗外の長男である森於菟は、山君という筆名でグリム童話を邦訳しており、グリム童話と関係が深い。彼は「ヘンゼルとグレーテル」を邦訳しているが、鷗外に邦訳の添削をしてもらったということを後に述べている。鷗外自身がグリム童話を邦訳して発表しているという記録はないが、於菟の邦訳の添削や於菟にグリム童話を勧めていたことから、グリム童話を熟知していたことがわかる。鷗外の長女である森茉莉は、幼い頃にグリム童話を鷗外から読み聞かされていた。そのことを記している文章があるので紹介する。

> 父の膝の上で、葉巻の匂いのする着物の胸に片頬を押しつけたり、足を動かしたりしながら色々なお伽噺を、聴いた。どれも独逸のお伽噺だった。雪白姫、薔薇姫、シンデレラ、金の毬と蛙の話、ハンスとグレエテ、赤頭巾、なぞだった[137]

鷗外と親戚関係にある西周は、獨逸学協会学校の校長となった人物である。於菟が在学していた頃には、西周はすでに逝去していたが、西は獨逸学協会の設立を主唱した人物であり、彼が顧問を務めていた静岡学問所の洋学部門には、英語、フランス語、オランダ語に加えてドイツ語があった[138]。ドイツ語の重要性を充分認識していたと思われる。さらに西は箕作麟祥や 1862(文久 2)年の遣欧使節団の団員であった福沢諭吉や箕作秋坪とともに明六社を結成して啓蒙活動をしていた。福沢諭吉と箕作秋坪は、ヤーコプ・グリム(Jacob Grimm 1785-1863)を訪れていることは前述しているが、西は明六社をとおしてグリム童話のことを知っていた可能性もある。また箕作麟祥は乙骨太郎乙と外山正一に英語を教えている。太郎乙が沼津兵学校で英語の教授をしていた頃、兵学校の頭取は西周であった。また太郎乙と親交があった外山正一は、西が顧問であった静岡学問所で英語の教授をしており、明六社の社員でもあった[139]。つまり西周は乙骨太郎乙と外山正一の上司であり、外山とも明六社で関わっているのである。また外山は羅馬字会を設立していて、そこにはグリム童話を邦訳した上田萬年や樋口勘次郎がいた。したがって乙骨太郎乙は西周や箕作麟祥から、外山正一は明六社と羅馬字会からグリム童話に関する知識を持っていた可能性がある。

田口卯吉については、グリム童話との接点は見あたらない。しかし彼は乙骨太郎乙や外山正一と親交が深く、1889(明治 22)年から 1899(明治 32)年まで 10 年間、上田敏を寄寓させている。上田敏は学生の頃から結婚するまで田口邸に住んでいた。学生時代から文芸活動を活発に行っていた上田敏にとって、田口邸での生活は彼の才能に磨きをかける貴重な時間であったと思われる。

---

137 森茉莉「幼い日々」『森茉莉全集』1 巻 筑摩書房 1993 年 7 月 37 頁。
138 樋口雄彦 前掲書 2010 年 28-29 頁。
139 戸沢行夫『明六社の人びと』築地書館 1991 年 4 月 56 頁。

このように上田敏について調査すると森鷗外、西周、乙骨太郎乙、外山正一、田口卯吉との繋がりが見えてくる。これらの人物は明治期に教育界で活躍した人物である。そしてなんらかの形でグリム童話と接点を持つ人びとでもある。

東海生が『日本之小學教師』にグリム童話を邦訳して発表したのは、1901(明治 34)年のことである。そのとき上田敏は高等師範学校の教授であった。邦訳文の分析と静岡県との関わりや多くの筆名を持つことから、東海生という筆名は上田敏のものであると思われる。

7. まとめ

第 4 章では最初の邦訳である「一太郎とおすみ」を取り上げ、東海生の実名を明らかにすることに努めた。「一太郎とおすみ」では、「向こうの」という意味での「あなた」が頻出する。「あなた」という言葉は日本古来の言葉である。その「あなた」という言葉は、上田敏の訳詩「山のあなた」を連想させる。また「餅」や「握飯」、「まんじゆう」といった日本人の嗜好に合う日本古来の食べ物が取り入れられている。一方、「金平糖」や「テンプラ」のようなポルトガル語が語源の食べ物も取り入れられ、西洋文化を紹介している。上田敏は江戸趣味と異国趣味を合わせ持つ人物であった。「一太郎とおすみ」の訳文中に出現する食べ物をみても、日本古来の文化と西洋文化の両方が紹介されているのである。さらに「一太郎とおすみ」では、楽器の風琴（オルガン）やヴァイオリンが出現し、鳥の鳴き声が「合奏の如く」と表現されている。とくにこの場面はリズム感があり、詩情豊かな文章で、他者の訳文にはない美しい響きがある。原典にはこのような文章は存在しない。それゆえ、この文章こそが実名を解明する手がかりとなったのである。そして「一太郎とおすみ」には結末句がある。上田敏は“folklore”を「俗説学」と訳して日本に紹介した人であり、講演も行っている。彼はその講演会でグリム童話についても触れている。つまり彼はグリム童話が西洋昔話であるということを認識しており、昔話には結末句があるということも熟知していたのであろう。

上田敏の交友関係を調べると、森鷗外と親交が深いことが判明する。「ヘンゼルとグレエテルと」を邦訳した山君は、鷗外の長男である森於菟の筆名である。鷗外は於菟の翻訳の添削をし、於菟にグリム童話の翻訳を勧めている。鷗外と親戚関係にある西周は獨逸学協会学校の初代校長である。グリム童話を邦訳した巌谷小波や森於菟はこの学校の卒業生である。獨逸学協会学校にはルドルフ・レーマンが奉職していた。さらに西周は、敏の伯父である乙骨太郎乙や外山正一の上司であった。乙骨太郎乙と外山正一は友人関係にあり、どちらも英文学者である。この 2 人と親交のある田口卯吉は、自宅に 10 年間にわたり上田敏を寄寓させていた。このように上田敏を調査すると、彼の周囲には明治期に活躍した人物が浮上する。そして彼らはグリム童話となんらかの接点を持つ人びとなのである。

第 5 章　明治期における「ヘンゼルとグレーテル」

1. 邦訳の概観

1) 邦訳一覧表【表 3】

番号	年	月	訳者	題名	出典	出版社
1	1901	8,9	東海生	一太郎とおすみ	日本之小學教師 3(32, 33)	國民教育社
2	1902	10	山君	ヘンゼルとグレエテルと	萬年艸 1	萬年艸発行所
3	1902	12	佐藤天風	深い深い森の中	女鑑(266)	国光社
4	1905	3	ばんすゐ	寶の箱	家庭童話 1 編	東京學海指針社
5	1906	3	橋本青雨	太郎と皐月	獨逸童話集	大日本國民中學會
6	1907	6	巌谷小波	鬼の宿	少年世界 13(8)	博文館
7	1908	8	曉影生	鬼婆退治	家庭雑誌 1(4)	家庭雑誌社
8	1909	3	水野繁太郎/ 權田保之助	兄と妹	雪姫・兄と妹 (獨逸文學叢書)	有朋堂書店
9	1910	12	柴田流星	兄と妹	日曜学校話材お伽艸紙 4 編	教文館
10	1911	2	日野蕨村	グレーテルとヘンゼル	獨逸お伽噺	岡村書店

2) 先行研究について

(1) 先行研究に収録されている話

先行研究は『日本におけるグリム童話翻訳書誌』[140]、『児童文学翻訳作品総覧』[141]、「明治期のグリムのメルヒェンの翻訳年表」[142]で紹介されているものを参考にした。ただし『児童文学翻訳作品総覧』においては、橋本青雨訳「太郎と皐月」は「みつけ鳥」の話として紹介されている。しかし、「太郎と皐月」の邦訳内容を吟味すると、「ヘンゼルとグレーテル」の邦訳であることが判明する。

(2) 先行研究に収録されていない話

上記の翻訳目録に紹介されていない訳文は、一覧表 1.1)に掲載しているばんすゐ訳「寶の箱」である。この訳文については 2.3)で詳述する。

(3) 最初の邦訳

---

[140] 川戸道昭/野口芳子/榊原貴教編『日本におけるグリム童話翻訳書誌』ナダ出版センター 2000 年 7 月 224 頁。

[141] 川戸道昭/榊原貴教編『児童文学翻訳作品総覧　明治大正昭和平成の 135 年翻訳目録』4 巻-2 大空社 2005 年 9 月 579-580 頁。

[142] 野口芳子 前掲書 1994 年 後記付属資料③7-12 頁。

「ヘンゼルとグレーテル」の最初の邦訳は、東海生訳「一太郎とおすみ」1である。この邦訳については、第3章で述べているので、ここではその他の9話について述べることにする。

(4) 邦訳についての概念規定

邦訳の分析と考察する前に、まず本論で使用する言葉である、忠実版、改変版、改作版についての定義を以下のように定めておく。原典どおりに訳されているもの、または話の展開が原典どおりであるものを忠実版とする。ただし表現が異なるものも含める。たとえば「魔女」が「魔法使い」として訳されているものや「パンの家」が「お菓子の家」として訳されているものなどである。話の展開はほぼ原典どおりであるが、出現する小道具が異なるものや残酷な行為（子捨て、魔女殺害、宝物略奪）を含まないものを改変版とする。話の内容が変えられているもの、または残酷な行為の3項目すべて含まないものを改作版とする。

2. 明治期に邦訳された他の9話の訳文と邦訳者について

1) 山君訳「ヘンゼルとグレエテルと」（1902）2

(1) 邦訳文について

登場人物は樵夫、妻、ヘンゼル、グレエテル、魔女である。母親は「妻」、「おっかさん」と表現されている。「妻」という表現は明治期では山君訳のみであり、継母か実母かが判別できない表現である。訳者の於菟は実母ではなく、祖母に育てられた。鷗外の再婚相手、すなわち継母は於菟のことを快く思っていなかったようである。母親に対する表現が不明確であるのはそのためではないだろうか。なお「魔女」という表現はこの山君訳で初めて出現する。

ところで、この頃„Hexe“はどのように訳されていたのだろうか。明治時代に出版された獨和辞典を調査すると、1887（明治 20）年に出版された『増訂獨和辭彙』には、„Hexe“は「魔ヲ使フ女」[143]とある。1893（明治26）年に出版された『獨英和三対小字彙』には、„Hexe“は「witch、魔術師、魔女」[144]とある。1898（明治31）年に出版された『袖珍獨和新辭林』には、„Hexe“は「魔法ヲ使フ女、巫婆（イチコ）、巫女（ミコ）、鬼婆、魔女」[145]とある。このように„Hexe“は「魔女」とは確定されていない。12歳の少年が「魔女」と訳すのは至難の業である。しかしその謎を解く文献が見つかった。それは於菟訳『しあはせなハンス』である。その本で於菟は鷗外が翻訳の添削をしていたことを明らかにしている。

---

[143] 風祭甚三郎譯『増訂獨和辭彙』後学堂 3版 1887年2月 263頁。
[144] 寺田勇吉他『獨英和三対小字彙』共同館 1893年9月 292頁。
[145] 保志虎吉他編『袖珍獨和新辭林』三省堂 1898年1月 633頁。

父が、夕方家に帰って夕食をすませ書斎でくつろいでいるところへ私が譯文をもつて行くと、父はすぐ筆をとりレクラム版の原書と照らし合わせながらていねいになおしてくれた。父の添削は誤譯や日本文としてのまちがいを正すばかりでなく、時によると私の原稿が朱でまつかになつてしまうこともあつた[146]

さらに於菟は、「ヘンゼルとグレエテル」は鷗外に直してもらったと明記している[147]。「魔女」という訳語はおそらく鷗外の添削によりもたらされたものであろう。

この訳文は原典にあるような会話文が略され、内容が簡潔にまとめられている。冒頭では「二親が相談して、明日二人を山へ棄てやうと云うて居るのであつた」とあり、両親による子捨てについての会話が省略されている。森へ向かうときの子猫や鳩についての描写がなく、森にいるときも会話がない。会話が初めて出現するのは、2 人がパンの家に到着してからである。それは魔女の「あゝ、可愛らしい子供達だ。そんな處に居ないで、早く内へおはいり。澤山おいしいものを食べさせてあげるよ」という言葉である。そしてその後、魔女とグレエテルの会話が簡潔にまとめて入れられている。ヘンゼルとの会話はない。グレエテルが魔女を焼き殺すときの機転や、鴨に乗るときの優しさは省略することなく記されている。話の筋に必要と思われるところに焦点を当てて、内容が取捨選択されたのである。

(2) 訳者について

訳者の山君は森於菟(1890-1967)の筆名である。於菟は森鷗外(1862-1922)の長男で、大正期から昭和期にかけての解剖学者であり、東邦医科大学教授であった[148]。鷗外は 2 度結婚しており、於菟の母親は鷗外の最初の結婚相手である赤松登志子である。

於菟は「ヘンゼルとグレエテルと」のほかに、「顎曲りの王」(KHM 52「つぐみひげの王」)、「蟇」(KHM 105「蛇の話」)、「小人の名」(KHM 55「がたがたの竹馬小僧」)、「茨姫/星の銀貨」(KHM 50「いばら姫」/ KHM 153「星の銀貨」)、「牝鶏の死」(KHM 80)、「賢い百姓の娘」(KHM 94)を発表している。於菟が雑誌に邦訳を発表した頃、彼は獨逸学協会学校の生徒であった。

獨逸学協会学校は現在の獨協学園である。当時の獨逸学協会学校は普通科と専修科があり、普通科はドイツ語教育を特色にした高等教育の予科として位置づけられ、専修科は法律学校として法曹官僚の養成機関として位置づけられていた[149]。於菟が最初にグリム童話

---

146 森鷗外、森於菟共譯 前掲書 1948 年「あとがき」1-2 頁。
147 同上「あとがき」2 頁。
148 日外アソシエーツ編集部『新訂増補人物レファレンス事典』明治・大正・昭和(戦前)編Ⅱ 日外アソシエーツ 2010 年 12 月 1873 頁。
149 獨協学園百年史編纂委員会編『獨協学園史 1881-2000』獨協学園 2000 年 5 月 461-464 頁。

の邦訳を発表したのは 1902(明治 35)年 8 月であることから、その頃の獨逸学協会学校の履修科目で当時使用されていた教科書を調査した。獨協学園が発行している『独協百年』に 1899(明治 32)年の獨逸学協会学校概要があり、外國語科目の教科書として『エンゲリン讀本』が明記されている。原題は *Deutsches Lesebuch aus den Qeullen zusammengestellt* である。著者はエンゲリン(Engelien)で、1885 年にベルリンのシュルツェ社で出版されたとある[150]。

獨逸学協会学校では 1901(明治 34)年の 5 月に獨逸語講習会が設置されている。講習会には正科と受験科がある。その学科課程を見ると、受験科の教科書に「エンゲリーン読本第三・第四」と記されている[151]。獨逸学協会学校ではドイツ語のリーダーとして『エンゲリン讀本』を使用していたことがわかる。国立国会図書館デジタルコレクションには『エンゲリン讀本』がいくつか存在していて、原書名は *Deutsches Lesebuch. Aus den Qeullen zusammengestellt* と記載されている。ここには、於菟が翻訳した KHM 83「幸せハンス」や KHM 50「いばら姫」が収録されている。KHM 15「ヘンゼルとグレーテル」は B 巻に収録されている。於菟が翻訳に際してこのテキストを使用したかについては不明であるが、獨逸学協会学校でグリム童話を学んでいたことは確かである。『エンゲリン讀本』についての詳細は後述する。

2) 佐藤天風訳「深い深い森の中」『女鑑』(1902) 3

(1) 邦訳文について

翻訳の題名は「深い深い森の中」で、「ヘンゼルとグレーテル」ではない。登場人物は木挽の父親、継母、ヘンゼル、グレッテル、魔術使いの婆である。ふたりの子どもは両親に捨てられ森で迷い、魔術使いの婆の家に行く。そこで歓待されて出される料理が「りんご」「梨」「角砂糖」「羊の肉」である。原典では「牛乳」「砂糖をまぶしたパンケーキ、りんごとくるみ」である。「角砂糖」は、松江春次がアメリカ留学帰国後の 1908(明治 41)年に日本で最初の角砂糖製造者となったものである。松江の成功によって角砂糖は国産できるようになり、輸入する必要がなくなったという[152]。したがって 1902(明治 35)年当時の角砂糖は高価なものであったと思われる。「梨」は 1888(明治 21)年に梨の栽培家である松戸覚之助が発見した品種が、1898(明治 31)年に東京興農園主の渡瀬寅次郎により「二十世紀」と命名された。その後鳥取県に移植されて特産品となる。ほかにも当麻辰二郎(当麻長十郎)が「長十郎」という品種を発見し、栽培されるようになる。「羊の肉」は明治時代に養羊が奨励された北海道では常食となっており、関東地方でも常食化されるようになった。この作品が発表された頃の「角砂糖」は高級品であるが、「梨」や「羊の肉」は明治 40 年

[150] 獨協学園百年史編算委員会編『独協百年』(5) 1981 年 12 月 166 頁。
[151] 同上 195 頁。
[152] 塩谷七重郎『松江春次伝』歴史春秋出版 2005 年 3 月 71 頁。

代には盛んに生産されるようになったものである。

原典では妹のグレーテルが魔女の家で蟹の殻を与えられるが、佐藤訳では「蟹の甲羅みたいにやせていた」とある。そして子どもたちは魔女を焼き殺した後、宝物を持ち帰る。その宝物は、原典では「真珠」と「宝石」であるが、佐藤訳では「金銀の細工物」「金剛石」「緑礬石」「紅玉石」「瑪瑙」「水晶」と具体的な宝石名が挙げられている。

「羊の肉」「梨」「角砂糖」や多くの種類の宝石は原典にない表現である。さらに子捨てで森に向かうときの距離が「1哩（マイル）」と表現されていて、英語の単位が使用されている。

佐藤訳では、魔術使いが子どもたちを歓待する食べ物が原典とは異なり、産業の発展を意識しているかのように改変されている。距離の単位が 1 哩と記されていることから、ドイツ語からの翻訳ではなく、英語からの翻訳であると思われる。宝石名が具体的に表現されているだけでなく、題名も大幅に改変されている。佐藤天風による改変であるのか、あるいは使用した英語版の底本による改変であるのかいずれかであろう。

(2) 訳者について

佐藤天風は筆名である。実名は佐藤忍（1882-没年不明）である。『新聞人名辞典』によると、彼は 1882（明治 15）年 5 月 16 日に仙台で生まれ、法学士で、報知新聞社、二六新報、大勢新聞社に在籍していたとある[153]。「深い深い森の中」を発表した 1902（明治 35）年は佐藤が 20 歳のときであった。1911（明治 44）年 12 月編纂の『新聞総覧』には、佐藤忍が報知新聞社に在籍していたことが記載されている。そこには論説部の主任として「佐藤忍君（天風）」とある[154]。大隈重信は早稲田大学総長に就任後、1911（明治 44）年 10 月 7 日に仙台と福島方面へ募金を目的とした地方巡遊をしている。そのときの同行者のなかに「報知新聞社の佐藤天風」の名が挙げられている。

> 同行者は綾子夫人、高田学長、三枝守富、田中幹事、内ヶ崎教授、桑田主事、伯爵編集局の桜井鷗村、報知新聞社の佐藤天風、新日本社の樋口竜峡、内ヶ崎騰次郎、『冒険世界』の河岡潮風、それに平和協会の渡瀬農学士らであった[155]。

佐藤天風の動向を追うと、1922（大正 11）年の『新聞総覧』に『大勢新聞』の主筆であり、政治部長と経済部長を兼任している[156]。1925（大正 14）年 6 月に創刊された『日本新聞』には顧問として在籍している[157]。その後は 1935（昭和 10）年に『日本及日本人』という雑誌

---

153 永代静雄編『新聞人名辞典』第 2 巻 日本図書センター 1988 年 2 月 123 頁。
154 北根豊編『新聞総覧　明治 44 年版』大空社 1991 年 11 月 61 頁。
155 早稲田大学大学史編算所編『早稲田大学百年史』第 2 巻 早稲田大学出版部 1981 年 9 月 293 頁。
156 北根豊監修『新聞総覧　大正 11 年版』大空社 1993 年 1 月 56 頁。
157 小林昌樹編/解題『雑誌新聞解題事典 1935』3 巻 金沢文圃閣 2015 年 9 月 58-59 頁。

に佐藤天風の名で「夏安居随筆」と題してエッセーを掲載している[158]。残念ながら彼の没年は不明である。佐藤忍は 1902(明治 35)年に第二高等學校を卒業後、東京帝國大學法科大學政治学科に進み、1906(明治 39)年 7 月に卒業している[159]。彼は仙台生まれであるが、卒業名簿には本籍は東京と記載されている。報知新聞社に入社した年は確定できていないが、1911(明治 44)年の『新聞総覧』では、まだ役職がついていないので、おそらく入社歴が浅いと思われる[160]。長年実名が不明であった佐藤天風は、東京帝國大學を卒業したジャーナリストの佐藤忍であると確定することができた。

3) ばんすゐ訳『寶の箱』(1905 年 3 月以前) 4

(1) 邦訳文について

『寶の箱』は、シリーズ家庭童話の第 1 編として學海指針社から発行されているが、出版年月が不明である。家庭童話は第 1 編から第 12 編までの構成である。奥付には「明治三十八年三月五日発行(自五編至十二編)」とある。すなわち第 5 編から第 12 編までは明治 38 年の発行ということである。第 1 編は明治 38 年よりも前に発行されているので、ここでは 3 月以前と表示しておく。しかしなぜこうした奥付になるのか不明である。學海指針社については「多クノ小學校教科書ノ編輯ヲ主宰シ、之ヲ集英堂ニ於テ發行ス、其後小學校教科用書ガ國定制度トナルニ及ビ集英堂ノ事業ヲ継承シ、明治三十七年十月株式合資會社學海指針社ヲ組織シ」とある[161]。第 1 編から第 4 編までの発行は組織名が異なるために、このような奥付になっているのであろう。また家庭童話の第 3 編『文銭の環』の奥付は、「明治三十七年七月十七日発行」とある。この本の発行所は集英堂である。明治 37 年 7 月には第 3 編が存在していたことが判明する。上記の記述のとおり、學海指針社が集英堂の事業を継承したということであろう。第 1 編の『寶の箱』は第 3 編と同じ年に出版されたものか、もしくは明治 37 年 7 月以前に出版されたものであると考えられる。また『文銭の環』の「はしがき」と『寶の箱』の「はしがき」は文章が異なっている。このことから現存する『寶の箱』は 1905(明治 38)年に刷り直したものであると思われる。

『寶の箱』では、兄の名前が孝一で、妹の名前が智惠子である。名前が和名に改変されている。孝一は「12 歳か 13 歳」という設定である。ふたりの父親は継父で、母親は実母である。父親は子どもたちを養っていくことができないという理由で、子捨てを提案し実行する。父親が子捨てを提案する話にペローの「親指小僧」がある。「親指小僧」では貧困が原因で、父親が子捨てを母親に提案し実行する。明治期の「ヘンゼルとグレーテル」の

---

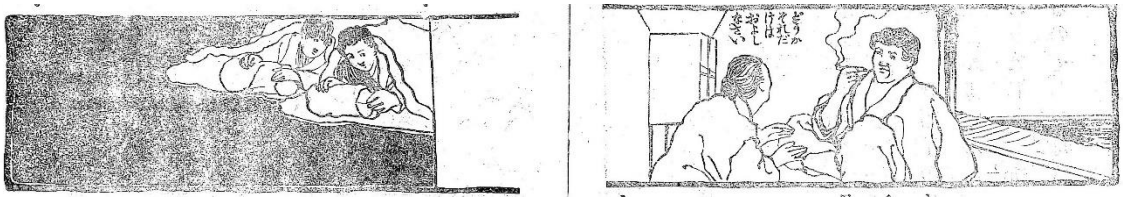
158 佐藤天風「夏安居随筆」政教社編『日本及日本人』(328) 政教社 1935 年 9 月 136-140 頁。

159 『第二高等學校一覧　明治 37 年-明治 38 年』第二高等學校 1905 年 11 月 155 頁。
『東京帝國大學一覧　明治 40 年-明治 41 年』東京帝國大學 1907 年 12 月 136 頁。

160 北根豊監修『新聞総覧　明治 44 年版』大空社　1991 年 11 月 61 頁。

161 東京書籍商組合『東京書籍商伝記集覧』青裳堂書店 1978 年 4 月 115 頁。

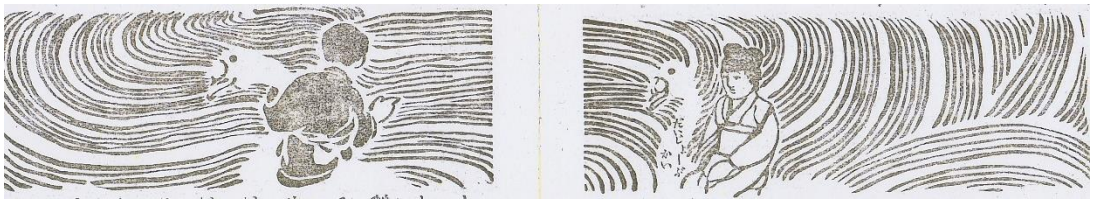
翻訳で、父親が子捨て提案するのは、この『寶の箱』だけである【図 1】。そのうえ継父である。継母ではなく継父が登場するのも、明治期ではこの話のみである。ペローの「親指小僧」は「ヘンゼルとグレーテル」の類話とされている。『寶の箱』は、父親が子捨てを提案するという点では、「親指小僧」に類似しているといえる。



【図 1】画家不明『寶の箱』

2 回目の子捨てで、2 人が道しるべにするのは、「パン」ではなく、「握り飯の飯粒」である。やがて 2 人は美しい鳥に導かれて「お菓子の家」を発見する【図 3】。原典の「パンの家」ではない。その家には「魔法使いの鬼婆」が住んでいる。鬼婆は「焼き魚」「吸い物」「刺身」「栗きんとん」の料理を 2 人にふるまう。原典にあるような「牛乳」「砂糖をまぶしたパンケーキ、りんご、くるみ」は出現しない。鬼婆によって提供される料理は、当時の日本人が好んだと思われるご馳走である。竈に火をつけた智恵子は、鬼婆に「餅」を焼くように言われる。パンが出現せず、日本人が主食とする食材に変えられているのである。道しるべの「飯粒」や鬼婆が焼こうとする「餅」が出現するのは、東海生訳の「一太郎とおすみ」を参考にしていると考えられる。鬼婆の家から去るときに、ふたりは金剛石や真珠の入った箱(寶の箱)を持ち帰る。途中に湖があり「橋もなければ舟もなく」と説明されている。原典では子どもたちの会話の場面であるが、省略されている。また原典ではグレーテルが白い鴨に頼むのであるが、ここでは兄の孝一が鵞鳥に渡してくれるように歌を歌って頼むのである。その歌は下記のような七五調のものである。

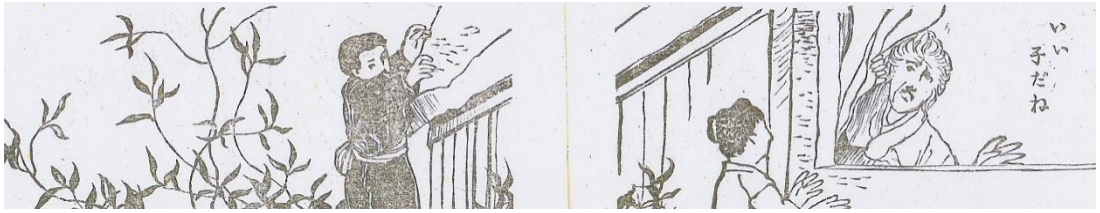
奇麗な鳥に　だまされて
宿った家は　鬼婆
やっと生命は　のがれても
見渡すかぎり　山ばかり
お前の聲を　あてにして
うれしやここと　來て見れば、
お海の様な　湖水で
舟もなければ　橋もない。
どうかお前の　背にのせて
渡しておくれな　コッコッと。



【図 2】画家不明『寶の箱』

明治期の訳文で、この場面が七五調の詩はほかにも存在するが、晩翠の『寶の箱』の詩は原典よりも長く、その内容も大幅に変えられている。晩翠は「荒城の月」の作詞や、多くの校歌の作詞をしている。この詩においてもまるで歌詞のようである。このことからも、『寶の箱』の翻訳者「ばんすゐ」は「土井晩翠」であると推測できる。

２羽の鵞鳥に助けられたふたりは無事帰宅する。ふたりが家に戻ると病気であった母親は全快する。そして宝物のおかげで父親は樵を辞めて、孝一と智恵子は学校に行くことができる。子どもたちが持ち帰った宝物のおかげで皆が幸せになる。子どもたちは見事に親の愛情を取り戻したのである。つまり経済力がある者は愛されるということである。



【図 3】画家不明『寶の箱』

(2) 訳者について

ばんすゐは、読み方から考えて土井晩翠（本名土井林吉）であろう。土井晩翠（1871-1952）は、仙台市で生まれた詩人、英文学者である。彼は質屋の長男として生まれ、父親は養子であった。晩翠は中学校進学を希望していたが、学問は無用という祖父の言葉に父親が従ったため、家業の質屋で働くことになる。その後仙台英学塾に通学し、1888（明治 21）年に仙台第二高等中學校（後の第二高等学校）に入学する[162]。1894（明治 27）年に 24 歳で第二高等学校を卒業した晩翠は、同年東京帝国大学文科大学英文学科に進学し、1897（明治 30）年に卒業する。彼は上田敏と同級生であり、ふたりは同年に同学科を卒業している。このふたりは、東京帝国大学文科大学在学中に雑誌『帝國文學』の編集委員として名を連ねている。第一次編集委員には上田敏、高山樗牛、大町桂月らの名前があり、第二次編集委員のなかに土井晩翠（林吉）の名前がある。その『帝國文學』の編集がきっかけで、誌上に次々と新体詩を発表し、執筆活動を活発に行う。晩翠という号は、『帝國文學』よりも前の 1893（明治 26）年に、二高校友会誌『尚志会雑誌』において用いたのが最初である[163]。号の

[162] 石井昌光『情熱の詩人 土井晩翠』東北出版 1953 年 6 月 35-36 頁。
[163] 日本近代文学館編『日本近代文学大事典』2 巻 講談社 1977 年 11 月 426 頁。

由来は、宋の詩人范質(はんち)の詩の一節である「遅々タル潤畔ノ松、鬱々トシテ晩翠ヲ含ム』からとった」という[164]。1897(明治 30)年に東京郁文館中学校の教師となり、1899(明治 32)年に芳賀矢一の媒酌で結婚する[165]。1900(明治 33)年には仙台に帰郷し、母校の第二高等学校の教授となる。その後 1901(明治 34)年に第二高等学校教授の職を辞して、欧州を巡歴しており、1904(明治 37)年 11 月に帰国する。その後は父親の希望で仙台に帰郷し[166]、1905(明治 38)年に第二高等学校の教授に復職する[167]。したがって『寶の箱』は 1904 年に執筆されたものではなく、おそらく欧州に出発する前に執筆されたものであろう。なお、土井姓の正しい読み方は「つちい」であるが、1934(昭和 9)年以降「どい」に改めている[168]。

4) 橋本青雨訳「太郎と皐月」(1906) 5

(1) 邦訳文について

この訳文は 3 種類のグリム童話を組み合わせたものである。冒頭は捨てられていた女の子(皐月)を貧しい樵が家に連れて帰る場面で始まる。樵の家には妻と太郎という男の子がいて、皐月はそこで一緒に暮らす。ここまでは KHM51「みつけ鳥」の内容である。樵は貧乏で食べる物に困り妻に相談する。妻は子捨てを提案し、実の息子である太郎と拾ってきた皐月を山の中に捨てることにする。母親については「悪い母親」ではあるが「継母」とは書かれていない。2 回目の子捨てで太郎は「パン屑」ではなく、「飯粒」を道しるべとして撒く。「飯粒」は東海生訳とばんすゐ訳に出現している。彼らは 3 人とも東京帝国大学の卒業生である。橋本は翻訳するにあたりこの 2 つの訳文を参考にした可能性がある。老婆の家は「パンで造った小屋で、屋根はお菓子、窓は角砂糖」であり、老婆は「小さな魔法使いの婆さん」である。「魔法使い」という表現は初めて出現するものである。2 人が家を食べていると「チッ ハ チュウ！チッ ハ チュウ！其所に來たのは、誰方(どなた)です！其所に居るのは、誰方です！」という魔法使いの台詞がある。2 人はこの魔法使いにより歓待されるが、翌日太郎は捕らえられる。ここまでは「ヘンゼルとグレーテル」の話である。その後 2 人は魔法使いの家から逃げ出すと、魔法使いの「お符」で皐月は家鴨になり、そしてバラの花に変身する。太郎は道化役者に変身し、笛を吹き魔法使いを茨の中で死ぬまで踊らせて、身動きができないようにする。その後皐月は疲れてしまい、太郎は村へ車か馬を呼びに行く。その間に皐月は石となり太郎が来るのを待つのだが、彼はひとりの娘と出会い、皐月のことを忘れてしまう。皐月は石から花に姿を変えると、羊飼いが現れてその花を家に持ち帰る。皐月が人間に戻ると羊飼いは彼女に求婚するが、彼女は断る。やがて

---

164 土井晩翠/薄田泣菫/上田敏/蒲原有明『現代日本文學全集』58 巻 筑摩書房 1957 年 8 月 407 頁。

165 石井昌光 前掲書 1953 年 43 頁。

166 土井晩翠『雨の降る日は天気が悪い』日本図書センター 1983 年 4 月 66 頁。

167 土井晩翠他『現代日本文學大系』12 巻 筑摩書房 1971 年 11 月 435 頁。

168 日本近代文学会東北支部編『東北近代文学事典』勉誠出版 2013 年 6 月 364 頁。

皐月は太郎が結婚するという話を聞く。婚礼の日、皐月の歌声を聞いた太郎は、皐月に気が付き、ふたりは結婚する。結末は KHM56「恋人ローラント」の内容である。このように「太郎と皐月」は、「みつけ鳥」「ヘンゼルとグレーテル」「恋人ローラント」の 3 種類のグリム童話を混成したものになっている。おそらく底本はエドガー・テイラー(Edgar Taylor 1793-1839)『ドイツ民話集』(*German Popular Stories*)[169]の英語訳と思われる。この本には‘Roland and May-bird’という題名の話が収録されている。その話は、冒頭が「みつけ鳥」その後は「ヘンゼルとグレーテル」、「恋人ローラント」の構成になっており、橋本訳の「太郎と皐月」と合致する。またテイラー訳の題名にある“May-bird”の“May”については、“he called the little girl May-bird, because he had found her on a tree in May.”(289)とあり、橋本訳では「丁度其兒を助けたのが、5 月ですから、然う名付けたのであります」とある。

‘Roland and May-bird’の「みつけ鳥」の箇所を見ていく。樵が森で見つける子どもは“a very little girl”(289)であり、彼の実の子どもは“my own son Roland”(289)である。橋本訳は、「可愛い女の子」で、彼の子どもは「倅の太郎」である。また樵には妻がいる設定である。グリム版では樵が森で見つけるのは男の子で、彼の実の子どもは女の子である。妻の存在はなく、年とった料理番の女がいる。次に「ヘンゼルとグレーテル」の箇所を見ていく。母親は“mother”であり“stepmother”ではない。老婆の家は“a strange little hut, made of bread, with a roof of cake, and windows of sparkling sugar”(293)である。橋本訳は「見ると、不思議や！其小屋はパンで造った小屋で、屋根はお菓子、窓は角砂糖」である。“sparkling sugar”はきらきら輝く砂糖、すなわち氷砂糖なので、橋本の「角砂糖」というのは彼の間違いなのか、敢えてそうしたのか定かではない。家から出てくるのは“a little old fairy”である。“witch”ではない。橋本訳は「小さな魔法使の婆さん」である。彼女は子どもたちが家を食べていると“Tip, tap! Who goes there?”(293)と言う。橋本訳は「チッ ヘ チュウ！チッ ヘ チュウ！其所に來たのは、誰方(どなた)です！其所に居るのは、誰方です！」である。くり返しがあるもののほぼ同じであることがわかる。

(2) 訳者について

橋本青雨の実名は橋本忠夫(1878-1944)である。彼は宮城県の出身で、明治、大正期の翻訳家でありドイツ語学者である。1901(明治 34)年に第二高等學校を卒業し、東京帝國大學獨逸文學科に進み、1904(明治 37)年 7 月に卒業している[170]。大学在学中から語学力と流麗な文章力で知られていたという[171]。実家は石巻市門脇町で、彼の父親は橋本寛蔵といい、

[169] Taylor, Edgar (ed.) *German Popular Stories*. London: Chatto & Windus [1869].
[170] 『東京帝國大学一覧明治 43 年-44 年』東京帝國大學 1911 年 2 月 (179)頁。
[171] 日外アソシエーツ編『20 世紀日本人名事典』日外アソシエーツ 2004 年 7 月 1977 頁。

町会議員を務めた人物で若い頃は英語を勉強していたという[172]。その父親の下で育った忠夫は早くから英語に親しんでおり、学生時代に翻訳のアルバイトをして学資の一部に充てたぐらいである[173]。卒業後は、教員となり、1908(明治 41)年から 1919(大正 8)年まで第三高等学校の教授を務める。1920(大正 9)年から新設された松本高等学校の教授となり、1926(大正 15)年 3 月まで務める。同年 4 月からは海軍大学講師となり、1933(昭和 8)年まで務める。その後中央大学の教授となる[174]。また橋本は、1930(昭和 5)年に始まったNHK(日本放送協会)ラジオ、ドイツ語講座の初代講師でもある[175]。

5) 巌谷小波翻案「お伽口演　鬼の宿」(1907) 6

(1) 邦訳文について

杣(そま)の夫婦と 13 歳の太郎吉と 9 歳のお松の 4 人家族で、子どもたちには年齢を設定している。母親は実母であるが、子どもたちのことを「喰潰(くいつぶ)し」と呼び、子捨てを提案する。両親が子捨ての話をしているのをお松のみが聞く。兄は何も知らない。父親は乗り気ではないが、苺を採りに行こうと子どもたちを誘い出して子捨てを実行する。「苺採り」はエンゲルベルト・フンパーディンク(Engelbert Humperdink　1854-1921)作曲のオペレッタ *Hänsel und Gretel* から取り込んだものであろう。小波はドイツ語が堪能であるから、フンパーディンクを知っていた可能性が高い。子捨ては 2 回ではなく、3 回おこなわれる。お松は竈の灰を道に撒く。パンは出現しない。3 回目の子捨てでは灰がないため稗を道しるべに撒く。稗は鳥に食べられ、ふたりは道に迷い、ほら穴のような所で寝る。猫が現れてふたりを「パンの家」ではなく「鬼の宿」へと導く。そこには鬼婆がいて、子どもたちの両親は鬼より恐ろしいと言う。やがて鬼婆の息子が帰ってくるのだが、鬼婆はふたりを長持に隠して食べられないように守る。そして鬼婆は、ふたりに立派な宝の鏡「浄玻璃」を土産として持たせる。家へは猫が道案内する。帰宅すると父親も母親も生存している。両親が鬼婆からもらった鏡をのぞくと、そこには恐ろしい鬼の顔が映る。両親は改心してふたりをかわいがる。その後両親は鏡に人間として映るようになる。

この話は冒頭から女の子の知恵と賢さを強調して描いている。兄の太郎吉は頼りない存在である。鬼の宿へ導くのは原典では鳥であるがここでは猫である。鬼の宝物の「浄玻璃」は、「地獄の閻魔の庁で、死者の生前に犯した罪業を映し出す鏡」[176]である。小波は冒頭で「今日子として親をすて、親として子をすてるとわ、共に人情にはずれた話、こう云う人こそ人間の皮を被った獣、否、鬼親、鬼子と云つても差支ありません」と述べている。両

---

[172] 三陸河北新報社編『20 世紀の群像』上巻 三陸河北新報社 2001 年 11 月 160 頁。
[173] 同上 160 頁。
[174] 同上 161-162 頁。日本近代文学会東北支部編 前掲書 2013 年 420 頁。
[175] 三陸河北新報社編 前掲書 2001 年 160 頁。
[176] 中村元他編『岩波仏教辞典』岩波書店 2 版 2002 年 10 月 543 頁。

親は子捨てという罪を犯した鬼であり、浄玻璃の鏡によって閻魔の裁きを受けたということであろうか。前書きにも「これわ少年諸君方よりも、世間の親御さん達に、讀んでいただき度い位のものです」と述べていることから、子どもを持つ親への戒めでもあるのだろう。鬼婆は恐ろしい悪人というより、善人として描かれている。ふたりの子どもを食べようとするのは鬼婆の息子である。ペローの「親指小僧」は、人食い鬼が子どもを食べようとし、その妻がそれを阻止する話である。鬼が子どもを守るという点で、この話はペローの「親指小僧」に似ている。

櫻井美紀と大島広志は、鳥取県の話者である木田信子の語りを集めた『キスカ』[177]に収録されている「子捨て山の話」を紹介している[178]。「子捨て山の話」について櫻井は「その語り口に巌谷小波の『鬼の宿』の介在が推定できる」[179]と述べているとおり、「鬼の宿」と「子捨て山の話」は類似している。「子捨て山の話」は、実の両親と姉と弟の 4 人家族であるが、両親は子どもを邪険に扱い夫婦 2 人だけの暮らしを望む。両親が子どもを捨てようと話しているのを姉は聞いてしまう。1 回目の子捨てでは姉が道しるべに撒いた灰で帰宅する。2 回目の子捨てでは道しるべに稗の実を撒くが、鳥に食べられてしまう。そこへ猫（タマ）が出現し、2 人を人食い婆さんの家に導く。婆さんは 2 人に奥の間を絶対見ないようにと言い含めて外出する。2 人は好奇心で奥の間に行き、人間の骨があるのを見てしまう。そこへ婆さんが帰宅し、鬼婆の形相になるが、生きていても親から見離され、婆さんに食べられるのは本望という 2 人の言葉に彼女は心を動かされ、家に帰るように促す。猫に案内されて 2 人は無事帰宅し、両親にこれまでの話をする。両親は神様による戒めであるとして、2 人に謝り改心して親子 4 人仲良く暮らすというものである。実の両親であること、道しるべに女の子が灰と稗を撒くこと、猫が出現すること、婆さんが 2 人に危害を与えないこと、両親が改心して子どもを可愛がることは、「鬼の宿」とよく似ている。両親が子どもたちに謝るというのは、ベヒシュタイン版の結末である。小波は多くの話を混成して独自の世界を作り、「口演童話」と称して日本各地で語った。「子捨て山の話」の語り部は鳥取県在住の人である。「鬼の宿」は『少年世界』に収録されているものである。おそらく口演童話を聴き、『少年世界』の読者が語り部に伝え、「子捨て山の話」として伝わったのではないだろうか。小波は精力的に各地で口演をおこない、子どもたちに影響を与えていたと推測する。

(2) 翻案者について

巌谷小波の実名は巌谷季雄(1870-1933)といい、明治から昭和にかけての児童文学者で

---

[177] 小倉広重編/木田信子話『キスカーこころのたまてばこー』小倉広重 1983 年。

[178] 櫻井美紀「昔話『味噌買橋』の出自ーその翻案と受容の系譜ー」『口承文芸研究』(15) 日本口承文芸学会 1992 年 71 頁。

[179] 同上。

ある。獨逸学協会学校の第 1 期生であり、1888(明治 21)年 9 月に獨逸学協会学校普通科を卒業する。しかし医学の道を放棄し文学を志すため、1889(明治 22)年 4 月末に獨逸学協会学校の専修科を退学する[180]。杉浦重剛の称好塾で学んでいた小波は、尾崎紅葉らの硯友社に加わる。1895(明治 28)年には雑誌『少年世界』を創刊し、多くのお伽噺を発表する[181]。

6) 曉影生訳「鬼婆退治」(1908) 7

(1) 邦訳文について

子どもの名前はハンゼルとグリテルである。子捨ては 1 回のみで、意地の悪い継母が実行する。ヘンゼルが道しるべとして撒く物はパンである。子どもたちは迷子になり森に住む老婆の所に行く。その老婆は題名にあるように「鬼婆」である。鬼婆は「ミルク」「御菓子」「林檎」でふたりを歓待する。ふたりが鬼婆の家から略奪する宝物は「真珠の玉」「ダイヤモンド」「ルビー」「紅玉」である。ふたりを救助するのは白い鵞鳥である。

この邦訳は簡潔にまとめられ、原典にはない表現が多いことが特徴である。継母については「意地の悪い」という表現が加筆されていて、継母の悪の度合いを強調している。鬼婆が歓待する料理に「くるみ」がない。ふたりが略奪する宝物は原典では「真珠と宝石」だが、宝石名が具体的に表現されている。「ダイヤモンド」と「ルビー」は佐藤天風訳で「金剛石」と「紅玉石」としてすでに出現しているが、曉影生はカタカナで表記している。「紅玉」はおそらく誤字で、鋼玉(コランダム)のことだと思われる。鋼玉は赤色がルビーで、青色がサファイアのことをさす。「紅玉石」であれば「ルビー」と表記しているので、ここではサファイアと表現したかったのではないだろうか。ふたりを救助するのは原典では白い鴨であるが、ここでは白い鵞鳥である。ふたりが救助を頼むと白い鵞鳥は「サアお乗りなさい」と言う。鵞鳥が擬人化されているのは、明治期ではこの話のみである。

(2) 訳者について

曉影生は筆名であり、実名は不明である。『家庭雑誌』に「鬼婆退治」と「魔法使」(KHM46 フィッチャー鳥)の 2 つのグリム童話を紹介しており、そのほかに 2 編の小説を著している。『家庭雑誌』は 1892(明治 25)年 9 月に徳冨蘇峰(猪一郎 1863-1957)が家庭雑誌社から創刊した雑誌である。そのときの家庭雑誌社の出版地は、蘇峰が主宰していた民友社の住所と同じである。したがって執筆者は民友社のメンバーである可能性が高い。

曉影生という筆名では、1894(明治 27)年 3 月発行の雑誌『不知火(しらぬい)』において論説が掲載されている[182]。『不知火』は 1893(明治 26)年の 7 月に第 1 号が少年義會(後の青年義會)か

---

[180] 巖谷大四 前掲書 1974 年 260 頁。
[181] 臼井勝美他編『日本近現代人名辞典』吉川弘文館 2001 年 7 月 128 頁。
[182] 曉影生「遠慮なければ近憂あり」水上四辻編『不知火』(9) 青年義會事務所 1894 年 3 月 17-18 頁。

ら発行された非売品である。少年義會の出版地は熊本県である。第 1 号の『不知火』には徳冨蘇峰の筆名である「玄堂逸史」の論説が掲載されている。創刊号に掲載されるということは、よほどこの雑誌に傾倒しているということであろう。蘇峰は熊本県出身で、熊本バンド(熊本洋学校の生徒が結成したキリスト教徒のグループ)の一員である。蘇峰は明治の翻訳王と呼ばれた森田思軒とともに「文学会」を発案している。「『文学会』は文筆家同士の顔合わせの場であると同時に、蘇峰と文筆家との出会いの場でもあった」[183]という。蘇峰の文学への興味をうかがい知るものである。第 1 回目の会合は 1887(明治 20)年 9 月に開かれた。この会合には不参加であったが、招待客には管了法の名前がある。管は、1887(明治 20)年に日本で初めてグリム童話を翻訳した『西洋古事神仙叢話』を出版した人物である[184]。

弟の徳冨蘆花(健次郎 1868-1927)も兄の蘇峰と行動を共にしている。蘆花は 1889(明治 22)年に熊本英学校を退職し、民友社に入る[185]。蘆花の筆名は数多くあるが、そのなかに雑誌名と同じ「不知火生」が含まれている[186]。蘆花の養女である鶴子によると、蘆花は子ども好きでよく物語を語り聞かせていて、グリム童話も語っていたという[187]。

筆名については確定できていないが、民友社との関わりから暁影生は徳冨兄弟ではないかと推測する。

7) 水野繁太郎/權田保之助訳「兄と妹」(1909) 8

(1) 邦訳文について

冒頭で大飢饉という社会的状況が描かれているが、2 回目の子捨てを実行するときは「不景気」という言葉が使われている。「不景気」という表現が出現するのはこの作品のみであり、權田の社会学者としての視点が表れているといえよう。老婆は「鬼婆」であり、魔女ではない。ふたりを救助するのは原典どおり白い鴨である。継母がふたりを起こすときに「怠け者」と言う。鬼婆も同じようにグレーテルを起こすときに「怠け者」と言うのである。まるで継母と鬼婆を同一視しているかのようである。鬼婆がふたりを歓待する料理のなかで「砂糖のついた油菓子」がある。原典では「砂糖をまぶしたパンケーキ、りんご、くるみ」である。明治期の訳文では単独で「砂糖」と訳しているものが多いなか、この訳文はドイツ語を理解している邦訳といえよう。しかし„Hexe“は魔女ではなく、鬼婆と訳されている。1902(明治 35)年の山君訳ではすでに「魔女」と訳されているが、明治期にはまだ「魔女」という言葉が一般化されていなかったのであろう。原典に忠実であるが、結末

183 谷口靖彦『明治の翻訳王　森田思軒』山陽新聞社 2000 年 6 月 145 頁。
184 野口芳子『グリムのメルヒェン』前掲書 1994 年 115 頁。
185 日本近代文学会東北支部編『東北近代文学事典』前掲書 2013 年 369 頁。
186 同上。
187 渡辺勲他「矢野鶴子さんに聞く　蘆花夫妻の思い出」『同志社談叢』(31) 同志社大学 2011 年 3 月 115-116 頁。

句はない。

(2) 訳者について

水野繁太郎(1868-1933)は、東京外國語學校に 15 歳から 19 歳までの 4 年間在学しており、1885 年に廃校のため中退したようである[188]。東京外國語學校が再興した 1897(明治 30)年には、山口小太郎と共に教授として着任する[189]。水野と山口は、「車の両輪のように、草創期の本学(東京外國語學校)におけるドイツ語教育の発展に尽くしたようだ」とある[190]。その後水野は、1914(大正 3)年に創設された上智大学の専任教授となり、東京外國語學校の教授の職を退くのである。

權田保之助(1887-1951)はドイツ語学者で、社会学者である[191]。彼は 1908(明治 41)年に東京外國語學校獨語學科を卒業しており[192]、1914(大正 3)年には東京帝国大学文科大学哲学科(美学専攻)を卒業している[193]。同大学助手を経て、1921 (大正 10) 年に大原社会問題研究所の研究員となる[194]。1924(大正 13)年に研究員として渡欧し、帰国後は日大芸術科講師、文部省専門委員などを務め、1946(昭和 21)年に日本放送協会常務理事に就任する[195]。ドイツ語辞典の編纂や翻訳をし、大正期から昭和期の社会学者として、民衆娯楽の調査や社会調査を実施した人である。社会学者でありながら、ドイツ語翻訳者の顔を併せもっていたのである。

水野と權田はどちらも東京外國語學校の出身者でドイツ語を専攻しているという接点があり、「兄と妹」のほかにも共に翻訳活動をしている。

8) 柴田流星訳「兄と妹」(1910) 9

(1) 邦訳文について

母親は「おっかさん」と表現されていて、継母という言葉はない。兄が道しるべとして撒くものは、おが屑である。2 回目の子捨てでは闇夜のため道に撒いたおが屑が役に立たない。この描写は山君訳の「闇夜で小石が見えない」と似ている。森にいる老婆は魔法使いである。魔法使いはふたりを歓待した後、兄を籠の中に入れて鳥に変える。その後魔法使いは妹により倉の中へ突き飛ばされる。妹が兄を救出すると兄は人間に戻る。ふたりは

188 東京外国語大学史編纂委員会編『東京外国語大学史』東京外国語大学 1999 年 11 月 530 頁。
189 同上 529-530 頁。
190 同上 530 頁。
191 森岡清美他編『新社会学辞典』有斐閣 1993 年 2 月 491 頁。
192 『東京外國語學校一覧 明治 41 年-42 年』東京外國語學校 1909 年 8 月 106 頁。
193 『東京帝國大學卒業生氏名録』東京帝國大学 1926 年 5 月 243 頁。
194 森岡清美他編 前掲書 4 1993 年 91 頁。
195 日外アソシエーツ編 前掲書 2004 年 1073 頁。

「魔法の珠」を奪い、その導きで迷うことなく家に帰り着く。母親は、妹が魔法使いを倉の中へ突き飛ばして扉を閉めた瞬間に死亡している。子どもたちは「魔法の珠」で父親に孝行をして、何不自由なく楽しい日々を送る。

道に撒く物がおが屑というのは、食べ物を粗末にしてはならないという戒めがあるのか、それとも父親が樵なので木と関係のある物にしたのであろうか。兄が鳥に変えられ、救出されると人間に戻るというのは、昭和期の「ヘンゼルとグレーテル」にも見られる。おそらく英語訳の改変と思われる。また魔法使いが倉へ閉じ込められた同じ時刻に、母親も死亡するという設定は、水野と權田の訳文と同様に、魔法使いと母親との同一化を示しているといえよう。

(2) 訳者について

柴田流星の実名は柴田勇(1879-1913)である。柴田は小説家、翻訳家、編集者である。彼は東京に生まれ、中学を卒業後イギリス人から英語を学ぶ。巌谷小波の門下生で、夏目漱石の木曜会の一員である。時事新報社を経て、明治期に創業された左久良書房の編集主任となる。翻訳は、永井荷風との共訳「船中の盗人」(『中學世界』1900 年)や塚原渋柿園との共訳『蛮勇』(1903 年)がある[196]。彼は名前の「勇」が片仮名の「マ」と「男」で「マヲトコ(間男)」と小学生時代からかわれていたという[197]。あるとき彼は坊主頭になり「夜這坊主」と揶揄されたことがきっかけで、謡曲の本にあった「弱法師」という号を用いるようになる。その後「流星」という号に改めたという[198]。柴田が「兄と妹」を日曜学校のテキストとして使用しているのは、彼がキリスト教徒であったからである。1912(明治 45)年 5 月に、柴田は『病者福音新奇蹟』を出版している。表紙には「主によりて死の手より救ひ出されたる再生者柴田彼得著」とある。柴田彼得というのは洗礼名であろう。この本のあとがきには、闘病中であったことが記されている。

【図 4】渡邊審也画「兄と妹」

9) 日野蕨村「グレーテルとヘンゼル」(1911) 10

(1) 邦訳文について

「グレーテルとヘンゼル」が収録されている『獨逸お伽噺』の目次の題名は、「ヘンゼルとグレーテル」であるが、ここでは本文の題名を使用する。

---

196 日本近代文学館編 前掲書 1977 年 162 頁。
197 「文壇諸名家雅號の由來」巌谷季雄編『中學世界』11(15) 博文館 1908 年 172 頁。
198 同上。

登場する人物は、木樵、義母(ままはは)、ヘンゼル、グレーテル、悪魔である。明治期において「悪魔」の出現はこの訳文のみである。悪魔が道に迷ったふたりを歓待するご馳走のなかに「あんぱん」が出現する。「あんぱん」は、1869(明治 2)年に「文英堂」(現木村屋總本店)の木村安兵衛によって開かれたことに端を発する[199]。1874(明治 7)年に銀座に進出し、安兵衛と息子の英三郎は、あんぱんの製造に成功する[200]。あんぱんは銀座名物となり、1 日に売れた数は 1 万 5000 個に達したほどだ。翌年には明治天皇の食卓に供し大変喜ばれたという[201]。1905(明治 38)年には、あんぱんの駅売りが始まり、全国に普及していったという[202]。

ヘンゼルは悪魔に魔術をかけられ、声が出なくなってしまう。グレーテルは老婆の家で蟹の殻を食べるのだが、日野訳では「グレーテルは、まるで蟹の殻を見たやうなもので」とあり、痩せていることを表現している。この描写は佐藤天風訳と似ている。2 か月経過後、グレーテルは悪魔をくどの中に押し込み、上から石油をかけて燃やしてしまう。「石油」という言葉が出現するのはこの訳文のみである。石油ランプが伝来した時期は明確ではないが、幕末の頃で人びとに大きな恩恵を与えたという[203]。その燃料として外国産燈油の輸入が盛んに行われ、燈油の国産化を目的に日本国内での石油業が模索されるようになる[204]。明治政府の意向により、1876(明治 9)年に御雇外国人ライマンが石油の地質調査を行い、内務省勧業寮や工部省工作局で官営事業を計画する。しかし手掘での採油は実現することのないまま 1882(明治 15)年に官営事業は廃止される[205]。その後 1887(明治 20)年代に入ると、新潟県長岡市で現在の日本石油や宝田石油が採油を始める[206]。石油業界は 1900 年代に入ると国内各社及び輸入油間で激しい競争が始まり、その後石油の需要が急増していく[207]。

【図 5】中村菱花画
「グレーテルとヘンゼル」

ヘンゼルは魔術が解けて、ふたりは抱き合いキスをする。その後ふたりは河を前にするのだが、ふたりの会話がなく「橋も架つてゐなければ、渡舟もありません」と述べられているだけである。この表現は佐藤訳 3 とばんすゐ訳 4 と同じである。さらに原典ではたくましく成長しているグレーテルが、日野訳では河を前

199 岡田哲『明治洋食事始め とんかつの誕生』講談社 2012 年 7 月 134 頁。
200 同上 137 頁。
201 同上 141 頁。
202 同上 143 頁。
203 富田仁『舶来事物起原事典』名著普及会 1987 年 12 月 196 頁。
204 宮地正人他編『明治時代史大辞典』2 巻 吉川弘文館 2011 年 12 月 440 頁。
205 同上 440-441 頁。
206 同上 441 頁。
207 同上。

にして泣きそうになる。つまり成長していない弱いままの女の子として描かれているのである。河でふたりを救助するのは、鴨ではなく鵠の鳥である。鵠の鳥に渡してもらうと、ふたりはお礼に真珠の玉を1つ与える。無事帰宅すると父親はいきなりふたりを抱き上げてキスをする。原典では鳥にお礼をすることなく、帰宅すると子どもたちは父親に抱き付く。ただしキスはしない。「あんぱん」や「石油」といった当時流行したものが出現し、文明開化の影響を受けた日本の社会の状況が訳文のなかに盛り込まれているといえる。

(2) 訳者について

日野蕨村は筆名で、久津見蕨村であるが、実名は久津見息忠(1860-1925)であることが判明している[208]。久津見は幕臣の長子として江戸に生まれる。蕨村という号は久津見家の領地が埼玉県蕨にあったことに由来する[209]。明治、大正時代の評論家である。

3. 明治期9話の概要

明治期の「ヘンゼルとグレーテル」の邦訳にはドイツ文学者、ドイツ語学者が3名存在している。原典に忠実な邦訳は1話(水野繁太郎、権田保之助訳 8)存在する。これはドイツ語対訳であるが、結末句が省略されている。

話の内容は変わることなく、小道具や表現が変わるものは5話(山君訳 2 佐藤訳 3 暁影生訳 7 柴田訳 9 日野訳 10)存在する。これらは母親が子捨てを提案し、老婆が死亡し、子どもたちが宝物略奪をするものである。このうち母親を継母としているのは3話(佐藤訳 3 暁影生訳 7 日野訳 10)である。2話は継母という表現ではなく「おっかさん」(山君訳 2)と「阿母さん」(柴田訳 9)である。

改作されているものは2話(ばんすゐ訳 4 巌谷編 6)存在する。ばんすゐ訳 4 は、子捨ての提案をするのは継父であり、子どもたちが帰宅したとき両親は生存している。パンの家はお菓子の家とされているが、具体的な菓子名は出現しない。老婆が子どもたちを歓待する料理は、焼き魚、吸い物、刺身、栗きんとんの和食である。おそらくこの話における改変は、訳者自身によるものであろう。巌谷編 6 は、母親の提案による子捨ては3回行われており、子どもたちが行き着く場所はパンの家ではなく鬼の住む家である。ここでは妹が子捨ての話を聞き灰や稗を道しるべとして撒くのである。鬼は死亡することなく、2 人は宝物を略奪することもない。帰宅すると両親が改心するのである。つまり子どもたちには非がないのである。これは子どもたちの目線で改変された話といえる。

橋本訳 5 は『獨逸童話集』に収録されているものの、ドイツ語からの邦訳ではなく、エドガー・テイラーによって大幅に改変された英語訳からの邦訳であり、「みつけ鳥」、「ヘン

[208] 野口芳子「明治期における『赤ずきん』の受容について－最初の邦訳と邦訳者を中心に―」『梅花児童文学』(26) 梅花女子大学大学院児童文学会 2018年6月 105頁。
[209] 下中邦彦編『日本人名大事典』2巻 平凡社 復刻版 1990年 420頁。

ゼルとグレーテル」、「恋人ローラント」の 3 話を混成した話なので、ここでは「ヘンゼルとグレーテル」の忠実版、改変版、改作版のいずれにも該当しないものとする。

4. 獨逸語教科書による受容

1) 『エンゲリン讀本』の概観

『エンゲリン讀本』は、『原典から収集されたドイツ語読本』(*Deutsches Lesebuch aus den Quellen zusammengestellt*)の訳本である。この原典の著者は、アウグスト・エンゲリーン(Augusut Engelien 1832-1903)とハインリッヒ・フェヒナー(Heinrich Fechner 1845-1909)である。*Deutsches Lesebuch aus den Quellen zusammengestellt*(1874)には、エンゲリーンはベルリンの小学校の教頭で、フェヒナーはベルリンの師範学校の先生であると記載されている[210]。この *Deutsches Lesebuch aus den Quellen zusammengestellt* は、A、B、C の 3 巻から成り立っている。A 巻は第 1 号から第 5 号まで、B 巻は第 1 号から第 3 号まで、C 巻は第 1 号から第 2 号まであり、合計 10 冊存在する。

2) 『エンゲリン讀本』に収録されている「ヘンゼルとグレーテル」

独逸学協会学校で使用されていた教科書を調査するなかで、『エンゲリン讀本』に「七人ノ懲治者」が含まれていることが判明した。その内容は東海生が邦訳した「七人の裁判官」と同じものであった。そこで、東海生が使用した底本はエンゲリンの *Deutsches Lesebuch aus den Quellen zusammengestellt* であると考え『エンゲリン讀本』を調査することにした。その結果、「ヘンゼルとグレーテル」(Hänsel und Gretel)は *Deutsches Lesebuch aus den Quellen zusammengestellt* の Ausgabe B, Teil. 2 に収録されていることが判明した。日本国内の主たる図書館や大学の蔵書を調べたが、Ausgabe B,Teil.2 についての訳本は見つけることができなかった。しかし『エンゲリン讀本』を使ってドイツ語教育がなされていた学校(獨逸学協会学校、東京学院、第三高等学校、第四高等学校、第五高等中学校)が存在するので、Ausgabe B, Teil. 2 に収められた「ヘンゼルとグレーテル」を学生がドイツ語で学習した可能性は充分あると考えられる。ただ虎の巻である訳本が出版されていないことを考えると、その受容は限られたものであったともいえる。しかし『エンゲリン讀本』を詳細に調査した結果、そのなかには初出のグリム童話やドイツ伝説が数多く含まれていることが判明した。この調査により、独逸語教科書における「ヘンゼルとグレーテル」(Hänsel und Gretel)の邦訳は発見できなかったが、この話はドイツ語を学んだ学生により受容されたといえる。なぜなら、教科書版におけるこの話の収録は、Engelien だけでなく、他の編著者によってもおこなわれているからである。それは Paldamus、Fischer、

[210] Engelien, August u. Fechner, Heinrich: D*eutsches Lesebuch aus den Quellen zusammengestellt*. Ausg. A, Teil.5. Berlin: Schulze, 1874. 標題紙による。

Muff/Dammann などである。「ヘンゼルとグレーテル」の明治期の受容は、独逸語教科書により大きな役割を果たしたと思われる。

3) 『エンゲリン讀本』以外の独逸語教科書

教科書版におけるこの話の収録はエンゲリン(Engelien)だけでなく、他の編著者によっても行われている。それは Paldamus (*Deutsches Lesebuch* Ⅳ 1870)、Fischer (*Deutsches Lesebuch zum Gebrauche an Bildungsanstalten für Kindergärtnerinnen* 1882)、Muff / Dammann (*Deutsches Lesebuch für höhere Mädchenschulen* Ⅲ 1895)などである。明治期に多く使用されていたボック(Bock)の教科書には「ヘンゼルとグレーテル」は収録されていない。

(1) Paldamus の独逸語教科書 (1870)

Deutsches Lesebuch [211]には、グリム童話は「ヘンゼルとグレーテル」(Hänsel und Gretel)、「狼と七匹の子山羊」(Der Wolf und die sieben jungen Geislein)、「赤ずきん」(Rotkäppchen)、「狼と人間」(Der Wolf und der Mensch)、「羊飼いの少年」(Der Hirtenbüblein)、「星の銀貨」(Die Sternthaler)、「賢いちびの仕立屋」(Vom klugen Schneiderlein)が収録されている。

「ヘンゼルとグレーテル」については、母親が第 4 版から出現する継母(Stiefmutter)であり、結末が第 4 版までの「食べ物や飲み物にもう困ることはなくなった」(sie brauchten für Essen und Trinken nicht mehr zu sorgen)である。結末は第 5 版から「心配がなくなり幸せに一緒に暮らす」(Da hatten alle Sorgen ein Ende, und sie lebten in lauter Freude zusammen)ではない。また第 5 版から出現する「雪のように白いきれいな小鳥」(schönes schneeweißes Vöglein)や結末句の「これで私の話はおしまい。そこに鼠が走っている。捕まえた人はそれで大きな毛皮の帽子が作れるよ」(Mein Märchen ist aus, dort lauft eine Maus, wer sie fängt, darf sich eine große, große Pelzkappe daraus machen)がない。そのためグリム版の第 4 版までのテキストの使用が考えられるが、第 3 版の文章が入っている箇所がある。この教科書は、第 3 版と第 4 版を混成したものなのかもしれない。

この教科書は 1875(明治 8)年に文部省により交付されている。

(2) Fischer の独逸語教科書 (1882)

Deutsches Lesebuch: zum Gebrauche an Bildungsanstalten für Kindergärtnerinnen[212]

---

[211] Paldamus, Friedrich Christian: *Deutsches Lesebuch* Ⅳ: Frankfurt a. M.: Hermann, 1870.

[212] Fischer, Max u. Kraft, Josef: *Deutsches Lesebuch zum Gebrauche an Bildungsanstalten für Kindergärtnerinnen*. Wien: Graeser, 1882.

(幼稚園女性教諭の教育機関で使用するためのドイツ語読本）には、グリム童話は「ヘンゼルとグレーテル」(Hänsel und Gretel)と「いばら姫」(Dornröschen)が収録されている。

「ヘンゼルとグレーテル」においては、母親が第 4 版から出現する継母(Stiefmutter)であるが、第 3 版の文章が使用されている箇所がある。そのため Paldamus と同様に版の確定ができない。

この教科書は 1887(明治 20)年に文部省により交付されている。

(3) Muff / Dammann の独逸語教科書（1895)

Deutsches Lesebuch für höhere Mädchenschulen[213](高等女学校のためのドイツ語読本）には「ヘンゼルとグレーテル」(Hänsel und Gretel)が収録されているが、グリム版ではなくベヒシュタイン版である。グリム童話は「星の銀貨」(Die Sternthaler)、「いばら姫」(Dornröschen)、「狼と狐」(Der Wolf und der Fuchs)、「ミソサザイ」(Der Zaunkönig)「蕪」(Die Rübe)、「幸運のハンス」(Hans im Glück)、「漁師とその妻の話」(Von dem Fischer un syner Fru)、「小人たち」(Die Wichtelmänner)、「白雪姫」(Sneewittchen)、「狐と馬」(Der Fuchs und das Pferd)が収録されている。

ここに収録されている「ヘンゼルとグレーテル」はベヒシュタイン版であるが、グリム(Brüder Grimm)版と表記されている。

5. 英語教科書による受容

1) 明治期の英語教科書

独逸語教科書に伴い、日本で明治時代に使用された英語教科書による受容を考える。ここでは『英語教育史資料』[214]を参考にして、「ヘンゼルとグレーテル」がどのくらい収録されているのかを調査した。

(1) 調査した英語教科書

『英語教育史資料』には、明治期の英語読本検定教科書と英語副読本検定教科書が掲載されており、そのなかから国立国会図書館が所蔵している読本を調査した。30 種の英語教科書のうち、この話を収録していたのは上原才一郎編のみであった。

(2) 上原才一郎(Uyehara, Saiichiro)編の英語教科書（1902)

Selections from Grimm's Fairy Tales [215]には、「ヘンゼルとグレーテル」は'Hans and

---

[213] Muff, Christian. u. Dammann, Adolf: *Deutsches Lesebuch für höhere Mädchenshulen II*: Berlin: Grote, 1895.

[214] 大村喜吉他編『英語教育史資料』3 巻 東京法令出版 1980 年 4 月。

[215] Uehara Saiichiro(ed.) *Selections from Grimm's Fairy Tales.* Tokyo: Uehara-shoten 1902.

Peggy'という題名で収録されている。母親は第 4 版から挿入される継母 “stepmother” である。魔女は“witch” で、第 6 版から挿入される魔女の詳細な容貌「目が赤く、遠くを見ることができないが、動物のように鼻が利き、人間が近づくとわかる」“red eyes, and cannot see far, but they have a fine scent, like the animals, and discover thereby the approach of human beings” が記載されている。底本はおそらく第 7 版を使用していると思われる。原典に忠実な英語訳であるが、結末句はない。なおこの教科書は、1902(明治35)年の 5 月 22 日に英語副読本検定教科書として登録されている。

編集者の上原才一郎(1866-不明)は、東京で出版業を営む人物である[216]。

6. 明治期のまとめ

最初の邦訳者である東海生について調査した結果、上田敏と森鷗外との関係が明らかになった。また森鷗外の長男である森於菟(山君)が在学していた獨逸学協会学校は、明治期のグリム童話の受容において重要な役割を演じている。なぜならそこで教科書として使用されていた『エンゲリン讀本』には、「ヘンゼルとグレーテル」だけでなく、「いばら姫」や「貧乏人と金持ち」、「プフリーム親方」など数多くのグリム童話が収録されているからである[217]。これまで明治期のグリム童話は英語訳からの受容であると主張されていたが、「ヘンゼルとグレーテル」に関しては多くの独逸語教科書に収録されていることが判明した。英語教科書による収録は、調査した結果、1 冊のみであった。

近代化を推し進めようとした明治期は、文学からも西洋の文化を取り入れようとした。翻訳者には文学者だけでなく、ジャーナリストも存在しているように、子捨ての話である「ヘンゼルとグレーテル」は、文筆活動をしている人々が普及に貢献したといっても過言ではない。兄妹の知恵や勇気を称える一方で、残酷なことをする両親がいることを読者に仄めかしているのである。それも当時の人たちにわかりやすく伝えようとしていることがみてとれる。たとえば、2 回目の子捨てで道しるべとして撒く物は「パン屑」ではなく「飯粒」になっているのが 3 話もある。「パンの家」を「餅の家」とし、魔女が歓待する料理は蒸し菓子や饅頭、焼魚や吸物といった和食になり、当時流行していた「あんぱん」も出現する話もある。主人公の名前は和名のものが 10 話中 4 話存在する。森に出現するのは主として「パンの家」であり、現在普及している「お菓子の家」は、ばんすゐ訳において初めて出現する。ばんすゐ訳には挿絵があり、「お菓子の家」は西洋風ではなく和風建築の家として描かれている。西洋の話が日本風に変えられていて、まるで日本で起きている話のように描かれているのである。

---

[216] 『人事興信録』人事興信所 第 7 版 1925 年 8 月 う之部 30 頁。

[217] 拙論「『エンゲリン讀本』における邦訳されたグリム童話とドイツ伝説－初出の邦訳を中心に－」『大阪国際児童文学振興財団研究紀要』(33) 大阪国際児童文学振興財団 2020 年 3 月 43-54 頁。

明治期の邦訳は、忠実版に分類できるのは、1 話のみで、水野繁太郎/權田保之助訳である。改変されているものは 6 話(東海生訳 1、山君訳 2、佐藤訳 3、曉影生訳 7、柴田訳 9、日野訳 10)である。そのうち東海生訳は、内容は忠実版であるが、原典にはない風琴やヴァイオリンなどが出現するため改変版とする。改作されているものは 2 話(ばんすゐ訳 4、巌谷編 6)である。ほかに規定外の橋本訳 5 の 1 話が存在する。

「ヘンゼルとグレーテル」の邦訳は、1905(明治 38)年までは、佐藤天風訳が収録されている『女鑑』や、ばんすゐ訳『寶の箱』のように教材や母親向けの雑誌、文芸雑誌に収録されているが、1906(明治 39)年からは橋本青雨訳『獨逸童話集』や巌谷小波訳が収録されている『少年世界』のように子ども向けの本や雑誌に収録されるようになる。

第 6 章 大正期における「ヘンゼルとグレーテル」について

1. 邦訳の概観

1）邦訳一覧表【表 4】

番号	年	月	訳者	題名	出典	出版社
11	1914	10	田中楳吉	ヘンゼルとグレーテル	グリンムの童話	南山堂
12	1914	10	小笠原昌齋	ヘンゼルとグレーテル	グリムお伽噺講義 上巻	精華書院
13	1914	11	年岡長汀	ヘンゼルとグレーテル	獨和對譯グリム十五童話	南江堂
14	1915	10	藤沢衛彦	ヘンゼルとグレーテル	通俗グリム童話物語	通俗教育普及會
15	1916	5	中島孤島	ヘンゼルとグレテル	グリム御伽噺	冨山房
16	**1916**	**6**	**少年通俗教育會**	**魔法婆**	**お話の庫　春の巻**	**博文館**
17	**1919**	**7**	**少年通俗教育會**	**林の中へ捨てられた兄妹**	**グリム物語**	**博文館**
18	1919	10	内藤豊一	Hans to Grete	グリムお伽噺	日本のローマ字社
19	1920	7	巌谷小波	キコリノコドモ	名作お伽画噺グリム	冨田文陽堂
20	1921	12	三宅房子	林へ子を捨てに	金の船 3(12)	キンノツノ社
21	**1924**	**6**	**葉多黙太郎**	**お菓子の家**	**グリム童話集**	**崇文館**
22	1924	7	今井ただし	ヘンセルとグレーテル	童話 5(7)	コドモ社
23	1924	8	金田鬼一	ヘンゼルとグレーテル	世界童話大系 2	世界童話大系刊行會
24	**1924**	**9**	**あしや・ろそん**	**お菓子の家**	**婦人倶楽部 5(9)**	**大日本雄辯會**
25	**1924**	**9**	**橋本玉造**	**ヘンゼルとグレーテル**	**世界童話選集ドイツ童話集**	**三水社**
26	1924	10	金の星社編輯部	ヘンゼルとグレテル	グリム童話	金の星社
27	1925	5	馬場直美	森の家	通俗泰西文藝名作集	帝國講學會
28	1925	8	童話研究會	林の棄兒	グリム名著選	博文館
29	**1926**	**5**	**蘆谷蘆村**	**お菓子の家**	**お母様の童話**	**文化生活研究会**
30	**1926**	**11**	**畑小鳥**	**オクワシノイヘ**	**カナグリームオトギ**	**富文館**

（**太字表示**は調査の結果、筆者が新たに発見した邦訳）

2）大正期の邦訳について

大正期の邦訳は 20 話存在する。先行研究では 13 話であるが、調査の結果、新たに 7 話存在することが判明した。それは上記一覧の少年通俗教育會編「魔法婆」16、少年通俗教育會編「林の中へ捨てられた兄妹」17、葉多黙太郎訳「お菓子の家」21、あしや・ろそん著「お菓子の家」24、 橋本玉造訳「ヘンゼルとグレーテル」25、蘆谷蘆村著「お菓子の家」29、畑小鳥訳「オクワシノイヘ」30 である。16 25 30 は三康図書館、17 21 29 は大阪府立中央図書館国際児童文学館、24 は国立国会図書館デジタルコレクションの所蔵

である。大正期の邦訳については特筆すべき点が 2 つある。1 つ目は大正初期にドイツ語対訳が 3 話存在することである。これはドイツ語の需要が多かったことを意味する。2 つ目はルートヴィッヒ・ベヒシュタイン(Ludwig Bechstein 1801-1860)の「ヘンゼルとグレーテル」の邦訳が出現することである。それは 1. 1)の今井ただし訳「ヘンセルとグレーテル」22 である。この訳文については 3. で詳しく述べる。

2. 大正期 20 話の邦訳内容と邦訳者(編者)について

1) 田中楳吉訳「ヘンゼルとグレーテル」(1914) 11

(1) 訳文について

ドイツ語対訳で原典に忠実な邦訳といえる。原典では母親は第 3 版までは実母であるが、第 4 版からは継母に変えられ、それが決定版まで維持される。田中訳では継母が子捨てを提案する。子どもたちは 2 回目の子捨てで迷子になりパンの家を見つけて魔女に歓待される。魔女については、原典では第 6 版から魔女の容貌が詳しく描かれ、その内容が決定版まで維持される。ここでは決定版の内容がそのまま訳出されている。2 人が無事帰宅すると父親のみが出迎える。最後の結末句は第 5 版から加筆されるが、田中訳では結末句がそのまま訳出されている。明治期には結末句は東海生 1 のみが訳出しており、翻訳では省略されることが多かった。大正期で田中以外に結末句を訳出しているのは、小笠原 12、年岡 13、中島 15、内藤 18、金田 23 である。明治期に比べると大正期は原典に忠実に訳されているものが多いといえる。

田中はグリム童話の第 6 版か決定版を底本として使用したものと思われる。ただし魔女は妖婆と訳され、妖婆が子どもたちを歓待する料理は、「お砂糖を添えた牛乳、焼菓子、りんご、くるみ」とあるが、原典では„Milch und Pfannekuchen mit Zucker, Apfel und Nüsse“[218]「牛乳、砂糖をまぶしたパンケーキ、りんご、くるみ」なので、砂糖は牛乳ではなく、焼菓子にかかるもの、あるいは牛乳と焼菓子の両方にかかるものと解釈すべきであろう。田中はドイツ語に堪能であるが、この点のみ文法的な間違いをしているといえる。

(2) 訳者について

田中楳吉(1883-1975)は、東京帝國大学を卒業した大正期及び昭和期のドイツ文学者である。ドイツに留学し、フランス、イギリス、アメリカを外遊する[219]。京城帝國大学、愛知大学、中央大学の教授を歴任した人物である。

---

[218] Bruder Grimm: *Kinder- und Hausmärchen*. Bd.1. Hrsg. v. Heinz Rölleke. Stuttgart: Reclam 1980, S. 105.

[219] 本論 91 頁【表 7】の資料番号 50 奥付。

2) 小笠原昌齋訳「ヘンゼルとグレーテル」(1914) 12

(1) 訳文について

ドイツ語対訳で、田中訳 11 同様、原典に忠実な邦訳である。ただし魔女は魔法使いと訳され、魔法使いが子どもたちを歓待する料理は、「牛乳、砂糖入りの揚げ菓子、りんご、くるみ」である。田中訳と比較すると、小笠原の方が正確な訳であるといえる。

(2) 訳者について

小笠原昌齋(生没年不明)は、1904(明治 37)年に東京外国語学校(現東京外国語大学)獨語学科を卒業する。本籍は山梨県で、卒業後は獨逸学協会学校(現獨協中学校・高等学校)のドイツ語教員となる[220]。その後東京外国語大学の教授となり、教授時代に小笠原稔と改名する[221]。彼の生没年を調査したが、確定することはできなかった。彼の出身校である東京外国語学校の同窓会誌には記載されておらず、著作物である『獨逸語基礎讀本』(1948 年 6 月)にも記載されていないので、生没年は不明である。

3) 年岡長汀訳「ヘンゼルとグレーテル」(1914) 13

(1) 訳文について

ドイツ語対訳で、田中訳 11 小笠原訳 12 同様に原典に忠実な訳である。ただし魔女は妖婆と訳されている。特筆すべきは、妖婆が歓待する料理が原典のとおり「牛乳、砂糖のついたパンケーク、りんご、くるみ」と訳出されていることだ。明治期以降 „Pfannekuchen“ を「パンケーク」と訳しているのは、年岡が初めてである。„Pfannekuchen“ は、1912(大正元)年発行の独和辞典では「薄焼き菓子」「煎餅」「紅梅焼の類」とある[222]。田中訳 11 小笠原訳 12 は、当時の独和辞典に準じているが、年岡は「パンケーク」と訳しているので、外国をよく知る人物といえる。しかし彼の訳にも原典と異なる点がある。鴨に救助を依頼するのが原典ではグレーテル(sie)であるのに(„Hier fährt auch kein Schiffchen,“ antwortete Gretel, „aber da schwimmt eine weiße Ente, wenn ich die bitte, so hilft sie uns hinüber.“ Da rief sie:)、ヘンゼルになっているという点である。兄の妹に対する配慮を意図した可能性も否定できないが、ドイツ語対訳の本であるので、訳者の主観が入ることは考えにくい。ドイツ語に堪能な年岡であるが、最初に川に橋がないので渡れないと言うのはヘンゼルであるので、彼女(sie)と書かれているにもかかわらず、そのままヘンゼルの言葉として訳してしまった可能性が高い。

(2) 訳者について

---

[220] 『東京外國語學校一覧 明治 37 年-38 年』東京外國語學校 1905 年 11 月 94 頁。
[221] 野中正孝『東京外国語学校史』不二出版 2008 年 11 月 388、1116 頁。
[222] 保志虎吉編『大正獨和辞典』三省堂書店 1912 年 9 月 926 頁。

年岡長汀(生没年不明)の実名は、年岡鷹市である。これまで年岡は文学士ということのみ判明していたが、調査の結果、京都文学会との関連が浮上した。京都文学会は京都帝國大学文科大学内における学会である。この学会では 1910(明治 43)年 4 月に雑誌『藝文』を創刊している。同年 12 月発行の『藝文』には、学会役員として年岡鷹市が名を連ねている。ほかにも文学博士上田敏、文学士藤代禎介や文学士成瀬清などが記載されている[223]。年岡は学士と記載されていないため、学生であると推測し、翌年の 1911(明治 44)年の京都帝國大学の卒業生名簿を調査した。その結果、年岡は本籍が岡山県であり、文學科獨文學専攻であることが判明した[224]。さらに廣庭基介によると「1916(大正 5)年に関西劇術研究会に成瀬無極、茅野蕭々、橋本青雨、年岡鷹市らドイツ文学畑が参加」とある[225]。成瀬無極の実名は前述の成瀬清で、茅野蕭々(しょうしょう)は茅野儀太郎、橋本青雨は橋本忠夫である。この 3 名はいずれもドイツ文学者であり 1916 年当時は第三高等學校(在京都)の教員であった。また橋本青雨は明治期に「ヘンゼルとグレーテル」の邦訳である「太郎と皐月」(『獨逸童話集』所収) を発表している[226]。年岡と橋本は、共に「ヘンゼルとグレーテル」を邦訳しており、演劇という分野においても接点があることが判明した。年岡がこれら 3 人と関わりがあるとすれば、彼は大学卒業後、関西に在住していた可能性が高いと思われる。

4) 藤沢衛彦訳「ヘンゼルとグレーテル」(1915) 14

(1) 訳文について

内容は原典にほぼ忠実な邦訳である。ただし藤沢も魔女を妖婆と訳し、妖婆が歓待する料理は「牛乳、お砂糖のついたパンケーク、りんご、くるみ」と訳している。また鴨に救助を依頼するのは本来グレーテルであるが、藤沢訳でもヘンゼルであり、原典と異なる箇所まで年岡訳 13 と同じであることから、明らかに年岡訳 13 を踏襲したものであることがわかる。年岡訳 13 と異なるところは、結末句が訳出されていないことくらいである。おそらくこれは藤沢が省略したのであろう。

(2) 訳者について

『通俗グリム童話物語』の編者は通俗教育普及会である。通俗教育普及会の会長は笹川臨風(種郎 1870-1949)である。前書きには翻訳者として藤沢衛彦が記載されている。藤沢衛彦(1885-1967)は、明治大学を卒業し、民俗学者で明治大学教授である。日本伝説学会を設立し、日本児童文学者協会の会長を歴任した人物である。

---

[223] 金尾種次郎編『藝文』1(9) 金尾文淵堂 1910 年 12 月 京都文學會役員名簿。

[224] 『京都帝國大学卒業生名簿』京都帝國大學 1936 年 7 月 315 頁。

[225] 廣庭基介「資料　島文次郎京都帝国大学附属図書館初代館長年譜について」『花園大学文学部研究紀要』(32) 花園大学文学部 2000 年 310 頁。

[226] 本論 39 頁【表 3】の資料番号 5。

5) 中島孤島訳「ヘンゼルとグレテル」(1916) 15

(1) 訳文について

内容は原典にほぼ忠実である。中島は大正期では初めて Hexe (witch)を魔女(まぢょ)と訳している。特徴としては、ヘンゼルとグレーテルがパンの家を見つけて食べているときに、魔女の「チップー、タップ、チップー、タップ、戸を敲くのはそりや誰だ？」という台詞があることだ。この台詞はエドワード・ヘンリー・ウェナート(Edward Henry Wehnert 1813-1868)の‘Hansel and Grethel’[227]における“Tip-tap, tip-tap, who raps at my door?”(48)と同じ表現である。また中島訳には魔女が「竈の中で焼けて灰になつて」という表現がある。この表現はグリム童話の原典には存在しない。ウェナート版には“witch to burn to ashes”(49)とある。おそらく中島はウェナート版の英語訳から訳したのであろう。さらに中島訳では魔女が子どもたちの寝顔を見て「椋鳥が又二つ来たよ」と言う。このような表現は原典にもウェナート訳にも存在しない。椋鳥という表現は、国語辞典によると「江戸の町に出て来た田舎者。またその人をあざけっていう語」、「特に、冬季、信越地方などの雪国から江戸に出て来た出かせぎ者」とある[228]。椋鳥は、2 人が魔女にとって嘲りの対象であることを示すために中島が付加したものと推測する。

(2) 訳者について

中島孤島の実名は中島茂一(1878-1946)で[229]、本籍は長野県であり、1899(明治 32)年に東京専門学校(現早稲田大学)の文學科を卒業している[230]。小説家、評論家、翻訳家である。早稲田大学の名簿には、1915(大正 4)年に早稲田大学出版部で編集員を務めていた記録がある[231]。

【図 6】岡本帰一画「ヘンゼルとグレテル」

6) 少年通俗教育會編「魔法婆」(1916) 16

(1) 訳文について

この話は改作されており、子どもたちの名前は太郎とお花で、和名である。2 人はみなしごで、実の親子関係ではない樵の家で養育されている。明治期以降、子どもたちが養父母に育てられるのはこの話が最初である。子捨てを提案するのは樵の妻である。2 人は捨

---

[227] Wehnert, Edward: *Household Stories. Collected by the Brothers Grimm*. New translated. (illust.) London: Routledge 1861.

[228] 小学館国語辞典編集部編『日本国語大辞典』12 巻 小学館 2 版 2001 年 12 月 921 頁。

[229] 日本近代文学館編 2 巻 前掲書 1977 年 499 頁。

[230] 田中唯一郎編『早稲田大學校友會會員名簿大正 4 年 11 月調』早稲田大學交友會 1915 年 12 月 145 頁。

[231] 同上。

てられ、お菓子の家を見つける。その家は「パン、カステーラ、ビスケット」でできている。「カステーラ」「ビスケット」は明治期以降初めて出現するものである。2 人が無事帰宅すると、樵の妻は死亡しており、奪った宝物で子どもたちは気立ての良い樵に孝行をして、仲睦まじく暮らすというものである。子どもたちがおじさんとおばさんに養育されている話としては、昭和期の絵本『オクワシノイヘ』がある[232]。これは主婦之友社編輯局が編集し出版しているものだ。執筆者の新井は 1933(昭和 8)年から 1941(昭和 16)年まで主婦之友社と森永製菓の嘱託として在籍していた[233]。昭和期の『オクワシノヘ』は「魔法婆」の内容と酷似しているので、おそらく彼が書いたのであろう。このことについては昭和期で詳述する。

(2) 編者について

『お話の庫』の前書きには、主に新井弘城が執筆をしたと書かれている。新井弘城は南部新一(1894-1986)が博文館に勤務していた頃の筆名である。南部は京都府舞鶴市に生まれ、立命館中学校を中退しており、編集者、作家、児童文学研究者である。戦後に児童文学者として活躍するときの筆名は南部亘国(ひろくに)である[234]。彼は博文館に 1915(大正 4)年に入館し、1928(昭和 3)年の夏に健康を損ねて退館する[235]。

7) 少年通俗教育會編「林の中へ捨てられた兄妹」(1919) 17

(1) 訳文について

内容はほぼ原典に忠実である。ただしこの話も中島訳 15 と同様に、ヘンゼルとグレーテルがパンの家を見つけて食べているときに「チップー、タップ、チップー、タップ」という魔女の台詞や、魔女が子どもたちを見て「椋鳥が来た」と言う台詞や、魔女が焼死して灰になるという表現や、歓待する料理などの点で、中島訳 15 を踏襲したものと思われる。中島訳 15 と異なっている箇所は、形容詞を多く使っていることである。たとえば魔女が子どもたちを歓待する料理では「濃い牛乳、香ばしいお煎餅、甘い砂糖、赤いりんご、脂のあるくるみ」というように、食べ物の前に原典にも中島訳にもない形容詞が付加されている。また子どもたちが魔女の家から帰宅するときに救助するのは家鴨である。その家鴨が「さあ〳〵、お乗りよお二人さん、船の代りになつてあげやう」と言う。原典にはこのような言葉はない。家鴨が擬人化されているのである。さらに中島訳 15 とは異なり、結末句は訳出されていない。

---

[232] 本論 85 頁【表 5】の資料番号 37。
[233] 大久保久雄「博文館編集者南部亘国さんと蔵書のこと」名著普及会編『名著サプリメント』3(10) 名著普及会 1990 年 8 月 28 頁。
[234] 同上 29 頁。
[235] 同上 28 頁。

(2) 編者について

編者は少年通俗教育會であるが、訳者については不明である。前述している「魔法婆」の編者も少年通俗教育會であるが、新井弘城(南部新一)が主筆であったと書かれている。当時新井は博文館に勤務していた。また少年通俗教育會が編集したものは、博文館から出版されていることから、博文館の編輯局が関与していると思われる。1915(大正 4)年 6 月の博文館編輯局見取り図には、局長に坪谷善四郎(1862-1949)、主幹に巌谷小波が在籍していたことが確認できる[236]。

8) 内藤豊一訳「Hans to Grete」(1919) 18

(1) 訳文について

すべてローマ字表記で、原典にほぼ忠実な邦訳である。子どもたちの名前はハンスとグレーテである。

(2) 訳者ついて

内藤豊一は筆名であり、実名は内藤好文(1895-1978)であることが判明した。1925(大正 14)年 11 月に出版された雑誌『ローマ字』において、内藤豊一は武蔵野学院教授で医学士と記載されている[237]。武蔵野学院は、1919(大正 8)年 3 月に開院した内務省管轄の児童自立支援施設の国立武蔵野学院(国立感化院)である。大正 14 年から大正 15 年当時の武蔵野学院の職員録によると、内藤豊一の名前は見あたらず、院医として内藤好文という名前が記されている[238]。内藤好文は、1895(明治 28)年 6 月 1 日に岡山で生まれ、1920(大正 9)年に東京帝國大学医学部を卒業し、附属病院の助手を務める。1921(大正 10)年に国立感化院の院医として勤務し、1926(大正 15)年に退職している。1929(昭和 4)年に東京帝國大学文学部独文科を卒業し、新潟高校教授に任じられ姫路高校教授となる。その後、神戸大学や関西大学の教授を歴任し[239]、親和女子大学から名誉教授の称号が授与されたドイツ文学者である[240]。経歴から内藤好文が国立感化院に勤務していた時期と内藤豊一が勤務していた時期とが重なる。1936(昭和 11)年には、内藤好文の名前で『GRIMM OTOGIBANASI』が出版されている。この本は『グリムお伽噺』と同様にローマ字で書かれており、「Siawasemono no Hans」(KHM 83「幸せハンス」)と「Osoreru koto wo narai ni dekaketa Hito no Hanasi」(KHM 4「怖がることを覚えるために旅に出かけた男の話」)の 2 話が収

236 南部亘国『回想の博文館』(古通豆本 14)日本古書通信社 1973 年 33 頁。
237 『ローマ字』20(11) ローマ字ひろめ會 1925 年 11 月 目次による。
238 『職員録大正 15 年 1 月 1 日』内閣印刷局 1926 年 2 月 23 頁。
239 『人事興信録』第 23 版 人事興信所 1966 年 5 月 「な之部」14 頁。
240 日本著作権協議会編『著作権台帳文化人名録』日本著作権協議会 19 版 1985 年 2 月 43 頁。

録されている。同様に内藤豊一訳『グリムお伽噺』にも「幸せハンス」と「怖がることを覚えるために旅に出かけた男の話」が訳されている。ただし『グリムお伽噺』では「幸せハンス」は「Nikoniko-Hans」という題名である。「怖がることを覚えるために旅に出かけた男の話」については題名が同じである。

内藤豊一は内藤好文の筆名であり、おそらく内藤豊一という名前は、医師もしくは医学生のときに使用していたものであろう。

9) 巌谷小波編「キコリノコドモ」(1920) 19

(1) 訳文について

この話は、毎日食べるパンに困り、貧乏な父親がひとりで山へ子どもを捨てに行き、こっそりと逃げ帰る。子捨ての提案者は不明である。母親については書かれていないが、置き去りにされた子どもたちは「おとうさんたちが迎えにこない」と言うので、おそらく両親が存在しているのであろう。子捨ては1回のみで簡潔にまとめられている。少年通俗教育會編 17 に続き、「パンの家」ではなく「お菓子の家」と表現されており、色鮮やかな家が描かれている【図7】。この話は『名作お伽画噺グリム』に収録されており、武田比佐が絵を描いている。おそらく「ヘンゼルとグレーテル」の最初の絵本であろう。2 人はお菓子の家を見つけて食べていると、魔法使いに捕まり助けを乞うが、許してもらえない。そして2人は魔法使いを竈に押し込み宝物を略奪する。家鴨に救助を求める2人は「ユカイナ　ゲンキナ　アヒルサン　ハシモナケナバ　フネモナイ　オマヘノ　セナカヲカサナイカ」と歌う。この「ゆかいなげんきな　あひるさん」というフレーズは、少年通俗教育會編 17 でも歌われている。少年通俗教育會は博文館と関わりがあり、巌谷小波も博文館とは密接な関係がある。それゆえ小波は少年通俗教育會に関与していたのではないかと推測する。

【図7】武田比佐画「キコリノコドモ」

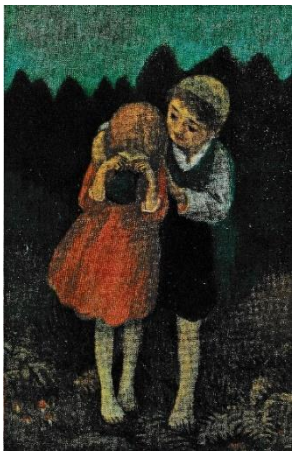
(2) 編者と画家について

巌谷小波については明治期で述べているため省略する。画家の武田比佐について調査したが不明である。

10) 三宅房子著「林へ子を捨てに」(1921) 20

(1) 訳文について

内容は原典にほぼ忠実な邦訳である。子どもたちの名前はヘンゼルとグレテルである。2 人が迷子になりパンの家を見つけて食べているときに「チップー、タップ、チップー、タップ　戸をたたくのは、そりゃ誰だ？」という魔女の台詞があり、魔女が「焼死して灰になる」と書かれている。この表現は中島訳 15 や少年通俗教育會編 17 のものと同じである。しかし三宅は「椋鳥が来た」という表現を付加することなく、結末句も訳出していない。



【図 8】岡本帰一画
「林へ子を捨てに」

(2) 著者について

三宅房子の実名は、齋藤佐次郎(1893-1983)である[241]。男性が女性の名前を筆名に使っているのである。しかしこの三宅房子という名前は、斎藤佐次郎であることを読者に明かしていない。当時の読者欄を読むと、三宅房子は読者にとって大変人気のある作家であったことがわかる。三宅房子すなわち斎藤佐次郎は 1916(大正 5)年に早稲田大学文学科英文学科を卒業し[242]、雑誌『金の船』の創始者で、編集者、翻訳家である。後にこの雑誌は『金の星』に改題され、出版社も金の星社となり、現在も子どもの本の出版社として存在している。

11) 葉多黙太郎訳「お菓子の家」(1924) 21

(1) 訳文について

話の内容はあまり改変されていないが、表現が少し変えられている。子どもたちの名前はヘンゼルとグレイチルである。父親は「俺たちはどうして食えばいいのだろう」と妻に言う。子どもを養うという表現ではなく、自分たちの心配をしているのである。その問いに対して継母は「2 人だけで助かろう」と言う。捨てられた子どもたちは「お菓子の家」を見つける。「パンの家」ではない。魔女は「牛乳、チョコレート、りんご」で 2 人を歓待する。魔女が 2 人に提供する食べ物で「チョコレート」が出現するのは葉多訳が初めてである。「チョコレート」は原典には出現しない食べ物である。題名が「ヘンゼルとグレーテル」ではなく、「お菓子の家」というのも葉多訳が初出である。また子どもたちが魔女の家から帰宅するときに救助するのは家鴨である。家鴨は「何だつて、そんな六ケ敷(むつかし)い顔をしてなさる？」と子どもたちに話しかける。少年通俗教育會編 17 同様に家鴨が擬人化されているのである。葉多訳には会話文が多い。残酷な場面を描きながら、同時に楽しい話として、子どもたちに提供しようと工夫を凝らした本といえる。

---

[241] 赤い鳥事典編集委員会編『赤い鳥事典』柏書房 2018 年 8 月 57 頁。
[242] 『早稲田大学校友會會員名簿 昭和 10 年用』早稲田大學校友會 1934 年 12 月 322 頁。

(2) 訳者について

葉多黙太郎は筆名であると思われる。挿絵画家の中一弥によると、葉多は作家の土師清二の弟子であったという[243]。中は葉多黙太郎の作品の挿絵を描いているが、葉多の実名については触れていない。中によると葉多は、当時兵庫県にいた土師清二のところにいたという。兵庫県には鉄道の駅名に葉多駅がある。もしかすると名前は地名と関係があるのではないだろうか。実名は判明していない。

12) 今井ただし訳「ヘンセルとグレーテル」(1924) 22

(1) 訳文について

この話はベヒシュタイン版の「ヘンゼルとグレーテル」の邦訳である。川戸道昭、榊原貴教の文献では、グリム版の「ヘンゼルとグレーテル」の翻訳作品として紹介されているが[244]、この話はグリム版ではない。

ルートヴィヒ・ベヒシュタイン(Ludwig Bechstein 1801-1860)はドイツの作家である。彼はグリム兄弟と同時代に昔話や伝説を発表していて、1845 年に『ドイツ昔話の本』(*Deutsches Märchenbuch*)を出版しており、それはグリム童話集を上回る読者数を獲得したといわれている[245]。今井訳がベヒシュタイン版であることは 3. ベヒシュタイン童話の邦訳についてで後述する。

(2) 訳者について

今井正(1903-1996)は、1928(昭和 3)年に早稲田大学法学部獨法科を卒業後、獨逸大使館に勤務する。1935(昭和 10)年の『早稲田大学校友會會員名簿』には、「獨逸大使館通譯官」であることが記載されている[246]。1940(昭和 15)年には外務省嘱託となり、1968(昭和 43)年に外務調査官を退職している。彼の翻訳に『日本誌 日本の歴史と紀行』(1973)がある[247]。この本は、ドイツ人医師であるエンゲルベルト・ケンペル(Engelbelt Kämpfer 1651-1716)が執筆した江戸時代の日本での見聞録を訳したものである。今井は、大学卒業後すぐに獨逸大使館に勤務しているので、ドイツ語が堪能であったことがわかる。彼の訳文はベヒシュタイン版の「ヘンゼルとグレーテル」に忠実なものである。おそらく日本では初出のものであろう。今井ただしという名前は、雑誌『童話』における使用以外、ほかには

---

[243] 中一弥『挿絵画家・中一弥』集英社 2003 年 2 月 32 頁。

[244] 川戸道昭/榊原貴教編『児童文学翻訳作品総覧』4 巻 大空社 2005 年 9 月 580-581 頁。

[245] 高木昌史編著『決定版グリム童話事典』三弥井書店 2017 年 4 月 303 頁。

[246] 『早稲田大學校友會會員名簿 昭和 10 年用』早稲田大學校友會 1934 年 12 月 83 頁。

[247] エンゲルベルト・ケンペル著/今井正訳『日本誌 日本の歴史と紀行』霞ヶ関出版 1973 年。

見当たらない。

13) 金田鬼一訳「ヘンゼルとグレーテル」(1924) 23

(1) 訳文について

原典に忠実な邦訳である。原典どおり魔女と訳されており、魔女が子どもたちを歓待する料理は「牛乳、お砂糖のかかっている卵焼きのお菓子、りんご、くるみ」である。「お砂糖のかかっている卵焼きのお菓子」という表現は、「パンケーキ」または「ホットケーキ」という表現を金田が知らなかったか、或いは当時の日本人や子どもが理解できる表現にしたのか、いずれかであろう。

(2) 訳者について

金田鬼一(1886-1963)は、東京帝国大学文学部独文科を卒業し、第四高等學校、学習院大学の教授を歴任している。ドイツ文学者であり、翻訳家である。この話が収録されているのは『世界童話大系』第 2 巻である。1927(昭和 2)年に出版された第 3 巻によって、彼は日本で初めて『グリム童話集』の決定版を全訳したのである。

14) あしや・ろそん「お菓子の家」(1924) 24

(1) 訳文について

ヘンゼルとグレーテルが道に迷っている場面から始まる。白い鳥ではなく、赤い鳥が 2 人を導き、お菓子の家を見つける。その家は屋根がきれいなお煎餅、柱がぷかぷかしたパン、軒がぴかぴかするチョコレート、窓が透き通った氷砂糖である。ここでもチョコレートが出現する。2 人が家の菓子を食べていると、恐ろしい鬼ばばあが登場する。鬼ばばあの容貌は「黄色い顔、尖った鼻、大きな眼鏡、せむし、怖い顔」とあり、原典にはない侮辱的な言葉が加筆されている。その後鬼ばばあは焼死し、2 人は宝物を略奪して無事帰宅すると、父親が喜んで出迎える。母親についての記述はない。

この話は、『婦人倶楽部』「震災一周年記念特別読物號」に収録されている。そのなかには「子供のページ」があり、「お菓子の家」は「お母様のおとぎばなし」として紹介されている。母親が子どものために読むことを目的としているので、残酷な行為をする母親は削除され、関東大震災の暗い過去を払拭させるためにも、子どもたちに夢のある話として提供したものと思われる。

(2) 訳者について

ここでは平仮名であるが、蘆谷蘆村である。彼の実名は蘆谷重常(1886-1946)である。

島根県に生まれ国民英学会および聖書学院に学ぶ[248]。彼は口演童話の研究家で、1922(大正 11)年には日本童話協会を創立し、敬虔なキリスト教徒でもあった。キリスト教は神から授かった命を大切にする教えである。そのため子どもを捨てる行為は、蘆谷にとって許されないものであったのであろう。

15) 橋本玉造訳「ヘンゼルとグレーテル」(1924) 25

(1) 訳文について

原典に忠実な邦訳である。しかし訳文は明らかに田中楳吉訳を踏襲していると思われる。それは田中のドイツ語の文法的な間違いが同じであることや、直接話法の部分がまったく同じであることによるものである。異なる点は文末の表現を変えていたり、漢字を平仮名に変えていたりしていることである。結末句は田中訳にはあるが、橋本訳にはない。おそらく橋本が省略したのであろう。またこの訳文が収められている『世界童話選集ドイツ童話集』は、訳文とともに童謡が収録されている。この訳文の後には、西條八十の童謡「お菓子の家」が収められている。

(2) 訳者について

橋本玉造についてはどのような人物であるのか不明である。彼はこのほかに『世界童話選集イソップ集』を出版している。

16) 金の星社編輯部著「ヘンゼルとグレテル」(1924) 26

(1) 訳文について

話の内容は変わらないが、加筆されている箇所がある。インフレという表現がなく、樵の家は貧しくて食べるパンがない。継母について「二人の子供を可愛がりませんでした」という表現があり、継母の印象をさらに悪くしている。子どもたちは捨てられて森で迷う。そのときにグレーテルが「仙女の茸を食べよう」とヘンゼルにもちかける。このような表現は原典にはない。ドイツでは白い斑点のある赤い茸は幸福の印とされているが、詳細は不明である。その後 2 人はパンの家を見つける。この家には桃の実の階段がある【図 9】。「桃の実」と「階段」は初めて出現するものだ。桃の実は秋の季語でもある。

【図 9】金の星社編輯部「ヘンゼルとグレテル」

[248] 大阪国際児童文学館編『日本児童文学大事典』1 巻 大日本図書 1993 年 10 月 33 頁。

この翻訳文が紹介されたのは10月なので、季節を意識したものかもしれない。魔女が2人を歓待する料理は、「お饅頭、リンゴタート、クリーム」である。1906(明治39)年に食通といわれた村井弦斎が著した『食道楽』に「林檎ターツ」の解説がある[249]。その解説によると、リンゴターツは現在のアップルパイとよく似た食べ物のようである。1915(大正4)年発行の英和辞典には「tart(タート)は果実を含めるパイ」とある[250]。またこの当時クリームと名の付く食べ物は、「チョコレートクリーム、アイスクリーム、生クリーム」がある。いずれもこの当時日本で製造販売されていたものである。2 人が無事帰宅すると継母は死亡しており、父親が出迎える。魔女の家から略奪した「真珠、ダイヤモンド、紅石、その他の宝石」で金持ちになるのだが、2 人は宝物よりも「月夜の晩に、道傍で赤く光ってゐる白い小石の方が、よつぽど美しいと思つてゐました」と思う場面で終わる。この文章は原典にはない。おそらく貨幣価値に左右されない子どもの純粋さを強調するために加筆されたのであろう。

(2) 編集者について

金の星社編輯部は、雑誌名が『金の船』から『金の星』に改変されたとき、出版社名も変えられたので、編輯部名も変わったのである。奥付には『金の船』と同様に編集代表者として齋藤佐次郎の名前が明記されている。童謡作詞者である野口雨情が名誉編集員として名を連ねている。彼は雑誌の創始者である齋藤佐次郎と生涯において親交があった人物である。1924(大正13)年1月号の『金の星』には、金の星社の社員名が記されている。そこには野口雨情の実名である野口英吉(1882-1945)、達崎龍一(1904-1979)[251]、山野虎市(1881-1925)などが名を連ねている[252]。1924(大正13)年の秋には、『金の星』の投稿者であり、後に児童文学者となる久米元一(1902-1979)が入社している[253]。おそらく主としてこの4人が齋藤佐次郎と共に編集に携わっていたのであろう。

17) 馬場直美訳「森の家」(1925) 27

(1) 訳文について

話の内容はほぼ原典どおりであるが、加筆されている箇所がある。食べ物の蓄えがなく、飢饉でパンさへ口にすることができない家である。そこで継母が子捨てを提案するが、「ひどいことを言うのは本当の母親ではないから」という表現が加筆され、継母を悪者視する見解が挿入されている。

---

[249] 村井弦斎『食道樂續篇　夏の巻』報知社出版部 1906年9月 310-311頁。
[250] 井上十吉『井上英和大辞典』井上辭典刊行會 1915年9月 2011頁。
[251] 達崎龍『達崎龍全童謡ホロホロ鳥』あい書林 1983年12月 90-96頁。
[252] 『金の星』6(1) 金の星社 1924年1月 149頁。
[253] 小林弘忠『「金の星」ものがたり』毎日新聞社 2002年3月 217頁。斎藤佐次郎『斎藤佐次郎・児童文学史』金の星社 1996年5月 645頁。

(2) 訳者について

馬場直美(1883-没年不明)は男性で、福島県出身の新聞記者である[254]。1905(明治 38)年に萬朝報に入社し、政経部編輯部や言論を担当する。1924(大正 13)年 5 月に退社後、同年 8 月に中外商業新報に入社し、政治経済部編集者となり[255]、1929(昭和 4)年 9 月に退社する。児童向けの本としては、『お伽百題』(岡村書店 1910 年) や『新譯イソップ物語』(岡村盛花堂 1910 年)を執筆している。

18) 童話研究会編「林の棄兒」(1925) 28

(1) 訳文について

話の内容はほぼ変わらないが、表現の異なる箇所がある。たとえば、貧乏の度合いについて「夏冬の着物一枚さへ新調できない」や子どもたちには「木の皮を食べさせられない」という表現がある。これらの言葉は原典には存在しない。「木の皮」と表現されているが、これは松皮を示しているのであろう。松皮は古くから飢饉のときに食用とされていた。とくに赤松、黒松の樹皮のあま皮は、でんぷん質が多く含まれているという[256]。当時の貧困の深刻さを伝えている表現といえよう。

(2) 編者について

童話研究会について調査をしたが、どのような人物が存在するのか不明である。この話が収録されている『グリム名著選』の前書きには「石本正三氏が編集に助力した」とある。南部新一書簡集にも石本正三の三男である石本清夫の手紙があることから、石本正三は児童文学に関わっている人物であると推測する。

19) 蘆谷蘆村著「お菓子の家」(1926) 29

(1) 訳文について

訳文は 14)「お菓子の家」とまったく同じである。ただしあとがきで蘆谷は、お菓子の家の 1 節だけがお伽噺として効果があるので、継子いじめの部分を削除し、お菓子の家の部分だけを採りこの話を作ったと解説している[257]。『婦人倶楽部』同様に子どもたちに夢を与えながら、この話が『お母様の童話』に収録されていることから、読者である母親に対する配慮を全面的に出したものといえる。

---

[254] 永代静雄編『新聞人名辞典』1 巻 日本図書センター 1988 年 2 月 41 頁。
[255] 永代静雄編 2 巻 前掲書 1988 年 6 頁。
[256] 高嶋雄三郎『松』法政大学出版局 1975 年 10 月 174 頁。
[257] 資料番号 29 84 頁。

(2) 著者について

14)と同じであるため省略する。

20) 畑小鳥著「オクワシノイヘ」(1926) 30

(1) 訳文について

話の内容は変えられていないが、表現の異なる箇所がある。子どもの名前は「一ロウとハナコ」で和名である。父親は貧しく、木を伐ることを商売にしている。ひどい嵐で米が収穫されず、食べていくことができない状況である。この本はカタカナ表記であるが、数字については漢字を使用している。子捨てを提案するのは継母である。子どもたちは森で迷い、壁がパン、屋根がお菓子、窓ガラスが氷砂糖でできた小屋を見つける。2 人が小屋を食べていると、中から人食い婆さんが出てくる。人食い婆さんは一ロウをかごに入れるが、毎日 2 人にご馳走を与える。その後ハナコの機転で人食い婆さんは釜の中に落とされて死亡する。2 人はお金と宝物を略奪し、川を前にして困っていると、家鴨が「ナニヲシンパイシテイナサル」と尋ねる。原典にはこのような言葉はない。少年通俗教育會編 17 や葉多訳 21 のものと同様に、家鴨が擬人化されているのである。帰宅すると継母は死亡している。その理由として継母は「悪いことをするため神様が殺した」と説明されている。

(2) 著者について

畑小鳥(ハタコトリ)は筆名であると思われるが、実名は不明である。

3. ベヒシュタイン童話の邦訳について

1) 今井ただし訳「ヘンセルとグレーテル」(1924) 22

大正期にはグリム童話だけでなく、ベヒシュタイン童話の「ヘンゼルとグレーテル」も日本語に訳されている。それが今井訳 22 である。先行研究では今井訳はグリム版とされているが、そうではない。ここではグリム版とベヒシュタイン版の相違点を提示して、今井訳がベヒシュタイン版であることを証明する。とくに後半部分に明確な相違があるので、その部分を引用して比較する。さらに、魔女の容貌についての詳細な描写は、グリム童話では第 6 版から加筆される。第 7 版(決定版)の「ヘンゼルとグレーテル」は第 6 版を踏襲しているので、ここでは第 7 版のテキストを使用することにする。

2) 魔女の詳細な容貌

グリム版においては第 6 版から魔女の詳細な容貌が加筆される。その箇所を引用したものが下記である。

【グリム版(決定版)】

Die Hexen haben rote Augen und können nicht weit sehen, aber sie haben eine

feine Witterung, wie die Tiere, und merken's, wenn Menschen heran kommen.(101)

魔女は赤い目をしていて、遠目が利かず、獣のように嗅覚が発達していて、人間が近付くと嗅ぎ分けることができる（拙訳）

【ベヒシュタイン版】

trat ein steinaltes, krummgebücktes, triefäugiges Mütterchen heraus von nicht geringer Häßlichkeit, Gesicht und Stirne voll Runzeln und in mitten eine große, große Nase. Hatte auch grasgrüne Augen. (45)[258]

すごく高齢で、腰が曲がり、ただれ目をした小さな老婆が出てきた。顔も額も皺だらけでとても醜く、真ん中に大きな大きな鼻があった。おまけに目は草色だった（拙訳）

【今井ただし訳】

大へん年とつた腰の曲つた、たゞれ眼のお婆さんが出て來ました。その顔ときたらそれはそれは厭らしい、皺くちやで、まん中に大きな大きな鼻がふらさがり、まるで草のやうに青い眼をしてゐる。(87)[259]

3) 魔女の宝物を子どもたちが持ち帰る場面

グレーテルが魔女を焼死させ、ヘンゼルを小屋から出した後、2 人はキスしあう。そして 2 人は魔女の家にあった真珠や宝石を持ち帰る。その持ち帰る場面の描写が下記である。

【グリム版（決定版）】

Und weil sie sich nicht mehr zu fürchten brauchten, so gingen sie in das Haus der Hexe hinein, da standen in allen Ecken Kasten mit Perlen und Edelsteinen. >>Die sind noch besser als Kieselsteine<< sagte Hänsel und steckte in seine Taschen was hinein wollte, und Gretel sagte >>Ich will auch etwas mit nach Haus bringen<< und füllte sich sein Schürzchen voll. (103)

そしてもう恐れることがなくなったので、2 人は魔女の家の中に入ると、部屋の四角に真珠や宝石の入った箱があった。「これは小石よりもいい」とヘンゼルは言い、ポケットに詰め込めるだけ詰め込んだ。グレーテルも「私も何か家に持って帰ろう」と言って、エプロンにいっぱい詰め込んだ。（拙訳）

【ベヒシュタイン版】

---

[258] Bechstein, Ludwig: *Deutsches Märchenbuch*. California: Createspace 2013, S. 42-47. 引用はページ数のみ( )内に表記する。

[259] 本論 62 頁【表 4】の資料番号 22 引用はページ数のみ( )内に表記する。

Und da war das weiße Vöglein wieder da, und auch viele viele andre Waldvöglein, die flogen auf das Kuchendach des Häusleins, darauf war ein Nest, und daraus nahm jedes Vöglein ein buntes Steinchen oder eine Perle, und trugen sie hin zu den Kindern, und Gretel hielt sein Schürzchen auf, daß es alle die vielen Steinchen fasse.（46）

するとそこに白い小鳥が再びやって来て、たくさんの森の小鳥たちもケーキでできている家の屋根に飛んで来た。そこには鳥の巣があり、小鳥は 1 羽ずつ色とりどりの小さな石や真珠をくわえて 2 人に運んできた。グレーテルはエプロンを広げて、たくさんの小さな石を入れた。（拙訳）

【今井ただし訳】

そのとき白い小鳥が澤山の仲間をつれて、またこゝへ飛んで來ました。そしてこの森の小鳥たちはカステラで出來てゐる小屋の屋根の上を舞ひ飛んでゐましたが、やがて一羽一羽自分の巣にかへつて、綺麗な小石や眞珠を一つづつ子供達の所へくはえて來ました。グレーテルは自分の前垂を擴げて、その數知れぬ寶石をもらひました。(89)

4) 子どもたちが帰宅したときの在宅者

魔女の家から子どもたちが無事帰宅すると、グリム版では母親は死亡しており、父親のみが在宅している。その場面が下記である。

【グリム版（決定版）】

Der mann hatte keine frohe Stunde gehabt, seitdem er die Kinder im Walde gelassen hatte, die Frau aber war gestorben.（108）

樵は子どもたちを森に置き去りにしてからというもの楽しいと思うことはなかった。一方、妻はすでに亡くなっていた。(拙訳)

【ベヒシュタイン版】

Der alte Holzhauer und seine Frau saßen traurig und still in dem engen Stüblein und hatten großen Kummer um die Kinder（47）

年取った樵と彼の妻は狭い小さな部屋に静かに悲しげに座っていて、子どもたちのことを考えるととても心配だった。(拙訳)

【今井ただし訳】

その時年とつた木樵夫婦はさびしく狭い小屋の中に坐つて、すてゝしまつた子供たちのことを心配してゐました。（89）

5) 比較の結果

上記の比較により、今井訳はグリム版ではなく明らかにベヒシュタイン版を使ったことがわかる。今井訳の内容は原典に忠実であり、訳者はドイツ語に堪能な人物であるといえる。なお、ベヒシュタイン童話「ヘンゼルとグレーテル」の邦訳(1924)は、今井ただし訳が日本で初出のものである。

4. 大正期 20 話の概要

大正期の「ヘンゼルとグレーテル」の邦訳はドイツ文学者が名を連ねており、ドイツ語原典からの忠実な邦訳が 7 話(田中訳 11 小笠原訳 12 年岡訳 13 藤沢訳 14 内藤訳 18 金田訳 23 橋本訳 25)存在する。そのうち藤沢訳 14 は年岡訳 13 を踏襲し、橋本訳 25 は田中訳 11 を踏襲しており、ドイツ語からの邦訳は 18 話中 7 話ということになる。このうち 3 話(田中訳 11 小笠原訳 12 年岡訳 13)はドイツ語対訳であり、ドイツ語の需要が多かったことを示している。英語訳からの邦訳は、3 話(中島訳 15 少年通俗教育會編 17 三宅訳 20)存在し、ほぼ忠実に訳されている。

改変されているものは 6 話(巌谷編 19 葉多訳 21 金の星社編輯部編 26 馬場訳 27 童話研究會編 28 畑訳 30)存在する。改作されているものは 3 話(少年通俗教育會編 16 あしや著 24 蘆谷著 29)である。特筆すべきは、ベヒシュタインの「ヘンゼルとグレーテル」の邦訳が 1 話(今井訳 22)存在することである。大正期になって、外国の様々な出版物が手に入りやすくなったことがわかる。

ヘンゼルとグレーテルが川を渡るときには、救助する鳥と会話をする話が 3 話(少年通俗教育會編 17 葉多訳 21 畑訳 30)も出現する。明治期には 1 話(暁影生訳)しか存在しないが[260]、大正期には 3 話に増える。継母が子捨てを提案し、魔女は焼死するという残酷さをそのまま伝えているが、同時に擬人化した動物を挿入し子どもたちを楽しませている。また大正期には数多くの児童雑誌が創刊され、子ども向けのグリム童話の単行本が出版される。題名が「ヘンゼルとグレーテル」ではなく「お菓子の家」に変えられたり、魔女が歓待する食べ物に「ビスケット」「カステーラ」「チョコレート」「リンゴタート」「クリーム」などの西洋菓子が出現したりする。大正期は西洋菓子産業が発展した時代である。子ども向けの読み物のなかに都市部で流行りの菓子を出現させているのである。残酷な行為から目を逸らし、ファンタジーの世界に子どもたちの目を向けさせるためであろうか。「ヘンゼルとグレーテル」の絵本が初めて出現するのも大正期である。「キコリノコドモ」という題名で『名作お伽画噺グリム』に収録されている。そこではお菓子の家が色鮮やかに描かれている。

一方、童話研究會編「林の棄兒」28 に出現する「木の皮を食べさせられない」という表

[260] 暁影生訳「鬼婆退治」『家庭雑誌』1(4) 家庭雑誌社 1908 年 8 月 74 頁。

現、畑小鳥訳「オクワシノイヘ」30に出現する「お米が採れない」という表現、略奪する物が「お金」という表現などは、当時の日本の貧しい世相を読者に伝えようとしていると解釈できる。1918(大正 7)年に米騒動が起きた頃には、米価高騰で捨て子が増加し、貧しい家の子どもは家計を助けるために労働し、「もらい子」となって働く子どもがいた[261]。都市部の華やかな生活の裏では、過酷な生活を強いられた貧しい農村部の子どもたちが存在したのである。

5.「菓子」の出現と西洋菓子産業

1) 改変された菓子について

大正期の「ヘンゼルとグレーテル」の邦訳は 20 話収集しているが、そのなかには題名が「お菓子の家」に変えられているものが 4 話ある。この題名は明治期の訳文には出現しない。また原典の「パンの家(Brothaus)」を「お菓子の家(Kuchenhaus)」と訳出されているものが 7 話ある。「お菓子の家」と最初に訳出したのは 1905(明治 38)年の土井晩翠であるが、それを題名として使用したのは大正期の邦訳者である。なぜ大正期に題名が変更しているのだろうか。改変された英語訳からの影響も考えられるが、ここでは話に出現する菓子、とくに大正期に発展した西洋菓子に焦点をあてて考察していく。

2) チョコレートについて

葉多訳「お菓子の家」21で魔女が子どもたちを歓待する食べ物は「牛乳、チョコレート、りんご」である。チョコレートは初めて出現する。そもそもチョコレートを日本で最初に食したのは岩倉使節団で、それは 1873(明治 6)年のことであるといわれている[262]。1878(明治 11)年に五代目凧月堂から暖簾分けをされた米津松造が日本で初めてチョコレートの製造を手掛けたが、高価で味も日本人の口に合わなかったようである。その後 2 度渡米経験のある森永太一郎が、1899(明治 32)年に森永西洋菓子製造所(現森永製菓)を創業する。森永製菓の発展はめざましく、1918(大正 7)年に日本で初めてカカオを原料としてチョコレートの一貫製造に成功し、広く一般に供給する体制を整えるのである。その時のチョコレートは 15 銭で発売され、翌年には低価格化が実現して 10 銭で発売された[263]。1919(大正 8)年の食べ物の価格はそば一杯が 7 銭、豆腐が 4 銭であったことを考えると[264]、チョコレートは庶民にとってはまだまだ高価な菓子であったといえる。

---

[261] 下川耿史編『近代子ども史年表 明治・大正編』河出書房新社 2002 年 1 月 326、334 頁。

[262] 岡田哲 前掲書 2013 年 456 頁。

[263] 竹内書店新社編集部編『超ロングセラー大図鑑』竹内書店新社 2001 年 9 月 83、87 頁。

[264] 文教政策研究会編『日本の物価と風俗 130 年のうつり変わり　明治元年～平成 7 年』文教政策研究会 1996 年 12 月 580、584 頁。

あしや著 24、蘆谷著 29 に出現するお菓子の家は、「きれいなお煎餅、透き通った氷砂糖、ぷかぷかしたパン、ぴかぴかするチョコレート」でできている。とくに蘆谷(あしや)は子捨てのエピソードを削除しており、題名も「お菓子の家」に改変している。菓子を強調し流行りのチョコレートを出現させて、子どもにとって魅力的な話に改変したのである。

3) ビスケットとカステラについて

少年通俗教育會編「魔法婆」16 では、子どもたちが見つけるお菓子の家は「パン、カステーラ、ビスケット」でできている。ビスケットは、前述した米津松造が 1875(明治 8)年に製造販売を開始していて、1877(明治 10)年に第 1 回内国勧業博覧会に出品している[265]。さらに彼は 1880(明治 13)年にイギリスからビスケットの製造機械を購入している[266]。1914(大正 3)年には東京府主宰の東京大正博覧会が上野公園で開かれたが、その時の出品では羊羹、カステラ、金平糖に次いでビスケットが多くを占めた。この博覧会は 134 日にわたり開催され、約 747 万人の入場者があったという[267]。1916(大正 5)年に出版された「魔法婆」に出現するビスケットは、流行りの菓子を取り入れたものといえよう。カステラは 1900(明治 33)年に文明堂が開業し広めているが、ビスケットが一般に普及されるのは、1923(大正 12)年に森永製菓が製造販売した「マリービスケット」からであると思われる。

4) 西洋菓子産業と子ども向け読み物との関わり

森永製菓は 1923(大正 12)年 9 月 1 日に起きた関東大震災の翌日に、社長と専務が直接指示してビスケットとミルクキャラメル 6 万袋をトラックで運ばせて、芝公園と日比谷公園で無料配布した。震災翌々日の 9 月 3 日からはミルクの配給を行い、人びとは長蛇の列を作ったという。さらに 9 月 7 日の東京日日新聞には、「森永ミルクを差し上げます」という広告を出している[268]。震災の混乱期のなかで、森永製菓のこのような偉業が西洋菓子の浸透を早めたと考えられる。

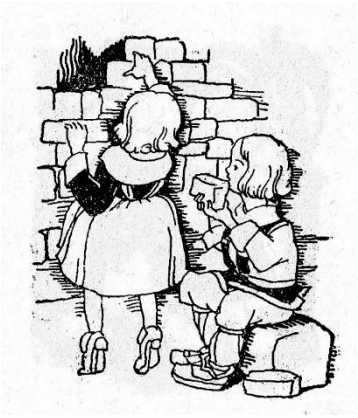
大正期の「ヘンゼルとグレーテル」には、子どもたちがお菓子(パン)の家を食べている場面の挿絵が 4 話(中島訳 15 巌谷編 19 三宅訳 20 今井訳 22)【図 10】【図 7】【図 11】【図 12】存在する。お菓子でできた家は、子どもたちの目には魅力的に映ったに違いない。挿絵から菓子の普及につながったのではないだろうか。やがて昭和期になると「ヘンゼルとグレーテル」の話は、菓子の宣伝として使われるようになる。大正期に発売された菓子の名称である「ミルクチョコレート」が絵本『オクワシノイヘ』に描かれ、森永ビスケット

[265] 江後迪子『洋菓子事始め』神戸凧月堂 2002 年 8 月 77 頁。
[266] 「東京凧月堂社史」編纂委員会編『東京凧月堂社史』東京凧月堂 2005 年 4 月 45 頁。
[267] 江後迪子 前掲書 2002 年 77 頁。
[268] 森永製菓編『森永製菓 100 年史』森永製菓 2000 年 8 月 89 頁。

「チョイス」が幼年雑誌においてお菓子の家の屋根として使われるのである[269]。このように菓子産業と子ども向け読み物との関わりが見てとれるのである。

【図 10】画家不明
「ヘンゼルとグレテル」

【図 11】画家不明
「林へ子を捨てに」



【図 12】画家不明
「ヘンセルとグレーテル」

6. 『赤い鳥』における西條八十の「お菓子の家」について

1) 西條八十について

西條八十(1892-1970)は詩人で、早稲田大学英文科を卒業している。1918(大正 7)年に『赤い鳥』に童謡「かなりや」を発表する。1921(大正 10)年に早稲田大学英文科講師となり、1924(大正 13)年にフランスに渡り、帰国後仏文科の助教授となる。1931(昭和 6)年には教授に就任し、1945(昭和 20)年まで在職する[270]。

2) 童謡「お菓子の家」について

大正期には児童向け雑誌が相次いで創刊される。1913(大正 2)年に『コドモ』(コドモ社)、1914(大正 3)年に『子供之友』(婦人之友社)、1915(大正 4)年に『良友』(コドモ社)が創刊される。その後 1918(大正 7)年 7 月に鈴木三重吉主宰の雑誌『赤い鳥』(赤い鳥社)が創刊される。『赤い鳥』の創刊号には「現在世間に流行してゐる俗悪な子供等の讀物と貧弱低劣なる子供の謡と音樂とを排除して、彼等の眞純な感情を保全開發するために、現代第一流の作家詩人、作曲家の誠實なる努力を集め、兼て子供のための眞價ある若き創作家、音樂家の出現を迎へる、最初の一大區劃的運動を導いてゐる」[271]とある。その『赤い鳥』は「子どもの読み物の世界に、大人の文学の第一線で活躍していた作家たちを引き入れ、

---

269 【表 7】の資料番号 100 6 頁。【図 16】

270 三好行雄他編『日本現代文学大事典　人名・事項編』明治書院 1994 年 6 月 149 頁。

271 「『赤い鳥』の標傍語(モットー)」『赤い鳥』創刊号 赤い鳥社 1918 年 7 月。

童話と童謡を創作する文学運動を呼び起こした」[272]のである。そのなかに童謡作家の西條八十がいた。彼は、1919(大正 8)年 10 月に『赤い鳥』において、「お菓子の家」という童謡を発表している[273]。そこには「ヘンゼルとグレーテル」という題名の記載はないが、森に住む魔女の「パンの家」を意識して作詩したものであることは一目瞭然である。下記が西條の童謡である。

山のおくの谿あひに、きれいなお菓子の家がある。
門の柱は飴ん棒、屋根の瓦はチヨコレイト、
左右の壁は麥落雁、踏む舗石がビスケット。
あつく黄ろい鎧戸も　おせば零れるカステイラ、
静かに午をしらせるは　金平糖の角時計。
誰の家やら知らねども　月の夜更けにおとづれて、
門の扉におぼろげな　二行の文字を讀みゆけば。－
「こゝにとまつてよいものは　ふたおやのないこどもだけ」

この童謡にもいろいろな菓子が出現する。ビスケット、カステイラ、金平糖は、1914(大正 3)年に行われた東京大正博覧会で出品されたものであり、チョコレートは前述した森永製菓で一般向けに製造販売されたものである。チョコレートはこの童謡よりも前に発売されているが、高価でありとても大正期に全国に普及していたとは考えにくい。チョコレートやビスケットは地方に住む子どもにとっては、おそらく未知の食べ物であったであろう。童謡に出現する菓子を見ても、『赤い鳥』は都会に住む人たちを読者の対象にしていたと推測される。

西條は後に「お菓子の家」について「いかにこの世の風が荒く冷たく当ろうとも、可憐な孤児たちのためには、必ず見えぬ何処かに温かい愛護の家を造って持つている。これは淋しい運命を持つた児等への慰藉のうたである」(大正 12 年 12 月)[274]と述べている。おそらく西條は 9 月に起きた関東大震災の影響も考えて、子どもに視点をおき憐れむ心を表したのであろう。本来の「ヘンゼルとグレーテル」は飢餓で親が子どもを捨てて、子どもたちがパンの家にたどり着く話だが、西條はふた親のない子どもを受け入れる養護施設として紹介している。子捨てには触れず、子どもを食べる魔女が作ったものであるとも書かず、流行りの菓子のみを出現させて憧れの家に改変しているのである。それによって苦難にあっても手を差し伸べてくれる人がいて、希望ある未来が待っていることを子どもたちに伝えようとしたという。彼は子捨てや魔女が存在する怖い現実を見せることなく、子どもに

[272] 河原和枝『子ども観の近代』(中公新書)中央公論新社 1998 年 2 月 66-67 頁。
[273] 西條八十「お菓子の家」『赤い鳥』3(4) 赤い鳥社 1919 年 10 月 48-49 頁。
[274] 西條八十『西條八十全集』6 巻 国書刊行会 1992 年 4 月 328 頁。

夢のみを与える話に「ヘンゼルとグレーテル」を改作したのである。この話の全文は『金の船』と『童話』には収録されているが、『赤い鳥』には収録されていない。『赤い鳥』は「中産階級の子弟を主たる読者とし、上品でハイカラなイメージを売り物に」[275]していた。それゆえ下層階級の子どもが主人公である「ヘンゼルとグレーテル」は、『赤い鳥』が唱える「純真無垢な存在である」子どものイメージを損なう恐れがあるため収録されず、子どもに夢を与える「お菓子の家」を取りあげて歌にした童謡のみが収録されたのであろう。そしてこの「お菓子の家」は、1928(昭和 3)年 8 月に橋本国彦(1904-1949)により作曲されレコード化される[276]。こうして「お菓子の家」は改変された形で子どもたちの記憶に留まることになる。

7. 大正期のまとめ

大正期は明治期からの近代化が発展し、都市部では子ども服の需要が本格化し子ども用自転車が発売されるなど[277]、生活が豊かになり大人と異なる「子ども」という存在が認識された時代である。児童雑誌の表紙においても、流行りの服を着た華やかな子どもが描かれている。同時に、貧困のために子どもを手放さなければならない人びとも存在した時代である。「ヘンゼルとグレーテル」に似た境遇の子どもたちが、まだ現実に数多く存在したのである。大正末期には、児童文学は「『新興童話連盟』(大正 14 年)による若い世代やプロレタリア児童文学の道にすすんだ人びとによって批判され、児童文学の社会性が追及されるように」[278]なる。それに呼応するかのように、改変された大正期の「ヘンゼルとグレーテル」の邦訳は、流行りの菓子が出現する夢のある華やかさと、樹皮を食べるような厳しい現実の両方を表現したものになっている。大正期の訳者は、子どもの人権を認めて理想化し、「お菓子」に焦点を当てて、消費者としての子どもに夢を与えようとした。その一方では、原典に忠実に訳すことによって、西洋昔話に描かれた貧しい庶民の現実を伝えようとした。明治期には 10 話であった邦訳が、大正期になると 20 話も出現するのは、「ヘンゼルとグレーテル」が大正期という時代に合致した話であったからだと思われる。

[275] 河原和枝 前掲書 1998 年 128 頁。
[276] 西條八十 前掲書 1992 年 298 頁。
[277] 下川耿史編『明治・大正　家庭史年表』河出書房新社 2000 年 3 月 451、460 頁。
[278] 滑川道夫他編『作品による日本児童文学史』1 巻 牧書店 1968 年 12 月 176 頁。

第 7 章　昭和期における「ヘンゼルとグレーテル」

1. 邦訳の概観

昭和期(1926-1988)の邦訳は、調査の結果、138 話存在することが判明した。昭和期は 63 年間も続いたため、時代をⅠ期、Ⅱ期、Ⅲ期に分けて考察する。Ⅰ期は「児童読物改善ニ関スル指示要綱」(1938 年 10 月通達)前までを A、以後を B に分けて表記する。Ⅱ期とⅢ期は新著作権施行(1971 年 1 月 1 日施行)前までをⅡ期、施行後をⅢ期の始まりとする。したがってⅠ期(A 1926-1938　B 1938-1945)、Ⅱ期(戦後から新著作権法施行前 1946-1970)、Ⅲ期(新著作権法施行からバブル期 1971-1988)とする。昭和期は敗戦後急速に復興を遂げ、万国博覧会を開催するまでに至った時代である。本論では日本が経済的に発展するなかで、児童文学はどのように関わったのかを明らかにするため、この時代区分にそって論を進めることにする。

2. Ⅰ期(A 1926-1938)の邦訳

1) 邦訳一覧表【表 5】

番号	年	月	訳者(編者)	題名	出典	出版社
31	1927	9	菊池寛訳	ヘンゼルとグレーテル	グリム童話集	文藝春秋社
32	1929	1	金田鬼一訳	ヘンゼルとグレーテル	グリム童話集(上)	近代社
33	1930	9	有富郁夫訳	ハンセルとグレーテル	ハンセルとグレーテル	玉川学園出版部
34	1932	11	豊嶋次郎編	ヘンゼルトグレーテル	グリムものがたり	金蘭社
35	1933	1	児童文学研究會	ヘンゼルトグレーテル	グリムモノガタリ	文化書房
36	1934	11	三浦吉兵衛訳	ヘンゼルとグレーテル	グリム童話	郁文堂書店
37	1935	6	主婦之友社編輯局著/長谷川露二画	オクワシノイヘ	オクワシノイヘ（主婦之友繪本）	主婦之友社

2) Ⅰ期(A 1926-1938)の邦訳について

Ⅰ期 A の邦訳は 7 話存在する。このうち原典にほぼ忠実に訳されているのは 3 話 31 32 36 である。改変されているものも 3 話 33 34 35 である。34 はヘンゼルが白い家鴨に向けて歌いかけ、グレーテルがひとりずつ渡してくれるよう家鴨に依頼するエピソードが欠落している。35 は実母が子捨ての提案をする。内容が大幅に改作されているものは 1 話 37 存在する。ここでは 1926(昭和元)年から 1938(昭和 13)年 10 月の「児童読物改善ニ関スル指示要綱」が通達される前までの邦訳について述べる。

昭和期最初の邦訳は、菊池寛(1888-1948)訳「ヘンゼルとグレーテル」31 である。この話は菊池寛が起こした文藝春秋社発行の『小学生全集』第 4 巻の『グリム童話集』に収録

されているもので、原典に忠実に訳されている。この本は価格が安く円本と呼ばれるものである。

2 番目の邦訳は、金田鬼一訳「ヘンゼルとグレーテル」32 である。原典に忠実に訳されたものである。奥付には非売品とある。

3 番目の邦訳は、有富郁夫(生没年不明)訳『ハンセルとグレーテル』33 で、小学 2 年生を対象にした本である。話の内容は原典にそったものだが、改変されているところが 3 箇所存在する。それらはこの話に出現するお菓子の家がチョコレートでできている点、子どもたちが迷子になったとき出現する小鳥が鬼婆の化身である点、子どもたちが鬼婆の家から帰宅するときに出会う白鳥が「グレーテルさんもご一緒に」と言って、子どもたちと会話をする点である。なお大正期には出現する鳥が擬人化されている話が 3 話存在するが、おそらくその流れを受けたものであろう。白鳥が擬人化されて、ファンタジー化しており、読者を楽しませているのである。2 人が帰宅すると父親のみが在宅しているが、「すはつて　ゐらつしやいました」と敬語が使われている点も特筆すべきである。挿絵は Mabel Luci Attwell が描いた *Grimm's Fairy Tales* に収録されているものと同じである【図 13】[279]。

【図 13】 Mabel Lucie Attwell 画『ハンセルとグレーテル』口絵

有富は鹿児島県の出身で、1930(昭和 5)年に早稲田大学英文科を卒業した人物である[280]。本の奥付の著者は小原国芳(1887-1977)となっており、出版社は玉川学園出版部である。玉川学園は、沢柳政太郎が設立した成城学園から分岐して、1929(昭和 4)年に小原国芳が創設したものである。小原は「全人教育論」を唱え、芸術教育の一環としての学校劇論を確立し、学校劇の実践に多くの影響を与えた人物である[281]。この本は授業での副読本として使用されたので、子どもの視点に合わせた改変が行われたのであろう。

4 番目の邦訳は、豊嶋次郎編「ヘンゼルトグレーテル」34 である。漢字とカタカナが混用された本である。副書名が『カタカナ一年生』であることから、小学 1 年生を対象にしたものと思われる。登場する老婆は鬼婆であり、その鬼婆が 2 人を歓待する料理は、お煎餅とりんごのみである。原典ではグレーテルが鴨(家鴨)に呼びかけるが、ここではヘンゼルに変更されており、2 人一緒では重いから 1 人ずつ渡してもらおうというグレーテルの提案は削除されている。兄の妹に対する配慮がクローズアップされ、女の子の賢明な提案

---

[279] Vredenburug, Edric (ed.): *Grimm's Fairy Tales.* London: Raphael Tuck [1919].
[280] 『早稲田大學校友會會員名簿　昭和 10 年用』早稲田大學校友會 1934 年 12 月 31 頁。
[281] 大阪国際児童文学館編『日本児童文学大事典』1 巻 大日本図書 1993 年 10 月 192 頁。

が省略されているのは、ジェンダーの視点から見ると問題といえよう。

編者の豊嶋次郎は小糸勝次郎(1891-1980)の筆名である。小糸はこの話が収録されている本の発行所である金蘭社の社長である。金蘭社は齋藤佐次郎の金の星社から暖簾分けされた出版社である。

5 番目の邦訳は、児童文学研究會「ヘンゼルトグレーテル」35である。漢字とカタカナが混用されている。この話は実母が子捨ての提案をする。お菓子の家の屋根はチョコレートでできている。著者は児童文学研究會とあり、代表者として成蹊学園の西原慶一(1896-1975)と玉川学園の谷口武(1896-1960)の名前が記載されている。挿絵は33で使用されている Mabel Lucie Attwell の挿絵が入れられている。

6 番目の邦訳は、三浦吉兵衛(1877-1939)譯「ヘンゼルとグレーテル」36である。郁文堂から出版された獨逸語譯註文庫シリーズの『グリム童話』に収録されている。

三浦は宮城県の出身であり、宮城県尋常中学校(現仙台一高)に在学しているときには、吉野作造や橋本青雨(忠夫)と共に文学活動をしていた[282]。吉野によると、三浦は小学校時代から文章を書くのが得意で、先生に一目置かれていたという[283]。彼は 1900(明治 33)年に第二高等学校を卒業し、1903(明治 36)年に東京帝國大學獨逸文學科を卒業したドイツ文学者である。第七高等学校造士館、第五高等学校、第一高等学校、山口高等学校の教授を歴任している。この本はドイツ語対訳であり、授業用のテキストとして使用されたもので、結末句まで原典に忠実に訳されている。

7 番目の邦訳は、主婦之友社編輯局著、長谷川露二画の『オクワシノイヘ』37である。主婦之友社が出版した『主婦之友繪本』のうちの 1 冊である。この話は改作されているので、その点について詳細に述べる。

【図 14】長谷川露二画『オクワシノイヘ』

主人公の名前はマサヲとチヨコで、和名である。2 人はみなしごで、おじとおばに養育されている。おばは子捨ての提案をし、マサヲが 2 回目に撒くのは小麦である。森で迷う 2 人はチョコレート、ビスケット、キャンデーで作られたお菓子の家を見つける。その家にいるのは魔法婆さんである。魔法婆さんは 2 人を家の中に招き入れ、マサヲを食べようとする。しかしチヨコの機転で魔法婆さんは焼死し、2 人は家にあった宝物を見つけて「おじさんたちにあげよう。そうすると置いてくれる」と言って持ち帰る。2 人が無事帰宅するとおばは生存しており、宝物を見て喜び、4 人は仲良く楽しく暮らす【図 15】。

これは主婦之友社編輯局が著し、長谷川露二(忠勝 1904-不明)が絵を描いた絵本『オクワ

[282] 吉野作造『吉野作造』日本図書センター 1998 年 8 月 24 頁。
[283] 同上 20 頁。

シノイヘ』である。この絵本は『主婦之友繪本』といい、1932(昭和 7)年から 1939(昭和 14)年にかけて懸賞用の賞品として作成された非売品である[284]。この絵本が出版される前の 1933(昭和 8)年には「児童虐待防止法」が公布されている。両親が出現せず、養育者をおじとおばに設定しているのは、実の親子ではなくても子どもを養育する義務があることを仄めかしているのではないだろうか。主婦之友社は「出版活動を通して、日本の家庭の幸せを実現」[285]することをモットーとして掲げている出版社である。たとえ「経済力＝愛情」であったとしても、4 人楽しく暮らすことが幸せであることを示しているのではないだろうか。この『オクワシノイヘ』の挿絵には「MILKCHOCOLATE」という文字が確認できる【図 16】。その文字は 1935(昭和 10)年に発売された森永製菓のミルクチョコレートのパッケージとよく似ている。このような商品名が挿絵にあるのはなぜなのか。調査の結果、主婦之友社には南部新一(1894-1986)が 1933(昭和 8)年から 1941(昭和 16)年まで嘱託として勤務していたことが判明した[286]。彼は同時に森永製菓にも勤務していたのである。また彼はそれ以前に 1915(大正 4)年から 1928(昭和 3)年まで博文館に勤務しており、そこでは新井弘城という筆名で『お話の庫』の執筆に関わっている[287]。『お話の庫』には「ヘンゼルとグレーテル」の話である「魔法婆」という題名の話がある。「魔法婆」については第 6 章で述べているが、子どもたちはみなし児で、実の親は存在せず、お菓子の家には魔物の婆さんが出現する。この『オクワシノイヘ』においても子どもたちはみなし児で、実の親は存在せず、お菓子の家には魔法婆さんが出現する。『オクワシノイヘ』での話の設定や登場する魔女が「魔法婆さん」であることから、この話の執筆者は大正期の「魔法婆」と同一人物、すなわち南部新一であると考えられる。この時期に南部は森永製菓にも勤務しているため、画家の長谷川露二に森永製菓の商品を挿絵として入れるよう依頼することもできる。森永製菓と児童文化との接点は南部によってもたらされたものと推測する。

【図 15】長谷川露二画『オクワシノイヘ』

【図 16】長谷川露二画『オクワシノイヘ』

[284] 鳥越信編『はじめて学ぶ日本の絵本史Ⅱ』ミネルヴァ書房 2002 年 2 月 112 頁。
[285] 主婦の友社社史編纂委員会編『主婦の友社八十年史』主婦の友社 1996 年 9 月。
[286] 大久保久雄「博文館編集者南部亘国さんと蔵書のこと」名著普及会編『名著サプリメント』3(10) 名著普及会 1990 年 8 月 29 頁。
[287] 本論 62 頁【表 4】資料番号 16「緒言」3 頁。

3) Ⅰ期(A 1926-1938)の時代背景

1927(昭和 2)年に金融恐慌が起こり、その後 1929(昭和 4)年に世界大恐慌の様相を帯びて、経済界は大混乱に陥る[288]。児童文学においてもその影響を受け、『赤い鳥』などの童心主義を唱える児童文芸雑誌は休刊に追い込まれる。その代わりに円本といわれる安価な全集が出現する。「ヘンゼルとグレーテル」の昭和期最初の邦訳 31 も円本に収録されている。1931(昭和 6)年 9 月に満州事変が勃発し、男性は前線に動員され 1945(昭和 20)年まで戦争の時代となる[289]。1938(昭和 13)年 5 月には国家総動員法が施行される。国家総動員法の主旨は、「国内におけるすべての人的・物的資源を統制・運用する権限が政府にある」[290]というものである。これにより物資、労力、資金などが軍需生産にあてられることになる。生活に必要な品物の生産が減らされ、配給制となり紙の入手も困難となる。

3. Ⅰ期(B 1938-1945)の邦訳

1) 邦訳一覧表【表 6】

番号	年	月	訳者(編者)	題名	出典	出版社
38	1942	10	金田鬼一訳	ヘンゼルとグレエテル	グリム童話劇(上)	アルス
39	1944	3	藤原肇訳	ヘンゼルとグレーテル	勇ましいちびの仕立屋さん	森北書店

2) Ⅰ期(B 1938-1945)の邦訳について

ここでは「児童読物改善ニ関スル指示要綱」の通達後から戦争終了までの邦訳について述べる。Ⅰ期 B は 2 話存在する。原典に忠実に訳されているのは 1 話 39 である。ただし 39 には結末句がない。

昭和期 8 番目の邦訳は、金田鬼一訳「ヘンゼルとグレエテル」38 である。この話の展開は、原典どおりだが、童話劇という形式のため会話文が多く、一部改変されている。魔法使いは子どもたちに「お菓子もいいが、甘いものばかりは毒」と言う。魔法使いが焼死した場面では子どもたちは「ばあさんが死んだ。ばあさんが死んだ」と歌い、踊りまくる。2 人が無事に戻り宝物を見た父親は「人間は働いて食べなくてはならない。人間は一生懸命に働いて神様のお手伝いをしなくては」という言葉が挿入されており、いずれも原典にはない表現である。食べるためには働かなくてはならないというのは、戦時中で食糧不足の状況を反映したものであろう。多くの人びとが庭や空き地を耕して、食料品を自給自足できるよう努力していたのである。そのような状況がこの言葉に表現されているといえる。

[288] 鳥越信編著『はじめて学ぶ日本児童文学史』ミネルヴァ書房 2001 年 4 月 184 頁。
[289] 久留島典子他編『歴史を読み替えるジェンダーから見た日本史』大月書店 2015 年 1 月 214 頁。
[290] 金子宏他編『法律学小辞典』有斐閣 3 版 1999 年 2 月 394 頁。

また同じ本に収録されている「赤ずきん」においても金田は改変を加えている。狩人は、祖母が殺害されたのは赤ずきんが情報を漏らしたからだと責任を追及している[291]。野口芳子は「道草よりも不用意に情報を漏らすことのほうが危険だというのは、戦中期における的を射た指摘」[292]であると述べている。グリム童話を日本で初めて完訳した金田鬼一が原典にはないメッセージを挿入したのは、おそらく戦時下で国の要求を受け入れざるを得ない状況があったからであろう。

9 番目の邦訳は、藤原肇(1901-不明)譯「ヘンゼルとグレーテル」39である。原典に忠実な邦訳であるが、結末句は省略されている。藤原は早稲田大学独文科を卒業し、会津短期大学教授となったドイツ文学者である。この本の題名は『勇ましいちびの仕立屋さん』である。おそらく勇ましい男の子の話と受け取られて出版が許可されたのであろう。藤原は前書きに「次代の國家を背負つて立つ可き、國民學校兒童の教養に幾分の貢献を」という言葉を添えている。戦時体制下で施行された特別行為税が伴うにもかかわらず出版したのは、おそらく彼は次世代の子どもたちにグリム童話を伝えるべきであるという使命感を持っていたからであろう。

3) Ⅰ期(B 1938-1945)の時代背景

1938(昭和 13)年 10 月に内務省警保局図書課により「児童読物改善ニ関スル指示要綱」が通達され、出版物の統制が行われる[293]。当初は赤本漫画を中心に検討を始めたものであるが、児童の読み物全般に検討の範囲が広げられたのである[294]。指示要綱を成立させた中心人物は、当時内務省にいた佐伯郁郎(慎一 1901-1992)である。ほかに民間の有識者として、山本有三、小川未明、坪田譲治、百田宗治、城戸幡太郎、波多野完治、佐々木秀一、西原慶一、霜田静志らが試案したという[295]。この指示要綱により出版業界は混乱に陥る[296]。1940(昭和 15)年には英語が敵性にあたるものとして排斥され、英語用語が禁止される。1942(昭和 17)年 12 月 5 日の東京日日新聞(夕刊)では、『スタイル』が『女性生活』に、『モダン日本』が『新太陽』に変えられ、雑誌名も英語の使用が禁止されていることが報告されている[297]。1941(昭和 16)年 1 月には、政府は人口政策確立要綱を策定し、「産めよ

---

[291] 野口芳子「日本における『赤ずきん』の受容について－昭和期を中心に－」『梅花児童文学』(27) 梅花女子大学大学院児童文学会 2019 年 6 月 92 頁。
[292] 同上。
[293] 菅忠道『自伝的児童文化史戦前・戦中期編』ほるぷ教育開発研究所 1978 年 3 月 198 頁。
[294] 鳥越信編著 前掲書 2001 年 161 頁。
[295] 佐伯郁郎『少國民文化をめぐって』日本出版社 1943 年 11 月 161 頁。
[296] 鳥越信編著 前掲書 2001 年 250 頁。
[297] 毎日コミュニケーションズ編『昭和ニュース事典』8 巻 毎日コミュニケーションズ 1994 年 6 月 40 頁。

殖やせよ」のスローガンで「産児報国」を呼びかけた[298]。また「高等女學校及女子青年學校等に於ては母性の國家的使命を認識せしめ」とあり、女子の母性の育成に努めている。さらに多子家族には物資の優先配給や表彰を行い、人為的産児制限を禁止している。同年12月には太平洋戦争が始まる。このような状況下では西洋の子捨ての話である「ヘンゼルとグレーテル」は出版を控えざるを得なかったと思われる。

3. Ⅱ期(1946-1970)の邦訳

1) 邦訳一覧表【表 7】

番号	年	月	訳者(編者)	題名	出典	出版社
40	1946	4	マツダフミヲ絵	オクワシノイヘ	オクワシノイヘ	実業之日本社
41	1946	11	村岡花子編/ 若林敏郎絵	お菓子の家	お菓子の家 (グリム童話輯 5 巻)	國際図書出版
42	1947	1	桃井鶴夫訳	ヘンゼルとグレーテル	絵入グリム童話選	英研社
43	1948	6	秋山淳訳	ヘンゼルとグレーテル	グリム童話集赤バラ白バラ	寶雲舎
44	1948	10	富山妙子画	おかしのいえ	おかしのいえ	浮城書房
45	1948	11	古関吉雄編	ヘンゼルとグレーテル	グリム童話集	玉川大学出版部
46	1948	12	金田鬼一著/ 有岡一郎絵	ヘンゼルとグレーテル	グリム童話(上) (銀の鈴文庫)	廣島図書
47	1949	1	白旗信譯/ 荒木市三画	ヘンゼルとグレーテル	蛙の王様 (ﾐﾈﾙｳﾞｧ児童文庫)	ミネルヴァ書房
48	1949	5	森村豊訳	兄と妹	世界名作童話集	主婦之友社
49	1949	10	飯塚信雄文/ さわいいちさぶろう絵	おかしのいえ	小学二年生 5(7)	小学館
50	1949	11	田中梅吉訳	兄さんと妹	祖稿グリム童話全集	東京堂
51	1950	10	小出正吾編著	ヘンゼルとグレーテル	世界童話の泉お話 12 か月 10－12 月の巻	実業之日本社
52	1950	10	竹田靖治文/ 相沢光朗絵	おかしのいえ	小学一年生 6(7)	小学館
53	1950	12	木下一二訳	ヘンゼルとグレーテル	グリム童話集	東京読書会
54	1951	8	相良守峯訳	ヘンゼルとグレーテル	金の鳥	中央公論社
55	1951	8	金田鬼一編著/ 寺内萬次郎絵	ヘンゼルとグレーテル	白雪姫	大日本雄弁 会講談社
56	1952	4	三島由紀夫文/	ヘンゼルとグレーテル	ヘンゼルとグレーテル	あかね書房

[298] 久留島典子他編 前掲書 2015 年 212 頁。

			池田かずお絵		（世界絵文庫 34）	
57	1952	11	堀尾勉脚色	へんぜるとぐれえてる	へんぜるとぐれえてる	グリム館
58	1953	1	壷井栄編著	ヘンゼルとグレーテル	星の銀貨	鶴書房
59	1953	11	土川留女子文/ 耳野卯三郎絵	へんぜるとぐれえてる	ありばばのぼうけん	小学館
60	1953	12	前川道介訳/ 井関完二絵	ヘンゼルとグレーテル	青い灯	いずみ書房
61	1954	1	浜田廣介文/ 松田文雄絵	おかしのいえ	ひかりのくに 9(1)	ひかりのくに 昭和出版
62	1954	1	武田雪夫文/ 沢井一三郎絵	おかしのいえ	おかしのいえ （二年生文庫）	講談社
63	1954	1	野長瀬正夫文/ 佐藤湊子画	お菓子の家	童幼の国増刊 4(1)	文教堂出版
64	1954	2	中野啓介文/ 駒宮録郎絵	おかしのいえ	きんのとり	日本書房
65	1954	3	宇野浩二文/ 堀文子絵	ヘンゼルとグレーテル	グリム童話 2	トッパン
66	1954	5	関敬吾他訳	ヘンゼルとグレーテル	グリム童話集 1	角川書店
67	1954	6	西山敏夫文/ 沢田重隆絵	おかしのいえ	こどもクラブ 10(7)	大日本雄弁会 講談社
68	1954	11	矢崎源九郎訳	ヘンゼルとグレーテル	わたくしたちの世 界名作童話全集 2	同和春秋社
69	1954	12	奈街三郎訳/ 茂田井武絵	ヘンゼルとグレーテル	グリム物語	東光出版社
70	1955	1	高山良策人形構成	おかしのいえ	よいこのくに 3(10)	よいこのくに社
71	1955	不明	堀尾勉文	ヘンゼルとグレーテル	ヘンゼルとグレーテル	エンゼル社
72	1956	9	藤田圭雄編	へんぜるとぐれーてる	グリムものがたり	宝文館
73	1956	12	植田敏郎訳	ヘンゼルとグレーテル	グリム童話宝玉集 1	宝文館
74	1957	1	橋本潔文/絵	ヘンゼルとグレーテル	主婦と生活 12(1)	主婦と生活社
75	1957	1	西山敏夫文/ 鈴木寿雄絵	おかしのいえ	たのしい一年生 2(1)	大日本雄弁会 講談社
76	1957	3	佐伯千秋文	ヘンゼルとグレーテル	小学二年生 12(13)	小学館
77	1957	4	土家由岐雄編著/ 若菜珪絵	ヘンゼルとグレーテル	グリム童話三年生	偕成社

78	1957	6	宮脇紀雄編著/ 鈴木未央子絵	ヘンゼルとグレーテル	ヘンゼルとグレーテル	偕成社
79	1957	7	村岡花子/ 小林和子絵	おかしのいえ	きたかぜとたいよう 一年生	ポプラ社
80	1957	7	柴野民三/ 輪島清隆絵	おかしのいえ	おかしのいえ （名作絵文庫二年生）	実業之日本社
81	1957	12	槇晧志文/ 駒宮録郎絵	おかしのいえ	キンダーブック 12(9)	フレーベル館
82	1957	12	矢崎源九郎訳	ヘンゼルとグレーテル	グリム童話名作集	筑摩書房
83	1957	不明	飯沢匡文	へんぜるとぐれーてる	へんぜるとぐれーてる	トッパン
84	1958	5	田村隆一編著	ヘンデルとグレーテル	ヘンデルとグレーテル	保育社
85	1958	6	小出正吾文/ 花野原芳明画	へんぜるとぐれーてる	グリム絵ものがたり	偕成社
86	1958	7	野村純三/ 川本哲夫絵	ヘンゼルとグレーテル	ヘンゼルとグレーテル （グリムどうわ 3）	ポプラ社
87	1958	11	高橋健二訳	ヘンゼルとグレーテル	グリム童話集	あかね書房
88	1959	4	植田敏郎訳	ヘンゼルとグレーテル	グリム童話集	講談社
89	1959	不明	三越左千夫文/ 谷俊彦絵	へんぜるとぐれーてる	へんぜるとぐれーてる （トッパンの愛児えほん）	トッパン
90	1960	1	岡本良雄文/ 長谷川露二絵	おかしの家	おかしの家 （講談社の絵本）	講談社
91	1960	1	岡本良文/ 矢車すずし絵	おかしのおうち	幼稚園 12(10)	小学館
92	1960	1	大畑末吉他訳/ 安泰絵	ヘンゼルとグレーテル	グリム童話集	講談社
93	1960	1	相賀徹夫編/ 小田忠絵	おかしのおうち	おかしのおうち （小学館の育児絵本）	小学館
94	1960	8	村岡花子訳/ 若菜珪	ヘンゼルとグレーテル	グリム童話集	偕成社
95	1960	8	並木俊文	ヘンゼルとグレーテル	しらゆきひめ	日本書房
96	1960	10	野長瀬正夫文/ 松井行正絵	ヘンゼルとグレーテル	おやゆび小僧	金の星社
97	1960	不明	八代球磨男文/ 西田静二絵	おかしのいえ	おかしのいえ（ひかりのくにダイヤ絵本 13）	ひかりのくに 昭和出版

98	1961	5	川西千保子文/ 石田英助絵	おかしのいえ	めばえ 4(2)	小学館
99	1961	8	鈴木隆/ 上柳輝彦絵	ふしぎなおかしのいえ	まほうの童話集	三十書房
100	1961	12	立原えりか文/ 谷俊彦絵	おかしのいえ	たのしい幼稚園 17(9)	講談社
101	1962	1	槇本楠郎文/ 鈴木未央子絵	ヘンゼルとグレーテル	世界童話名作文庫 4	小学館
102	1963	2	村岡花子/ 丸木俊子絵	ヘンゼルとグレーテル	幼年世界童話文学 全集 5	集英社
103	1963	11	宮脇紀雄文/ 岸田はるみ絵	へんぜるとぐれえてる	幼稚園 16(９)	小学館
104	1964	6	西原康文/ｳｫﾙﾄ・ ﾃﾞｨｽﾞﾆｰ絵	お菓子の家	お菓子の家（講談社 のディズニー絵本)	講談社
105	1965	4	植田敏郎訳	ヘンゼルとグレーテル	少年少女世界の名作文学 27	小学館
106	1965	8	宮脇紀雄文/ 武田将美絵	おかしのいえ	幼稚園 18(5)	小学館
107	1965	8	今村洋子絵	おかしのいえ	小学一年生 21(5)	小学館
108	1965	10	土家由岐雄文/ 林義雄絵	へんぜるとぐれえてる	グリムの童話	小学館
109	1965	12	久米みのる文/ 松本かつぢ絵	おかしのいえ	たのしい幼稚園 21(10)	講談社
110	1966	4	上崎美恵子文/ 岸田はるみ絵	おかしのおうち	めばえ 9(1)	小学館
111	1966	8	松本零士絵	おかしのいえ	よいこ 11(5)	小学館
112	1966	9	宮脇紀雄文/ 林義雄絵	おかしのいえ	グリムの童話	小学館
113	1966	11	植田敏郎訳/ 吉井忠絵	ヘンゼルとグレーテル	グリム名作集	講談社
114	1967	4	藤城清治文/ 木馬座制作	ヘンゼルとグレーテル	キンダーおはなし えほん 1(1)	フレーベル館
115	1967	5	高橋真琴絵	おかしのいえ	小学一年生 23(2)	小学館
116	1967	9	藤原一生文/ 深沢邦朗絵	ヘンゼルとグレーテル	ヘンゼルとグレーテル	小学館

117	1967	10	浜田廣介文/ 西村保史郎絵	ヘンゼルとグレーテル	グリム童話	偕成社
118	1968	1	高橋真琴絵	おかしのおうち	幼稚園 20(10)	小学館
119	1968	4	手塚富雄訳/ 井上洋介絵	ヘンゼルとグレーテル	グリム童話集	河出書房
120	1968	4	岡田久子文/ 岸田はるみ絵	おかしのいえ	ディズニーランド 5(4)	講談社
121	1968	6	生源寺美子文/ 鈴木未央子絵	ヘンゼルとグレーテル	ニルスのぼうけん	講談社
122	1968	8	まどみちお文/ 岸田ハルミ絵	おかしのいえ	よいこ 13(5)	小学館
123	1968	不明	村岡花子文/ 吉崎正己絵	ヘンゼルとグレーテル	ヘンゼルとグレーテル （どうわ絵本）	偕成社
124	1969	5	人形劇団ひとみ 座制作部	ヘンゼルとグレーテル	ふしぎな国のヘンゼルとグレーテル	人形劇団ひとみ座制作部
125	1969	5	久保喬文/ 小坂茂絵	おかしのいえ	小学一年生 25(2)	小学館
126	1969	7	大塚勇三訳/ 堀内誠一画	ヘンゼルとグレーテル	ヘンゼルとグレーテル （グリム童話集 2）	学習研究社
127	1969	11	辻まさき文/ 佐川節子絵	おかしのいえ	よいこ 14(8)	小学館
128	1970	1	土家由岐雄文/ せおたろう絵	おかしのおうち	おかしのおうち （小学館幼児絵本）	小学館
129	1970	1	不明	おかしのいえ	ベビーブック 3(10)	小学館
130	1970	12	藤川圭介文/ 瀬尾太郎絵	おかしのいえ	ディズニーランド 7(15)	講談社

2) Ⅱ期(1946-1970)の邦訳について

戦後、読み物の統制が廃止されると出版物が著しく増加する。「ヘンゼルとグレーテル」の話も多く出版される。Ⅱ期は戦後から新著作権法実施前年までを対象とする。Ⅱ期の邦訳は 91 話存在する。そのうち原典に忠実な邦訳は 23 話 41 42 43 45 46 47 53 54 58 60 66 68 69 72 73 82 87 88 92 94 113 119 126 である。ただし「魔女」(Hexe)については「鬼婆」「魔法使い」と訳しているものも含めている。原典から改変された邦訳は 29 話 40 52 55 56 61 62 65 79 83 84 86 89 90 95 96 97 99 101 102 105 108 116 118 120 121

123 124 125 128 である。改作された邦訳は 31 話 44 49 51 59 63 67 70 75 76 77 78 81 85 91 93 98 100 103 104 106 107 109 110 111 112 115 117 122 127 129 130 存在する。そのほかにグリム版ではなくベヒシュタイン版の邦訳が 1 話 80、フンパーディンクのオペラを混成にした話が 5 話 57 64 71 74 114 、ほかのグリム童話の話を混成したものが 1 話 48、初稿版が 1 話 50 存在する。特筆すべきは、子捨てのない話が 33 話あり、子捨ての提案者が変更されている話が 12 話存在することである。また題名が「ヘンゼルとグレーテル」ではなく「お菓子の家」(おかしのおうち)に変更されているものが 38 話存在する。Ⅱ期には改変や改作が行われているものが多い。なぜなのか、その理由を探るため、改変、改作されている話をいくつか取り上げて詳細に見ていくことにする。しかしその前に 1949(昭和 24)年に出版された田中梅吉訳『祖稿グリム童話全集』について述べる。これは、1927 年にドイツで出版されたヨゼフ・レフツ編『エルザスのエーレンベルク修道院の手書き原稿に基づいたグリム童話の初稿』の全訳本である。グリム童話の受容において大きな意味を持つものであるため最初に紹介する。

3) Ⅱ期(1946-1970)に出版された初稿訳について

1949(昭和 24)年 11 月に、田中梅吉が日本で初めて初稿(手書き原稿)の全訳本を出版している。書名は『祖稿グリム童話全集』である。グリム兄弟がブレンターノに送っていたとされる初稿原稿は、長らく不明であった。田中が底本としたテキストは、1927 年にヨゼフ・レフツ(Joseph Lefftz 1888-1977)が出版した『エルザスのエーレンベルク修道院の手書き原稿に基づいたグリム童話の初稿』(*Märchen der Brüder Grimm Urfassung nach der Originalhandschrift der Abtei Ölenberg im Elsass*)である。田中の目次は、話の提供者別に話が集められている。それによると、ヴィルヘルムによるものが 14 話、ヤーコプによるものが 27 話、信頼しうる人たちによるものが 7 話である。ここには初稿原稿の 48 話がすべて収録されている。これを見ると、最初はヤーコプが主導権を握って昔話の収集に取り組んでいたことが判明する。「ヘンゼルとグレーテル」は初稿では「兄と妹」なので、田中訳では「兄さんと妹」という題名で収録されている。この話の提供者はヴィルヘルムである。

【図 17】ルートヴィヒ・エーミール画?
「兄さんと妹」

田中訳は原典に忠実であるが、「パン焼き竈」が「パン焼きストーブ」、「家畜小屋」が「豚小舎」、「魔女」が「妖婆」と訳され、結末は「母親は死んでいた」(die Mutter aber war gestorben)が「お母さんは死んでしまいました」と訳されていて、過去完了形が正しく訳されていないという間違いがある。

しかしこの当時、日本で初稿が全訳されて出版されていたという事実は特筆すべきものである。田中が行った仕事は、研究者として高く評価されるべきものである。

4) Ⅱ期(1946-1970)に改変、改作されている話

(1) 子捨てのない話

① 土川留女子文/耳野卯三郎絵「へんぜるとぐれえてる」(1953) 59

ヘンゼルとグレーテルは両親と共に薪採りに行き、森の小屋で留守番をするのだが、花を摘んでいるうちに道に迷う。森には魔法使いがいて2人を歓待するが、翌日から2人は共に働かされる。そして2人は魔法使いのいない隙に宝物を略奪する。魔法使いは2人を追いかけるが、追いつけず逃がしてしまう。2人が帰宅すると母親がいて「おかあさん」と言って抱きつき、母も力いっぱい子どもを抱きしめる。

【図18】耳野卯三郎画「へんぜるとぐれえてる」

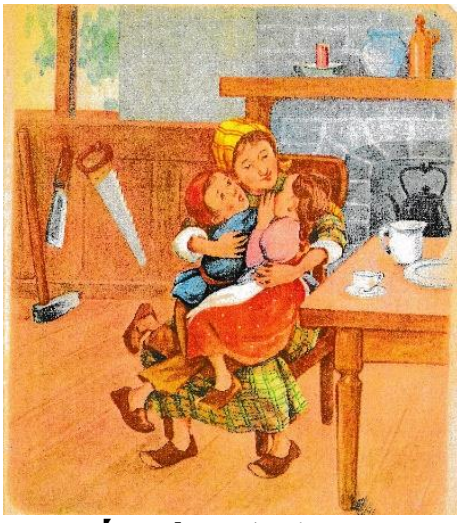
この話の母親は実母で、両親による子捨てがなく、子どもたちは自らの不注意で道に迷う。魔法使いの家では2人は共に働いており、原典とは異なる。魔法使いは焼死することなく、生存していて残酷な場面はない。しかし2人は宝物を略奪するので盗みを働いていることになる。2人が帰宅したとき迎えるのは母親のみで、父親の存在については述べられていない。原典では父親のみが家にいるのだが、ここでは母親のみが在宅している。父親は仕事に行き、母親は家で家事と育児をする存在ということであろうか。「男は仕事、女は家庭」という近代家族の姿が描かれているようである。さらに挿絵の中心には、2人を抱きしめている愛情深い母親の姿が描かれているのである【図19】。

この話が収録されている『ありばばのぼうけん』のあとがきには、「捨て子」という表現を避けたと書かれている[299]。子どもを捨てたり、魔法使いを焼き殺したりする残酷な描写はすべて削除され、ヘンゼルとグレーテルが痛快な冒険をする話として描かれているのである。作者は土川留女子(1916-不明)で、志賀直哉の次女である。留女子は奈良女子高等師範学校を卒業後、親の勧める結婚をする。しかし、その結婚生活は1年に満たないものであった[300]。直哉は「自分の言ひなりに嫁がせてつらい思ひを味はせた」と述べ、結婚の事

[299] 【表7】の資料番号 59 49頁。

[300] 『人事興信録』下巻 人事興信所 13版 1941年 ナの部 162頁。弦巻克二他「池田小菊関連書籍－志賀直哉未発表書簡を求めて－」『叙説』(33) 奈良女子大学文学部國語國文学研究室 2006年 261頁。

実は戸籍には記載されなかった[301]。この結婚については明確にされていないが、留女子は男爵である長與太郎の妻であったことは事実である[302]。その後留女子は 1942(昭和 17)年 12 月に音楽家の土川正弘(1906-1947)と結婚する。彼女がこの話を発表したのは、夫を亡くした 6 年後のことである。幼い娘 2 人を育てるのに手一杯の頃であったという[303]。ヘンゼルとグレーテルが無事帰宅したとき、父親ではなく母親が 2 人の子どもを抱きしめるのは、この話に彼女自身を重ね合わせていたのかもしれない。それゆえ、子どもたちに読み聞かせるために残酷な場面を削除し、子どもの冒険物語にすり替えたのであろう。また近代家族では子どもたちが帰宅するとき迎えるのは母親であり、父親ではない。この話は典型的な昭和期の近代家族の実状に合わせて書き換えられたものといえよう。



【図 19】耳野卯三郎画
「へんぜるとぐれえてる」

② 小出正吾文/花野原芳明絵「へんぜるとぐれーてる」(1958) 85

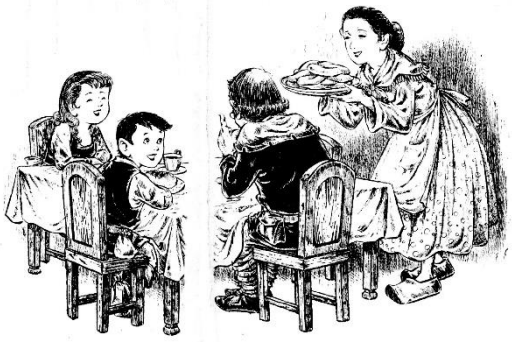
ヘンゼルとグレーテルは薪採りに行き道に迷い、お菓子の家を見つける。そこには魔法使いがいて 2 人を歓待する。翌朝グレーテルは魔法使いを焼き殺す。その後 2 人は子どもたちを探していた両親と再会し喜び合い、4 人で楽しく食事をしながら談笑する。

両親による子捨てがなく、子どもたちは自らの不注意で道に迷う。魔法使いの家から 2 人が帰宅すると、母親は家族のために食事を準備する。挿絵にはテーブルに食事を運んでいる母親、そのテーブルで子どもたちと話をする父親が描かれている【図 20】。ヘンゼルは「まほうつかいのおばあさんのすばらしいごちそうよりも、うちのぱんのほうが、よっぽどおいしいや」と言い、グレーテルは「そうよ。まほうつかいのおかしのおうちより、ここのおうちのほうが、どんなにいいか、わからないわ」[304]と言う。原典にはこのような言葉はない。

小出正吾(1897-1990)は静岡県三島市の出身である。1912 年に洗礼を受けたキリスト教徒である。1918(大正 7)年に早稲田大学商科を卒業後、南洋商会に入社する。1921(大正 10)年から出張で 10 か月間インドネシアのジャワ島に滞在する。滞在中、その地で伝えられている民話の数々を採集し、日本昔話の数種の原話を見出す。植民地での被統治民族の

[301] 阿川弘之『志賀直哉』上巻 岩波書店 1994 年 7 月 244 頁。
[302] 『人事興信録』下巻 人事興信所 13 版 1941 年 ナの部 162 頁。
[303] 阿川弘之 前掲 245 頁。
[304] 【表 7】の資料番号 85 54-55 頁。

実態に触れ、世界平和を心から願ったという[305]。1922(大正 11)年に帰国し、会社を退職する。同年山田静と結婚し、文学を独学する。『福音新報』において少年少女向けに毎週童話を執筆するようになる。1927(昭和 2)年には最初の童話集『ろばの子』を出版し、童話作家の仲間入りを果たす。1931(昭和 6)年に童話作家協会会員となる。1935(昭和 10)年には明治学院高等学部社会事業科(現明治学院大学社会学科)の主任教授となり、戦時体制下の児童福祉施設の現場に接し、恵まれない子どもを主題にして創作するようになる[306]。戦後は三島市に帰郷し、1948(昭和 23)年に三島市 PTA 連合会長に就任し、1951(昭和 26)年には三島市教育委員長に就任する[307]。他にも三島文化協会総代、三島市子供会連絡協議会会長、三島市誌編纂委員を務める[308]。1966(昭和 41)年から 1972(昭和 47)年まで日本児童文学者協会会長を歴任する。1967(昭和 42)年には、日本児童文芸家協会より児童文化功労者、1978(昭和 53)年には静岡県知事より教育学術文化功労者として表彰される人物である。



【図 20】花野原芳明画
「へんぜるとぐれーてる」

小出は子捨てや宝物略奪を省略している。子捨てについては子どもを遺棄することを禁じているキリスト教信者だから削除したのであろうか。それとも彼は、戦時中に恵まれない子どもと接する機会が多かったので、子捨てを描くことに抵抗感があったからであろうか。宝物略奪については、彼は PTA 会長や教育委員長を務めていたため、子どもが他人の物を盗む行為を描くことを潔しとしなかったからであろう。しかし悪人のレッテルを貼られている魔法使いの殺害は省略していない。ようするに他人を排除し、血縁関係で結ばれた家族の団結力を誇示しているのである。この話は、子どもが勝手に道に迷った結果、困難に遭遇し、それに打ち勝って家に戻り「貧しくても楽しい我が家」を実感した話になっている。ようするに小出は「子捨て」の話を「細やかな愛情で包まれた近代家族」の価値観を強調する話に改変したのである。

③ 波多野完治、波多野勤子監修/相賀徹夫編/小田忠絵『おかしのおうち』(1960) 93

登場人物は、樵の父親、母親、ヘンゼル、グレーテル、山に住む魔法使いである。ある日、4 人で山へ木を伐りに行き、ヘンゼルとグレーテルは道に迷う。そこへ白い鳥が飛んできて 2 人を「おかしのおうち」に導く。空腹の 2 人が喜んで家を食べていると、魔法使

[305] 小出正吾『童話から童話へ』教文館 1980 年 11 月 236 頁。
[306] 大阪国際児童文学館編 前掲書 287 頁。
[307] 小出正吾 前掲書 1980 年 322 頁。
[308] 同上 322-323 頁。

いはヘンゼルを小屋に入れて、彼にのみ毎日ご馳走を食べさせる。グレーテルは魔法使いに竈の火を見るように言いつけられると、機転を利かして逆に魔法使いを竈の中に入れて鍵をかけてしまう。その後 2 人は魔法使いの宝物を略奪して帰宅する。家では両親が喜んで 2 人を出迎える。

土川と小出同様、この話は両親による子捨てがなく、子どもたちは自らの不注意で道に迷う話になっている。特筆すべきは、グレーテルが魔法使いを竈の中に入れるとき、魔法使いが焼死したとは書かれていないことである。残酷な場面を言葉で表現していないのだ。しかし魔法使いの宝物は略奪する。2 人が帰宅したときの挿絵には、母親は床に座り込みヘンゼルを抱きしめ、父親は床に膝をつき走ってくるグレーテルに手を伸ばす場面が描かれている。両親はどちらも低い姿勢となり、子ども目線で 2 人を出迎えている【図 21】。これらの挿絵から、両親の子どもに対する愛情の深さが見てとれる話にしていることがわかる。

この絵本の監修者は、心理学者の波多野完治(1905-2001)と児童心理学者の波多野勤子(旧姓畠山 1905-1978)である。文作者は記載されていない。勤子は 1927(昭和 2)年に日本女子大学英文学部を卒業後、1928(昭和 3)年に日本女子大学児童研究所所員となる。1930(昭和 5)年に波多野完治と結婚し、1937(昭和 12)年には東京文理科大学(現筑波大学)教育相談員兼心理学科の補佐員となる。『おかしのおうち』が出版された 1960(昭和 35)年は、勤子が日本児童研究所を創設して所長に就任した年である[309]。勤子はこの絵本のあとがきで「継母」と「子捨て」について述べている。継母については「世の中には、継母だっていい人はたくさんいます。それなのに継母といえばみんな悪いように思われてはたまりません。こどもにとってもそれはつらい悲しいことです。ことにこの愛読者の中にも、そういう関係にいらっしゃる方がないとはいえません。そこで、継母ということには一切触れないことにしました」[310]とある。このことは、戦後の家庭環境に配慮したものと解釈できる。現実に戦争で片親を失くした子ども、継母、継父が多く出現した社会的状況が存在したからである。そして勤子自身も里親であった。勤子は、4 人の息子を持つ母親であるが、末息子が小学 2 年生のときに母親を失った 4 歳の女の子を引き取り育てているのである[311]。勤子自身が血縁関係のない子どもを育てた経験が

【図 21】小田忠画『おかしのおうち』

[309] 大泉溥編『日本心理学者事典』クレス出版 2003 年 2 月 854 頁。
[310] 【表 7】の資料番号 93 「ママのてびき」2 頁。
[311] 波多野勤子『道－愛情の記録－』文藝春秋新社 1958 年 6 月 18 頁。

あるために継母という言葉を敬遠したのであろう。一方、夫の完治は継母に育てられ継母に対して良い印象をもっていなかった[312]。それゆえ両者とも絵本に継母が登場することを避けたのかもしれない。子捨てについては「お話だとわかっていても、子どもにはかなり不安を与えることなので」という理由で迷子になったことにしている。野口芳子が「貧しくて、食べ物がなくなったので困惑し、子どもを森に捨てようとする母親から、優しくて、献身的に家族に尽くす理想の母親になって」[313]いると主張しているように、この本の母親は原典の母親像から異なるものになっているのである。勤子は 4 歳の子どもに与える絵本について「このころになると、そらで文章をすっかりおぼえてしまうから、正しいコトバであること、いい文章であることが必要である」[314]と述べている。残酷な表現は削除し、やさしく愛情深い表現のみを使うように配慮した勤子の監修によって、現実離れした「やさしさ」を強調する絵本が創出されたのである。

(2) 父親が子捨ての提案をする話

①土家由岐雄編著「ヘンゼルとグレーテル」(1957) 77

食べ物がなくなったため父親が子捨てを提案する。母親は実母で子捨てに同意する。1 回目の子捨てでは、ヘンゼルはグレーテルをおんぶして帰宅する。2 回目の子捨てで道に迷い、ヘンゼルは月を見上げて「ぼくたちは、なんにもわるいことをしないのに、なぜ、こんなかなしいめにあうのですか」という言葉を投げかける。その後お菓子の家を見つけて魔法使いに歓待されるが、ヘンゼルは牢屋のような部屋へ入れられ、グレーテルは労働をさせられる。グレーテルの機転により、魔法使いは竈の中へ入れられる。2 人は「はやくかえろう。おとうさんがまっている」、「おかあさんもしんぱいしている」と言う。2 人は魔法使いの金貨や銀貨、宝石を略奪し、川にいる白鳥に救助を頼む。白鳥は擬人化され、2 人と会話する。2 人が無事帰宅すると、両親は子捨てを後悔して泣いている。2 人は両親に略奪した物をおみやげと言って渡す。最後は「ヘンゼルも、グレーテルも、もうすてられることはないでしょう。うちじゅうあかるく、たのしく、くらすことでしょう」で終わる。

明治期にばんすゐ(土井晩翠)訳『寶の箱』(1905) 4 で継父が子捨てを提案するという話があるが、実父として子捨てをするのはこの話が最初である。土家由岐雄(土屋 1904-1999)は、東京生まれで、小学校卒業後、家の窮状を見かねて自ら三菱合資会社の店童(てんどう)とよばれていた給仕として勤務する[315]。1922(大正 11)年に三菱の給費で東京工科学校(現日本工業

[312] 波多野勤子 前掲書 1958 年 23 頁。
[313] 野口芳子 前掲書 1994 年 107-108 頁。
[314] 波多野勤子『幼児の心理』光文社 1954 年 5 月 164 頁。
[315] 井上こみち「童句・童謡に夢を託す八十代青年土家由岐雄先生を訪ねて」『児童文芸』33(10) 1987 年 10 月 35 頁。

大学)採鉱冶金科を卒業し、三菱の社員としてシンガポール支店に勤務するが、その後本社に戻り退職し、童話の創作活動をするようになる。1955(昭和30)年5月に日本児童文芸家協会の創立総会が開かれた際には、役員の理事として名を連ねている[316]。

土家は父親を理性的な存在に、母親を父親に従う存在として描いている。原典では優柔不断で感情的な父親と、生きていくために子捨てを提案する理性的な母親が登場する。しかし土家は、母親が悪者とされている話ではなく、扶養の責任者である父親が子捨てをする話に改変し、近代家族における父親像に書き換えたのである。物価高で子捨てをせざるを得ない状況になり、不本意ながら悲しい決断をした父親は残酷ではなく、むしろ悲しい存在として描かれている。ヘンゼルがグレーテルをおんぶするという行為は、男の子の強さと逞しさを強調し、近代の「男の子らしさ」を強調している。さらにヘンゼルが月を見上げて発する言葉は原典には存在しない。経済力不足からの子捨ては子どもに原因があるのではなく、父親に原因があるのだが、インフレが原因ならばそれを招いた為政者に原因があるといえよう。彼は「ヘンゼルとグレーテル」においてインフレを引き起こした社会に対して為政者の責任を訴えているとも読める。

土家は、1951(昭和26)年に戦時中の動物園を描いた「かわいそうなぞう」を発表している[317]。彼は子どものときから「正義感の強い立派なものを書きたいと思って」[318]いて、生涯平和を願った人物である。そして子どもたちは捨てられたにもかかわらず、両親の元に早く帰ろうとする。土家はあとがきで「子どもたちは、両親のそばにいる有難さを感謝して、親というものをあらたにみなおすことでありましょう」[319]と述べている。たとえ実の両親が過ちを犯しても、血縁関係で結ばれた親子の絆は普遍的であるということを強調しているのである。

② 宮脇紀雄文/鈴木未央子絵「ヘンゼルとグレーテル」(1957) 78

父親は子どもたちが飢え死にするのを見るのが耐えられなくて、子捨てを提案し母親と共に実行する。母親は実母である。2 人は森で迷子になるとお菓子の家を発見する。その家は屋根がチョコレート、壁がパン、窓が白砂糖、柱がビスケット、庭の小石が飴玉、階段がカステラでできている。2 人が家を食べていると魔法使いが出現し、2 人をミルク、卵焼き、ケーキ、りんご、クルミなどのご馳走で歓待する。その後ヘンゼルは捕らえられ、グレーテルは働かされる。そしてグレーテルの機転により、悪事をはたらいてきた魔法使いは神様のばちがあたり焼死する。2 人は金貨や銀貨、真珠を略奪し、白鳥の救助で無事

[316] 福田清人他編『日本児童文芸史』三省堂 1983 年 6 月 245 頁。
[317] 土家由岐雄「かわいそうなぞう」塚原健二郎他編『愛の学校 2 年生』東洋書館 1951 年 122-132 頁。
[318] 岡信子「対談土家由岐雄先生　童話への夢そして、出会い」『児童文芸』39(5) 日本児童文芸家協会 1993 年 5 月 56 頁。
[319] 【表 7】の資料番号 77 217 頁。

帰宅する。家では両親が泣いており、2 人が略奪した宝物で楽しく暮らすのである。

宮脇はあとがきで「この本では、おもしろくてたのしいお話だけをえらんで集め、それを子供たちに読みやすいように、やさしい表現で書きました。また、話のなかのあまり残酷なところなどは、適当に省略した」としている。彼はリライトしていることを公言しているのである。

宮脇紀雄(1907-1986)は、岡山県に生まれた童話作家である。1921(大正 10)年に吹屋尋常高等小学校高等科を卒業する。14 歳のときに母親と死別し、学校の教員になることを希望していたが、長男として家業の農業に従事する[320]。24 歳のときに再婚した父への反発から家を出て、岡山市内の書店に勤務する。独立して樹木社書店を経営するが、2 年後に倒産する。本屋を営んでいるときに『週刊朝日』の懸賞読物に入選し、坪田譲治、土師清二を訪ね、土師清二のもとで約 1 年間書生として過ごす。屑屋をしていた 31 歳のとき、懸賞小説に応募した作品が 1 等に入選し『講談倶楽部』に掲載される。1943(昭和 18)年 3 月に坪田譲治夫妻の媒酌で結婚し、1 男 2 女に恵まれる[321]。宮脇は「小説も書いていたが、採用されるのは童話であり、児童文学を深く愛していたとはいえない」[322]と、自分の児童文学観を述懐している。児童文学は彼にとって生活をするためのものであったようだ。しかし彼は、日本児童文芸家協会には創立から参加し、浜田廣介に学んでいる[323]。

宮脇が童話を書き続けたのは幼い頃死に別れた母親への慕情だという[324]。そのためであろうか。この話のなかでの母親は、父親の提案にしたがい子捨てを実行するものの、悪者ではなくむしろ優しい存在として描かれている。しかし魔法使いは悪者であり、とくにグレーテルが反抗すると暴力を奮う存在として描かれている。子どもたちは帰宅後、宝物を両親におみやげとして渡す。魔法使いは悪人で他人であるため排除される存在、一方、家族は血縁関係で結ばれた身内であるため、たとえ過ちを犯しても容認し愛情を抱き続ける存在であるということを伝えているかのような本である。

③ 浜田廣介文/西村保史郎絵「ヘンゼルとグレーテル」(1967) 117

貧しくて食べる物がなく養育できない父親は、妻に子捨てを提案する。妻も「その方が幸せなのかもしれない」と同意する。両親は子捨てを実行する。1 回目の子捨てでは、子どもたちは帰宅し、両親はもっと奥へ置き去りにしようとささやきあう。2 回目の子捨てでは子どもたちは迷子になり、白い鳥の導きでお菓子の家を見つける。その家はビスケット、あめんぼう、カステラ、チョコレートでできている。そこへ気味の悪い魔法使いが現

---

320 岡長平『宮脇紀雄 人と作品』岡長平(私家版) 2016 年 4 月 4 頁。
321 同上 15 頁。
322 こどもの本編集委員会編『こどもの本』10(7) 日本児童図書出版協会 1984 年 7 月 20 頁。
323 日本近代文学館編『日本近代文学大事典』3 巻 講談社 1977 年 11 月 325 頁。
324 こどもの本編集委員会編 前掲書 1984 年 20 頁。

れ、2 人を「パン、ハム、スープ、卵焼き、バタ焼きのいも、赤いりんご」で歓待する。魔法使いは、ヘンゼルを捕らえ、グレーテルを働かせる。魔法使いはヘンゼルを煮ようとするが、グレーテルの機転で逆に竈の火の中へ入れられてしまう。ただし、焼死したとは書かれていない。グレーテルはヘンゼルを救出し、魔法使いの宝石と金貨を奪う。川には白鳥がいてヘンゼルが呼びかけて渡してもらう。2 人が帰宅すると両親は喜び、謝罪する。そして「いいんだよ。いいおみやげを、どっさりもってこれたんだもの」というヘンゼルの言葉で終わる。

浜田廣介(広助 1893-1973)は、山形県生まれの児童文学者である。1914(大正 3)年に農業を営んでいた生家が破産する。同年 3 月に山形県立米沢中学校(現米沢興譲館高等学校)を卒業し、4 月に早稲田大学高等予科に入学する。1918(大正 7)年に早稲田大学英文科を卒業し、コドモ社の社主である木元平太郎の誘いを受け入社し、『良友』の編集者となる。1920(大正 9)年に退社後、精華書院、実業之日本社に務める。1923(大正 12)年 9 月、関東大震災により実業之日本社の社屋が倒壊消失したため退社し、文筆業に専念する[325]。1955(昭和 30)年には日本児童文芸家協会の初代理事長となり 10 年間在職し、1965(昭和 40)年には会長に就任する。日本児童文芸家協会には、創立のときから土家由岐雄が貢献している。浜田は幼い頃、母方の祖母や母親から昔話を聞いており[326]、とくに継子いじめの話を繰り返し聞き、かわいそうで哀れな話を好んだという[327]。中学生のときに両親の関係が不和になり、母親は廣介を置いて実家へ帰る。

浜田の「ヘンゼルとグレーテル」は、両親の身勝手さが表れているものである。貧しいときには子どもを邪険に扱い、経済的に豊かになると子どもを大切にしようとする。最後にヘンゼルはそのような両親に対して、健気な言葉を発する。この言葉は原典にはない。浜田は再話に対して「作家の側には、むかし話を取扱って自分なりに仕上げてみたい、あるイメージが浮かんでくる。そこにおぼえる興味とともに意欲が出てくる。こうなって、作家の筆が動き出すのは、作家における性質で、やむをえないとなるのである。むかし話を素材にして、文学として自分の作を出してみようというこころみでは、作家は自由にその意図を伸ばしてよいといえる」[328]と述べている。さらに浜田は、金田鬼一の翻訳である岩波文庫を参考にして「グリム童話にかかわるかぎり、その翻訳を基本」[329]として、「児童雑誌の編集者から、あるいは児童本の発行所から頼まれて、グリム童話を幼童向きに再話した」[330]と述べている。また「訳者の側に立つのではなく、作者といえる性質から、それ

---

[325] 浜田留美『父浜田廣介の生涯』筑摩書房 1983 年 10 月 206-208 頁。
[326] 同上 7 頁。
[327] 畠山兆子他『小川未明　浜田広介』大日本図書 1986 年 10 月 126 頁。
[328] 浜田廣介「作家の意欲」『児童文芸』14(3) 日本児童文芸家協会 1968 年 3 月 3 頁。
[329] 浜田廣介「金田先生ご夫妻のこと」『児童文芸』19(10) 日本児童文芸家協会 1973 年 10 月 190 頁。
[330] 同上。

らの再話は自分の好みをまじえることになった」[331]と述懐している。この「ヘンゼルとグレーテル」も浜田自身の翻訳ではなく、創作を加えていることが読み取れる。結末のヘンゼルの「善意」と取れる言葉も浜田の創作であろう。畠山兆子は「広介童話の基底には、ささやかなものへの愛、弱者への思いやり、自分を捨てても他人に尽くそうとするやさしさがある。そのような『善意』への賛美がある」[332]と表現している。幼い頃から哀れな話を好み、多感なときに孤独を味わった廣介である。それゆえに、ヘンゼルの最後の言葉にあるように、彼は人生の哀れさを伝え、善意こそが幸せにつながることを伝えているのではないだろうか。

(3) 実母が子捨ての提案をする話

① 宮脇紀雄文/林義雄絵「おかしのいえ」(1966) 112

実母が子捨ての提案をする。両親は「かわいい子どもを捨てたくない」、「森へ棄てれば木の実を食べて大きくなるだろう」と言い、子捨てを実行する。子どもたちは森で迷い、チョコレート、カステラ、飴、ドーナツでできたお菓子の家を発見する。そこには悪い魔法使いがいて、ヘンゼルは捕らえられ、グレーテルは働かされるが、グレーテルの機転により魔法使いは焼死する。その後 2 人は「魔法使いが盗んだ宝物を返してあげよう」と言い、持ち帰る。家では両親が子どもたちのことを心配している。子どもたちは母親が森へ探しに行っているときに帰宅する。父親は「もう離さない」と言って喜ぶのである。

この話は実母が生存しているという設定である。両親は子どものためを思い、子捨てを実行する。子どもたちは宝物を奪うのではなく、元の持ち主に返すつもりで持ち帰ったのである。つまり、子どもたちの行為は強盗ではなく、本来の持ち主に返すための「正義の行為」であったと主張しているのである。

② 生源寺美子文/鈴木未央子絵「ヘンゼルとグレーテル」(1968) 121

食べ物がなくなり実母が「悲しそうに」子捨てを提案し、実行する。子どもたちは両親と「はぐれた」という。2 人はチョコレート、カステラ、飴でできたお菓子の家を発見する。魔法使いはヘンゼルを鳥かごに入れ、グレーテルは薪拾いをする。グレーテルの機転により魔法使いは死亡し、2 人は宝石を持ち帰る。帰宅すると母親は悲しみのあまり死亡していて、父親が出迎える。

この話は実母で、食べ物がなくなったために仕方なく子捨てを提案する。子どもたちは捨てられたにもかかわらず、両親と「はぐれた」ことになっていて、両親の悪意からではなく偶然に起きた出来事のように描かれている。帰宅した家には父親のみが在宅している。

---

[331] 浜田廣介 前掲書 1973 年 190 頁。
[332] 畠山兆子他 前掲書 1986 年 146 頁。

母親が死亡したのは子どもたちを失った悲しみが原因とされている。子を想う母性愛が強調された話に改変されているのである。

生源寺美子(1914-2015)は、奈良県で生まれた児童文学作家である。幼少時は父親の転勤で東北、関西、朝鮮などの各地で過ごす。京城高女、大邱高女、自由学園高等部などで学ぶ。1955(昭和 30)年に与田準一の指導のもと、岩崎京子らとともに児童文学の同人誌『童話』を創刊し、以後児童文学の創作に取り組むのである[333]。

(4) 魔女が生存している話

① 野長瀬正夫文/佐藤湊子画「お菓子の家」(1954) 63

樵の父親とヘンゼルとグレーテルの 3 人家族が仲良く暮らしている。しかしお金がなく食べ物が買えなくなると、よそのおばさんが子どもは邪魔だからと言い、子捨てを提案し実行する。子どもたちは森でおいしいパンとクリームでできたお菓子の家を見つける。魔法使いはヘンゼルを檻に入れるが、グレーテルには労働を課さない。グレーテルは魔法使いを竈の中に押し入れ、魔法使いは大火傷を負うが死なない。2 人が帰宅すると父親は喜び、3 人仲良く暮らす。

野長瀬正夫(1906-1984)は、奈良県に生まれた詩人である。私立十津川中学校文武館を卒業後、6 年間郷里で小学校教師を務める。1929(昭和 4)年に上京し、詩作や編集に携わる。昭和初期にプロレタリア文学運動に関わる。

野長瀬の話は、父親と子ども 2 人の 3 人家族で、母親が登場しない。子捨てを提案するのは他人である。森ではグレーテルは労働することなく、魔法使いは火傷を負うのみで死亡しない。2 人は魔法使いの宝物を略奪するとは書かれていないが、帰宅したときには宝物をお土産として持ち帰る。子どもの殺人行為を傷害行為に改変し、略奪行為も魔法使いからの贈答品を思わせる「お土産」という言葉で表現し、犯罪と気づかれないよう配慮している。子捨ての提案者であるよそのおばさんの所在は不明であり、魔法使い同様、死について触れていない。お金がないという表現は現実的な問題であるが、残酷な場面を曖昧にして、親子 3 人での暮しを強調したものになっている。

② 槇本楠郎文/鈴木未央子絵「ヘンゼルとグレーテル」(1962) 101

ひどい日照りで、子どもたちのことが心配な父親は継母に相談する。継母は子捨てを提案する。お菓子の家にたどり着いた 2 人は、魔法使いに歓待される。翌日ヘンゼルは捕らえられ、グレーテルは毎日ご馳走を運ぶ。グレーテルは魔法使いを力いっぱい突き飛ばし、よぼよぼの魔法使いは腰を打ち動けなくなる。子どもたちが帰宅すると、継母は病気で死亡している。親子 3 人、貧乏でも楽しく幸せに暮らす。

---

[333] 日本児童文学学会編『児童文学事典』東京書籍 1988 年 4 月 376 頁。

槇本楠郎(楠男 1898-1956)は岡山県出身で裕福な農家に生まれる。1917(大正 6)年に早稲田大学予科に入学し、1919(大正 8)年頃には中途退学する。1920(大正 9)年に結婚するがその後実家が破産し、しばらく農業に就く。1927(昭和 2)年に上京し東京毎夕新聞社に入社する。1928(昭和 3)年に全日本無産者芸術聯盟に参加する。その後全日本無産者芸術団体協議会（ナップ）に改組する。同年『戦旗』に「文化村を襲った子供」を発表する。この話はプロレタリアの子どもが金持ちの文化村の子どもに対してデモ行進するもので、遊びのなかに労働闘争を取り入れ、子ども社会にも貧富の差があることを明らかにしている。1929(昭和 4)年に新興童話作家聯盟の機関誌『童話運動』が創刊されると、編集部員として参加する。旧ナップ文学部は日本プロレタリア作家同盟と改称する。1932(昭和 7)年には日本プロレタリア作家同盟に加盟していることで治安維持法に触れそうな緊迫した状況となり、作家同盟を脱退する。1938(昭和 13)年には童話「母の日」で第 1 回童話作家協会・金の星社童話賞を受賞する。その後病床にありながら作品を書き続ける。

この話が発表されたのは槇本の没後であり、いつ執筆されたものか定かではない。おそらく浜田廣介と親交があったため出版に至ったと思われる。子捨ての提案をする継母は死亡しているが、魔法使いの焼死と宝物略奪という残酷な場面はなく、貧しくても実の親子と暮らすことの幸せを描いている。本のあとがきで浜田廣介は「日常生活の中で、子どもたちは兄や弟、姉や妹などを愛情の対象として意識することは、少ないと思います。その意味で、反省の材料となる作品」と解説している。浜田は兄弟愛の美しさを強調しているのだが、この話はそれだけではない。魔法使いを焼死させないのは、子どもに殺人行為をさせたくないという作者の配慮なのではないだろうか。娘のナナ子は、槇本は生涯生活が苦しい身の上であったが、子煩悩であったと発言している[334]。子どもたちの魔法使い殺害を傷害にとどめ、宝物略奪の場面を削除し、貧しくても幸せな家族という結末を強調したのは、プロレタリア作家としての槇本の貧困者へのエールではないだろうか。貧困者でも罪を犯さず、誠実に生きている人びとが数多くいることを知っていた槇本ならではの改変といえよう。

5) 家族の在り方

土川、小出、波多野の話は、子捨てを省略して、家族間の愛情を強調したものに変わっている。とくに土川は寡婦であり、一家を支える女性であった。働き手の夫を失い、義母と同居し、子どもの養育を担わなければならなかった頃の執筆である。子どもの成長をなによりも強く望んでいたにちがいない。父親が出現することなく、母親の愛情のみを描くことによって、自分の子どもと同じような境遇にある子どもたちが読んでも、違和感を抱

[334] 槇本ナナ子「父槇本楠郎のこと」『日本児童文学』2(11) 児童文学者協会 1956 年 12 月 30 頁。

かないよう配慮したのかもしれない。波多野は実際に血縁関係のない女の子を育てた経験から、悪者とされている継母のことを書かないという選択をした。彼女は『おかしのおうち』のあとがきでそのことについて解説することにより、世間に継母の立場を理解してもらいたかったのではないだろうか。一方、小出の話は子どもたちが無事帰宅すると、一家団欒で食事をする場面で終わる。土家の話は父親が子捨てを提案し実行するが、子どもたちは両親の元にいたいと願う。宮脇と浜田の話は、父親が親権を握っていることを示していると読める。小出、土家、宮脇、浜田は男性であり、扶養者の立場を強調しているとも読める。生源寺は母親が子捨てを提案するが、「悲しそうに」という言葉を付加し、子どもを想う母親の気持ちを表している。野長瀬は母親を登場させず、子どもは働くことなく、死という言葉を避けている。暗い場面を描くことなく、戦後多く存在した片親家族に配慮したのであろうか、親子 3 人の生活の楽しさを伝えている。槇本は子どもたちの残酷な行動を描写せず、貧乏でも家族がいれば幸せだということを強調している。

Ⅱ期においては「近代家族」を描いているものが出現する。西洋では近代家族は戦後の1950 年代から 1960 年代にかけて黄金期を迎える[335]。日本では 1948 年の優性保護法により人口妊娠中絶が合法化され、同時に国策としての避妊も奨励された。都市部ではさまざまな企業で「新生活運動」が唱えられ、「そこから規範として全国に波及したのが、夫婦あたり子どもは 2 人、夫は『企業戦士』で妻は専業主婦という戦後家族の理想像」[336]であった。そのことを裏付ける合計特殊出生率の統計がある。それによると、1940 年では 4.11 人であったのに対して、1960 年では 2.00 人となり出生率が下降し、以後ほぼ横ばい傾向である[337]。「子どもをたっぷりと愛するために子どもの数を制限した」[338]と落合恵美子は述べている。この頃の「ヘンゼルとグレーテル」は、子捨てがなく親の愛情を強調した話に改変されているものが多い。子どもたちが無事帰宅したとき、原典では「父親の首にかじりつく」という表現があり、子どもたちの行動のみが強調されている。しかし昭和Ⅱ期の日本では、父親が帰宅した 2 人をしっかりと抱きしめ、喜ぶ姿が付加されていく。子どもに対する親の愛情が強調されているのである。原典でも 4 人家族(両親と子ども 2 人)の話である「ヘンゼルとグレーテル」は、近代家族の理想像を伝える恰好の話と受け取られ、改変されて普及したのであろう。

6) Ⅱ期(1946-1970)の時代背景

1947(昭和 22)年から 1949(昭和 24)年まで第一次ベビーブームが始まる。1948(昭和 23)年には国民の祝日に関する法律が公布され、「こどもの日」が制定される。これは「こども

[335] 姫岡とし子『ヨーロッパの家族史』山川出版社 2008 年 10 月 85 頁。
[336] 久留島典子他編 前掲書 2015 年 225 頁。
[337] 日本総合愛育研究会編『日本子ども資料年鑑 1991/92』中央出版 1991 年 1 月 44 頁。
[338] 落合恵美子『21 世紀家族へ』有斐閣 新版 1998 年 5 月 62 頁。

の人格を重んじ、こどもの幸福をはかるとともに、母に感謝する」ために定められたものである。翌年 1949(昭和 24)年 5 月 5 日が初の「こどもの日」となる。また 5 月の第 2 日曜日が「母の日」とされ、1949 年 5 月 8 日が初の「母の日」となる。この年は「母親と子どもを大切にすること」が強調された年といえる。おそらく現実には大切にされていなかったからこそ、国が「大切にする日」を設ける必要があったのであろう。厚生省の調べでは「1949 年 1 月現在いわゆる未亡人は約 188 万人、うち 2, 3 割が戦争未亡人」とある[339]。戦後には「戦争未亡人」や困窮した母子が多くいた。1949 年 5 月の特別国会では初めて「未亡人」問題が取り上げられている。決議文には「夫を失った婦人は所謂未亡人と呼ばれ、封建的因襲のままに社会的冷遇をうけ、か弱き女手にいたいけな子供や老人を背負い、社会混乱の渦中に漂流し、或はいばらの道に難行し、その生活苦を原因とする悲惨事件は、近時一層の深刻さを加えているが、これが福祉に関する施策は皆無に等しい」[340]とある。「戦争未亡人」は、国のために戦争に赴いた夫を亡くしたにもかかわらず、冷遇されていたのである。女性は戦争の犠牲者であるのに社会的に差別され、翻弄された存在といえよう。「母の日」が制定された翌年の 1950(昭和 25)年には「父の日」が実施される。この時期に子捨てのない話が出現するのは、「こどもの日」、「母の日」、「父の日」を制定した社会状況を鑑みて、親子間の愛情や子どもを大切にすることを強調する必要があったからであろう。

戦中期に子どもたちから遠ざけられていた外国文学作品は、戦後になって数多く翻訳されるようになる。1950 年に創刊された『岩波少年文庫』(岩波書店)と『世界名作全集』(講談社)の 2 つのシリーズが端を発して、翻訳ブームが起こる。1953(昭和 28)年には日本児童図書出版協会が設立される。これは「児童図書出版文化の向上と優良児童図書の普及」を目的とし、児童図書を出版する 14 社により設立されたものである。この協会は月刊誌『こどもの本』や、おすすめの本を紹介する『ブックガイド(絵本編・読み物編)』を発行し、現在も活動を続けている。また同年には「学校図書館法」が制定され、図書館建設運動が盛んになり、シリーズや全集といった出版物が歓迎されるようになる。その理由は、図書館用であれば、ハードカバーで原典に忠実な邦訳が望まれるからである。さらに 1951(昭和 26)年には村岡花子(道雄文庫)、1955(昭和 30)年には土屋滋子(土屋文庫、入舟文庫)[341]、1958(昭和 33)年には石井桃子(かつら文庫)、1967(昭和 42)年には松岡享子(松の実文庫)が自宅と蔵書を開放した家庭文庫を主宰する。村岡は翻訳家で、土屋は経済的にゆとりのある主婦であった。石井は北米とヨーロッパの児童図書館の活動を学び、松岡はアメリカの児童図書館での勤務経験を持つ人物である。外国児童文学をよく知る村岡、石井、松岡の

---

[339] 阿部恒久他『通史と史料　日本近現代女性史』芙蓉書房出版 2000 年 12 月 152 頁。
[340] 参議院本会議決議本文「未亡人並びに戦没者遺族の福祉に関する決議」参議院 1949 年 5 月。
[341] 尾崎真理子『ひみつの王国　評伝石井桃子』新潮社 2014 年 6 月 423-424 頁。

3 人が文庫活動をしていたことは、都市部の子どもたちに限定されていたとはいえ、社会に大きな影響を及ぼしたと思われる。

4. Ⅲ期の邦訳(1971-1988)

1) 邦訳一覧表【表 8】

番号	年	月	訳者(編者)	題名	出典	出版社
131	1971	6	中川正文文/ 藤井千秋絵	おかしのいえ	小学一年生 27(3)	小学館
132	1972	4	山主敏子文/ 村上幸一絵	ヘンゼルとグレーテル	ｵｰﾙｶﾗｰ版母と子の世界の名作 20	集英社
133	1973	5	西本鶏介	ヘンゼルとグレーテル	世界昔話集	芸術生活社
134	1973	5	矢川澄子訳	ヘンゼルとグレーテル	こどもの世界文学 15	講談社
135	1973	不明	柴野民三文/ 鈴木寿雄絵	おかしの家	ｵｰﾙｶﾗｰ版世界名作ｲｿｯﾌﾟ・ｸﾞﾘﾑ･ｱﾝﾃﾞﾙｾﾝ 2	国際情報社
136	1974	5	植田敏郎訳	ヘンゼルとグレーテル	子どもに聞かせるグリムの童話	実業之日本社
137	1975	12	平田昭吾文/ 成田マキホ画	ヘンゼルとグレーテル	ヘンゼルとグレーテル (ﾃﾚﾋﾞ名作アニメ劇場 6)	ポプラ社
138	1975	不明	はるなしげこ文/ 中山正子人形	へんぜるとぐれーてる	へんぜるとぐれーてる （トッパンの人形絵本）	フレーベル館
139	1976	4	辻真先文/ 木村光雄絵	ヘンゼルとグレーテル	ヘンゼルとグレーテル （世界名作えほん 7）	朝日ソノラマ
140	1976	10	高橋健二訳	ヘンゼルとグレーテル	グリム童話全集 1	小学館
141	1977	5	セルジオ絵	ヘンゼルとグレーテル	ヘンゼルとグレーテル (ﾌｧﾌﾞﾘこども世界名作ｼﾘｰｽﾞ)	TBS ブリタニカ
142	1977	10	ﾒﾘｰ･ﾏｯｸﾚﾝ絵	ヘンゼルとグレーテル	ヘンゼルとグレーテル (ﾒﾘｰｺﾞｰﾗﾝﾄﾞえほん)	大日本絵画
143	1977	10	TBS ブリタニカ編	ヘンゼルとグレーテル	ヘンゼルとグレーテル	TBS ブリタニカ
144	1978	1	植田敏郎訳/ 安井淡絵	ヘンゼルとグレーテル	ヘンゼルとグレーテル （世界のメルヘン絵本１）	小学館
145	1979	2	高橋健二文/ 柳柊二絵	ヘンゼルとグレーテル	ヘンゼルとグレーテル （講談社の絵本９）	講談社
146	1979	7	桜井正明文/ かたやまさえこ絵	ヘンゼルとグレーテル	ヘンゼルとグレーテル （学研・ひとりよみ名作 17）	学習研究社

147	1979	不明	原葵訳	ヘンゼルとグレーテル	ファブリ世界名作えほん全集 34	童音社
148	1980	10	こわせたまみ文/福原ゆきお絵	ヘンゼルとグレーテル	ヘンゼルとグレーテル（世界の昔話名作選 10）	チャイルド本社
149	1981	3	佐久間彪訳/ﾘｽﾍﾞｽ･ﾂｳﾞｪﾙｶﾞｰ絵	ヘンゼルとグレーテル	ヘンゼルとグレーテル	かど書房
150	1981	10	大友克洋	ヘンゼルとグレーテル	ヘンゼルとグレーテル	CBS ソニー
151	1982	3	いわむらりょう他作/鈴木徹演出	ヘンゼルとグレーテル	飛行船ぬいぐるみ名作ミュージカル 31	劇団飛行船
152	1983	4	大庭みな子訳/ｽｰｻﾞﾝ･ｼﾞｪﾌｧｰｽﾞ絵	ヘンゼルとグレーテル	ヘンゼルとグレーテル	ほるぷ出版
153	1983	9	渡辺麻実文/森有子絵	ヘンゼルとグレーテル	ヘンゼルとグレーテル（世界名作絵ものがたり 15）	集英社
154	1984	11	堀尾青史脚本/高橋透画	ヘンゼルとグレーテル	ヘンゼルとグレーテル（家庭版かみしばい）	童心社
155	1984	11	大畑末吉訳/徳田秀雄絵	ヘンゼルとグレーテル	ヘンゼルとグレーテル	講談社
156	1985	1	小澤俊夫訳	ヘンゼルとグレーテル	完訳グリム童話	ぎょうせい
157	1985	7	相良守峯訳/ﾊﾞｰﾅﾃﾃﾞｨｯﾄ･ﾜｯﾂ絵	ヘンゼルとグレーテル	ヘンゼルとグレーテル	岩波書店
158	1985	10	立原えりか文	ヘンゼルとグレーテル	小学二年生 41(7)	小学館
159	1985	11	内海宣子訳/ﾔﾝ･ﾋﾟｱﾝｺﾌｽｷｰ絵	ヘンゼルとグレーテル	ヘンゼルとグレーテル（ふぇありい・ぶっく）	ほるぷ出版
160	1986	1	梅田ちづる絵	ヘンゼルとグレーテル	ヘンゼルとグレーテル	講談社
161	1986	2	池内紀訳/ｱｰｻｰ･ﾗｯｶﾑ絵	ヘンゼルとグレーテル	ヘンゼルとグレーテル（グリム童話集 3）	新書館
162	1986	6	神沢利子文/フォンタナ画	ヘンゼルとグレーテル	ヘンゼルとグレーテル（国際版はじめての童話 12）	小学館
163	1986	10	山主敏子編	ヘンゼルとグレーテル	10 月のおはなし	ぎょうせい
164	1987	4	香山美子文/柿本幸造絵	ヘンゼルとグレーテル	ヘンゼルとグレーテル（ﾁｬｲﾙﾄﾞ絵本館）	チャイルド本社
165	1987	11	立原えりか文/ｻﾝﾘｵｱﾆﾒｽﾀｯﾌ絵	ヘンゼルとグレーテル	ヘンゼルとグレーテル（サンリオ名作アニメランド 8）	サンリオ
166	1988	2	おおくぼ由美文	ヘンゼルとグレーテル	グリム名作劇場 I	角川書店

			/中島順三構成		赤ずきん	
167	1988	6	川上まり子他訳/モニック・フェリックス絵	ヘンゼルとグレーテル	ヘンゼルとグレーテル（ワンス・アポンナ・タイムシリーズ）	西村書店
168	1988	12	ささきたづこ文/上野紀子絵	ヘンゼルとグレーテル	赤ずきん・ヘンゼルとグレーテル	講談社

2) Ⅲ期(1971-1988)の邦訳について

Ⅲ期の邦訳は 38 話存在する。原典に忠実なものは 9 話 134 136 140 144 149 155 159 161 167 である、改変されているものは 23 話 132 133 137 138 139 141 142 143 145 146 147 148 152 153 157 158 160 162 163 164 165 166 168 である。改作されているのは 2 話 131 150 である。フンパーディンクのオペラを混成したものが 2 話 151 154、ベヒシュタイン版が 1 話 135、第 2 版が 1 話 156 存在する。Ⅲ期では子捨てのない話は、フンパーディンクのオペラを含めて 3 話 131 151 154 である。「お菓子の家」という題名は 2 話 131 135 のみになり、Ⅱ期と比較すると大幅に減少する。そして 1974 年以降、題名は「ヘンゼルとグレーテル」に統一される。

3) Ⅲ期(1971-1988)に出版された第 2 版訳について

小澤俊夫が『完訳グリム童話』(1985)において、第 2 版の「ヘンゼルとグレーテル」を邦訳している。訳文は忠実に訳されている。ただし窓は「氷砂糖」(von hellen Zucker)であるが、「白い砂糖」と訳されている。

4) Ⅲ期(1971-1988)に改変されている話

(1) 子捨ての提案者が変更されている話

① 山主敏子文/村上幸一絵「ヘンゼルとグレーテル」(1972) 132

この話は、内容については改変されていないが、子捨ての提案者は継母ではなく、意地悪なおばさんである。魔女はグレーテルにより竈の中へ入れられるが、焼死したとは書かれていない。ヘンゼルとグレーテルは宝物を略奪することなく、魔女の家を去る。帰宅途中に白い鴨が出現するが、鴨は擬人化され 2 人と言葉を交わす。帰宅すると意地悪なおばさんは不在であり、生死については不明である。父親は「どんなに毎日探し歩いたことか」と言い、2 人をしっかりと抱きしめる。悪い継母は登場せず、魔女は焼死せず、子どもたちは宝物略奪をしない。また鳥を擬人化することにより読者を楽しませ、父親の子どもに対する愛情はしっかり表現されている。解説では奈街三郎(山田三郎 1907-1978)が母親について、「原典では『後妻の継母』ですが、本書では少しでも童心を傷つけない配慮から、『おばさん』にしている」と述べている。奈街は 1925(大正 14)年に新興童話連盟を結成し、プロレタリア児童文学の道にすすんだ人物である。この本が出版されたとき(1972)に

は、彼は日本児童文学者協会評議員を務めていた。奈街はプロレタリア児童文学者の視点から、プロレタリア層の子どもや継母を擁護する改変に賛意を表したのである。つまり、主人公である貧乏人の子どもを「殺人行為」や「略奪行為」を犯さない人間に改変したことを評価し、「継母」に悪のレッテルを張ることに反対しているのである。「童心を傷つけない」ためではなく、「世間の先入観から守るため」と書けばプロレタリア文学者的である。それをあたかも「童心主義」に賛意を示すかのような書き方をしているところに違和感を覚える。

訳者の山主敏子(瀬川敏子 1907-2000)は、東京生まれの児童文学作家で翻訳家である。青山女学院専攻部を卒業後、1936(昭和 11)年に同盟通信社文化部(戦後共同通信社に改組)に入社し、論説委員を務める。1962(昭和 37)年に退職後は、児童文学の著作活動に専念し、翻訳やノンフィクション、伝記、再話に取り組む[342]。1975(昭和 50)年に日本児童文芸家協会理事長となり 15 年間在職する。

② 西本鶏介「ヘンゼルとグレーテル」(1973) 133

この話は、子捨ての提案者が不明で、父親が 2 人を森へ捨てに行くところから始まる。子捨ては 1 回のみで、ヘンゼルはパン屑を道しるべに撒くが、小鳥に食べられて森で迷子になる。そしてチョコレートとクリームでできたお菓子の家を発見する。2 人は魔法使いに「肉、卵、ハム、パン、ミルク、りんご、クルミ」で歓待される。その後ヘンゼルは捕らえられ、グレーテルはヘンゼルを煮る準備をさせられる。そしてグレーテルの機転により魔法使いは焼死する。2 人は宝石を略奪し、白鳥の救助により無事帰宅する。家には父親だけがいる。彼は涙を流して 2 人に謝罪する。母親はばちがあたり死亡したという。

西本鶏介(西本敬介 1934-)は、奈良県出身の児童文学作家、児童文学評論家である。1958(昭和 33)年に國學院大学文学部日本文学科を卒業する。卒業後は医学系出版社に勤務するが、すぐに文筆家を志し「トナカイ村」に参加する。1988(昭和 63)年に昭和女子大学文学部教授に就任し、2004(平成 16)年に名誉教授となる。翻訳ではルース・マニング=サンダース(Ruth Manning-Sanders)の『世界の民話館』(1981)を出版している。

話のなかに母親は出現しないが、子どもたちが帰宅すると、ばちが当たって死亡したことになっている。しかし母親は悪い存在として描かれているので、その点では原典の内容を踏襲しているといえる。西本は読み聞かせをする際の手引として、「魔女が子供を食べるというのは、危険な森の中へ一人でいってはいけないという戒め」であると述べている。彼は教訓としてこの話を取り上げているのである。この話が収録されている本は、どこでも自由に持ち運びができるハンディタイプのものである。しかもサブタイトルが「一日一話五分間のお話」とあり、気軽に話を楽しむことができるようになっている。大人が幼児

[342] 日本児童文学学会編 前掲書 1988 年 773-774 頁。

に数多くの話を読み聞かせできて、当時としては目新しいものであったと思われる。

(2) 子捨ての理由が改変されている話

① こわせ・たまみ文/福原ゆきお絵「ヘンゼルとグレーテル」(1980) 148

この話の母親は意地の悪い継母である。継母は「びんぼうなのは、ふたりも子どもがいるから」と言い、子捨てを提案し実行する。彼女は父親が子どもたちのことを不憫に思うと、「じゃあ、パンをかうお金をかせいでおくれ」と言う。家庭経済が苦しい原因は父親の経済力のなさと子どもの数にあるとする継母の言動は、夫婦喧嘩や離婚につながる恐れがある。

実際にその頃の日本は離婚率が増加していて、1983(昭和 58)年にはピークに達している。その後、離婚率は一時期下降するものの、年を追うごとに増加している。また父親ではなく子捨ての提案を継母にさせているのは、「男のずるさ」を感じさせる。グレーテルが魔法使いを竈の中に入れると「真っ赤な炎になってなにもかももえつきなくなってしまった」とあり、はっきりと魔法使いが焼死したとは書かれていない。2 人が宝物を略奪することなく帰宅すると、継母は死亡している。継母は悪い存在であることを強調し、子どもたちは残酷な行動をしていない存在であるかのように描かれている。子どもたちは悪くなく、むしろ不甲斐ない両親の犠牲になっていることを訴えているかのようである。

こわせ・たまみ(小和瀬玉三 1934-)は男性で、埼玉県出身の詩人であり、児童文学者でもある。彼は 1957(昭和 32)年に早稲田大学第一商学部を卒業している。在学中に早稲田童謡研究会に属して作品を書き始め、コピーライターを経て作家生活に入った人物である[343]。

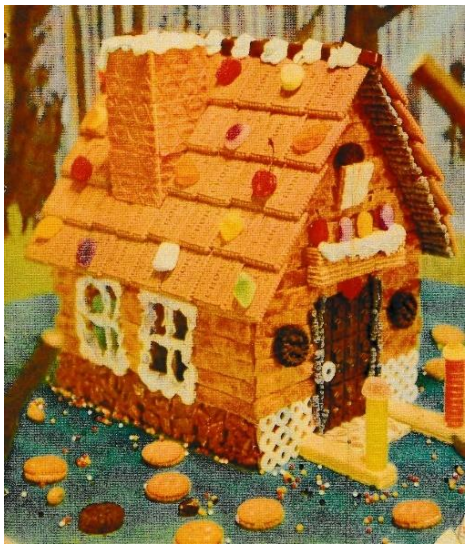
② 立原えりか文「ヘンゼルとグレーテル」(1985) 158

この話の母親は継母ではなく実母である。母親は「こどもたちさえいなければ、なんとか食べていかれるわ」と言う。子どもたちを養うことができないから捨てるのではなく、自分たちの生活を維持するため、子どもを捨てるのである。

立原えりか(渡辺久美子 1937-)は東京生まれで、都立白鷗高等学校を卒業している。在学中から童話作家をめざし、『婦人朝日』に投稿する。1961(昭和 36)年に画家の渡辺藤一と結婚するが、経済的な理由から夫と離婚する。この作品が発表された 1985(昭和 60)年は結婚生活がすでに破綻していた時期である。最初に彼女が離婚を考えたのは 1979(昭和 54)年であったが、夫を一生愛し続けると誓った自分への裏切りと、子どもを不幸にしたくないという思いから、離婚を引き延ばしていたという[344]。立原は 1961 年 12 月に「おかしのいえ」と題して「ヘンゼルとグレーテル」を紹介している。冒頭には本物のお菓子の家

[343] 日本児童文学学会編 前掲書 1988 年 286 頁。
[344] 立原えりか「離婚は残酷なメルヘン」『婦人公論』80(5) 1995 年 5 月 100 頁。

の写真があり、屋根は森永製菓のビスケット「チョイス」でできている【図 22】。この話はお菓子が主体となっているものである。子どもたちは捨てられることなく、いきなり迷子になりお菓子の家を見つける。グレーテルは魔法使いを突き飛ばし、白鳥に救助され、帰宅すると両親が出迎えるというものである。1961 年といえば立原が結婚した年である。立原はⅡ期ではお菓子の家に焦点を当てて幼い子ども向けに改変しているが、Ⅲ期では子どもをないがしろにする母親を描いている。立原は「娘のころのわたしは白馬に乗って颯爽と現れる王子さまを夢みていた」[345]と記しているが、彼女にとっての結婚生活は娘時代の夢とは異なり、経済的に厳しいものであった。同じ話が歳月を経て変化しているのは、立原自身が過酷な経験をしたからではないだろうか。彼女は現実を見据え、人生には思いもよらないことが起こることをこの話をとおして子どもたちに伝えようとしたのかもしれない。



【図 22】谷俊彦絵/牧野圭一写真構成

「おかしのいえ」

5) テレビアニメとの関連

1975(昭和 50)年にはテレビアニメに関係する絵本が出版されている。それは平田昭吾による『テレビ名作アニメ劇場』のシリーズである。「ヘンゼルとグレーテル」は第 6 巻として出版されている 137。この話の展開は原典に忠実である。絵本の表紙にはカラフルなお菓子の家と、ヘンゼルとグレーテルが喜んでいる姿が描かれている【図 23】。1975 年は家庭用テレビゲームが登場した年でもある。メディアの発展とともに絵本もテレビ化されることによって変化したのである。

【図 23】成田マキホ画

『ヘンゼルとグレーテル』

6) 「お菓子の家」という表現について

Ⅱ期では「ヘンゼルとグレーテル」ではなく「お菓子の家」や「おかしのおうち」という題名が多く使われていたが、Ⅲ期で使われているのは 2 話(中川文 131 と柴野文のベヒ

[345]立原えりか 前掲書 1995 年 98 頁。

シュタイン版 135)のみである。1974(昭和 49)年以降「ヘンゼルとグレーテル」に統一され原典どおり子捨てが描写されるようになる。一方、ヘンゼルとグレーテルが森で見つける「パンの家」は「お菓子の家」に変更されているものが多くなる。「お菓子の家」という表現は、Ⅰ期では 5 話(56%)、Ⅱ期では 62 話(68%)、Ⅲ期では 28 話(74%)である。「お菓子の家」をカラフルな挿絵で描いて強調することにより、「子捨ての話」から「お菓子の家が出現する話」に視点を移し、「楽しい夢のある話」である点をアピールしているのである。

7) 宝物略奪について

Ⅲ期になると原典どおり子捨てが描写されるようになり、「パンの家」が「お菓子の家」に変更されることは前述した。しかしそのなかでヘンゼルとグレーテルが魔女の家から宝物を略奪する場面は、Ⅲ期ではベヒシュタイン版を除くと省略されているものが 6 話(桜井文 146 こわせ文 148 大友著 150 神沢文 162 山主著 163 おおくぼ文 166) 存在している。子どもが悪事を働くのは、教育的によくないと判断したのであろう。作者や出版社の意図が表れているといえよう。

8) Ⅲ期(1971-1988)の時代背景

Ⅱ期には数多くの邦訳が出版されていたが、1970 年代になると出版数が減少する。しかし大幅な改変がなく、内容は原典に忠実なものが多くなる。その理由として 4 つ考えられる。1 つ目は鳥越信(1929-2013)の「児童文学完訳至上主義」である。彼は早稲田大学の教授を務めていた頃、抄訳や再話を追放する運動を行い、本物の完訳こそが望ましいという理論を展開した。当時児童文学の世界では「和文和訳」が行われ、和訳から再話されたものが数多く出版されていた[346]。彼は出版社を名指しし、完訳ではない翻訳文学を批判したのである。2 つ目は 1970 年にコインロッカーベビー事件が発生し、1973 年に多発したことである。この時代は「未熟な母親による子捨て・子殺しに注目したマスコミによって『母性喪失の時代』」[347]と呼ばれた。「ヘンゼルとグレーテル」は子捨ての話であるため敬遠されたのではないだろうか。3 つ目は 1971(昭和 46)年 1 月 1 日に施行された著作権法である。この著作権法は、1899(明治 32)年に制定された著作権法(旧制)以来の大きな改正である。新しく改正された著作権法では、子ども向きに書き直す再話が問題の 1 つとして挙げられている。再話については出版社、編集者、執筆者が細心の注意を払っていることが当時の雑誌から読み取れる[348]。内容を変更したり、ストーリーを変えたりすると、著作

[346] 小谷野敦「鳥越信の『児童文学完訳至上主義』の迷走」『ネバーランド』12 巻 てらいんく 2009 年 11 月 157 頁。
[347] 石川弘義他編『大衆文化事典』弘文堂 1991 年 2 月 413 頁。
[348] 「新著作権法の問題点と注意点」日本児童文学者協会編『日本児童文学』17(4) 盛光社 1971 年 4 月 65 頁。

者人格権の侵害になる恐れがあるからである。4 つ目は 1973(昭和 48)年のオイルショックにより、紙が減少し、印刷代や製本代の価格が上昇したことである。これにより出版社はこれまでの方針を変えざるを得なくなった。そのため児童書の出版数が減少しているのである。1974(昭和 49)年に『日本児童文学』では出版社や編集者に向けたアンケート調査を行っている。そのなかで実業之日本社は「良質なものを出版する」と回答している[349]。実際、1974 年には原典に忠実な『子どもに聞かせるグリムの童話』が出版されている。1974 年に「ヘンゼルとグレーテル」が収録されている本は、現在のところこれ以外にみつかっていない。

5. フンパーディンクのオペラ「ヘンゼルとグレーテル」

1) フンパーディンクのオペラについて

「ヘンゼルとグレーテル」のオペラは、エンゲルベルト・フンパーディンク(Engelbert Humperdinck 1854-1921)により作曲され、妹のヘルマン・ヴェッテ(Hermann Wette)が台本を書いたものである。このオペラの原作は、グリム童話とベヒシュタイン童話を混成したものであると明記されている[350]。

2) オペラ「ヘンゼルとグレーテル」のあらすじ

ほうき職人の父親、母親、ヘンゼル、グレーテルの 4 人が森の近くに住んでいる。子どもたちは家の手伝いをするが遊びに夢中になる。そこへ母親が現れ子どもたちを叱るのだが、はずみでミルクが入った壺をひっくり返す。怒った母親は子どもたちを森へ苺摘みに行かせる。そこへほうきが売れて陽気な気分の父親が帰宅する。彼は子どもたちが森に行ったことを知ると、森にはほうきに乗った魔女が飛んでいると妻に警告する。両親は慌てて家を飛び出して子どもたちを探しに行く。森ではグレーテルは花の冠を作り、ヘンゼルは苺を摘むが、2 人は苺をすべて食べてしまう。森で迷った 2 人は、眠りの精の出現で眠りに陥る。翌朝目覚めた 2 人は、14 人の天使の夢を見たと話す。そこへお菓子の家が出現し、2 人は大喜びする。魔女が現れ、ヘンゼルは首に縄をかけられる。ヘンゼルは縄をはずしてグレーテルと逃げようとするが、魔女は呪文をかけて 2 人を動けないようにする。魔女はヘンゼルを檻に入れ、グレーテルには食事の支度を言いつける。グレーテルは呪文を解き、ヘンゼルを自由にする。2 人は、力を合わせて魔女を竈に押し込む。竈が爆発すると不思議なことが起こる。お菓子の家の垣根は捕らえられた子どもたちだったのだ。ヘンゼルとグレーテルが顔をなでると子どもたちは目を覚ます。両親は神に感謝する。

---

[349] 日本児童文学者協会編『日本児童文学』20(4) 盛光社 1974 年 4 月 26-27 頁。

[350] Humperdinck, Engelbert (Komponist) *Hänsel und Gretel* . Wette, Adelhid (Textdichter) Stuttgart: Reclam 1952, S. 4.

3) 日本での上演

「ヘンゼルとグレーテル」のオペラは、3 幕で構成されており、第 1 幕は「ほうき職人の家」、第 2 幕は「森の中」、第 3 幕は「お菓子の家」である。このオペラは 1893 年 12 月 23 日にシュトラウスの指揮によりヴァイマールで初演された[351]。日本では、1913(大正 2)年 2 月 2 日に松居松葉訳「夜の森」という題で帝國劇場で初めて上演された。帝國劇場での翻訳オペラの上演はこれが初めてであった[352]。ただし「夜の森」は第 3 幕目の「お菓子の家」がなく、「貧家の一室」と「魔女の館」の 2 幕構成であった[353]。「夜の森」は 2 月 26 日まで上演され好評を博したという[354]。昭和期に入ると、1928(昭和 3)年 12 月 25 日に放送歌劇として伊庭孝訳「ヘンゼルとグレーテル」がラジオで放送される[355]。1934(昭和 9)年 12 月 29 日に山田耕筰の指揮により歌劇物語「ヘンゼルとグレーテル」が放送され[356]、1940(昭和 15)年 9 月 28 日に村岡花子の語りによりラジオ放送される[357]。戦後は 1949(昭和 24)年 1 月 23 日を皮切りに、何度も上演されるようになる[358]。

4) 日本での受容

本来のオペラの「ヘンゼルとグレーテル」の母親はとても怖い存在である。両親が留守中に子どもたちは家の手伝いをしないで遊んでいるところへ母親が帰宅する。母親は激怒し、そのせいでミルクが入った大事な壺を自分で割ってしまう。それを子どもたちに八つ当たりして、森へ苺を摘んでくるように命令する。そのときの母親の言葉が「籠一杯になるまで摘んで来なかったら、壁まで飛んで行ってしまうほどぶん殴るよ」(bringt ihr den Korb nicht voll bis zum Rand, so hau ich euch, daß ihr fliegt an die Wand!)[359]である。しかし収集した話にはこのような言葉はない。日本で受容されると母親は優しい存在に改変されるのである。

5) フンパーディンクのオペラが混成された邦訳

(1) 邦訳の概要

Ⅱ期からオペラの「ヘンゼルとグレーテル」を混成した話が出現する。それらは堀尾勉

---

[351] スタンリー・セイディ編/中矢一義他日本語監修『新グローヴオペラ事典』白水社 2006 年 9 月 603 頁。
[352] 伊藤直子「『夜の森』の帝劇公演(1913)をめぐってードイツ・オペラ受容の一側面ー」『国立音楽大学研究紀要』44 集 国立音楽大学紀要編集委員会 2010 年 3 月 1 頁。
[353] 『帝國劇場絵本筋書大正 2 年 2 月あきらめほか』帝國劇場 1913 年 2 月。
[354] 増井敬二『日本のオペラー明治から大正へ』民音音楽資料館 1984 年 11 月 201 頁。
[355] 増井敬二『日本オペラ史～1952』水曜社 2003 年 12 月 296 頁。
[356] 同上 307 頁。
[357] 同上 286 頁。
[358] 同上 434 頁。
[359] Humperdinck, Engelbert（Komponist）a.a.O., S. 21.

脚色 57 、中野啓介(1910-1977)文 64 、堀尾勉文 71 、橋本潔(1930-)文/絵 74、藤城清治 114 である。 57 は後述する。 64 は父親が樵で子どもたちは母親の指示で苺採りに行くという設定である。森では魔法使いは 2 人を歓待するが、ヘンゼルにより竈の中に押し込まれてしまう。2 人は宝物を奪い帰宅すると、両親が 2 人を出迎えて抱きしめるというものである。 71 74 は父親がほうき職人で、子どもたちは両親の留守中に勝手に食べ物を食べて母親に叱られ、苺採りに行くという設定である。結末はいずれも助け合いの力で乗り切った子どもたちを両親が褒めるというものである。2 冊ともにオペラを参考にしたと記載されている。 114 は舞台での人形劇公演の写真絵本である。この話については後述する。

Ⅲ期にはいわむらりょう他作 151 、堀尾青史の紙芝居 154 がある。この話については後述する。 151 はほうき職人で、留守番をしている子どもたちのところに魔女の使者が現れ、2 人はお菓子の家やおもちゃがある夢の国に招待される。森では魔女と使者との乱闘があり、魔女が死亡すると何もかも消えてなくなり、森は平和になる。そこへ 2 人を探していた両親が現れ、母親は 2 人の子どもを強く抱きしめる。

堀尾青史(勉)は昭和期に 3 つの作品を発表している。ここでは堀尾の 57 と 154、およびミュージカルを絵本にしている藤城清治の 114 を取り上げて論じることにする。

(2) 堀尾青史(勉)の作品について

① 堀尾勉脚色「へんぜるとぐれえてる」(1952) 57

ほうき職人の父親が、ほうきを売りに出かけ、2 人は留守番をするが、お腹がすいてパンを食べてしまう。そこへ母親が現れて 2 人を叱り、森へ苺を摘みに行くよう命じる。父親は帰宅すると、子どもたちがいないことに気付き理由を聞く。彼は森には子どもを食べる魔法使いがいると言い、母親を叱る。2 人の子どもは森で迷子になる。そこへほうきに乗った魔女が現れ、2 人を誘うかのようにお菓子の家が出現し、2 人は家の中に入る。ヘンゼルは魔女に捕らえられ、グレーテルは女中として働かされる。魔女はグレーテルの機転により竈で焼死させられ、2 人は魔女の家にあった赤い箱を持ち帰る。両親は子どもたちの行動に驚くと同時に喜ぶ。

前半はフンパーディンクのオペラ部分である。作者の堀尾勉はグリムの「前半はいかにも残酷なので、オペラに脚色されたものから、この脚本を作ることに」したと解説している。この本は人形を使用したカラーの写真絵本で、長辺は 25ｃｍで、30 頁あり、価格は 100 円である。1952(昭和 27)年当時の週刊誌の価格が 30 円、後楽園球場入場料金が 100 円、映画館入場料が 80 円である[360]。1958(昭和 33)年に出版された講談社のゴールド絵本

[360] 文教政策研究会編『日本の物価と風俗 130 年のうつり変わり－明治元年～平成 7 年－』1996 年 12 月 565、572、576 頁。

が 4 色 36 頁で 100 円であることから[361]、かなり高価なものであったと思われる。また「ヘンゼルとグレーテル」の人形絵本は、この本が初めてのものである。戦後すぐにこのような絵本が出版されたのは画期的なことだったのではないだろうか。

② 堀尾青史脚本/高橋透画「ヘンゼルとグレーテル」(1984) 154

両親はほうきを売りに出かけ、ヘンゼルとグレーテルは留守番をする。母親から苺パイを食べるように言われるが、全部食べないように忠告される。しかし 2 人は全部食べてしまい、帰宅した母親に叱られる。彼女は 2 人に森へ苺を摘みに行くように命じる。2 人は森で迷子になる。ほうきに乗った魔女が 2 人を見つけ、ビスケット、チョコレート、飴、ショートケーキでできたお菓子の家へと導く。ヘンゼルは魔女に捕らえられ、グレーテルは召使となる。グレーテルの機転で魔女は竈に入れられる。2 人は魔女の宝石を奪い、帰宅する。家では両親が子どもの無事を喜び、ヘンゼルとグレーテルはお互いを称え合う。

この紙芝居は「童心社の家庭版かみしばい」で 12 場面からなるものである。前半の 2 人がお菓子の家に到着するまでの内容は、フンパーディンクのオペラと似ている。ここではほうきに乗り飛んでいる魔女の絵が描かれており【図 25】、子どもたちにステレオタイプの魔女像を刷り込んでいるといえる。

【図 24】高橋透画　家庭版かみしばい

「ヘンゼルとグレーテル」①

【図 25】高橋透画　家庭版かみしばい

「ヘンゼルとグレーテル」⑤

③ 堀尾青史(勉)について

堀尾青史(勉 1914-1991)は兵庫県の出身で、児童文学作家、紙芝居作家、宮沢賢治研究者である。明治大学文学部を中退している。1938(昭和 13)年に日本教育紙芝居協会の設立とともに、同会機関紙『教育紙芝居』の編集に携わり、紙芝居の脚本も手掛けている。戦前からの紙芝居運動、編集者活動などによって広範な児童文化関係者と交流がある[362]。また 1969(昭和 44)年に設立された「子どもの文化研究所」では 3 代目の所長を務めている。

---

[361] 甲賀忠一他『明治・大正・昭和・平成　物価の文化史事典』展望社 2008 年 7 月 327 頁。

[362] 日本児童文学学会編 前掲書 1988 年 689-690 頁。

(3) 藤城清治の作品について

① 藤城清治文「ヘンゼルとグレーテル」(1967) 114

父親は樵でほうき職人ではなく、母親は実母である。冒頭は子どもたちがミルクをなめて歌ったり、踊ったりして大騒ぎしていると、子豚がミルクをこぼしてしまう。そこへ母親が帰宅し【図 26】、2 人に森へ茸採りに行くように命じる。2 人は森で迷うと、眠りの精に眠りの粉をかけられて眠りに陥る。翌朝、チョコレート、キャラメル、ビスケットでできたお菓子の家が出現する【図 27】。そこへ魔法使いが現れ、2 人は魔法使いに歌を教え、一緒に歌ったり踊ったりする。その後魔法使いは 2 人に魔法をかけて動けなくする。ヘンゼルは檻に入れられ、グレーテルは働かされる。グレーテルは魔法使いの隙を見て、ヘンゼルを助ける。2 人は力を合わせて魔法使いを竈の中に押し込み、焼死させる。その後、2 人は無事両親の元に帰宅する。

【図 26】木馬座「ヘンゼルとグレーテル」

この本は、藤城主宰の「木馬座」によるぬいぐるみの人形劇を絵本にしたものである。「木馬座」はこの劇を 15 年間で数百回にわたり上演したという[363]。各地で上演されたようなので、「ヘンゼルとグレーテル」の子どもたちへの普及に貢献したと思われる。

② 藤城清治について

藤城清治(1924-)は東京出身の影絵作家である。1936 年に 12 歳で慶應普通部に入学し、猪熊弦一郎のアトリエでモダニズムの影響を受ける。慶應の児童文化研究会で人形劇と出会う。1946 年に人形劇と影絵の劇場「ジュヌ・パントル」(その後「木馬座」と名称変更)を結成する。彼は 1947 年に慶應義塾大学経済学部を卒業する。

【図 27】木馬座「ヘンゼルとグレーテル」

(4) 考察

フンパーディンクの話は子捨てがなく、結末は両親が 2 人を出迎えるというもので、家

[363] 【表 7】の資料番号 114 34 頁。

族間の残酷な行為がない。混成された話では、子どもたちは森にいる魔女の存在を消し、宝物を略奪して帰宅すると、両親は子どもたちを褒める。子どもたちの残酷な行動は、勇気がある行動として褒めたたえられるのである。

昭和期はラジオ放送が始まり、戦後になるとミュージカルが上演され、「ヘンゼルとグレーテル」はオペラの内容が全国に広まる。紹介した訳文の解説にはオペラについて書かれている。フンパーディンクのオペラが日本における「ヘンゼルとグレーテル」の受容に及ぼした影響は少なからぬあると思われる。

6. 西洋と日本における子どもの遺棄について

1) 西洋の子どもの遺棄

西洋中世では、堕胎は「重い体刑でもって、死刑でもってさえもおどかされ」[364]ており、「カロリナ法典」(1532)では溺殺刑と規定される[365]。そのため出産しても養育できない場合は、子捨てが行われていたのである。ヤーコプ・グリムは『ドイツ法律故事誌』(*Deutsche Rechtsaltertümer*)において父親の強権について述べている。

> in gewissen fällen traf auch nicht neugeborne, sondern schon ältere kinder das geschick der aussetzung oder tödtung, ohne daß die sitte des alterthums den eltern ihre handlung zum vorwurf machte noch die gesetze strafe verhängten. Dahin gehört große armuth und hungersnoth[366].

> 場合によっては、新生児だけではなく、かなり大きくなった子どもですら、[父親により]遺棄されたり殺害されたりすることがあった。そのことに対して古い慣習法は両親を咎めたり罰したりすることはなかった。ひどい貧困や飢饉の場合がこれに該当する(拙訳)。

『ドイツ法律故事誌』はドイツの古い慣習法を集大成したものである。西洋では飢饉で生活が困窮すると、弱い立場の者が捨てられた。同書のなかでヤーコプはその慣習法の名残として「ヘンゼルとグレーテル」の話を挙げている[367]。そこでは子捨ての提案者は母親とされているが、父親がそれに追随して森に行き子どもたちを置き去りにしている。現実には父親の親権でなされる行為が、ここでは母親を提案者とすることにより、女性の悪の

---

[364] ベーベル著/伊東勉他訳『婦人論』上巻 大月書店 1958 年 5 月 161 頁。
[365] 三成美保『ジェンダーの法史学』勁草書房 2005 年 2 月 87 頁。
[366] Grimm, Jacob: *Deutsche Rechtsaltertümer.* Darmstadt: WBG, 1965, Bd. 1. (1. Aufl. 1899), S. 634.
[367] Ebd.

度合いが強調されているといえる。

2) 日本の子どもの遺棄

日本では望まない妊娠をした場合、堕胎や間引きが行われてきた。堕胎については清原元輔(908-990)の家集『元輔集』に「男の、人の国にまかるほどに、子をおろしてける女の」という詞書(ことばがき)がみられる。当時でも子をおろすという風習があったようである[368]。また『今昔物語』には「流産ノ術ヲ求メテ毒ヲ服ス」[369]という記述があり、「當時既に堕胎が行はれ、同時に流産の術卽ち堕胎の方法が知られて居た」[370]ようである。これらの記述からすでに平安時代に堕胎が行われており、女性は罰せられることはなかったのである。間引きについては16世紀に来日したポルトガル人宣教師のルイス・フロイス(Luis Frois 1532-1597)が「ヨーロッパでは嬰児が生まれてから殺されるということは、滅多に、というよりほとんど全くない。日本の女性は、育てていくことができないと思うと、みんな喉の上に足をのせて殺してしまう」[371]と報告している。実際に、産婆や両親が「子どもは、神からの授りものなので、不用なのは神にお返し申す」[372]として生後間もない子どもを葬り去った。間引きは、「出生後しばらくの間はあの世との境界領域にあるとみなす生命観につながって」[373]いて、自分たちが生きるために、そして生活の向上のための手段として家族や村落に容認されていた。こうした慣習を改めるために、江戸時代には間引きの戒めの書である『子孫繁盛手引草』が極貧階層の人びとに無料配布された[374]。明治期になると政府は1868(明治元)年 12 月に「産婆ニシテ売薬又ハ堕胎ノ取扱ヲ為スヲ厳禁ス」という布告を出し[375]、1882(明治15)年施行の旧刑法において「堕胎罪」が制定され、1908(明治41)年には改定された「堕胎罪」が施行された[376]。これは富国強兵のため、法的に堕胎を禁止したのである。しかし間引きや堕胎の風習は密かに行われ続けていたという[377]。敗戦後は人口が増加し、生活に困窮すると妊娠した女性が闇中絶を行うため、政府は 1948(昭和 23)年に「優性保護法」を成立させ、人工妊娠中絶を緩和させる。それにより女性は産むことについての決定権を持つようになる。中絶を経験した女性は身体に不調を感じたり家庭に

---

368 藤本一惠『清原元輔集全釈』風間書房 1989年8月 266頁。
369 経済雑誌社編『国史大系』16巻 経済雑誌社 1901年10月 663頁。
370 高橋梵仙『日本人口史之研究』三友社 1941年11月 309頁。
371 ルイス・フロイス著/岡田章雄訳『ヨーロッパ文化と日本文化』岩波書店 1991年6月 51頁。
372 大塚民俗学会編『日本民俗事典』弘文堂 1972年2月 675頁。
373 福田アジオ他編『日本民俗大辞典』下巻 吉川弘文館 2000年4月 583頁。
374 「子孫繁盛手引草」社会事業研究所編『徳川時代児童保護資料/日本堕胎史』久山社 1998年4月 1-5頁。
375 桑原洋子他編『近代福祉法制大全』1巻 港の人 1999年6月 21頁。
376 小泉英一『堕胎罪研究』巖松堂書店 1934年12月 55頁。
377 森山茂樹他『日本子ども史』平凡社 2002年5月 169頁。

問題が生じたりすると、祟りを恐れ水子供養するようになる。しかしこれは「供養という名で金銭を支払わせようとする、人々の弱みにつけこんだ新ビジネス」[378]であり、女性たちの痛みを利用したものであったともいえる[379]。女性は産むことに対して決定権を持つことが許されたものの、同時にその責任も押しつけられたのである。

3) ジェンダーの視点からみた改変について

(1) 子捨ての提案者

「ヘンゼルとグレーテル」は、食料難のために母親が子捨てを提案することから始まる。母親は子捨てを提案する悪人として描かれている。「ヘンゼルとグレーテル」において、初稿(1810)から第 3 版(1837)までは、母親は実母として登場している。継母という表現はグリム兄弟が第 4 版(1840)で挿入したものである[380]。グリム兄弟がメルヒェン(Märchen)を収集していた 19 世紀初期は、近代化が進められていた時代である。「ヘンゼルとグレーテル」は伝承文学であり、そこで描かれている家族は近代家族ではなく、近代以前の伝統家族である。伝統家族は家父長を中心とする労働共同体であり、構成員は皆生産者であった。「ヘンゼルとグレーテル」に出現する父親は家父長でありながら、飢饉のため妻子を養えず途方にくれている男性である。「ヘンゼルとグレーテル」では子どもは、生産者ではなく消費者として描かれている。つまり伝統家族のなかで生産に貢献しない子どもたちなのである。妻は夫と一緒に森で仕事をする生産者であり、家事のみ行う消費者としての存在ではない。生産者である妻が子捨てを提案するのは、家族全滅を避けるための苦肉の決断といえる。たとえ子どもたちを残したとしても、生産者ではないため生き延びることはできない。主たる生産者である夫ではなく、妻が理性的な判断で解決策を提案したのである。

一方、近代社会では母親は生産者ではなく、消費者であり、家庭のなかで家事育児をする存在である。産業革命で工場や鉱山が発達し、雇用労働が増えると、次第に家庭は生産の場ではなくなり消費の場へと変化した。その結果、男女の性別役割分担が定着し、いわゆる近代家族が誕生したのだ[381]。児童書の購入者は主として市民層の母親であった。その母親が子捨てを提案するということは、メルヒェンであっても受け入れられないことと判断されたのであろう。おそらくグリム兄弟は購入者である母親に配慮して、子捨ての提案者を「実母」ではなく「継母」に変更したと思われる[382]。

---

[378] 荻野美穂『「家族計画」への道－近代日本の生殖をめぐる政治－』岩波書店 2008 年 10 月 292 頁。

[379] 青柳まちこ「忌避された性」『日本民俗文化大系』10 巻 普及版 小学館 1995 年 7 月 445 頁。

[380] *Kinder- und Hausmärchen gesammelt durch die Brüder Grimm.* Bd.1. Göttingen: Dieterichis 1840, S. 93.

[381] 野口芳子 前掲書 2016 年 87 頁。

[382] 同上 12 頁。

(2) 悪人としての継母

継母は悪人として描かれていて、父親は子捨てを実行するにもかかわらず、子どもたちにとっては優しい存在で善人として描かれている。つまり「女性は悪人、男性は善人」という「ジェンダーによる善悪の固定化」が行われているのである。近代以前の西洋家族では子どもの親権を握るのは父親であるので、子捨ての決定権は父親が握っているはずである。しかしこの話では父親ではなく、母親が子捨ての決断をする。経済力がなく優柔不断の夫を、妻は厳しく糾弾する。しかし、そのような賢明な妻をメルヒェンは「悪女」と判断し、グリム兄弟により「悪い継母」に固定されてしまう。

(3) 理想の家族像

昭和期の「ヘンゼルとグレーテル」では、とくにⅡ期において子捨ての提案者が母親ではなく、父親であったり、他人であったりする話が出現する。また継母が実母に変えられ、子捨てが削除され、子どもたちが自ら道に迷う話が出現する。戦後の日本は産業化が進むと、家庭は子ども中心となり、「母性愛」が強調され、血縁関係で結ばれた親子関係が重視されるようになる。さらに児童書の購買者が多い都市部では「男は仕事、女は家庭」という性別役割分担が強調されるようになる。そこには血縁関係のある親子間には細やかな情緒的愛情があるということを信じて疑わない「近代家族」の存在がみてとれる。一方、原典どおりに継母が子捨てを提案すると、継母は死亡し父親と子どもの 3 人家族になって話が終わる。実母が子捨ての提案をする場合「悲しそうに」という言葉が付加されているものがあるが、継母にはない。これにより継母は実母の悪行を一身に引き受ける存在となり、「継母＝悪」というイメージが刷り込まれていく。本来継母は悪い存在ではない。日本における児童虐待について調べると、1988(昭和 63)年の統計では、虐待しているのは実母が 48.7%、実父が 30.5%、継母が 3.3%、継父が 5.8%であることが判明する。実父母が全体の約 80%を占めており、継父母が約 9%という結果である[383]。このことから、実際に子育てをしている者で、継父母の虐待率は実父母よりはるかに少ないといえる。しかし児童書においては、悪人として出現するのは継母が多い。さらに挿絵によって「実の両親と 2 人の子ども」という理想的家族が持つ肯定的イメージが強調されている。それによって継母や片親家族の否定的イメージが刷り込まれていくことになる。

7. 昭和期のまとめ

昭和期はⅠ期、Ⅱ期、Ⅲ期と 3 つの時代に分けて考察している。そのうちⅠ期は A と B に分けている。Ⅰ期には 1938(昭和 13)年 10 月に児童の読み物に関する統制が通達され、

[383] 日本総合愛育研究会編 前掲書 1991 年 216 頁。

出版界が混乱に陥る。そこで邦訳がどのように変化しているのかを分析するために、Ⅰ期は統制前後で 2 つに分けている。

Ⅰ期の邦訳は 9 話あり、Ⅰ期 A は 7 話、Ⅰ 期 B は 2 話存在する。Ⅰ期 A で忠実に訳されているのは 3 話あり、改変されているものは 3 話あり、大幅に改作されているものは 1 話存在する。Ⅰ期 B で忠実に訳されているのは 1 話で、改変されているのは 1 話である。Ⅱ期は 91 話あり、忠実に訳されているものは 23 話あり、改変されているものは 29 話あり、改作されているものは 31 話ある。またベヒシュタイン版が 1 話、フンパーディンクのオペラの混成版が 5 話、他のグリム童話の混成版が 1 話、初稿版が 1 話存在する。Ⅲ期の邦訳は 38 話あり、忠実に訳されているのは 9 話あり、改変されているのは 23 話あり、改作されているのは 2 話ある。またベヒシュタイン版が 1 話、フンパーディンクのオペラの混成版が 2 話、第 2 版が 1 話存在する。ここではそれぞれの時代区分にしたがって、注目すべき点について述べる。

Ⅰ期 A で大幅に改作されているのは『オクワシノイヘ』という絵本である。子どもたちの名前はヘンゼルとグレーテルではなく、マサオとチヨコという和名である。2 人を養育しているのは、実の親ではなくおじとおばである。1931(昭和 6)年に満州事変が勃発しており、この絵本が出版されたときには日本は戦時体制下にあった。そのため名前が日本化されているのであろう。また実の親ではなくおじとおばが養育するのは、戦時下に戦力である自分の子どもを捨てることがあってはならないという時代の風潮が現れているからであろう。挿絵には「MILKCHOCOLATE」という文字が描かれており、これはこれまでになかった表現方法である。西洋菓子産業の宣伝が絵本に取り入れられたのである。消費者としての子どもの存在を認め、その意向を尊重することが企業利益につながるという発想は画期的なものであるといえよう。

Ⅰ期 B の出版は戦時下では奇蹟的というべきものである。ここでは、金田鬼一は童話劇として紹介している。ヘンゼルとグレーテルが魔法使いの家から宝石を持ち帰ったときに「人間は働いてたべなくっちゃいけない。はたらけば、たべられる」[384]と言う。つまり戦時中の食糧不足を反映して、自ら土地を耕して食料を調達するべきだと説いているのである。本のあとがきには、作者の言葉として「これからさき、大東亜をしよつて立つ日本の、現在の少年少女諸君ばかりでなく、學校や、家庭や、社會で、それらの諸君を指導してくださる大人のかたがたにも、ごらん願へましたら」[385]と記されている。グリム童話の全訳を日本で初めて出した金田がこのような改変をしたのは、戦時下の厳格な出版規制が敷かれた時期に本を出すための苦肉の策であったといえよう。

藤原肇の「ヘンゼルとグレーテル」が収録されている本の題名は『勇ましいちびの仕立

[384] 本論 89 頁【表 6】資料番号 38 322 頁。
[385] 【表 6】資料番号 38 406 頁。

屋さん』である。おそらく「勇ましい」という題名のおかげで、検閲を免れたのであろう。Ⅰ期 B の邦訳文が 2 話のみであるのは、「児童読物改善ニ関スル指示要綱」が通達されたことと、戦時体制下であったことが要因であると思われる。

Ⅱ期は 91 話存在する。そのうち忠実な邦訳は 23 話、改変された邦訳は 29 話あり、改作された話は 31 話存在する。ベヒシュタイン版が 1 話、フンパーディンクのオペラの混成版が 5 話、ほかのグリム童話の混成版が 1 話、初稿版が 1 話存在する。特筆すべきは、1949(昭和 24)年にグリム童話の初稿（1810）の全訳本が田中梅吉によって出されたことである。底本は 1927 年に出版されたヨゼフ・レフツ(Joseph Lefftz)編の初稿本(*Märchen der Brüder Grimm Urfassung nach der Originalhandschrift der Abtei Ölenberg im Elsass*. Heidelberg, C. Winter, 1927）である。そこには初稿 48 話の邦訳がすべて収録されており、提供者別に話が紹介されている。目次にはヴィルヘルムによるものが 14 話、ヤーコプによるものが 27 話、信頼しうる人たちによるものが 7 話存在することが明記されている。初稿では「ヘンゼルとグレーテル」は「兄と妹」なので、ここでは「兄さんと妹」という題名で収録されている。邦訳文は原典の内容に忠実であるが、「パン焼き竈」が「パン焼きストーブ」に、「家畜小屋」が「豚小舎」になり、結末は「母親は死んでいた」(die Mutter aber war gestorben）が「お母さんは死んでしまいました」と訳されていて過去完了形が正しく訳されていないという間違いがある。しかしこの当時、日本で初稿が全訳されて出版されていたという事実は特筆すべきものである。田中が行ったこの仕事は研究者として高く評価されるべきものである。

Ⅱ期は子捨てが削除され、子どもたちが自ら道に迷う話が出現する。また子捨ての提案者が母親ではなく、父親であったり、他人であったりする話が出現する。とくに親の愛情を強調した話に改変されているものが多い。子どもたちが無事帰宅したとき、原典では「父親の首にかじりつく」という表現で、子どもたちの行動のみが強調されている。しかしⅡ期では父親が帰宅したとき 2 人をしっかりと抱きしめ、喜ぶ姿が描写されているものが出現する。親にとって子どもは何よりも大切な存在であるということを訴えているかのようである。改変された話に焦点を当てると、「近代家族」という言葉が垣間見える。原典でも 4 人家族の話である「ヘンゼルとグレーテル」は、近代家族の理想像を伝える恰好の話として受け取られ、改変されて普及したのであろう。その他に、プロレタリア児童文学に関わっている人物による改変が挙げられる。槇本楠郎と野長瀬正夫である。「ヘンゼルとグレーテル」は、プロレタリア層の家族の話である。槇本と野長瀬の話では、子どもたちは魔女を死亡させることがなく、宝物も略奪しない。彼らは貧しい家の子どもは悪事を働くという世間の先入観を削除するため、子どもたちが違法行為（殺人、略奪）をしないことにしたのであろう。

題名が「ヘンゼルとグレーテル」ではなく「お菓子の家」に変更されているものが多いのもⅡ期の特徴である。「お菓子の家」という題名のほとんどは、絵本や学年別雑誌に収録

されているものである。当時学年別雑誌は人気のある雑誌であった。そのため子どもたちへの影響は大きかったにちがいない。「ヘンゼルとグレーテル」の話が「お菓子の家」を想像させるのは、Ⅱ期からの改変によるものが大きいと思われる。

Ⅱ期からフンパーディンクのオペラを混成した話が出現する。しかしここで紹介されているのは、母親が優しい存在であるものばかりである。本来のオペラの話は母親が非常に怖い存在であり、日本で紹介されている優しい母親とは対称的である。フンパーディンクのオペラが混成されているものの、日本ではそれをさらに改変した形で受容されているのである。

戦中期に子どもから遠ざけられていた外国文学作品は、戦後になって数多く翻訳されるようになる。1953(昭和 28)年には「学校図書館法」が制定されたことを受け、図書館建設運動が盛んになり、出版社は原典に忠実な本を出版するようになる。Ⅱ期の邦訳数が多いのは、改変された話と原典に忠実な話が併存していることが要因の 1 つであろう。

Ⅲ期は、Ⅱ期に存在していた「お菓子の家」という題名は 2 話のみになり、1974(昭和 49)年以降、「ヘンゼルとグレーテル」に統一される。これは完訳至上主義や新著作権法施行によるものと思われる。話の展開はほぼ原典どおりになり、子捨ての話が収録されるようになる。しかし子どもたちによる魔女殺害や宝物略奪が省略されている話は存在する。継母の悪行は容認できるが、子どもたちの犯罪行為は認めることが出来ないという教育的判断が働いたのであろう。また子捨ての理由が改変されている話も出現する。その 1 つにこわせ・たまみ(1980)の話がある。継母が「びんぼうなのは、ふたりも子どもがいるから」と言い、子捨てを提案し実行する。子どもたちのことを不憫に思う父親に対して「じゃあ、パンをかうお金をかせいでおくれ」と言う。家庭経済が苦しい原因は父親の経済力のなさと子どもの数にあるとする継母の言動は、夫婦喧嘩や離婚につながる恐れがある。

実際その頃離婚率が増加していて、1983(昭和 58)年にはピークを迎える。女性の雇用率が増加し、Ⅱ期での近代家族像が揺らぎ、家庭環境が変化する。この頃の児童文学は、高度成長期に叫ばれた児童中心主義から一転して、リアルな描写が多くなる。メディアの発展と家族の複雑化とともに子どもたちが抱える問題を掘り下げる傾向が強くなるのである。

1975(昭和 50)年には家庭用テレビゲームが登場し、テレビ番組では「まんが日本昔ばなし」が放映される。メディアが発達し、子どもの読書離れが目立つようになる。その影響であろうか、1975 年には平田昭吾による『テレビ名作アニメ劇場』という絵本が出版される。1977(昭和 52)年には「メリーゴーランドえほん」という仕掛け絵本が出版される。さまざまな趣向を凝らして、子どもたちに本への興味を持たせようとしているのである。1973(昭和 48)年には、西本鶏介が『世界昔話集』を出版している。この本の副書名は「一日一話五分間のお話」である。これはどこでも持ち運びができるハンディタイプのもので、気軽に話を楽しむことができるものである。大人が幼児に数多くの話を読み聞かせすることができて、この当時としては目新しいものであったといえよう。平成期になると「一日

一話」と題して短い話が数多く収録された物語集が多く出版されるようになる。短い時間で、親が読み、子どもは耳からの読書を楽しむことで親子間の絆を深めようというのである。現在出版されている物語集は、西本の『世界昔話集』に端を発するものといえよう。

結　論

明治期、大正期、昭和期の 3 つの時代から「ヘンゼルとグレーテル」の邦訳の変遷をみていくと、時代ごとに特徴があることがわかる。収集した 168 話には、原典から忠実に訳されているもののほかに、改変されていたり、改作されていたりするものがある。そこには時代や社会の影響や翻訳者(作者)の意向で変化しているものが数多くある。実名が判明しているものは、その人物を詳細に調査すると邦訳の傾向を把握することができるが、筆名で発表されているものに関してはその調査ができない。そのため本論ではとくに筆名から実名を割り出す作業に力を注いだ。

「ヘンゼルとグレーテル」の最初の邦訳は東海生訳の「一太郎とおすみ」である。東海生は筆名であり、実名については明らかにされていない。そこで邦訳文を分析すると、原典には出現しない表現が見つかる。楽器では風琴(オルガン)やヴァイオリン、食べ物ではテンプラ、金平糖、まんじゅうなどである。さらに「向こうの」という意味の「あなた」という表現も頻出する。訳文は総じて原典に忠実で、昔話特有の結末句まで忠実に訳されている。結末句が訳出されているのは明治期では「一太郎とおすみ」のみである。東海生は昔話というジャンルにも造詣が深い人であることがわかる。様々な要素から検討した結果、東海生は上田敏であろうという結論に達した。彼は 1901(明治 34)年当時、高等師範学校に教授として在籍していた。東京帝國大學では英文科の学生でありドイツ語を履修しており、カール・フローレンツ(Karl Adolf Florenz)教授の指導を受けていた[386]。彼は講義でグリム童話「赤ずきん」を学生に暗記させていたという[387]。上田敏と同じ年に東京帝國大學に入学した登張竹風は、フローレンツの講義について「メールヒェンは文芸の珠玉である。之を軽んずる者は文芸そのものを軽んずるものである」[388]と指導されたという。上田敏は 1903(明治 36)年に樗牛會の講演会で「外国文學の研究」と題して俗説の必要性を説き、その例としてグリム童話を挙げている。彼にとってフローレンツの影響は大きかったと思われる。さらに上田敏は森鷗外と親交が深かったことが判明する。鷗外の長男は山君（森於菟）で、「ヘンゼルとグレーテル」の 2 番目の訳者である。於菟が「ヘンゼルとグレエテルと」を発表したのは 12 歳で、獨逸学協会学校に在籍していたときである。後年になって、於兎は鷗外がグリム童話を推奨し、翻訳の添削をしてくれたことを明らかにしている。また鷗外は西周と親戚関係にあり、西は獨逸学協会学校の初代校長を歴任している。獨逸学協会学校では独逸語教科書としてエンゲリン讀本が使用されていた。そこにはグリム童話やドイツ伝説が数多く収録されている。獨逸学協会学校は、その当時法曹官僚の養成機関として位置づけられていた。ドイツ語でグリム童話を学習した卒業生は、有識者と

---

386 安田保雄 前掲書 1977 年 17 頁。
387 上村直己『明治期ドイツ語学者の研究』多賀出版 2001 年 3 月 429 頁。
388 同上。

してなんらかの形でグリム童話を奨励し、普及に尽力したと思われる。実際、卒業生の巌谷小波はグリム童話を数多く紹介している。そこに在籍していた教員もまた、グリム童話の翻訳に携わっている。

明治期の邦訳文の特徴は、子どもたちの名前が和名であったり、道しるべとして撒く物が「飯粒」であったり、魔女の家が「餅の家」であったり、日本化されていることである。また「ヘンゼルとグレーテル」は、初めのうちは大人に紹介されていたが、大正期に近づくにつれて子どもに紹介されるようになる。

大正期の邦訳は、先行研究では 13 話とされていたが、筆者は新たに 7 話発見し、合計 20 話あることが判明した。大正期にはドイツ語対訳の本が数多く出版されており、ドイツ語の需要が多かったことが窺われる。同時に多くの児童雑誌が創刊され、子ども向けのグリム童話の単行本が初めて世に出る。それらは話の展開は原典に忠実であるが、子どもが楽しめるように改変が施されている。たとえば、ヘンゼルとグレーテルが魔女の家から帰宅する途中に鴨（家鴨）と遭遇するのだが、その鳥が擬人化され、子どもたちと会話をするという箇所である。この改変を行っているのは、明治期には 1 話(暁影生訳)しか存在しなかったが、大正期になると 3 話に増える。また題名も「ヘンゼルとグレーテル」ではなく「お菓子の家」に変わっていく。挿絵には子どもたちが「お菓子の家」(「パンの家」)を食べている場面が挿入されるようになる。明治期に「パンの家」を「お菓子の家」と表現しているのは、1 話(ばんすゐ訳)しかなく、そこには子どもが家を食べている場面の挿絵はない。継母が子捨てを提案し、魔女は焼死するという事実は伝えているが、擬人化した動物を挿入し、お菓子の家を前面に出すことにより、子どもたちを楽しませているのである。会話をする動物や食べることができるお菓子の家を想像することは、子どもにとって魅力的なものであったにちがいない。

「ヘンゼルとグレーテル」の最初の絵本に収録されている「キコリノコドモ」(巌谷小波監修)では、色鮮やかなお菓子の家の側で、グレーテルが座り込んでお菓子を食べている場面が描かれている。当時は現在のようにメディアが普及している時代ではなかったので、挿絵で視覚に訴えるような「菓子の家」が登場すると、読者である子どもたちは憧れを抱き、自分も食べたてみたいという衝動にかられたことだろう。さらに魔女がヘンゼルとグレーテルを歓待する場面では、原典には出現しない「ビスケット」、「カステーラ」、「チョコレート」、「クリーム」などの都市部で流行りの西洋菓子が出現する。大正期は、明治期から創業された西洋菓子産業が発展した時代である。とくに森永製菓の発展はめざましく、1918(大正 7)年に日本で初めてカカオを原料としたチョコレートの一貫製造に成功し、広く一般に供給する体制を整えるのである。現在販売されている森永製菓の「マリービスケット」は、1923(大正 12)年から製造販売されている。そのことを強調しているかのように、当時流行りの西洋菓子が子ども向けの読み物に取り込まれている。とくに蘆谷蘆村著「お菓子の家」では、子捨てを削除し、悪い親も排除し、チョコレートを出現させ、お菓子の

家を強調して楽しい話に改変しているのである。

大正期に創刊された『赤い鳥』では、1919(大正 8)年に西條八十は、森に住む魔女の「パンの家」を意識していると思われる童謡「お菓子の家」を発表している。この童謡にもいろいろな菓子が出現する。彼もまた子捨てには触れず、子どもに夢のみを与えるものとして「ヘンゼルとグレーテル」の一部のみを紹介しているのである。大正期に創刊された児童雑誌『金の船』と『童話』には「ヘンゼルとグレーテル」の全文が収録されているが、『赤い鳥』には収録されていない。おそらく『赤い鳥』は「純真無垢な存在である」子どものイメージを損なうため、この話を収録しなかったのであろう。しかしその一方では、両親が「木の皮を食べさせられない」や「夏冬の着物 1 枚さへ新調できない」といった貧しさを強調した訳文も出現している。実際、大正期は貧困のために子どもを手放さなければならない人びとが存在した。大正期は子どもという存在が認識され、児童雑誌の表紙において流行りの服を着た華やかな子どもが描かれている。一方、現実の社会では「ヘンゼルとグレーテル」に似た貧困家庭の子どもたちが数多くいた。大正期の訳者は、子どもの人権を認めて理想化し、菓子に焦点を当てて子どもに夢を与えようとした。その一方では、原典に忠実に訳すことにより、西洋昔話に描かれた貧しい庶民の現実を伝えようとしたのである。大正期に「ヘンゼルとグレーテル」の訳文が 20 話存在するのは、この時代の要求に合致した話であったからではないだろうか。

昭和初期は、金融恐慌、世界大恐慌の様相を帯びて、経済界は混乱に陥る。その状況を反映し、昭和期最初の邦訳は、「円本」と呼ばれる『小學生全集』に収録されている。庶民にとっては手頃な価格であったため、広く一般に普及したようである。その後『オクワシノイヘ』という非売品の絵本が出版される。子どもたちの名前は和名であり、実の両親ではなく叔父と叔母という設定である。この頃の日本は戦時体制下にあり、自分の子どもを捨てることなどあってはならないとする時代の風潮が現れている。しかし挿絵にはアルファベットで「MILKCHOCOLATE」という文字が描かれており、西洋菓子産業の宣伝が絵本に取り入れられているのである。消費者としての子どもの存在を認め、企業利益につながる発想は画期的なものであるといえる。

「国家総動員法」(1938)が制定され、「児童読物改善ニ関スル指示要綱」(1938)が通達されると出版物は極端に減少する。そのなかで奇蹟的に出版されたものが金田鬼一訳と藤原肇訳である。金田は童話劇という形式を取り入れ、戦時中の食糧不足を反映し、自ら土地を開墾し食料を調達するべきだと説いている。グリム童話の全訳を日本で初めて出した金田が、改変をしてまで出版に至ったということは、「ヘンゼルとグレーテル」を使って労働の大切さを国民に伝えたかったのではないだろうか。藤原は『勇ましいちびの仕立屋さん』という書名のおかげで検閲を免れたと思われる。戦時体制下では訳者は苦肉の策を講じて、次世代の子どもたちにグリム童話を伝えようとしたのである。

戦後になると、戦中期に子どもから遠ざけられていた外国文学作品が数多く出版される

ようになる。そのなかで「ヘンゼルとグレーテル」の話は子捨てが削除され、子どもたちが自ら道に迷う話に改変される。お菓子の家を見つけて宝物を奪い、帰宅すると家族で喜び合うという子どもたちの冒険物語に変えられているのである。「こどもの日」や「母の日」が制定され、「父の日」が実施されるようになった背景には、親子間の愛情や子どもを大切にすることを強調する必要があったと思われる。親にとって子どもは何よりも大切であることを訴えているのである。改変された話に焦点を当てると、「近代家族」という言葉が垣間見える。「ヘンゼルとグレーテル」は原典でも 4 人家族の話であるので、家族の理想像を伝えるには恰好の話であったようだ。また「お菓子の家」という題名が多く存在するのもこの時期である。「ヘンゼルとグレーテル」の話が「お菓子の家」を想像させるのは、この時代からの改変によるものかもしれない。その一方、1953(昭和 28)年に「学校図書館法」が制定されたことを受けて図書館建設運動が盛んになる。出版社は原典に忠実な話を出版するようになる。Ⅱ期において邦訳数が多いのは改変された話と忠実な話が併存していることが要因であろう。

1971(昭和 46)年の新著作権法の施行を境に、「ヘンゼルとグレーテル」は話の展開がほぼ原典どおりになり、子捨ての話が収録されるようになる。ただし、子どもたちによる違法行為は省略される傾向がある。継母の悪行は容認できても、子どもたちの犯罪行為は認めることができないという教育的判断が働いているのである。子どもの読み物が教育書として扱われているのである。昭和後期に近づくと、継母が子捨ての提案をするときに、貧乏なのは子どもが 2 人もいるからと、家庭経済の苦しさは子どもの数が原因であるとするものが出現する。離婚率が増加し始め、近代家族像が揺らぎはじめ、家庭環境が変化する時代の到来である。児童文学でも「性」「自殺」「家出」「離婚」などのテーマが目立つようになる。メディアの発展と家族の複雑化とともに子どもたちが抱える問題を掘り下げる傾向が強くなる。1975(昭和 50)年には家庭用テレビゲームが登場する。メディアの発達に伴い、子どもの読書離れが目立つようになる。出版社はこのような状況のなかで、テレビ番組用の絵本や仕掛け絵本などで「ヘンゼルとグレーテル」を紹介している。趣向を凝らして子どもたちに本への興味を持たせようと四苦八苦しているのである。昭和期は原典に忠実な訳と大幅に改変された訳が混在するまさに「激動の時代」であったといえる。戦前、戦中、戦後、高度経済成長など時代背景がダイナミックに変わるのに乗じて、「ヘンゼルとグレーテル」の邦訳も改変されていく。昭和期の終わりに出る、一日一話の読み聞かせ（5 分間）という物語集は、平成期に入って、人気を集め次第に家庭におけるグリム童話受容の主流となっていくようである。

グリム童話集の翻訳に関して特筆すべきは、田中梅吉が 1949(昭和 24)年に『祖稿グリム童話全集』を出版していることである。この本はヨゼフ・レフツ(Joseph Lefftz)編の初稿本(*Märchen der Brüder Grimm Urfassung nach der Originalhandschrift der Abtei Ölenberg im Elsass*)を底本として、初稿 48 話の邦訳がすべて収録されたものである。ま

た目次には話の提供者として、ヴィルヘルムによるものが 14 話、ヤーコプによるものが 27 話、信頼しうる人たちによるものが 7 話存在することが明記されている。

金田鬼一は 1924(大正 13)年に独逸編の第 1 巻、1927(昭和 2)年に独逸編の第 2 巻を出版した『世界童話大系』において、日本で初めてグリム童話の全訳を成し遂げ、第 7 版(決定版)(1857)に収録されている話をすべて邦訳して紹介している。小澤俊夫は 1985(昭和 60)年に『完訳グリム童話』を出版しており、第 2 版に収録されている話をすべて邦訳して紹介している。吉原高志と吉原素子は 1997(平成 9)年に『初版グリム童話集』を出版し、初版の邦訳を紹介している。

このように日本は世界でもまれにみるグリム童話の邦訳が揃った国である。初版本の全訳のみ平成期にずれ込むが、決定版(1927)、初稿(1949)、第 2 版(1985)の全訳本が出たのは、すべて昭和期である。とりわけ、ドイツで発見された初稿が出版されて、約 20 年後に初稿の全訳本を出版した田中梅吉の仕事は高く評価すべきである。

明治期から昭和期までの「ヘンゼルとグレーテル」を、主に改変点に焦点をあてて見ていくと、そこには社会の変容が取り込まれていることが判明する。歴史的、社会的背景に目を向けると、明治期の近代化、大正期の童心主義、昭和初期の軍国主義、戦後の近代家族主義などのキーワードが見えてくる。子どもの読み物に社会の要素が入れられているのである。外国文学作品である「ヘンゼルとグレーテル」が、日本でどのように受け入れられたかを文学だけでなく、社会学、歴史学、法学、経済学、ジェンダー学などから学際的な視点からの考察を試みた。本論の価値はその領域横断的研究にあると思われる。

謝　辞

本論文を執筆するにあたり、多くの方々からご支援とご指導を賜りました。この場を借りまして、感謝の意を表します。

とりわけ、指導教官である梅花女子大学大学院教授 野口芳子先生には、博士課程前期・後期を通じて５年間、親身なご指導を賜りました。心より感謝申しあげます。グリム童話研究の第一人者である野口先生より直接指導を受けたことは、私にとってかけがえのない財産となりました。野口先生の細やかなお心遣いに触れながら、粘り強い調査力と強い精神力を身につけることができました。研究とはいえ、至福の学生生活を送ることができたのは、野口先生のおかげです。本当にありがとうございました。

梅花女子大学大学院では、多くの先生方にご指導ご鞭撻を賜りました。また切磋琢磨してきた研究室の院生、いつも温かい言葉をかけて励ましてくださった院生の方々には、心よりお礼申しあげます。

国立国会図書館、大阪府立中央図書館、大阪国際児童文学館、三康図書館、梅花女子大学図書館をはじめ、多くの図書館の方々にご協力いただきました。さらに明治製菓や森永製菓には、貴重な資料や情報の提供をしていただきました。心よりお礼申しあげます。

本論文を完成することができたのは、多くの方々の支援や励ましのおかげです。改めて感謝の意を表します。

最後に、研究生活を温かく見守り、支え続けてくれた家族に心より感謝いたします。

2021 年 11 月　小泉直美

参考文献

使用テキスト

1. 初稿/初版 Röllke, Heinz: *Die älteste Märchensammlung der Brüder Grimm*. Cologny-Geneve: Bodmer 1975.
2. 第 2 版 Brüder Grimm: *Kinder- und Hausmärchen.* Hrsg. v. Heinz Rölleke. Bd.1. Köln: Diederichs 1982.
3. 第 3 版 *Kinder- und Hausmärchen gesammelt durch die Brüder Grimm.* Hrsg. v. Heinz Rölleke. Frankfurt a. M. : Deutscher Klassiker 1983.
4. 第 4 版 *Kinder- und Hausmärchen gesammelt durch die Brüder Grimm.* Bd.1. Göttingen: Dieterich 1840.
5. 第 5 版 *Kinder- und Hausmärchen gesammelt durch die Brüder Grimm*. Bd. 1. Göttingen: Dieterich 1843.
6. 第 6 版 *Kinder- und Hausmärchen gesammelt durch die Brüder Grimm*. Bd. 1. Göttingen: Dieterich 1850.
7. 第 7 版 Brüder Grimm: *Kinder- und Hausmärchen.* Bd.1-3. Hrsg. v. Heinz Rölleke. Stuttgart: Reclam 1980.

参考文献（ドイツ語）

1. Bechstein, Ludwig: *Deutsches Märchenbuch.* California: Createspace 2013.
2. Engelien, August u. Fechner, Heinrich: *Deutsches Lesebuch aus den Quellen zusammengestellt. Ausg. A, Teil.5*. Berlin: Schulze 1874,
3. Grimm, Jacob u. Grimm, Wilhelm: *Deutsches Wörterbuch*. München: DTV 1984, Bd.18. (1. Aufl. 1941 Leipzig).
4. Grimm, Jacob: *Deutsche Rechtsaltertümer.* Darmstadt: WBG 1965, Bd.1. (1. Aufl.1899)
5. Fischer, Max u. Kraft, Josef: *Deutsches Lesebuch zum Gebrauche an Bildungsanstalten für Kindergärtnerinnen*. Wien: Graeser, 1882.
6. Humperdinck, Engelbert (Komponist) *Hänsel und Gretel*. Wette, Adelheid (Textdichter) Stuttgart: Reclam 1952.
7. Muff, Christian. u. Dammann, Adolf: *Deutsches Lesebuch für höhere Mädchenschulen II*: Berlin: Grote, 1895.
8. OAG Tokyo (ed.): OAG Notizen September 2006. Tokyo: OAG. 2006.
9. Paldamus, Friedrich Christian: *Deutches Lesebuch IV*: Frankfurt a. M.: Hermann, 1870.

10. Röllke, Heinz: *Die Märchen der Brüder Grimm-Quellen und Studien*. Trier: WVT. 2000.
11. Rölleke, Heinz: August Stöbers Einfluß auf die Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm. *In: Wo das Wünschen noch geholfen hat*. Bonn: Bouvier 1985.

参考文献（英語）

1. Teylor, Edgar (ed.): *German Popular Stories*. London: Chatto & Windus [1869].
2. Uyehara, Saiichro (ed.): *Selections from Grimm's Fairy Tales* .Tokyo: Uyehara-shoten 1902.
3. Vredenburug, Edric (ed.): *Grimm's Fairy Tales*. London: Raphael Tuck, [1919].
4. Wehnert, Edward: *Household Stories. Collected by the Brothers Grimm*. Newly translated. (illust.) London, Routledge 1861.

参考文献（日本語）

1. 青柳まちこ「忌避された性」『日本民俗文化大系』10 巻 普及版 小学館 1995 年
2. 阿部恒久他『通史と史料 日本近現代女性史』芙蓉書房出版 2000 年
3. 石井昌光『情熱の詩人 土井晩翠』東北出版 1953 年
4. 石川弘義他編『大衆文化事典』弘文堂 1991 年
5. 伊藤直子「『夜の森』の帝劇公演（1913）をめぐってードイツ・オペラの受容の一側面ー」『国立音楽大学研究紀要』44 集 国立音楽大学紀要編集委員会 2010 年
6. 井上こみち「童句・童謡に夢を託す八十代青年土家由岐雄先生を訪ねて」『児童文芸』33(10) 1987 年
7. 赤い鳥事典編集委員会編『赤い鳥事典』柏書房 2018 年
8. 阿川弘之『志賀直哉』上巻 岩波書店 1994 年
9. 磯崎嘉治「東京人・上田柳村の一性格」『定本上田敏全集』月報・総目次巻 教育出版センター 1985 年
10. 板倉敏之他編『もうひとりのグリムーグリム兄弟以前のドイツ・メルヘン』北星堂書店 1998 年
11. 伊藤正義編『新潮日本古典集成謡曲集』中巻 新潮社 1986 年
12. 井上十吉『井上英和大辞典』井上辭典刊行會 1915 年
13. 岩下哲典他『レンズが撮らえた幕末の日本』山川出版社 2011 年
14. 巌谷大四『波の跫音』新潮社 1974 年
15. 臼井勝美他編『日本近現代人名辞典』吉川弘文館 2001 年
16. 上田正昭他編『日本人名大辞典』講談社 2001 年
17. 上田敏全集刊行会編『定本上田敏全集』2 巻 教育出版センター 1985 年

18. 上田敏全集刊行会編『定本上田敏全集』6 巻 教育出版センター 1985 年
19. 上村くにこ訳『ロゼット姫』東洋文化社 1981 年
20. 江後迪子『洋菓子事始め』神戸凪月堂 2002 年
21. 大泉傳編『日本心理学者事典』クレス出版 2003 年
22. 大久保久雄「博文館編集者南部亘国さんと蔵書のこと」『名著サプリメント』3(10) 名著普及会 1990 年
23. 大阪国際児童文学館編『日本児童文学大事典』1 巻 大日本図書 1993 年
24. 大島浩英「『グリム童話集』初稿、初版、第 7 版における『ヘンゼルとグレーテル』の変化について」『大手前論集』(10) 大手前大学 2009 年
25. 大塚民俗学会編『日本民俗事典』弘文堂 1972 年
26. 大村喜吉他編『英語教育史資料』3 巻 東京法令出版 1980 年
27. 岡信子「対談土家由岐雄先生童話への夢そして、出会い」『児童文芸』39(5) 日本児童文芸家協会 1993 年
28. 岡長平『宮脇紀雄』岡長平 2016 年
29. 岡田哲編『たべもの起源事典』東京堂出版 2003 年
30. 岡田哲『明治洋食事始め』講談社 2012 年
31. 岡田哲編『たべもの起源事典 日本編』筑摩書房 2013 年
32. 荻野美穂『「家族計画」への道』岩波書店 2008 年
33. 小倉広重編/木田信子話『キスカーこころのたまてばこー』小倉広重 1983 年
34. 尾崎真理子『ひみつの王国　評伝石井桃子』新潮社 2014 年
35. 小田切進編『日本近代文学大事典』2 巻 講談社 1977 年
36. 落合恵美子『21 世紀家族へ』有斐閣 1998 年
37. 落合直文他『明治文學全集』44 巻 筑摩書房 1968 年
38. 風祭甚三郎譯『増訂獨和辭彙』後学堂 第 3 版 1887 年
39. 金尾種次郎編『藝文』1(9) 金尾文淵堂 1910 年
40. 金城ハウプトマン朱美「グリム兄弟のメルヘン『ヘンゼルとグレーテル』についてーその成立と現代ドイツにおける受容ー」溝井裕一編『グリムと民間伝承』麻生出版 2013 年
41. 片桐洋一『古今和歌集全評釈』上巻 講談社 1998 年
42. 金子宏他編『法律学小辞典』有斐閣 第 3 版 1999 年
43. 川戸道昭/野口芳子/榊原貴教編『日本におけるグリム童話翻訳書誌』ナダ出版センター 2000 年
44. 川戸道昭/榊原貴教編『図説翻訳文学総合事典』1 巻 大空社 2009 年
45. 川戸道昭/榊原貴教編『児童文学翻訳作品総覧 明治大正昭和平成の 135 年翻訳目録 4 フランス・ドイツ編 2 大空社 2005 年

46. 上村直己『明治期ドイツ語学者の研究』多賀出版 2001 年
47. 河原和枝『子ども観の近代』(中公新書)中央公論社 1998 年
48. 岸辺成雄他編『音楽大辞典』1 巻 平凡社 1981 年
49. 北根豊編『新聞総覧』明治 44 年版 大空社 1991 年
50. 北根豊編『新聞総覧』大正 11 年版 大空社 1993 年
51. 教育ジャーナリズム史研究会編『教育関係雑誌目次集成 第Ⅱ期学校教育編』20 巻 日本図書センター 1989 年
52. 教育ジャーナリズム史研究会編『日本之小學教師 ; 教育研究』日本図書センター 1989 年
53. 暁影生「遠慮なければ近憂あり」『不知火』(9) 青年義會事務所 1894 年
54. 近代人物研究会編『近代人物号筆名辞典』柏書房 1979 年
55. 久留島典子他編『歴史を読み替えるジェンダーから見た日本史』大月書店 2015 年
56. 桑原洋子他編『近代福祉法制大全』1 巻 港の人 1999 年
57. 経済雑誌社『国史大系』16 巻 経済雑誌社 1901 年
58. 小泉英一『堕胎罪研究』巖松堂書店 1934 年
59. 小泉直美「明治期におけるグリム童話 KHM15『ヘンゼルとグレーテル』の受容について－『一太郎とおすみ』の訳者東海生に焦点をあてて－」『梅花児童文学』(27) 梅花女子大学大学院児童文学会 2019 年
60. 小泉直美「『エンゲリン讀本』における邦訳されたグリム童話とドイツ伝説－初出の邦訳を中心に－」『大阪国際児童文学振興財団研究紀要』(33) 大阪国際児童文学振興財団 2020 年
61. 小泉直美「昭和期における『ヘンゼルとグレーテル』の受容について－ジェンダーの視点から－」『日本ジェンダー研究』(24) 日本ジェンダー学会 2021 年
62. 小出正吾『童話から童話へ』教文館 1980 年
63. 甲賀忠一他『明治・大正・昭和・平成　物価の文化史事典』展望社 2008 年
64. こどもの本編集委員会編『こどもの本』10(7) 日本児童図書出版協会 1984 年
65. 小林祥次郎『くいもの　食の語源と博物誌』勉誠出版 2011 年
66. 小林弘忠『「金の星」ものがたり』毎日新聞社 2002 年
67. 小林昌樹編/解題『雑誌新聞解題事典 1935』3 巻 金沢文圃閣 2015 年
68. 小堀桂一郎『森鷗外』ミネルヴァ書房 2013 年
69. 小谷野敦「鳥越信の『児童文学完訳至上主義』の迷走」『ネバーランド』12 巻 てらいんく 2009 年
70. 近藤芳樹『牛乳考屠畜考』日新堂 1872 年
71. 今野一雄訳『ペローの昔ばなし』白水社 2007 年
72. 西條八十『西條八十全集』6 巻 国書刊行会 1992 年

73. 西條八十「お菓子の家」『赤い鳥』3(4) 赤い鳥社 1919 年
74. 斎藤佐次郎『斎藤佐次郎・児童文学史』金の星社 1996 年
75. 佐伯郁郎『少國民をめぐって』日本出版社 1943 年
76. 櫻井美紀「昔話『味噌買橋』の出自ーその翻案と受容の系譜ー」日本口承文芸学会『口承文芸研究』(15) 日本口承文芸学会 1992 年
77. 笹渕友一『「文學界」とその時代』上巻 明治書院 1959 年
78. 三陸河北新報社編『20 世紀の群像』上巻 三陸河北新報社 2001 年
79. 塩谷七重郎『松江春次伝』歴史春秋出版 2005 年
80. 静岡新聞社出版局編『静岡県歴史人物事典』静岡新聞社 1991 年
81. 清水多吉『西周』ミネルヴァ書房 2010 年
82. 下川耿史編『明治・大正　家庭史年表』河出書房新社 2000 年
83. 下川耿史編『近代子ども史年表明治・大正編』河出書房新社 2002 年
84. 下中邦彦編『日本人名大事典』2 巻 復刻版 平凡社 1990 年
85. 社会事業研究所編『徳川時代児童保護資料/日本堕胎史』久山社 1998 年
86. 主婦の友社社史編纂委員会編『主婦の友社八十年史』主婦の友社 1996 年
87. 小学館国語辞典編集部編『日本国語大辞典』小学館 第 2 版 2001 年
88. 少年通俗教育會編『幼年百譚お話の庫 春の巻』博文館 1916 年
89. 人事興信所編『人事興信録』人事興信所 第 7 版 1925 年
90. 菅忠道『自伝的児童文化史戦前・戦中期編』ほるぷ教育開発研究所 1978 年
91. 杉本邦子『明治の文芸雑誌』明治書院 1999 年
92. 杉本つとむ『語源海』東京書籍 2005 年
93. 杉山洋子他訳『ペンタメローネ』大修館書店 1995 年
94. 須田康之「日本におけるグリム童話の受容と変容」『教育社会学研究』49 集 日本教育社会学会 1991 年
95. スタンリー・セイディ編/中矢一義監修『新グローヴオペラ事典』白水社 2006 年
96. 政教社編『日本及日本人』(328) 政教社 1935 年
97. 高木昌史編著『決定版グリム童話事典』三弥井書店 2017 年
98. 高嶋雄三郎『松』法政大学出版局 1975 年
99. 高橋梵仙『日本人口史之研究』三友社 1941 年
100. 田口親「外山正一博士」『日本歴史』(74) 實教出版 1954 年
101. 田口親『田口卯吉』吉川弘文館 2000 年
102. 竹内書店新社編集部編『超ロングセラー大図鑑』竹内書店新社 2001 年
103. 立原えりか「離婚は残酷なメルヘン」『婦人公論』80(5) 1995 年
104. 達崎龍『達崎龍全童謡ホロホロ鳥』あい書林 1983 年
105. 谷口靖彦『明治の翻訳王森田思軒』山陽新聞社 2000 年

106. 土家由岐雄「かわいそうなぞう」『愛の学校 2 年生』東洋書館 1951 年
107. 弦巻克二他「池田小菊関連書籍－志賀直哉未発表書簡を求めて－」『叙説』(33) 奈良女子大学文学部国語国文学研究室 2006 年
108. 帝國劇場『帝國劇場絵本筋書 大正 2 年 2 月あきらめほか』帝國劇場 1913 年
109. 寺沢龍『明治の女子留学生』平凡社 2009 年
110. 寺田勇吉他『獨英和三対小字彙』共同館 1893 年
111. 土井晩翠他『現代日本文學全集』58 巻 筑摩書房 1957 年
112. 土井晩翠他『現代日本文學大系』12 巻 筑摩書房 1971 年
113. 土井晩翠『雨の降る日は天気が悪い』日本図書センター 1983 年
114. 東京外国語大学史編纂委員会編『東京外国語大学史』東京外国語大学 1999 年
115. 東京書籍商組合『東京書籍商伝記集覧』青裳堂書店 1978 年
116. 「東京凧月堂社史」編纂委員会編『東京凧月堂社史』東京凧月堂 2005 年
117. 戸沢行夫『明六社の人びと』築地書館 1991 年
118. 獨協学園百年史編纂委員会編『独協百年』(5) 1981 年
119. 獨協学園百年史編纂委員会編『獨協学園史 1881-2000』獨協学園 2000 年
120. 獨協学園史調査研究資料センター編『獨協学園資料センター研究年報』4 号 獨協学園史調査研究資料センター 2012 年
121. 富田仁『舶来事物起原事典』名著普及会 1987 年
122. 鳥越信編『はじめて学ぶ日本児童文学史』ミネルヴァ書房 2001 年
123. 鳥越信編『はじめて学ぶ日本の絵本史Ⅱ』ミネルヴァ書房 2002 年
124. 中一弥『挿絵画家・中一弥』集英社 2003 年
125. 永井菊枝『小伝乙骨家の歴史』フィリア 2006 年
126. 中村洪介『西洋の音、日本の耳』春秋社新装版 2002 年
127. 中村元他編『岩波仏教辞典』第 2 版 岩波書店 2002 年
128. 永代静雄編『新聞人名辞典』1 巻 日本図書センター 1988 年
129. 永代静雄編『新聞人名辞典』2 巻 日本図書センター 1988 年
130. 滑川道夫他編『作品による日本児童文学史』1 巻 牧書店 1968 年
131. 南部亘国『回想の博文館』日本古事通信社 1973 年
132. 日外アソシエーツ編『20 世紀日本人名辞典』日外アソシエーツ 2004 年
133. 日外アソシエーツ編集部『新訂増補人物レファレンス事典 明治・大正・昭和(戦前編)Ⅱ』日外アソシエーツ 2010 年
134. 日本近代文学会東北支部編『東北近代文学事典』勉誠出版 2013 年
135. 日本近代文学館編『日本近代文学大事典』2-3 巻 講談社 1977 年
136. 日本児童文学学会編『児童文学事典』東京書籍 1988 年
137. 日本児童文学編集部「新著作権法の問題点と注意点」『日本児童文学』17(4) 盛光社

1971 年
138. 日本児童文学編集部「どうなる子どもの本の世界」『日本児童文学』20(4) 盛光社 1974 年
139. 日本総合愛育研究会編『日本子ども資料年鑑 1991/92』中央出版 1991 年
140. 日本大辞典編集刊行会編『日本国語大辞典』1 巻 小学館 1972 年
141. 日本著作権協議会編『著作権台帳文化人名録』日本著作権協議会 第 19 版 1985 年
142. 日本歴史學會編『日本歴史』(74) 實教出版 1954 年
143. 野口芳子『グリムのメルヒェンその夢と現実』勁草書房 1994 年
144. 野口芳子「『グリム童話』のなかの悪人像－継母と魔女の抽出を中心に－」『武庫川女性学研究』(2) 武庫川女子大学女性学研究会 1997 年
145. 野口芳子『グリム童話と魔女』勁草書房 2002 年
146. 野口芳子『グリム童話のメタファー』勁草書房 2016 年
147. 野口芳子「幕末にヤーコプ・グリムを訪問した日本人について」大野寿子編『グリム童話と表象文化』勉誠出版 2017 年
148. 野口芳子「明治期における『赤ずきん』の受容について－最初の邦訳と邦訳者を中心に－」『梅花児童文学』(26) 梅花女子大学大学院児童文学会 2018 年
149. 野口芳子「日本における『赤ずきん』の受容について－昭和期を中心に－」『梅花児童文学』(27) 梅花女子大学大学院児童文学会 2019 年
150. 野中正孝編『東京外国語学校史』不二出版 2008 年
151. 畠山兆子『小川未明　浜田広介』大日本図書 1986 年
152. 波多野勤子『幼児の心理』光文社 1954 年
153. 波多野勤子『道　愛情の記録』文藝春秋新社 1958 年
154. 浜田廣介「作家の意欲」『児童文芸』14(3) 日本児童文芸家協会 1968 年
155. 浜田廣介「金田先生ご夫妻のこと」『児童文芸』19(10) 日本児童文芸家協会 1973 年
156. 浜田留美『父浜田廣介の生涯』筑摩書房 1983 年
157. 樋口雄彦『旧幕臣の明治維新』吉川弘文館 2005 年
158. 樋口雄彦『静岡学問所』静岡新聞社 2010 年
159. 姫岡とし子『ヨーロッパの家族史』山川出版社 2008 年
160. 廣庭基介「資料島文次郎京都帝国大学附属図書館初代館長年譜について」『花園大学文学部研究紀要』(32) 花園大学文学部 2000 年
161. 府川源一郎「樋口勘次郎とグリム童話」横浜国立大学編『横浜国大国語教育研究』横浜国立大学国語教育研究会 2004 年
162. 福沢諭吉「肉食之説」『福沢諭吉全集』20 巻 岩波書店 1963 年
163. 福田アジオ他編『日本民俗大辞典』下巻 吉川弘文館 2000 年
164. 福田アジオ『日本の民俗学』吉川弘文館 2009 年

165. 福田清人他編『日本児童文芸史』三省堂 1983 年
166. 藤沢衛彦『図説日本民俗学全集』3 巻 高橋書店 1977 年
167. 藤本一惠『清原元輔全釈』風間書房 1989 年
168. 文教政策研究会編『日本の物価と風俗 130 年のうつり変わり明治元年～平成 7 年』文教政策研究会 1996 年
169. ベーベル著/伊東勉他訳『婦人論』上巻 大月書店 1958 年
170. 保志虎吉他編『袖珍獨和新辭林』三省堂 1898 年
171. 保志虎吉編『大正獨和辞典』三省堂書店 1912 年
172. 細谷瑞枝「『ヘンゼルとグレーテル』その後」『茨城キリスト教大学紀要』(37) 茨城キリスト大学 2003 年
173. 毎日コミュニケーションズ編『昭和ニュース事典』8 巻 毎日コミュニケーションズ 1994 年
174. 前田富祺編『日本語源大辞典』小学館 2005 年
175. 槇本ナナ子「父槇本楠郎のこと」『日本児童文学』2(11) 児童文学者協会 1956 年
176. 増井敬二『日本のオペラー明治から大正へー』民音音楽資料館 1984 年
177. 増井敬二『日本オペラ史～1952』 水曜社 2003 年
178. 松村康平他編『児童学事典』光生館 第 3 版 1970 年
179. 三上参次『外山正一先生小伝』大空社 1987 年
180. 三成美保『ジェンダーの法史学』勁草書房 2005 年
181. 宮地正人他編『明治時代史大辞典』2 巻 吉川弘文館 2012 年
182. 三好行雄他編『日本現代文学大辞典人名・事項編』明治書院 1994 年
183. 武庫川女子大学『武庫川女性学研究』(2) 武庫川女子大学女性学研究会 1997 年
184. 村井弦斎『食道樂續篇夏の巻』報知社出版部 1906 年
185. 村上濱吉編『明治文學書目』村上文庫 1937 年
186. 森鷗外/森於菟共譯『グリム童話しあはせなハンス』文藝春秋社 1948 年
187. 森於菟『父親としての森鷗外』(ちくま文庫)筑摩書房 1993 年
188. 森茉莉『森茉莉全集』1 巻 筑摩書房 1993 年
189. 森岡清美編『新社会学辞典』有斐閣 1993 年
190. 森永製菓編『森永製菓 100 年史』森永製菓 2000 年
191. 森山茂樹他『日本子ども史』平凡社 2002 年
192. 安田保雄『上田敏研究　その生涯と業績』有精堂出版 増補新版 1977 年
193. 吉田精一『森鷗外全集』別巻 筑摩書房 1971 年
194. 吉野作造『吉野作造』日本図書センター 1998 年
195. ルイス・フロイス著/岡田章雄訳『ヨーロッパ文化と日本文化』岩波書店 1991 年
196. 蘆花生『不如帰』民友社 1900 年

197. 早稲田大学大学史編算所編『早稲田大学百年史』2 巻 早稲田大学出版部 1981 年
198. 渡辺勲他「矢野鶴子さんに聞く蘆花夫妻の想いで」『同志社談叢』(31) 同志社大学 2011 年

その他資料 (国立国会図書館デジタルコレクション所蔵)

1. 『京都帝國大學卒業生名簿』1936 年
2. 『職員録　明治 34 年 4 月 1 日現在調査』
3. 『職員録　大正 15 年 1 月 1 日』1926 年
4. 『第二高等学學校一覧　明治 37 年－明治 38 年』1905 年
5. 『東京外國語學校一覧　明治 37 年－明治 38 年』1905 年
6. 『東京外國語學校一覧』1909 年
7. 『東京帝國大學一覧　明治 40 年－明治 41 年』1907 年
8. 『東京帝國大學卒業生氏名録』1926 年
9. 『早稲田大學校友會會員名簿　大正 4 年 11 月調』1915 年
10. 『早稲田大學校友會會員名簿　昭和 10 年用』1934 年

図版出典一覧

【図 1】 『寶の箱』ばんすゐ訳 東京學海指針社 1905(明治 38)年 3 月以前 2-3 頁
大阪国際児童文学館所蔵

【図 2】 同上書 30-31 頁 大阪国際児童文学館所蔵

【図 3】 同上書 16-17 頁 大阪国際児童文学館所蔵

【図 4】 『日曜學校話材お伽艸紙 第 4 編』柴田流星訳 教文館 1910(明治 43)年 12 月
口絵 国立国会図書館デジタルコレクション所蔵

【図 5】 『獨逸お伽噺』日野蕨村訳 岡村書店 1911(明治 44)年 2 月 「グレーテルとヘンゼル」内 国立国会図書館デジタルコレクション所蔵

【図 6】 『グリム御伽噺』中島孤島訳 冨山房 1916(大正 5)年 5 月 245 頁
国立国会図書館デジタルコレクション所蔵

【図 7】 『名作お伽画噺』巌谷小波監修 富田文陽堂 1920(大正 9)年 7 月 3-4 頁
大阪国際児童文学館所蔵

【図 8】 「林へ子を捨てに」三宅房子訳『金の船』3(12) 1921(大正 10)年 12 月 口絵
梅花女子大学附属図書館所蔵

【図 9】 『世界少年少女名著大系 10 グリム童話』金の星社 1924(大正 13)年 10 月
151 頁 大阪国際児童文学館所蔵

【図 10】 『グリム御伽噺』冨山房 1916(大正 5)年 5 月 「ヘンゼルとグレテル」内
国立国会図書館デジタルコレクション所蔵

【図 11】 「林へ子を捨てに」三宅房子訳『金の船』3(12) キンノツノ社 1921(大正 10)年
12 月 45 頁 梅花女子大学附属図書館所蔵

【図 12】 「ヘンセルとグレーテル」今井ただし訳『童話』5(7) コドモ社 1924(大正 13)
年 6 月 86 頁 梅花女子大学附属図書館所蔵

【図 13】 『ハンセルとグレーテル』玉川学園出版部 1930(昭和 5)年 9 月 口絵
大阪国際児童文学館所蔵

【図 14】 『オクワシノイヘ』主婦之友社 1935(昭和 10)年 6 月 11 頁
大阪国際児童文学館所蔵

【図 15】 同上書 23-24 頁 大阪国際児童文学館所蔵

【図 16】 同上書 13-14 頁 大阪国際児童文学館所蔵

【図 17】 『祖稿グリム童話全集』東京堂 1949(昭和 24)年 11 月 「兄さんと妹」内
国立国会図書館所蔵

【図 18】 『ありばばのぼうけん』小学館 1953(昭和 28)年 11 月 30-31 頁
国立国会図書館所蔵

【図 19】 同上書 46 頁 国立国会図書館所蔵

【図 20】 『グリム絵ものがたり』偕成社 1958(昭和 33)年 6 月 54-55 頁
国立国会図書館デジタルコレクション所蔵

【図 21】 『おかしのおうち』小学館 1960(昭和 35)年 1 月 20 頁
国立国会図書館デジタルコレクション所蔵

【図 22】 「おかしのいえ」立原えりか文『たのしい幼稚園』講談社 1961(昭和 36)年 12 月 5-6 頁 国立国会図書館デジタルコレクション所蔵

【図 23】 『テレビ名作アニメ劇場ヘンゼルとグレーテル』ポプラ社 1975(昭和 50)年 12 月 表紙 神奈川県立図書館所蔵

【図 24】 家庭版かみしばい「ヘンゼルとグレーテル」童心社 1984(昭和 59)年 11 月 1 画面 小泉直美所蔵

【図 25】 同上書 5 画面 小泉直美所蔵

【図 26】 『キンダーおはなしえほん ヘンゼルとグレーテル』フレーベル館 1967(昭和 42)年 4 月 8-9 頁 国立国会図書館デジタルコレクション所蔵

【図 27】 同上書 20-21 頁 国立国会図書館デジタルコレクション所蔵

改版による人物描写の変遷表

父親

	将来を妻に嘆く	①妻に子捨てをせめたてられ、承知したとき	②子捨ての心情	②2度めの子捨てに対しての諺	魔女の家から子どもたちが帰宅したとき
初稿	なし	なし	なし	なし	金持ちになった der ward ein reicher Mann
初版	同上	同上	子どもたちと最後の一口まで分け合う方がよい Es wäre doch besser, wenn du den letzten Bissen mit deinen Kindern teiltest.	同上	同上
第2版	同上	同上	同上	同上	子どもたちが充分な宝物を持ち帰ってきたので、彼らは一生食べ物や飲み物に心配がいらなくなった Nun brachten die Kinder Reichthümer genug mit und sie brauchten für Essen und Trinken nichit mehr zu sorgen.
第3版	同上	同上	同上	同上	同上
第4版	同上	同上	同上	同上	同上
第5版	俺たちはどうなるのだろう Was soll aus uns werden?	子どもたちがあわれだ "Aber die armen Kinder dauern mich doch"	Es wäre besser, daß du den letzten Bissen mit deinen Kindern teiltest.	やりかけた以上最後までやり通さなければならない Wer A sagt, muß auch B sagen.	心配がなくなり彼らは楽しく暮らす Da hatten alle Sorgen ein Ende, und sie lebten in lauter Freude zusammen.
第6版	同上	同上	同上	同上	同上
第7版	同上	同上	同上	同上	同上

改版による人物描写の変遷表

母親

	母の表現	①子捨ての提案	①子捨ての理由	①子捨てをするように父をせめたてるときの言葉	猫(鳩)を見ているヘンゼルを侮辱する言葉	①子どもたちが森から帰宅したとき	②子捨ての提案での言葉	②子捨ての提案で夫への態度
初稿	母 Mutter	母 sprach seine Frau zu ihm	なし	なし	なし	怒っていた Mutter war bös.	なし	なし
初版	同上	同上	子どもたちを養うことができない wir können sie nicht länger ernähren.	全員飢え死にすることになる So müssen wir alle miteinander Hungers sterben.	ばかだね narr	嬉しそうなふりをしていたが、心の中では怒っていた。 als wenn sie sich freute, heimlich aber war sie bös.	1回目は子どもたちは帰り道がわかったから戻ってきたのは仕方がない Einmal haben die Kinder den Weg zurückgefunden, und da habe ichs gut seyn lassen.	同上
第2版	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上
第3版	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上
第4版	継母 Stiefmutter	同上	同上	同上	同上	同上(Stiefmutter)	同上	同上
第5版	同上	父が母に相談し、母が提案 sprach zu seiner Frau.	上記削除。 子どもたちは帰り道がわからないので、厄介払いができる。 Sie finden den Weg night wieder nach Haus, und wir sind sie los.	棺桶を作るための板にかんなをかけておけば Du kannst nur die Bretter für die Särge hobelen.	同上	お前たちはもう帰る気がないと私たちは思ったんだ。 Wir haben geglaubt, ihr wolltet gar nicht wiederkommen.	これで一巻の終わりだ。子どもたちを捨てなければならない。 Hernach hat das Lied ein Ende. Die Kinder müssen fort.	しかし妻は夫の言うことに耳をかたむけなかった。夫を叱りつけて、非難した。 Aber die Frau hörte auf nichts, was er sagte, schalt ihn und machte ihm Vorwürfe.
第6版	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上
第7版	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上

改版による人物描写の変遷表

ヘンゼル

	①子捨ての話を聞いたとき	①小石を集めて戻ったとき	②小石を集めようとしたが、戸に鍵がかかっていたとき	魔女の家から宝物を持ち帰るときの言葉	大きな川を前にしたとき	鴨(あひる)が現れたとき
初稿	静かにするように促すのみ Es solle still seyn	言葉なし	悲しくなって妹を慰めることができない Da fing das Brüderchen an traurig zu werden, und konnte das Schwesterchen nicht trösten.	言葉なし	場面なし	場面なし
初版	上記に追加「なんとかする」 Ich will uns helfen.	「安心してお休み 」 schlaf nur ruhig.	上記削除され、「神様はきっと助けてくれる」となる Der liebe Gott wird uns schon helfen.	同上	同上	同上
第2版	同上	同上	同上	同上	言葉なし	グレーテルを渡した後に乗る trug das Grethel hinüber und hernach holte es auch den Hänsel
第3版	ich will uns schon helfen.	同上	同上	同上	同上	trug Grethel hinüber, und dann holte es Hänsel
第4版	同上	同上	同上	同上	同上	同上
第5版	同上	上記に追加「神様は見捨てないだろう」 Gott wird uns nicht verlassen.	同上	「小石よりいい」 Die sind noch besser als Kieselsteine.	渡れない。橋がなければ丸太もない。 "Wir können nicht hinüber", sprach Hänsel," ich sehe keinen Steg und keine Brücke."	ヘンゼルが乗り、妹も乗るように促す 。 Hänsel setzte sich auf und bat sein Schwesterchen, sich zu ihm zu setzen.
第6版	同上	同上	同上	同上	同上	同上
第7版	同上	同上	同上	同上	同上	同上

改版による人物描写の変遷表

グレーテル

	①置き去りにされて泣いた理由	①置き去りにされて泣きながら言う言葉	魔女から家事を言いつけられたとき	魔女を釜の中に押し込むとき	川を渡るとき	森から帰宅して宝物を出すとき
初稿	2人は夜になるまで待ったが両親は迎えにこなかった Sie warten lang bis es Nacht ward, aber die Eltern kamen nicht wieder.	なし	なし	グレーテルは気が付いた Das merkt das Schwesterchen	川の場面なし	なし
初版	dann wieder bis an den Abend; aber Vater und Mutter blieben aus, und niemand wollte kommen und sie abholen. Wie es nun finstere Nacht wurde,	同上	グレーテルは驚いて泣いたが、魔女の言うとおりにしなければならなかった。 Grethel erschrak und weinte, mußte aber thun, was die Hexe verlangte.	神様がグレーテルにそのことを教えてくれた Gott gab es aber Gretel ein.	同上	同上
第2版	夜になるまで待っても父と母は戻ってこない。誰も迎えに来てくれない Nun warteten sie bis zum Abend, aber Vater und Mutter blieben aus, und niemand wollte kommen und sie abholen.	同上	同上	神様はグレーテルに良い考えを思いつかせて、言わせた Gott gab es aber dem Mädchen ein, daß es sprach.	グレーテルが先に渡る trug das Grethel hinüber und hernach holte es auch den Hänsel.	同上
第3版	同上	同上	同上 Hexe→böse Hexe	Gott gab es aber dem Mädchen in den Sinn, daß es sprach.	trug Grethel hinüber, und dann holte es auch Hänsel.	同上
第4版	同上	同上	同上	グレーテルは魔女のたくらみに気付いた merkte das Mädchen, was sie im Sinn hatte.	同上	同上
第5版	眠ってようやく目を覚ますともう真っ暗になっていた Als sie erwachten, war es schon finstere Nacht.	私たちはどうやって森から出たらいいの Wie sollen wir nun aus dem Wald kommen!	上記に加筆 グレーテルは激しく泣くが無駄であった Gretel fing an, bitterlich zu weinen, aber es war alles vergeblich.	Grethel merkte, das sie im Sinn hatte.	それでは鴨が重いから順番に渡してもらおう Es wird dem Entchen zu schwer, es soll uns nacheinander hinüberbringen.	真珠や宝石が部屋中に散らばった daß die Perlen und Edelsteine in der Stube herumsprangen.
第6版	同上	同上	同上	同上	同上	同上
第7版	同上	同上	同上	同上	同上	同上

改版による人物描写の変遷表

魔女

	外見	2人を家に招き入れるとき	容貌についての詳細な描写	2人への執着を表す言葉	指のかわりに骨を出されてもわからない理由	グレーテルに釜に入るように促されるとき
初稿	小さな年とった女 eine kleine alte Frau	言葉なし	なし	なし	なし	板の上に乗る setz dich auf das Brett
初版	石のように年とった小さな女 eine kliene steinalte Frau	いいものをあげよう Ihr sollts gut haben	同上	同上	同上	die Alte setzte sich auf das Brett
第2版	石のように年とった女 eine steinalte Frau	同上	同上	同上	同上	setzte sich die Alte auf das Brett
第3版	同上	同上	同上	同上	同上	同上
第4版	同上	同上	同上	同上	同上	同上
第5版	上記に「杖をついている」が加わる。 ein Krücke stützte	同上	同上	逃がすものか die sollen mir nicht entwischen	濁った目をしていて見えない die trübe Augen hatte, konnte es nicht sehen	竈に頭を突っ込む steckte den Kopf in den Backoften
第6版	同上	つらい思いはさせない Es geschieht euch kein Leid.	目が赤く、遠目が利かず、獣のように嗅覚が発達していて、人間が近付くと嗅ぎ分けることができる Die Hexen haben rote Augen und können nicht weit sehen, aber sie haben eine feine Witterung, wie die Tiere, und merken's, wenn Menschen herankommem.	die sollen mir nicht wieder entwischen	同上	同上
第7版	同上	同上	同上	同上	同上	同上

邦訳一覧

明治期の「ヘンゼルとグレーテル」

番号	年	月	訳者・編者	題名	出典	出版社
1	1901	8,9	東海生訳	一太郎とおすみ	日本之小學教師 3(32-33)	國民教育社
2	1902	10	山君訳	ヘンゼルとグレエテルと	萬年艸　1	萬年艸発行所
3	1902	12	佐藤天風訳	深い深い森の中	女鑑(266)	国光社
4	1905	3	ばんすゐ訳	寶の箱	寶の箱(家庭童話第1編)	學海指針社
5	1906	3	橋本青雨訳	太郎と皐月	獨逸童話集	大日本國民中學會
6	1907	6	巌谷小波訳/武内桂舟画	お伽口演　鬼の宿	少年世界 13(8)	博文館
7	1908	8	曉影生訳	鬼婆退治	家庭雑誌 1(4)	家庭雑誌社
8	1909	3	水野繁太郎、權田保之助訳	兄と妹	雪姫・兄と妹(獨逸文學叢書第2編)	有朋堂書店
9	1910	12	柴田流星訳	兄と妹	日曜學校話材お伽艸紙　第4編	教文館
10	1911	2	日野蕨村訳	グレーテルとヘンゼル	獨逸お伽噺	岡村書店

大正期の「ヘンゼルとグレーテル」

11	1914	10	田中楳吉訳	ヘンゼルとグレーテル	グリンムの童話	南山堂
12	1914	10	小笠原昌齋訳	ヘンゼルとグレーテル	グリムお伽噺講義　上巻	精華書院
13	1914	11	年岡長汀訳	ヘンゼルとグレーテル	獨和對譯グリム十五童話	南江堂
14	1915	10	藤沢衛彦訳	ヘンゼルとグレーテル	通俗グリム童話物語	通俗教育普及會
15	1916	5	中島孤島訳	ヘンゼルとグレテル	グリム御伽噺	冨山房
16	1916	6	少年通俗教育會編	魔法婆	幼年百譚お話の庫　春の巻	博文館
17	1919	7	少年通俗教育會編	林の中へ捨てられた兄妹	グリム物語(世界童話第2集)	博文館
18	1919	10	内藤豊一訳	Hans to Grete	グリムお伽噺	日本のローマ字社
19	1920	7	巌谷小波編/武田比佐画	キコリノコドモ	名作お伽画噺グリム	冨田文陽堂
20	1921	12	三宅房子訳	林へ子を捨てに	金の船 3(12)	キンノツノ社
21	1924	6	葉多黙太郎訳	お菓子の家	グリム童話集	崇文館
22	1924	7	今井ただし訳	ヘンセルとグレーテル	童話 5(7)	コドモ社
23	1924	8	金田鬼一訳	ヘンゼルとグレーテル	グリム童話集(世界童話大系2)	世界童話大系刊行會
24	1924	9	あしや・ろそん	お菓子の家	婦人倶楽部5(9)	大日本雄辯會
25	1924	9	橋本玉造訳	ヘンゼルとグレーテル	世界童話選集ドイツ童話集	三水社
26	1924	10	金の星社編輯部編	ヘンゼルとグレテル	グリム童話(世界少年少女名著大系10)	金の星社
27	1925	5	馬場直美訳	森の家	通俗泰西文藝名作集	帝國講學會
28	1925	8	童話研究會編	林の棄兒	グリム名著選	博文館
29	1926	5	蘆谷蘆村	お菓子の家	お母様の童話	文化生活研究会
30	1926	11	畑小鳥	オクワシノイヘ	カナグリームオトギ	富文館

昭和期の「ヘンゼルとグレーテル」

31	1927	9	菊池寛訳	ヘンゼルとグレーテル	小学生全集グリム童話集	文藝春秋社
32	1929	1	金田鬼一訳	ヘンゼルとグレーテル	グリム童話集(上)	近代社
33	1930	9	有富郁夫訳	ハンセルとグレーテル	ハンセルとグレーテル(小學2年用)	玉川学園出版部
34	1932	11	豊嶋次郎編	ヘンゼルトグレーテル	グリムものがたり　カタカナ一年生	金蘭社
35	1933	1	児童文学研究會	ヘンゼルトグレーテル	グリムモノガタリ(カタカナ児童読本)	文化書房
36	1934	11	三浦吉兵衛訳	ヘンゼルとグレーテル	グリム童話(獨逸語譯註文庫)	郁文堂書店
37	1935	6	主婦之友社編輯局著/長谷川露二画	オクワシノイヘ	オクワシノイヘ(主婦之友繪本)	主婦之友社
38	1942	10	金田鬼一訳	ヘンゼルとグレエテル(4幕)	グリム童話劇(上)	アルス
39	1944	3	藤原肇訳	ヘンゼルとグレーテル	勇ましいちびの仕立屋さん	森北書店
40	1946	4	マツダフミヲ絵	オクワシノイヘ	オクワシノイヘ	実業之日本社
41	1946	11	村岡花子編/若林敏郎絵	お菓子の家	お菓子の家（グリム童話輯　第5巻）	國際図書出版
42	1947	1	桃井鶴夫訳	ヘンゼルとグレーテル	絵入グリム童話選	英研社

昭和期の「ヘンゼルとグレーテル」

43	1948	6	秋山淳訳	ヘンゼルとグレーテル	グリム童話集　赤バラ白バラ	實雲舎
44	1948	10	富山妙子画	おかしのいえ	おかしのいえ(なかよしくらぶ)	浮城書房
45	1948	11	古関吉雄編	ヘンゼルとグレーテル	グリム童話集	玉川大学出版部
46	1948	12	金田鬼一著/有岡一郎絵	ヘンゼルとグレーテル	グリム童話(上)(銀の鈴文庫)	廣島図書
47	1949	1	白旗信譯/荒木市三画	ヘンゼルとグレーテル	蛙の王様(ミネルヴァ児童文庫)	ミネルヴァ書房
48	1949	5	森村豊訳	兄と妹(ドイツの話)	世界名作童話集	主婦之友社
49	1949	10	飯塚信雄文/さわいいちさぶろう絵	おかしのいえ	小学二年生 5(7)	小学館
50	1949	11	田中梅吉訳	兄さんと妹	祖稿グリム童話全集	東京堂
51	1950	10	小出正吾編著	ヘンゼルとグレーテル	世界童話の泉お話12か月　10月-12月の巻	実業之日本社
52	1950	10	竹田靖治文/相沢光朗絵	おかしのいえ　ぐりむえばなし	小学一年生 6(7)	小学館
53	1950	12	木下一二訳	ヘンゼルとグレーテル	グリム童話集　美しい話の巻	東京読書会
54	1951	8	相良守峯訳	ヘンゼルとグレーテル	金の鳥	中央公論社
55	1951	8	金田鬼一編著/寺内萬次郎絵	ヘンゼルとグレーテル	白雪姫(世界名作童話全集16)	大日本雄弁会講談社
56	1952	4	三島由紀夫文/池田かずお絵	ヘンゼルとグレーテル	ヘンゼルとグレーテル(世界絵文庫34)	あかね書房
57	1952	11	堀尾勉脚色	へんぜるとぐれえてる	へんぜるとぐれえてる（人形絵本）	グリム館
58	1953	1	壷井栄編著	ヘンゼルとグレーテル	星の銀貨(世界名作童話全集１)	鶴書房
59	1953	11	土川留女子文/耳野卯三郎絵	へんぜるとぐれえてる	ありばばのぼうけん(小学館の幼年絵本14)	小学館
60	1953	12	前川道介訳/井関完二絵	ヘンゼルとグレーテル	青い灯(外国童話名作集1)	いずみ書房
61	1954	1	浜田廣介文/松田文雄絵	おかしのいえ	ひかりのくに 9(1)	ひかりのくに昭和出版
62	1954	1	武田雪夫文/沢井一三郎絵	おかしのいえ	おかしのいえ（二年生文庫）	講談社
63	1954	1	野長瀬正夫文/佐藤湊子画	お菓子の家	童幼の国増刊 4(1)	文教堂出版
64	1954	2	中野啓介文/駒宮録郎絵	おかしのいえ	きんのとり	日本書房
65	1954	3	宇野浩二文/堀文子絵	ヘンゼルとグレーテル	グリム童話2(トッパンの絵物語)	トッパン
66	1954	5	関敬吾他訳	ヘンゼルとグレーテル	グリム童話集１（角川文庫）	角川書店
67	1954	6	西山敏夫文/沢田重隆絵	おかしのいえ ぐりむえばなし	こどもクラブ 10(7)	大日本雄弁会講談社
68	1954	11	矢崎源九郎訳	ヘンゼルとグレーテル	わたくしたちの世界名作童話全集2	同和春秋社
69	1954	12	奈街三郎訳/茂田井武絵	ヘンゼルとグレーテル	グリム物語	東光出版社
70	1955	1	高山良策人形構成	おかしのいえ	よいこのくに 3(10)	よいこのくに社
71	1955	不明	堀尾勉文/山田三郎美術	ヘンゼルとグレーテル	ヘンゼルとグレーテル（エンゼルブック12）	エンゼル社
72	1956	9	藤田圭雄編	へんぜるとぐれーてる	グリムものがたり(世界幼年文学全集3)	宝文館
73	1956	12	植田敏郎訳	ヘンゼルとグレーテル	グリム童話宝玉集１	宝文館
74	1957	1	橋本潔文/絵	ヘンゼルとグレーテル	主婦と生活 12(1)	主婦と生活社
75	1957	1	西山敏夫文/鈴木寿雄絵	おかしのいえ	たのしい一年生 2(1)	大日本雄弁会講談社
76	1957	3	佐伯千秋文	ヘンゼルとグレーテル	小学二年生 12(13)	小学館
77	1957	4	土家由岐雄編著/若菜珪絵	ヘンゼルとグレーテル	グリム童話三年生	偕成社
78	1957	6	宮脇紀雄編著/鈴木未央子絵	ヘンゼルとグレーテル	ヘンゼルとグレーテル	偕成社
79	1957	7	村岡花子/小林和子絵	おかしのいえ	きたかぜとたいよう一年生	ポプラ社
80	1957	7	柴野民三/輪島清隆絵	おかしのいえ	おかしのいえ（名作絵文庫二年生）	実業之日本社
81	1957	12	槇晧志文/駒宮録郎絵	おかしのいえ	キンダーブック 12(9)	フレーベル館
82	1957	12	矢崎源九郎訳	ヘンゼルとグレーテル	グリム童話名作集	筑摩書房
83	1957	不明	飯沢匡文	へんぜるとぐれーてる	へんぜるとぐれーてる（トッパンの人形絵本）	トッパン
84	1958	5	田村隆一編著	ヘンデルとグレーテル	ヘンデルとグレーテル(幼年名作全集24)	保育社
85	1958	6	小出正吾文/花野原芳明画	へんぜるとぐれーてる	グリム絵ものがたり(なかよし絵文庫)	偕成社
86	1958	7	野村純三/川本哲夫絵	ヘンゼルとグレーテル	ヘンゼルとグレーテル（グリムどうわ3）	ポプラ社
87	1958	11	高橋健二訳	ヘンゼルとグレーテル	グリム童話集(世界児童文学全集3)	あかね書房

昭和期の「ヘンゼルとグレーテル」

88	1959	4	植田敏郎訳	ヘンゼルとグレーテル	グリム童話集(少年少女世界文学全集19)	講談社
89	1959	不明	三越左千夫文/谷俊彦絵	へんぜるとぐれーてる	へんぜるとぐれーてる(トッパンの愛児えほん)	トッパン
90	1960	1	岡本良雄文/長谷川露二絵	おかしの家	おかしの家（講談社の絵本ゴールド版）	講談社
91	1960	1	岡本良文/矢車すずし絵	おかしのおうち	幼稚園 12(10)	小学館
92	1960	1	大畑末吉他訳/安泰絵	ヘンゼルとグレーテル	グリム童話集(世界童話文学全集3)	講談社
93	1960	1	相賀徹夫編/小田忠絵	おかしのおうち	おかしのおうち（小学館の育児絵本）	小学館
94	1960	8	村岡花子訳/若菜珪絵	ヘンゼルとグレーテル	グリム童話集(児童世界文学全集11)	偕成社
95	1960	8	並木俊文	ヘンゼルとグレーテル	しらゆきひめ	日本書房
96	1960	10	野長瀬正夫文/松井行正絵	ヘンゼルとグレーテル	おやゆび小僧	金の星社
97	1960	不明	八代球磨男文/西田静二絵	おかしのいえ	おかしのいえ（ひかりのくにダイヤ絵本13）	ひかりのくに昭和出版
98	1961	5	川西千保子文/石田英助絵	おかしのいえ	めばえ 4(2)	小学館
99	1961	8	鈴木隆/上柳輝彦絵	ふしぎなおかしのいえ	まほうの童話集(たのしい幼年童話6)	三十書房
100	1961	12	立原えりか文/谷俊彦絵	おかしのいえ	たのしい幼稚園 17(9)	講談社
101	1962	1	槇本楠郎文/鈴木未央子絵	ヘンゼルとグレーテル	世界童話名作文庫4	小学館
102	1963	2	村岡花子/丸木俊子絵	ヘンゼルとグレーテル	幼年世界童話文学全集５こびととくつや	集英社
103	1963	11	宮脇紀雄文/岸田はるみ絵	へんぜるとぐれえてる	幼稚園 16(9)	小学館
104	1964	6	西原康文/ｳｫﾙﾄ･ﾃﾞｨｽﾞﾆｰ絵	お菓子の家	お菓子の家（講談社のディズニー絵本）	講談社
105	1965	4	植田敏郎訳	ヘンゼルとグレーテル	少年少女世界の名作文学27ドイツ編Ⅰ	小学館
106	1965	8	宮脇紀雄文/武田将美絵	おかしのいえ「ﾍﾝｾﾞﾙとｸﾞﾚｰﾃﾙ」より	幼稚園 18(5)	小学館
107	1965	8	畠山洸一郎編/今村洋子絵	おかしのいえ	小学一年生 21(5)	小学館
108	1965	10	土家由岐雄文/林義雄絵	へんぜるとぐれえてる	グリムの童話(小学館の絵本)	小学館
109	1965	12	久米みのる文/松本かつぢ絵	おかしのいえ	たのしい幼稚園 21(10)	講談社
110	1966	4	上崎美恵子文/岸田はるみ絵	おかしのおうち	めばえ 9(1)	小学館
111	1966	8	林順信編/松本零士絵	おかしのいえ	よいこ 11(5)	小学館
112	1966	9	宮脇紀雄文/林義雄絵	おかしのいえ	グリムの童話	小学館
113	1966	11	植田敏郎訳/吉井忠絵	ヘンゼルとグレーテル	グリム名作集(世界の名作図書館6)	講談社
114	1967	4	藤城清治文/木馬座制作	ヘンゼルとグレーテル	キンダーおはなしえほん 1(1)	フレーベル館
115	1967	5	畠山洸一郎編/高橋真琴絵	おかしのいえ	小学一年生 23(2)	小学館
116	1967	9	藤原一生文/深沢邦朗絵	ヘンゼルとグレーテル	ヘンゼルとグレーテル（世界の名作グリム童話）	小学館
117	1967	10	浜田廣介文/西村保史郎絵	ヘンゼルとグレーテル	グリム童話(カラー版世界の幼年文学10)	偕成社
118	1968	1	鶴岡文夫編/高橋真琴絵	おかしのおうち	幼稚園 20(10)	小学館
119	1968	4	手塚富雄訳/井上洋介絵	ヘンゼルとグレーテル	グリム童話集(少年少女世界の文学24)	河出書房
120	1968	4	岡田久子文/岸田はるみ絵	おかしのいえ	ディズニーランド 5(4)	講談社
121	1968	6	生源寺美子文/鈴木未央子絵	ヘンゼルとグレーテル	ニルスのぼうけん(ワイドカラー世界の名作童話13)	講談社
122	1968	8	まどみちお文/岸田ハルミ絵	おかしのいえ	よいこ 13(5)	小学館
123	1968	不明	村岡花子文/吉崎正己絵	ヘンゼルとグレーテル	ヘンゼルとグレーテル（どうわ絵本）	偕成社
124	1969	5	人形劇団ひとみ座制作部	ヘンゼルとグレーテル	ふしぎな国のヘンゼルとグレーテル	人形劇団ひとみ座制作部
125	1969	5	久保喬文/小坂茂絵	おかしのいえ	小学一年生 25(2)	小学館
126	1969	7	大塚勇三訳/堀内誠一画	ヘンゼルとグレーテル	ヘンゼルとグレーテル(グリム童話集2)	学習研究社
127	1969	11	辻まさき文/佐川節子絵	おかしのいえ	よいこ 14(8)	小学館
128	1970	1	土家由岐雄文/せおたろう絵	おかしのおうち	おかしのおうち（小学館幼児絵本）	小学館
129	1970	1	不明	おかしのいえ	ベビーブック 3(10)	小学館
130	1970	12	藤川圭介文/瀬尾太郎絵	おかしのいえ	ディズニーランド 7(15)	講談社
131	1971	6	中川正文文/藤井千秋絵	おかしのいえ	小学一年生 27(3)	小学館
132	1972	4	山主敏子文/村上幸一絵	ヘンゼルとグレーテル	オールカラー母と子の世界の名作20	集英社

昭和期の「ヘンゼルとグレーテル」

133	1973	5	西本鶏介	ヘンゼルとグレーテル	世界昔話集　一日一話五分間のお話	芸術生活社
134	1973	5	矢川澄子訳	ヘンゼルとグレーテル	こどもの世界文学15	講談社
135	1973	不明	柴野民三文/鈴木寿雄絵	おかしの家	オールカラー版世界名作ｲｿｯﾌﾟ・ｸﾞﾘﾑ・ｱﾝﾃﾞﾙｾﾝ2	国際情報社
136	1974	5	植田敏郎訳	ヘンゼルとグレーテル	子どもに聞かせるグリムの童話	実業之日本社
137	1975	12	平田昭吾文/成田マキホ画	ヘンゼルとグレーテル	ヘンゼルとグレーテル（テレビ名作アニメ劇場６）	ポプラ社
138	1975	不明	はるなしげこ文	へんぜるとぐれーてる	へんぜるとぐれーてる（トッパンの人形絵本）	フレーベル館
139	1976	4	辻真先文/木村光雄絵	ヘンゼルとグレーテル	ヘンゼルとグレーテル（世界名作えほん７）	朝日ソノラマ
140	1976	10	高橋健二訳	ヘンゼルとグレーテル	グリム童話全集１	小学館
141	1977	5	セルジオ絵	ヘンゼルとグレーテル	ヘンゼルとグレーテル(ファブリこども世界名作シリーズ)	ＴＢＳブリタニカ
142	1977	10	メリー・マックレン絵	ヘンゼルとグレーテル	ヘンゼルとグレーテル（メリーゴーランドえほん）	大日本絵画
143	1977	10	TBSブリタニカ編	ヘンゼルとグレーテル	ヘンゼルとグレーテル（ミニまんが世界昔ばなし11）	ＴＢＳブリタニカ
144	1978	1	植田敏郎訳/安井淡絵	ヘンゼルとグレーテル	ヘンゼルとグレーテル（世界のメルヘン絵本1）	小学館
145	1979	2	高橋健二文/柳柊二絵	ヘンゼルとグレーテル	ヘンゼルとグレーテル（講談社の絵本9）	講談社
146	1979	7	桜井正明文/かたやまさえこ絵	ヘンゼルとグレーテル	ヘンゼルとグレーテル（学研・ひとりよみ名作17）	学習研究社
147	1979	不明	原葵訳	ヘンゼルとグレーテル	ヘンゼルとグレーテル（ファブリ世界名作えほん全集34）	童音社
148	1980	10	こわせたまみ文/福原ゆきお絵	ヘンゼルとグレーテル	ヘンゼルとグレーテル（世界の昔話名作選10）	チャイルド本社
149	1981	3	佐久間彪訳/ﾘｽﾍﾞｽ･ﾂｳﾞｪﾙｶﾞｰ絵	ヘンゼルとグレーテル	ヘンゼルとグレーテル	かど書房
150	1981	10	大友克洋	ヘンゼルとグレーテル	ヘンゼルとグレーテル	ＣＢＳソニー
151	1982	3	いわむらりょう他作/鈴木徹演出	ヘンゼルとグレーテル	飛行船ぬいぐるみ名作ミュージカル31	劇団飛行船
152	1983	4	大庭みな子訳/ｽｰｻﾞﾝ・ｼﾞｪﾌｧｰｽﾞ絵	ヘンゼルとグレーテル	ヘンゼルとグレーテル	ほるぷ出版
153	1983	9	渡辺麻実文/森有子絵	ヘンゼルとグレーテル	ヘンゼルとグレーテル(世界名作絵ものがたり15)	集英社
154	1984	11	堀尾青史脚本/高橋透画	ヘンゼルとグレーテル	ヘンゼルとグレーテル（家庭版かみしばい）	童心社
155	1984	11	大畑末吉訳/徳田秀雄絵	ヘンゼルとグレーテル	ヘンゼルとグレーテル	講談社
156	1985	1	小澤俊夫訳	ヘンゼルとグレーテル	完訳グリム童話	ぎょうせい
157	1985	7	相良守峯訳/ﾊﾞｰﾅﾃﾞｨｯﾄ･ﾜｯﾂ絵	ヘンゼルとグレーテル	ヘンゼルとグレーテル	岩波書店
158	1985	10	立原えりか文	ヘンゼルとグレーテル	小学二年生 41(7)	小学館
159	1985	11	内海宜子訳/ﾔﾝ･ﾋﾟｱﾝｺﾌｽｷｰ絵	ヘンゼルとグレーテル	ヘンゼルとグレーテル(ふぇありい・ぶっく)	ほるぷ出版
160	1986	1	梅田ちづる絵	ヘンゼルとグレーテル	ヘンゼルとグレーテル(講談社のびのび絵本4)	講談社
161	1986	2	池内紀訳/ｱｰｻｰ･ﾗｯｶﾑ絵	ヘンゼルとグレーテル	ヘンゼルとグレーテル(グリム童話集3)	新書館
162	1986	6	神沢利子文/フォンタナ画	ヘンゼルとグレーテル	ヘンゼルとグレーテル(国際版はじめての童話12)	小学館
163	1986	10	山主敏子編	ヘンゼルとグレーテル	10月のおはなし	ぎょうせい
164	1987	4	香山美子文/柿本幸造絵	ヘンゼルとグレーテル	ヘンゼルとグレーテル（チャイルド絵本館）	チャイルド本社
165	1987	11	立原えりか文/サンリオアニメスタッフ絵	ヘンゼルとグレーテル	ヘンゼルとグレーテル(サンリオ名作アニメランド8)	サンリオ
166	1988	2	おおくぼ由美文/中島順三構成	ヘンゼルとグレーテル	グリム名作劇場Ｉ赤ずきん	角川書店
167	1988	6	川上まり子他訳/ﾓﾆｯｸ･ﾌｪﾘｯｸｽ絵	ヘンゼルとグレーテル	ヘンゼルとグレーテル(ﾜﾝｽ・ｱﾎﾟﾝﾅ・ﾀｲﾑｼﾘｰｽﾞ)	西村書店
168	1988	12	ささきたづこ文/上野紀子絵	ヘンゼルとグレーテル	赤ずきん・ヘンゼルとグレーテル	講談社